

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第515集

いい　おか　さい　かわ

飯岡才川遺跡第12次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

2008

岩 手 県 盛 岡 市
(財)岩手県文化振興事業団
埋 藏 文 化 財 セン タ ー

飯岡才川遺跡第12次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査



調査区遠景（南東から）



調査区全景（直上）



調査区北側古墳完掘状況（東から）



古墳出土遺物

序

本県には、旧石器時代をはじめとする1万ヵ所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史が生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会資本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業用埋蔵文化財センターは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によつてやむを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、盛岡南新都市土地区画整理事業に関連して平成17・18年度に実施された盛岡市飯岡才川遺跡第12次発掘調査の調査成果をまとめたものです。今回の調査では、古代の堅穴住居・古墳をはじめとする各種の遺構が検出され、集落・墓地の姿が明らかになるとともに、土器、石製品などたくさんの遺物も出土いたしました。当地域における歴史を解明する上で貴重な資料を提供することができたと考えております。本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書の作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました盛岡市都市整備部盛岡南整備課、盛岡市教育委員会をはじめとする関係各位に対し、深く感謝の意を表します。

平成20年1月

財團法人 岩手県文化振興事業団
理事長 武田牧雄

例　　言

- 1 本報告書は、岩手県盛岡市飯岡新田2地割43-1ほかに所在する飯岡才川遺跡第12次発掘調査の結果を収録したものである。
- 2 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号と遺跡略号は以下のとおりである。
遺跡番号：LE16-2291 遺跡略号：ISW-05-12・ISW-06-12
- 3 本遺跡の調査は、盛岡南新都市土地区画整備事業に伴う事前の緊急発掘調査である。調査にあたっては盛岡市と県教委事務局生涯学習文化課との協議を経て、財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として実施した。
- 4 発掘調査は2カ年にわたりて実施しており、調査対象面積、調査期間、調査担当者は以下のとおりである。

<平成17年度>	面 積：3,200m ²	期 間：平成17年10月3日～11月10日
	担当者：濱田 宏・村木 敬・石崎高臣	
<平成18年度>	面 積：4,000m ²	期 間：平成18年9月19日～11月24日
	担当者：金子昭彦・村田 淳・菅野 梢	
- 5 室内整理期間、整理担当者は以下のとおりである。

<平成17年度>	期 間：平成18年2月1日～平成18年3月31日
	担当者：濱田 宏
<平成18年度>	期 間：平成18年11月1日～平成19年3月31日
	担当者：菅野 梢・平野 祐
- 6 報告書の執筆は、第Ⅰ章を盛岡市、その他を濱田、金子、村田が担当し、編集は村田が行なった。項目毎の文責は文末に記した。
- 7 航空写真撮影および写真解析図化作業は以下の業者に業務委託を行なった。

航空写真撮影：東邦航空（株）
写真解析図化作業：（株）セビアス
- 8 各種鑑定・分析は次の方々にお願いした。

石材鑑定：花崗岩研究会
鉄製品保存処理：岩手県立博物館
- 9 野外調査および本書の作成にあたり、次の方々からご指導・ご助言を賜った。（順不同、敬称略）

千田和文・津島知弘・神原雄一郎・今野公顯・斎藤麻希子（盛岡市教育委員会）
井上雅孝（滝沢村教育委員会）
- 10 野外調査では盛岡市・滝沢村・寒石町・矢巾町・紫波町の方々に多大なるご協力をいただいた。
- 11 本遺跡の調査成果は、当センター主催の現地説明会・遺跡報告会、「平成17年度発掘調査報告書」・『平成18年度発掘調査報告書』などで公表しているが、本書の記載内容がそのいずれにも優先する。
- 12 本遺跡から出土した遺物及び調査に関わる資料は、岩手県立埋蔵文化財センターで保管している。

目 次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と周辺の環境	
1 遺跡の位置と地形的環境	1
2 歴史的環境	1
3 過去の調査歴	6
4 調査区の概要	6
III 調査の方法	
1 野外調査の方法	7
2 調査経過	9
3 室内整理の方法	10
4 凡例	10
IV 検出された遺構と遺物	
1 遺構の分布状況	14
2 竪穴住居	14
3 古墳	44
4 陥し穴状遺構	70
5 土坑・墓坑	76
6 溝跡	94
7 土器埋設遺構	99
8 烧土遺構	100
9 柱穴列・柱穴	101
10 遺構外出土遺物	104
V 調査のまとめ	
1 陥し穴状遺構	130
2 土器の分類	130
3 竪穴住居	133
4 墓制関連の遺構	134
5 鉄鐸に関する検討	136
報告書抄録	201

図版目次

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	1	第41図	R Z029	64
第2図	遺跡周辺の地形	4	第42図	R Z030・031	66
第3図	調査区の位置	5	第43図	R Z030出土状況	67
第4図	グリッド及び基準点配置図	8	第44図	R Z032	69
第5図	遺構配置図（1）	12	第45図	R D104～107	72
第6図	遺構配置図（2）	13	第46図	R D108～111	74
第7図	R A028（1）	15	第47図	R D112～114	77
第8図	R A028（2）	16	第48図	R D115～118	79
第9図	R A029	17	第49図	R D119～124	83
第10図	R A030	19	第50図	R D125～130	86
第11図	R A031（1）	20	第51図	R D131～136	89
第12図	R A031（2）	21	第52図	R D137～140・142	92
第13図	R A032	23	第53図	R D141・143	93
第14図	R A033	25	第54図	R G055・056（1）	96
第15図	R A034	26	第55図	R G032・056（2）	97
第16図	R A035（1）	28	第56図	R G057・058	98
第17図	R A035（2）	29	第57図	R Z033・034、R F002	101
第18図	R A036（1）	31	第58図	柱穴列・柱穴（1）	102
第19図	R A036（2）	32	第59図	柱穴列・柱穴（2）	103
第20図	R A037	34	第60図	R A028出土遺物（1）	105
第21図	R A038（1）	35	第61図	R A028出土遺物（2）	106
第22図	R A038（2）	36	第62図	R A028・029出土遺物	107
第23図	R A039（1）	38	第63図	R A029出土遺物	108
第24図	R A039（2）	39	第64図	R A030・031出土遺物	109
第25図	R A040	40	第65図	R A031～033出土遺物	110
第26図	R A041（1）	42	第66図	R A033出土遺物	111
第27図	R A041（2）	43	第67図	R A033～035出土遺物	112
第28図	R Z014	45	第68図	R A035・036出土遺物	113
第29図	R Z017	47	第69図	R A036出土遺物	114
第30図	R Z018	49	第70図	R A036～038出土遺物	115
第31図	R Z019	51	第71図	R A038・039出土遺物	116
第32図	R Z020	53	第72図	R A039～041出土遺物	117
第33図	R Z021	54	第73図	R Z017・018・020・022出土遺物	118
第34図	R Z022	55	第74図	R Z023出土遺物	119
第35図	R Z023（1）	57	第75図	R Z024・030出土遺物	120
第36図	R Z023（2）	58	第76図	R Z032、R D124・125・128・135	
第37図	R Z024・025	59		140・141出土遺物	121
第38図	R Z026	60	第77図	R G056、R Z033出土遺物	122
第39図	R Z027	61	第78図	R Z034、P 22、遺構外出土遺物	123
第40図	R Z028	63	第79図	飯岡才川遺跡主要遺構配置図	131

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧.....	3
第2表 遺構名振替一覧.....	11
第3表 柱穴計測表.....	104

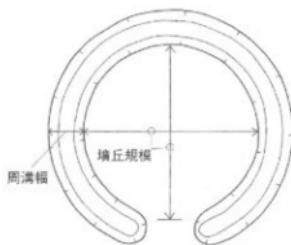
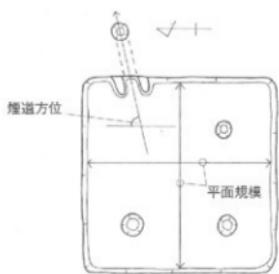
第4表 遺物観察表(1).....	124
第5表 遺物観察表(2).....	126
第6表 遺物観察表(3).....	128

写真図版目次

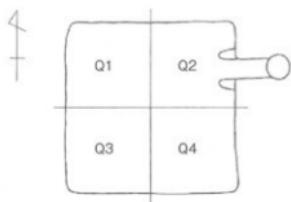
写真図版1 清査区の状況.....	141
写真図版2 R A028	142
写真図版3 R A029	143
写真図版4 R A030	144
写真図版5 R A031	145
写真図版6 R A032	146
写真図版7 R A033	147
写真図版8 R A034	148
写真図版9 R A035	149
写真図版10 R A036	150
写真図版11 R A037	151
写真図版12 R A038	152
写真図版13 R A039	153
写真図版14 R A040	154
写真図版15 R A041	155
写真図版16 R Z014	156
写真図版17 R Z017	157
写真図版18 R Z018	158
写真図版19 R Z020	159
写真図版20 R Z022	160
写真図版21 R Z023	161
写真図版22 R Z024・025	162
写真図版23 R Z026	163
写真図版24 R Z028	164
写真図版25 R Z030	165
写真図版26 R Z031	166
写真図版27 R Z032	167
写真図版28 R Z019・021(1)	168
写真図版29 R Z027・029(1)	169
写真図版30 R Z019・021・027・029(2)	170
写真図版31 R D104 ~ 107	171

写真図版32 R D108 ~ 111	172
写真図版33 R D112 ~ 115	173
写真図版34 R D116 ~ 119	174
写真図版35 R D120 ~ 123	175
写真図版36 R D124 ~ 127	176
写真図版37 R D128 ~ 131	177
写真図版38 R D132 ~ 135	178
写真図版39 R D136 ~ 139	179
写真図版40 R D140 ~ 142、R F002	180
写真図版41 R D143・144、R Z033・034	181
写真図版42 R G056	182
写真図版43 R G032・055・057・58	183
写真図版44 R G断面、柱穴群	184
写真図版45 R A028出土遺物(1)	185
写真図版46 R A028出土遺物(2)	186
写真図版47 R A028・029出土遺物	187
写真図版48 R A029 ~ 031出土遺物	188
写真図版49 R A031 ~ 033出土遺物	189
写真図版50 R A033出土遺物	190
写真図版51 R A033・034出土遺物	191
写真図版52 R A035・036出土遺物	192
写真図版53 R A036・037出土遺物	193
写真図版54 R A038・039出土遺物	194
写真図版55 R A039 ~ 041出土遺物	195
写真図版56 R Z古墳出土遺物(1)	196
写真図版57 R Z古墳出土遺物(2)	197
写真図版58 R Z古墳、R D土坑出土遺物	198
写真図版59 R D土坑、R G溝、 R Z033出土遺物	199
写真図版60 R Z034、遺構外出土遺物	200

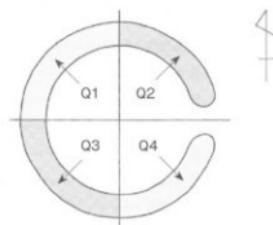
遺構計測位置



墓穴住居区割図



古墳区割図



焼土



炭化物

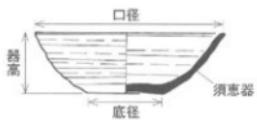
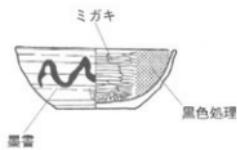


石

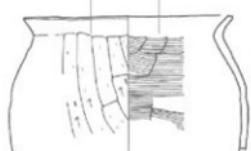


地山

土器の表現方法



ケズリ ハケメ



ヘラナデ



凡例図

I 調査に至る経過

盛岡南新都市開発計画は、盛岡市が経済・文化などに対する機能を備えた北東北の拠点都市を目指して、市の南部地域を新市街地として開発し、両者が有機的に結びついた輪状都心を形成するために策定された土地区画整理事業である。岩手県・盛岡市・旧都南村の三者は、平成2年9月に地域振興整備公団（当時・現都市再生機構）に対して事業申請を行い、これを受けて公団は実施計画を作成した。平成3年12月には建設大臣と国土庁長官から事業の実施許可があり、平成3年度から平成22年度までの20年間を事業予定期間とし、対象面積313haの土地区画整備事業が実施されることになった。なお、本事業については平成18年度に当初計画より数年の期間延長が示されている。

飯岡才川遺跡第12次調査は、岩手県教育委員会と盛岡市とが協議し、平成17年度事業として確定した。その後、財團法人岩手文化振興事業団埋蔵文化財センターが委託を受け、受託事業として発掘調査を実施した。
(盛岡市都市整備部盛岡南整備課)

II 遺跡の立地と周辺の環境

1 遺跡の位置と地形的環境（第1・2図）

飯岡才川遺跡は、岩手県盛岡市飯岡新田2地割字才川43-1ほかに所在する。JR東北本線盛岡駅から南方へ約2kmの位置にあり、総面積は62,000m²である。零石川右岸の中～低位段丘上に立地しており、遺跡範囲の標高は約120～124mである。

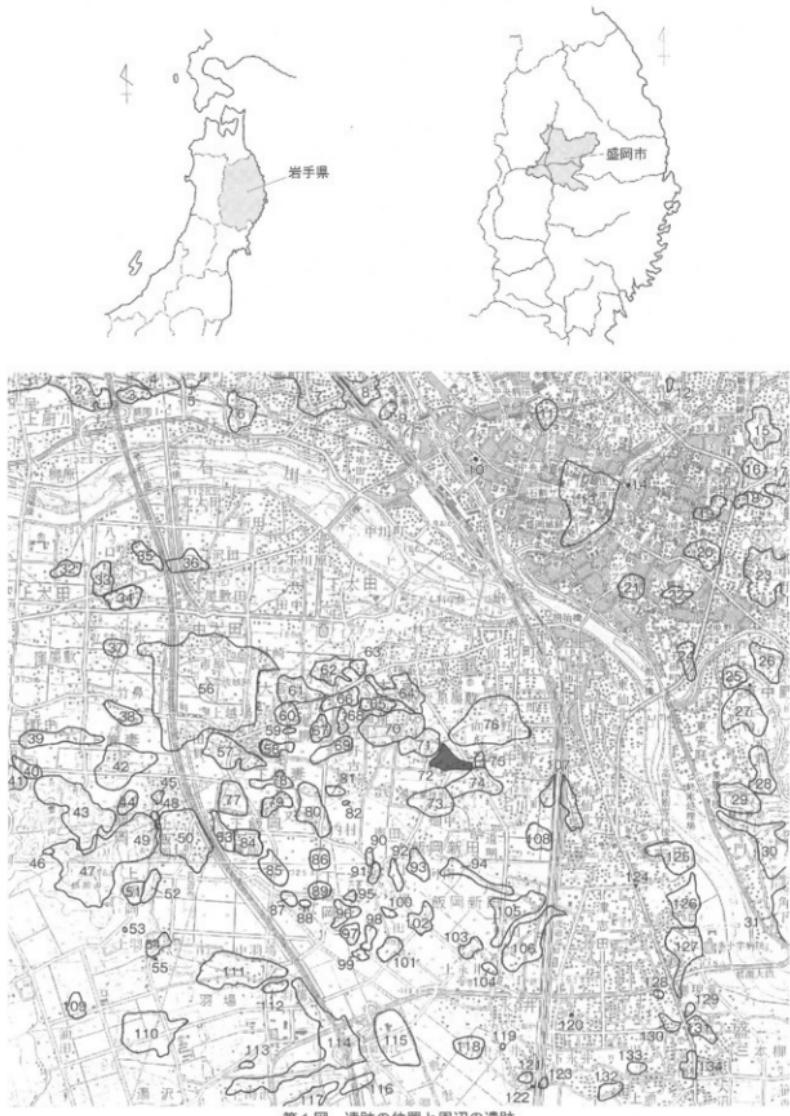
岩手県の県庁所在地である盛岡市は、江戸時代以降盛岡南部藩の城下町として発展をとげた町である。平成18年1月10日に玉山村と合併しており、総面積886万m²、人口約30万人を擁する北東北地方における中核都市として位置づけられる。

地形的みると、盛岡市は北上低地帯に位置し、その西側には奥羽山脈、東側には北上山地が低地帯と平行するように南北方向に連なっている。市街地（低地帯）の中央を県北部の岩手郡岩手町御堂観音境内に源流を発する北上川が流れ、奥羽山脈から零石川、北上山地から中津川と梁川が盛岡駅の南側で合流して南流する。第三系および火山岩類を主体として構成される奥羽山脈は、各支流に多量の土砂を供給しており、それによって大小の扇状地が複合する沖積地を零石川右岸（南岸）に作り出している。また、この地域は度重なる零石川の氾濫や流路の変化によって多くの旧河道や自然堤防が入り組む地形をしており、本遺跡はこのなかの低位段丘面に位置している。

2 歴史的環境（第1図・第1表）

盛岡市域には、現在までに500以上の遺跡の存在が確認されている。遺跡の時代・性格は多岐に渡り、古くは大新町遺跡（7）のように縄文時代草創期の遺物を出土する遺跡から、新しくは盛岡城跡（13）のような近世城館などさまざまな性格の遺跡が確認されている。本遺跡の位置する零石川右岸の低位段丘面では、平成5年度から開始された盛岡南新都市区画整備事業関連をはじめとする大規模な発掘調査が実施されることによって数多くの遺跡の内容が判明しつつある。なかでも陸奥国最北の古代城柵遺跡であり、一辺800m以上の築地塀や大溝が検出され、堅穴住居から多数の鉄製品や施釉

陶器などが出上した志波城跡（56）をはじめ、奈良～平安時代に属する遺跡が多数発見されている。このうち本遺跡の周辺のみに限ってみても、本遺跡の東側にあり古墳時代末～平安時代にかけて600



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

第1表 國辺遺跡一覧

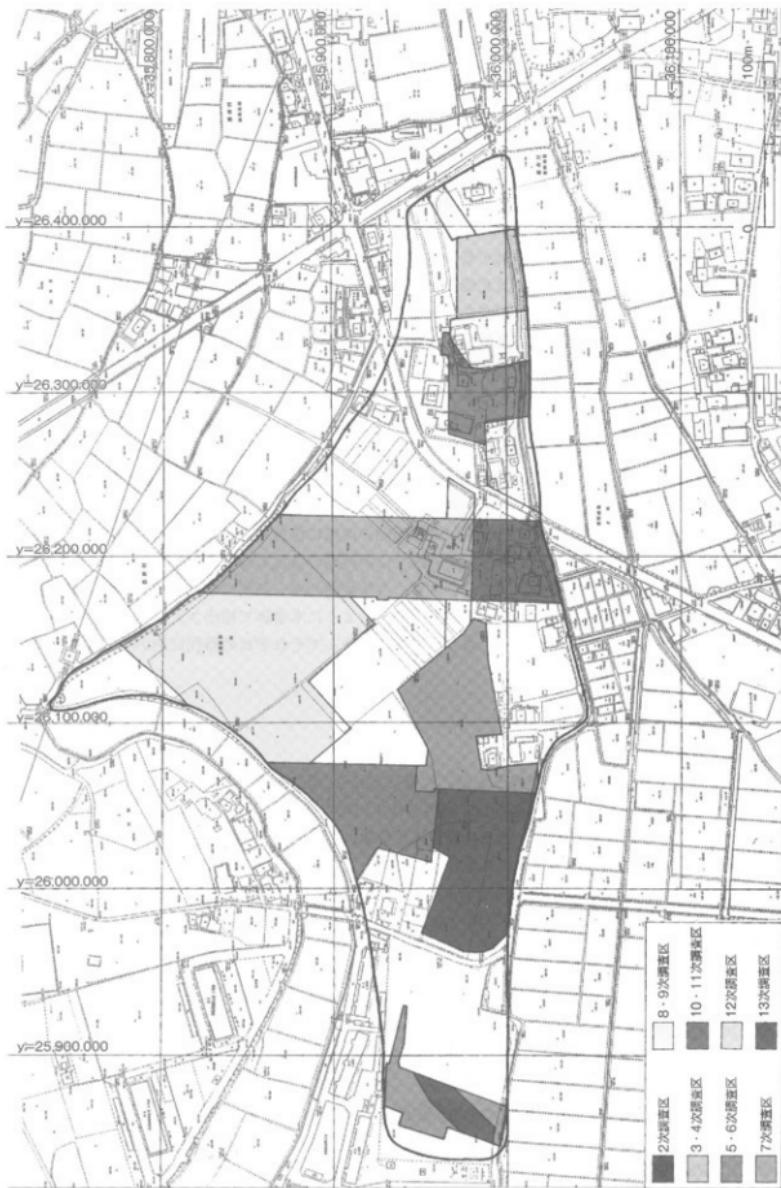
No.	遺跡名	時代	種別	No.	遺跡名	時代	種別
1	上ノ代	古代	集落	67	鬼傳B	古代	集落
2	幡丘	古代	集落	68	鬼傳C	古代	集落
3	幡丘II	古代	集落	69	野古B	古代	散布地
4	幡丘	古代(奈良)	集落	70	野古A	奈良・平安	集落
5	長崎町	縄文・古代	散布地	71	泉岡沢田	古代	集落・古墳
6	稻荷町	縄文・古代～近世	集落	72	飯闇才川	縄文・古代	集落・古墳
7	大新町	縄文・古代	集落	73	矢盛	縄文・古代	散布地
8	前九年	縄文	集落	74	御谷地	縄文・古代	集落
9	宿田南	中世・近世	集落	75	向中野原	古代・中世	集落・城館
10	水津御塚	近世	紅坂	76	竹太郎	古代	集落
11	橋山田	縄文	散布地	77	辻屋敷	古代	集落
12	愛宕山	近世	散布地	78	上越場B	古代	集落
13	鹿園城	中世・近世	城館	79	二又	古代(平安)	散布地
14	鍛冶町	近世	一里塚	80	西田A	古代	集落
15	鍋ヶ森	中世・近世	散布地	81	西田B	古代	集落
16	鳥子	縄文・弥生	散布地	82	前田	古代	集落
17	新庄	縄文	散布地	83	藤島II	古代	散布地
18	瀬戸	縄文・弥生	散布地	84	藤島	縄文・平安	集落
19	花垣船(花板船)	中世	散布地	85	坂岡林崎II	古代	輪落
20	山王工	縄文・古代	集落	86	深洞I	古代(平安)	集落
21	人恵寺町	縄文	散布地	87	坂岡林崎I	古代	集落
22	中野館	中世	散布地	88	上新田	古代(平安)	集落
23	砂留	縄文・古代	集落	89	深洞II	古代(平安)	集落
24	新山館	古代・中世・近世	集落・城館	90	高原敷I	古代	散布地
25	葛西館	縄文・古代	散布地	91	高屋敷II	古代(平安)	散布地
26	金寺	縄文・古代	散布地	92	下久根I	縄文・古代	散布地
27	立石	縄文・古代	集落	93	石持	古代	散布地
28	星ヶ森	縄文・近世	散布地	94	夕見	古代	散布地
29	鶴ヶ森遺	中世	散布地	95	西	古代(平安)	集落
30	門	縄文・古代	散布地	96	階堂I	縄文・古代	集落
31	角下	縄文・古代	散布地	97	階堂III	古代(平安)	集落
32	細田	古代(平安)	散布地	98	階堂II	古代(平安)	集落
33	鮎・松ノ木	古代(平安)	集落	99	南谷地	古代(平安)	集落
34	上野丘敷	古代	散布地	100	下久根II	縄文・古代	散布地
35	八ツ口	古代	散布地	101	田中	古代(平安)	集落
36	八掛	古代(奈良・平安)	集落	102	松島	古代	集落
37	細中	古代	集落	103	舊本	古代	散布地
38	五兵衛新田	古代	集落	104	塙田	古代	散布地
39	天沼	古代	集落	105	生畔	古代	集落
40	蟹波下	古代	散布地	106	陣当	古代	集落
41	二ツ沢	縄文・古代	散布地	107	南仙北	縄文・古代	集落
42	竹鼻	古代	集落	108	向中野原	古代	集落
43	山中	縄文・古代	散布地	109	アイノ野	縄文	散布地
44	月見山	縄文・古代	散布地	110	本郷	古代(平安)	集落
45	堆	縄文・古代	散布地	111	因磯	縄文・古代	散布地
46	細織	縄文	散布地	112	新井田II	古代	散布地
47	飯岡山船	中世	散布地	113	小田I	古代	散布地
48	高館古墳	古代	古墳	114	新田	古代(平安)	集落
49	高館	縄文	散布地	115	大島	古代	集落
50	大御I	古代	集落	116	一本松	平安	散布地
51	飯岡赤坂	古代	散布地	117	浜沢大船	古代・中世	散布地
52	赤坂II	古代	散布地	118	間木	古代	散布地
53	いたこ塚	近世	祭祀跡	120	永井経塚	古代	經塚
54	小船(羽扇鱗)	中世	散布地	121	神田	古代	祭祀跡
55	移子塚	古代	散布地	122	神田塚	近世	祭祀跡
56	志波城	古代	城柵跡	123	下永井	古代	散布地
57	石仏	古代	集落	124	いたこ塚	近世	祭祀跡
58	水門	古代	集落	125	碇壁	古代(奈良)	集落
59	小林	古代	集落	126	西魔渡	古代	集落
60	大宮	古代・中世	集落	127	百日本	縄文・古代	集落
61	大宮北	古代	集落	129	中島	古代	集落
62	小幅	古代	集落	130	下永林	縄文・古代	散布地
63	冥界	古代	散布地	131	三木柳	縄文・古代	集落
64	本宮熊童A・B	縄文・古代	集落	132	荒尾	古代	集落
65	稻荷	古代	集落	133	高穗A	古代	集落
66	鬼傳A	古代	集落	134	高穗B	古代	散布地

軒を超える堅穴住居が検出され、東国との関連が想定される関東系土師器が出土した台太郎遺跡(76)、40基以上の古墳及び奈良—平安時代の堅穴住居が検出された飯岡沢田遺跡(71)、多数の堅穴住居をはじめ壘状遺構が検出された細谷地遺跡(74)、旧河道が検出され多量の木製品が出土した向中野館遺跡(75)などを挙げることができる。

また、この他にも縄文時代の遺跡として陥し穴状遺構が検出された矢盛遺跡(73)、晩期の住居跡が検出された本宮熊堂A遺跡(64)など、中世の遺跡として居館跡や堀が検出された矢盛遺跡、曲輪や堀などが検出された向中野館遺跡などを挙げることができる。



第2図 周辺の地形



第3図 調査区の位置

3 過去の調査歴（第3図）

飯岡才川遺跡では平成18年度までに試掘調査を含めて13次の調査が当センター及び盛岡市教育委員会によって実施されている。これまでの調査では縄文時代の陥り穴状遺構、古代の竪穴住居・掘立柱建物・古墳・墓坑、江戸時代の掘立柱建物などが検出されている。

陥り穴状遺構は、主に遺跡範囲の南西に位置する第5・6・10次調査区で多数検出されている。いずれも溝形をしており、旧河道を挟んで両岸に列状あるいは2~4基単位のグループで配置されている。遺物はほとんど出土していないが、いずれも縄文時代に属すると考えられる。

本遺跡では古代に属する遺構・遺物が最も多く検出されており、その種類も多岐にわたる。遺跡範囲の中央に位置する第7次調査区では北側を中心に8基の古墳が確認されている。墳丘は削平されており出土遺物も乏しいが、その多くが奈良時代~平安時代初頭に属すると考えられる。この他にも奈良~平安時代に属すると考えられる墓坑もみつかっており、今回報告する第12次調査区を含めた遺跡範囲の北側が古代には墓域として利用されていたものと考えられる。

竪穴住居は遺跡範囲の中央に位置する第7次調査区と西側に位置する第3・4・11次及び第8・9次調査C区で確認されている。これまでに調査されたものはいずれも平安時代のものであり、奈良時代に属するものは今回報告する第12次調査区でのみ確認されている。第3・4次調査区では竪穴住居とともに同時期と考えられる総柱式の掘立柱建物もみつかっており、遺跡範囲の東側が平安時代には集落の中心域として利用されていたと考えられる。

この他にも江戸時代に属する掘立柱建物が遺跡範囲の南側に位置する第13次調査区及び第8・9次調査C区で確認されている。また、第3次調査区では同時期の墓坑も確認されており、第13次調査区の南側に隣接する細谷地遺跡第12次調査区を含めた遺跡範囲の南~西側は江戸時代には居住域及び墓地として利用されていたことがわかってきてている。このように本遺跡で検出された遺構・遺物は縄文時代から江戸時代までと多岐にわたっており、断絶期を挟んでそれぞれの時代において人々の生活の痕跡を留めた遺跡であるといえる。

4 調査区の概要

第12次調査区は、遺跡範囲の中央~北側に位置しており、7,200m²を対象として2ヵ年にわたって発掘調査を実施した。調査前は畠地として利用されていたため、至る所で耕作痕（トレッチャ痕）や整地・造成の痕跡が確認された。また、調査区北西端には明治時代の衛生試験場の建物基礎が残存しており、一部の遺構がこれによって壊されている。

基本層序は、整合性を図るために隣接する第7次調査区E II 21グリッド（盛南開発グリッドでは-2 E 11bグリッド）で確認された層序を用いた。遺構検出面はⅢ~Ⅳ層上面であるが、先述の通り近年の耕作や造成の影響で調査区中央を除くほとんどの地点でI層の直下にⅢ層が検出されるという状況であった。また、RG056溝の南東側（-3 C16S ~ 22v グリッド付近）ではI層直下でIV層以下に存在する礫層が確認された。各層の性質と層厚は以下の通りである。

I層 10YR3/2黒褐色 しまりやや密、粘性強 現耕作土 遺物微量包含 層厚約10cm

II層 10YR2/2黒褐色 しまりやや密 根の影響で地山ブロック混入 層厚5~10cm

= 遺構検出面①

III層 10YR7/8黄橙色粘質土 しまりやや密、粘性強 部分的に10YR8/8黄橙色粘質土ブロックを含む斑状に含む地山 層厚25~40cm = 遺構検出面②

IV層 10YR8/8黄橙色粘質土 しまりやや密、粘性強 地山

III 調査の方法

1 野外調査の方法

(1) グリッドの設定(第4図)

盛岡南新都市土地区画整備事業に因る調査では、盛岡市教育委員会の方針に準じて平面直角座標系第X系(日本測地系)を座標変換した調査座標を用いてグリッドの設定を行っている。具体的には、本遺跡が所在する飯岡地区的調査座標点X = -36,000.000、Y = 26,000.000を基点として、辺50×50mの正方形グリッド(大グリッド)を設定し、さらにそれを25等分して2×2mの小グリッドとしている。グリッドの呼称は、北西隅を基点として大グリッドは南方向へ1～25、東方向へA～Y、小グリッドは南方向へ1～25、東方向へa～yとしており、小グリッドの呼称は1A 5bなどとなる。ただし、今回の調査区は基点座標より北側に位置し、大グリッドの呼称が基点から北方向に-1～-25となることから、小グリッドの呼称は-1A 5bなどとなる。

なお、今次調査区の基準点は平成17年度に隣接する第7次調査区の基準点(基1・補2)をもとに打設し、それぞれ仮番号を付した。平成18年度はそのうちの5点とさらに増設した3点を主要基準点として用い、それらをもとに調査区全体をカバーできるようにグリッドの設定を行なった。主要基準点の座標は以下の通りである。

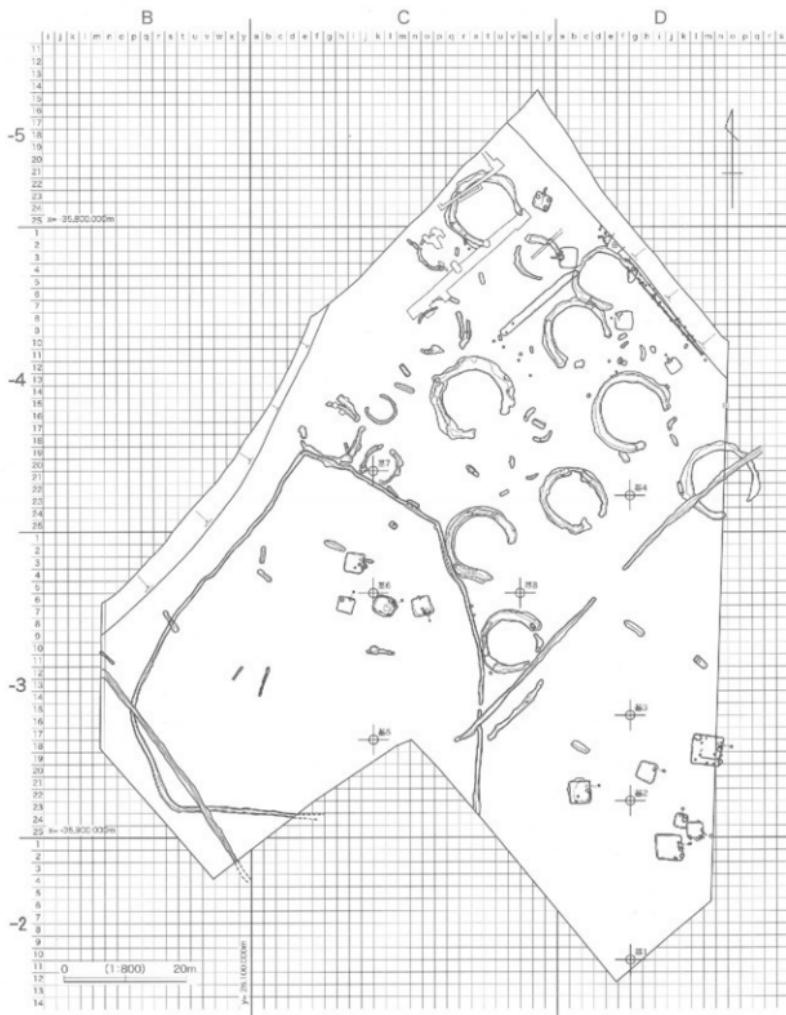
点名	グリッド名	X	Y	標高(m)	H17年度名
基1	-2D11g	-35,920.000	26,162.000	124.105	仮1
基2	-3D23g	-35,894.000	26,162.000	124.072	仮2
基3	-3D16g	-35,880.000	26,162.000	123.869	仮3
基4	-4D23g	-35,844.000	26,162.000	124.243	仮4
基5	-3C18k	-35,884.000	26,120.000	124.656	仮6
基6	-3C6k	-35,860.000	26,120.000	124.588	H18年新設
基7	-4C21k	-35,840.000	26,120.000	124.570	H18年新設
基8	-3C6w	-35,860.000	26,144.000	124.449	H18年新設

(2) 精査の方法および遺構の記録

調査に先立って調査区内の雜物撤去を行い、続いて遺構の有無を確認するために調査区内の数ヶ所にトレチ子を設定して人力で試掘を行った。試掘の結果、調査区内は隣接する第7次調査と同様、近年の削平により大部分で表土(盛土・耕作土)直下が遺構検出面(地山)となることが判明した。そのため、調査の迅速化と人力掘削量の軽減を図るために、調査員監督の下、重機(バックホー)によつて遺構検出面付近まで表土を掘削し、その後人力で遺構検出を行った。

検出された遺構については釘やスプレーを使ってマーキングし、一部の堅穴住居や古墳については検出状況の写真撮影を行った。なお、遺構名については野外調査では各遺構に仮名(○号住居跡など)をつけ、室内整理の段階で盛岡市教育委員会が使用している略号に遺構名を変更している。

遺構の掘り下げは4分法と2分法を使い分け、土層観察を行いながら進めた。掘り下げには主に移



第4図 グリッド及び基準点配置図

植観を使用し、カマドや遺物の集中する地点では竹籠なども使用している。遺構のプランや新旧関係が不明な場合は適宜サブトレントを設定して層位確認を行っている。なお、堅穴住居や古墳の刷溝では、遺物の取り上げ単位としてベルトを境界とした区画設定を行っている（凡例図参照）。

遺構の記録については、完掘時、土層断面、遺物出土状況には写真撮影と実測図の作成を行っている。遺構の実測は、平成17年度は簡易遺り方測量と光波測距儀を用いて作成した。平成18年度はそれらの方法に加え、デジタルカメラ及びラジコンヘリを使用した写真解析図化作業を業務委託して実施した。いずれも縮尺は1/20を基本とし、遺構配置図や大型の遺構は1/50や1/100、遺物出土状況やカマドは1/10など適宜縮尺を変更して作成している。

写真撮影は、平成17年度の調査では35mm判カメラ2台（モノクロ・カラーリバーサル）と6×7判カメラ（モノクロ）、メモ用としてデジタルカメラ（オリンパス社製コンパクトタイプ、400万画素）を使用し、平成18年度はカラーリバーサルに代えてデジタルカメラ（キャノン社製一眼レフタイプ、1280万画素）を使用した。

（3）広報・普及啓発活動

平成18年10月3日 職場体験（岩手町川口中学校2年生2名）。

平成18年10月28日 現地説明会（28名参加）

平成19年1月20日 第28回遺跡報告会（岩手県立埋蔵文化財センター・（財）岩手県文化振興事業団主催）においてスライドを使用した報告を行った。

2 調査経過

野外調査は平成17・18年度の2ヶ年にわたって実施した。平成17年度には調査区全域の表土除去と遺構検出及び遺構精査（調査区東側及び南西側3,200m²）、18年度は遺構検出と遺構精査（17年度未了分4,000m²）を行っている。以下に各年度の調査経過を簡単に記す。

平成17年度

10月3日 調査開始。人力による粗掘と重機による表土除去作業を行う。（～10月21日）

10月6日 遺構精査開始（～11月8日）

11月7日 終了確認。次年度縁越分の面積を確認する。

11月9日 次年度調査に備えて精査未了区域にブルーシートをかける。

11月10日 資材を搬出し野外調査終了。

平成18年度

9月19日 資材搬入し野外調査再開。

9月20日 ブルーシートを除去しながら遺構検出及び精査開始。

10月3日 職場体験

10月26日 ラジコンヘリによる写真測量（1回目）。

10月28日 現地説明会開催

11月8日 終了確認

11月9日 航空写真撮影

11月24日 ラジコンヘリによる写真測量（2回目）。午後に資材搬出し野外作業終了。

3 室内整理の方法

室内整理作業は、平成17・18年度とも最初に遺物の洗浄・註記から開始した。土器類は乾燥後に土器部と須恵器に選別して破片数と重量を計測した後に註記を行っている。註記については、平成17年度は遺跡名・遺構名（野外調査での仮遺構名）・出土層位を記した。平成18年度は取り上げた日付順に付した袋番号と遺跡名のみを記し、遺構名を変更した時点で報告書掲載分には遺構名と層位・掲載番号を追記している。各年度とも註記の後には接合・復元作業を行い、回転復元実測が可能なもの及び器形や調整に特徴があるものを中心に登録を行い、それらについて実測・拓本・トレースを行った。

金属製品のうち、鉄製品についてはX線透過写真撮影を行って遺存状況を確認しながら銷落しと実測を行った。また、一部のものについては破損防止のために保存処理作業を委託している。

剥片石器・石製品・陶磁器については、出土点数が少ないため全点登録した後に実測を行っている。砾石器については遺構内出土のものを中心を選別し、登録を行ったものについて実測を行った。

遺構図面の整理は、平成17年度は実測原図をもとに修正図（第二原図）を作成し、トレースと版下作成を行っている。平成18年度は簡易造り方測量で実測した遺構（堅穴住居と土坑の一部）については修正図を作成しているが、その他の遺構については写真解析作業を業務委託して図化を行っている。なお、平成18年度については修正図作成成分・写真解析分とともに図面の調整を行った後にレイアウトを行いデジタル版下としており、トレース及び版下作成を行っていない。ただし、表現の体裁を整えるため17年度作成についても版下を取り込んでデジタルデータ化している。

4 凡　　例

（1）遺構名

遺構の名称は、盛岡市教育委員会で使用している略号に準じて付し、遺跡全体で通し番号としている。野外調査時には種別の変更や欠番を避けるために全て仮遺構名（1号住居跡など）とし、室内整理の段階で略号に振り替えている。仮遺構名と変更した略号の対応関係は第2表の通りである。

なお、遺構の略号は以下の通りである。

R A…堅穴住居	R C…柱穴列	R D…土坑・陥し穴状遺構	R F…焼土遺構
R G…溝跡	R Z…古墳・土器埋設遺構		

（2）掲載縮尺

遺構図面の縮尺は以下の通りであり、図中にスケールを付している。

堅穴住居・土坑・陥し穴状遺構…1/50、古墳…1/50～100、土器埋設遺構・焼土遺構…1/25

カマド・遺物出土状況…1/25 溝跡…断面1/50・60（平面は規模に応じて使い分け）

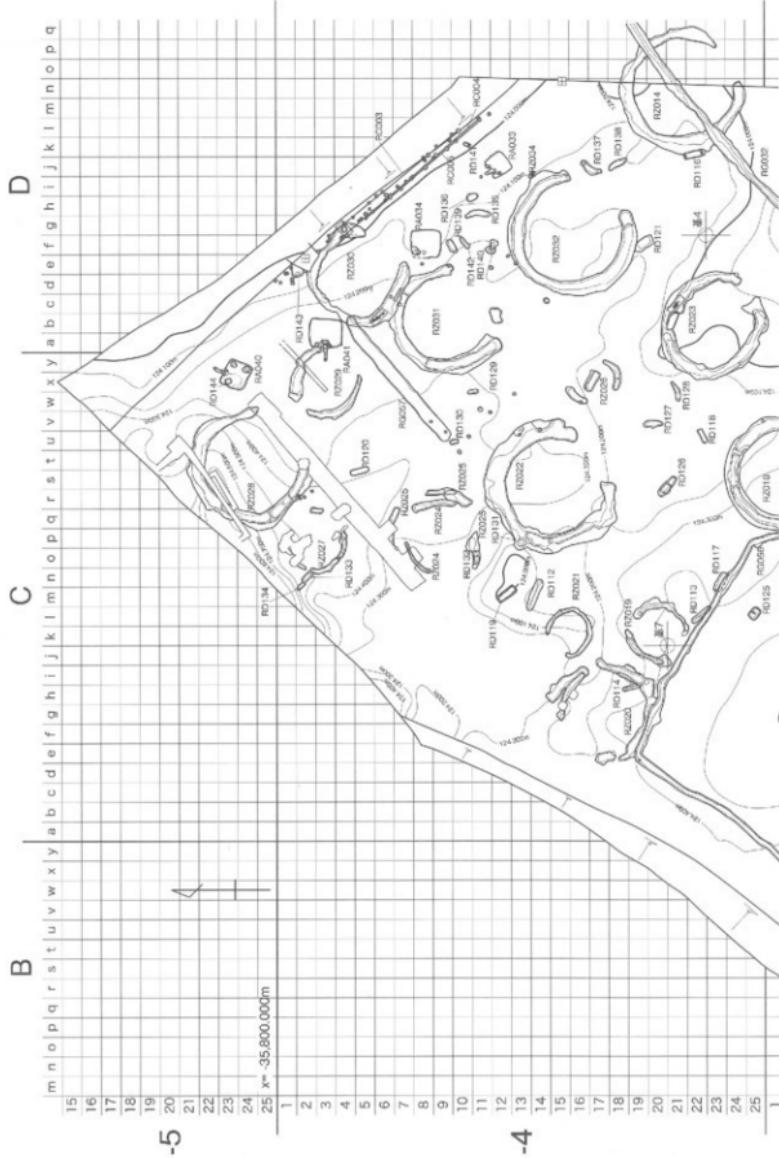
遺構の計測位置・区割り・焼土などの表現は凡例図の通りである。

遺物図面の縮尺は、土器・石製品・陶磁器・砾石器は1/3、金属製品は1/2、剥片石器は2/3を基本としているが、大きさの関係上、縮尺を変更しているものがある。土器の表現方法及び計測位置については凡例図の通りである。なお、回転復元実測が可能な土器については、回転体分割法（島原・村田 2007）を用いた容量計測も行っている。

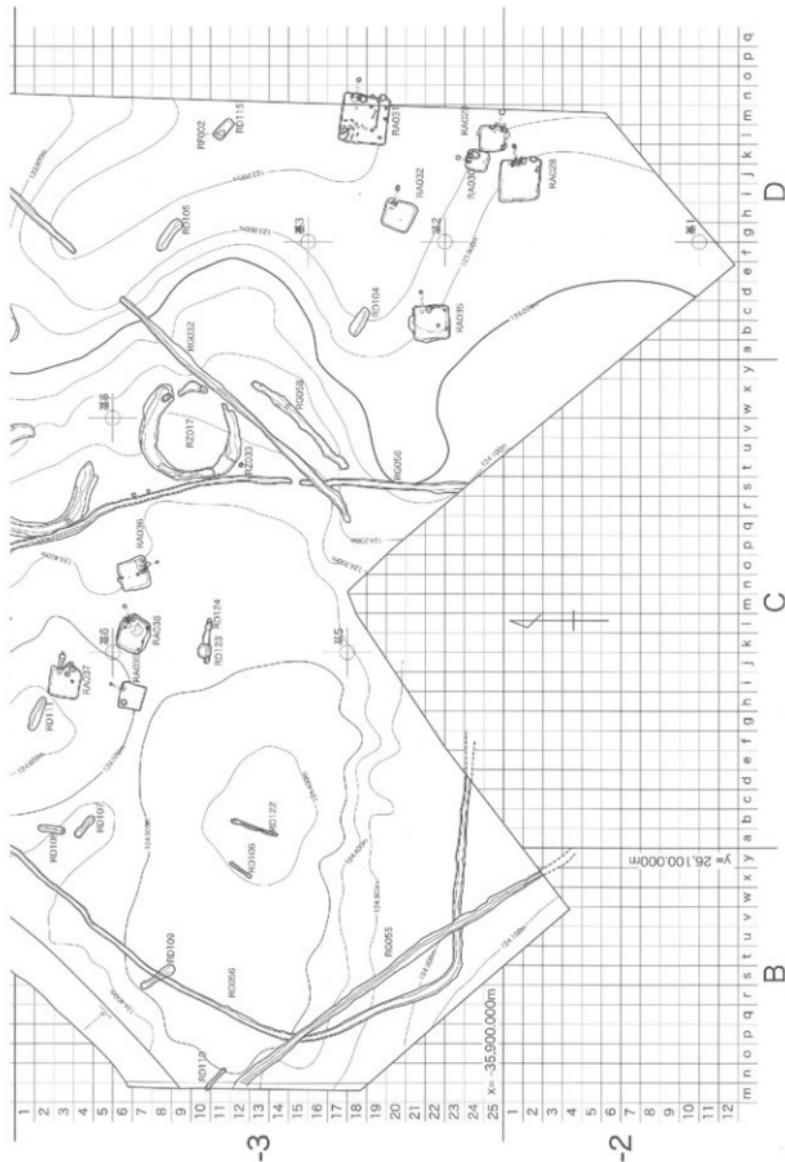
第2表 遺構名一覧

堅穴住居		土坑・隨穴状遺構		焼土遺構		古墳	
新	旧	新	旧	新	旧	新	旧
RA028	→ 1号住居跡	RD104	← 2号上坑	RF002	→ 1号焼土	RZ014	→ SZ08
RA029	→ 2号住居跡	RD105	← 3号土坑			RZ017	→ 1号古墳
RA030	→ 7号住居跡	RD106	← 7号土坑			RZ018	→ 2号古墳
RA031	→ 3号住居跡	RD107	← 8号土坑			RZ019	→ 3号古墳
RA032	→ 4号住居跡	RD108	← 9号土坑			RZ020	→ 4号古墳
RA033	→ 5号住居跡	RD109	← 10号土坑			RZ021	→ 5号古墳
RA034	→ 6号住居跡	RD110	← 11号土坑			RZ022	→ 6号古墳
RA035	→ 8号住居跡	RD111	← 14号土坑			RZ023	→ 7号古墳
RA036	→ 9号住居跡	RD112	← 21号土坑			RZ024	→ 8号古墳
RA037	→ 10号住居跡	RD113	← 23号土坑			RZ025	→ 9号古墳
RA038	→ 11号住居跡	RD114	← 28号土坑			RZ026	→ 10号古墳
RA039	→ 12号住居跡	RD115	← 1号土坑			RZ027	→ 11号古墳
RA040	→ 13号住居跡	RD116	← 4号土坑			RZ028	→ 12号古墳
RA041	→ 14号住居跡	RD117	← 5号土坑			RZ029	→ 13号古墳
柱穴列		RD118	← 17号土坑			RZ030	→ 14号古墳
RC003		RD119	← 22号上坑			RZ031	→ 15号古墳
RC004		RD120	← 26号土坑			RZ032	→ 16号古墳
RC005		RD121	← 34号上坑			土器埋設遺構	
RC003		RD122	← 6号土坑			RZ033	→ 1号埋設
RC004		RD123	← 12号土坑			RZ034	→ 2号埋設
RC005		RD124	← 13号土坑				
RC003		RD125	← 15号土坑				
RC004		RD126	← 18号土坑				
RC005		RD127	← 19号土坑				
RC003		RD128	← 20号土坑				
RC004		RD129	← 24号土坑				
RC005		RD130	← 25号上坑				
RC003		RD131	← 27号土坑				
RC004		RD132	← 29号土坑				
RC005		RD133	← 30号土坑				
RC003		RD134	← 31号土坑				
RC004		RD135	← 32号土坑				
RC005		RD136	← 33号土坑				
RC003		RD137	← 35号土坑				
RC004		RD138	← 36号土坑				
RC005		RD139	← 37号上坑				
RC003		RD140	← 38号土坑				
RC004		RD141	← 39号上坑				
RC005		RD142	← 40号土坑				
RC003		RD143	← 41号土坑				
RC004		RD144	← 42号土坑				

*柱穴番号は野外調査で使用した番号を使用



第5図 造構配置図(1)(S=1/500)



第6図 造構配置図(2) (S=1/500)

IV 検出された遺構と遺物

1 遺構の分布状況（第5・6図）

2ヵ年にわたる調査によって、堅穴住居14棟・古墳17基・土坑31基・陥し穴状遺構11基・溝跡5条・土器埋設遺構2基・焼土遺構1基・柱穴列3列を検出した。分布状況をみると、堅穴住居は調査区北辺と中央・南東側に分布する。古墳は調査区中央～北側に等間隔で分布する。土坑は調査区全域で検出されているが、このうち墓坑と推定されるものは古墳の分布範囲内でのみ確認されている。陥し穴状遺構は調査区西側に集中して分布する。遺物は土器類のほとんどが堅穴住居と古墳の周溝からの出土であり、その他からはほとんど出土していない。

2 堅 穴 住 居 (RA)

RA028堅穴住居

遺構（第7・8図、写真図版2）

〈位置・検出状況〉調査区南部、平安時代の住居跡が集中する地点の1棟である。-2D2i・3i付近に位置し、北東約1.2～1.5mほどにはRA029・030が隣接する。Ⅲ層上面で黒色土の広がりで確認した。（重複関係）認められない。

〈規模〉4.18×4.34m 〈平面形〉不整形方 〈床面積〉15.07m²

〈壁の高さ・状態〉36～44cmほどで、いずれも直立ぎみに立ち上がっている。

〈堆積状況〉上位は褐色土粒を含む黒色土、中位は褐色土粒などを含む黒褐色土、下位は黄褐色土粒等を含む暗褐色土からなる。自然堆積層である。

〈床面〉Ⅲ層を床面とし堅く締まる。ほぼ平坦である。

〈カマド〉カマドは東壁北隅寄りに設置される。本体部・煙道部とも残存状況は良好である。

（本体部）幅は100cm前後を測る。袖部は地山の削り出しをベースにして、扁平な円碟を芯材に据えているが、左右とも芯材碟が本体中央部に崩落し奥壁の一部を覆っている。燃焼部焼土は直径30cm程度に形成され、厚さは最大で6cmである。カマド内には遺物が多く含まれていた。

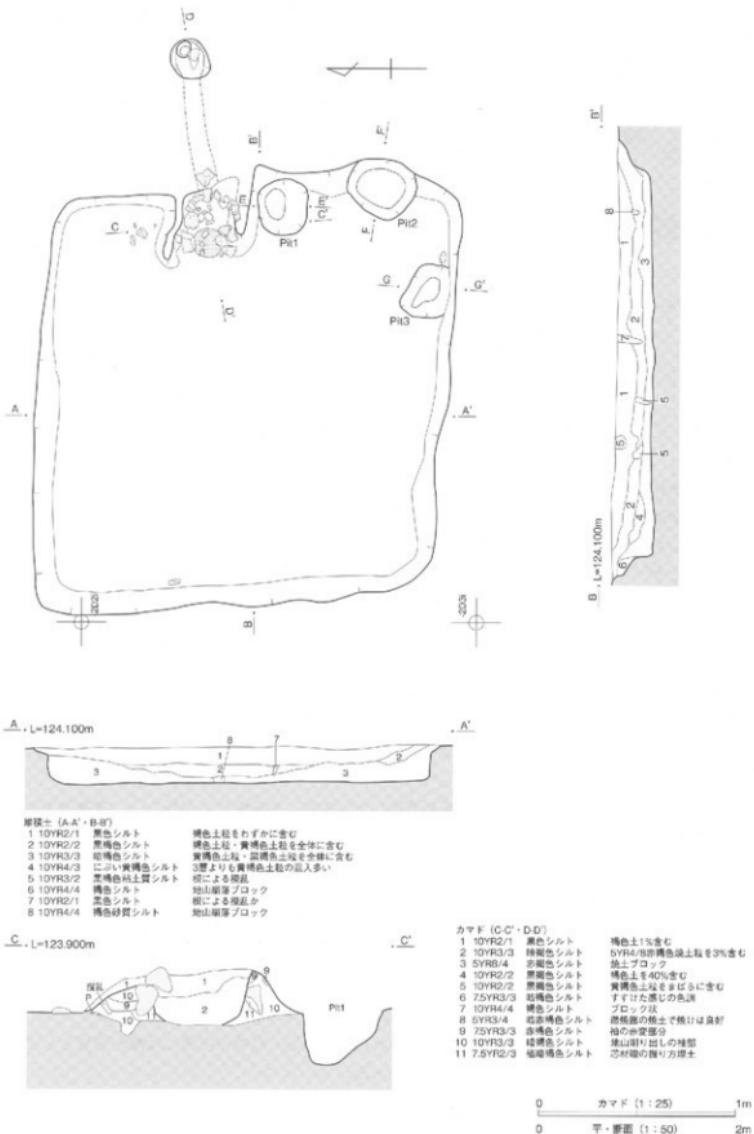
（煙道・煙出し部）削り貫き式の煙道で、堆積土には焼土粒や炭化物粒を含む。煙出しに向かってはおよそ25度の角度で下り、奥壁からの長さは約1.1mである。煙道方位はN-80°-Eである。煙出し内からは大形の礫が数個出土したが、上部構造に関係があるものかは不明である。

〈柱穴・土坑〉柱穴は確認されなかったが、直径25～35cmほどの貯蔵穴と思われる土坑が3基（Pit 1～3）検出された。Pit 1はカマドのすぐ右脇に、Pit 2は東壁南東コーナー寄りに、Pit 3は南壁南東コーナー寄りに位置している。

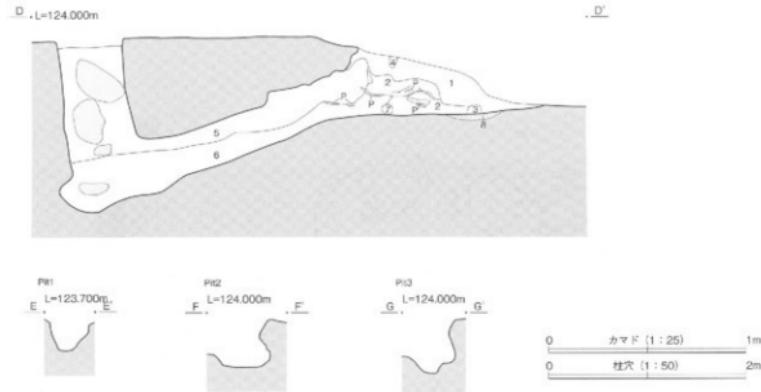
出土遺物（第60～62図、写真図版45～47）

〈出土状況〉土器類は、堆積土やカマド内・煙道部・袖内などから土師器が5,146g、須恵器が138g出土した。石製品は砥石1点、鐵製品では角釘が1点出土している。

〈掲載遺物〉29点掲載した（1～29）。1～12は土師器の壊で、1～3は内面が黒色処理されるもの、4～12は非黒色処理のものである。全体的に口縁部が外反する器形のものが多い。12は倒立文字「木」と思われる破片である。13はロクロ成形後、内外面および底部まで黒色処理・ヘラミガ



第7図 RA028 (1)



第8図 RA028 (2)

き調整が施された小型の鉢である。調整は非常に丁寧に行われている。14～21は非ロクロ成形の壺で、口縁部内外面は横ナデ、体部外面はヘラケズリないしヘラナデ調整、体部内面にはヘラナデ・ハケ調整が施されるものである。いずれも短めの口縁部が特徴的である。22～24はロクロ成形の壺である。体部外面下位がヘラケズリ調整されている。24の内面には指の搔き上げ痕が観察された。25～27は須恵器の壺、28は1面使用的砥石、29は釘と思われる鉄製品である。

時 期 出土した遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀初）に属するものと思われる。

R A 029 壺穴住居

遺 構（第9図、写真図版3）

〈位置・検出状況〉 R A 028同様、調査区南部の住居群のうちの1棟で、-3 D251付近に位置する。Ⅲ層上面で確認した。

〈重複関係〉 遺構の北西隅がR A 030の東壁と重複しているが、本遺構の方が新しい。遺構の上面は農業機械（トレンチャー）の痕跡が至る所に確認できた。

〈規模〉 2.68×2.78m 〈平面形〉 略方形 〈床面積〉 5.26m²

〈壁の高さ・状態〉 35～42cm程度で、いずれも直立ぎみに立ち上がる。

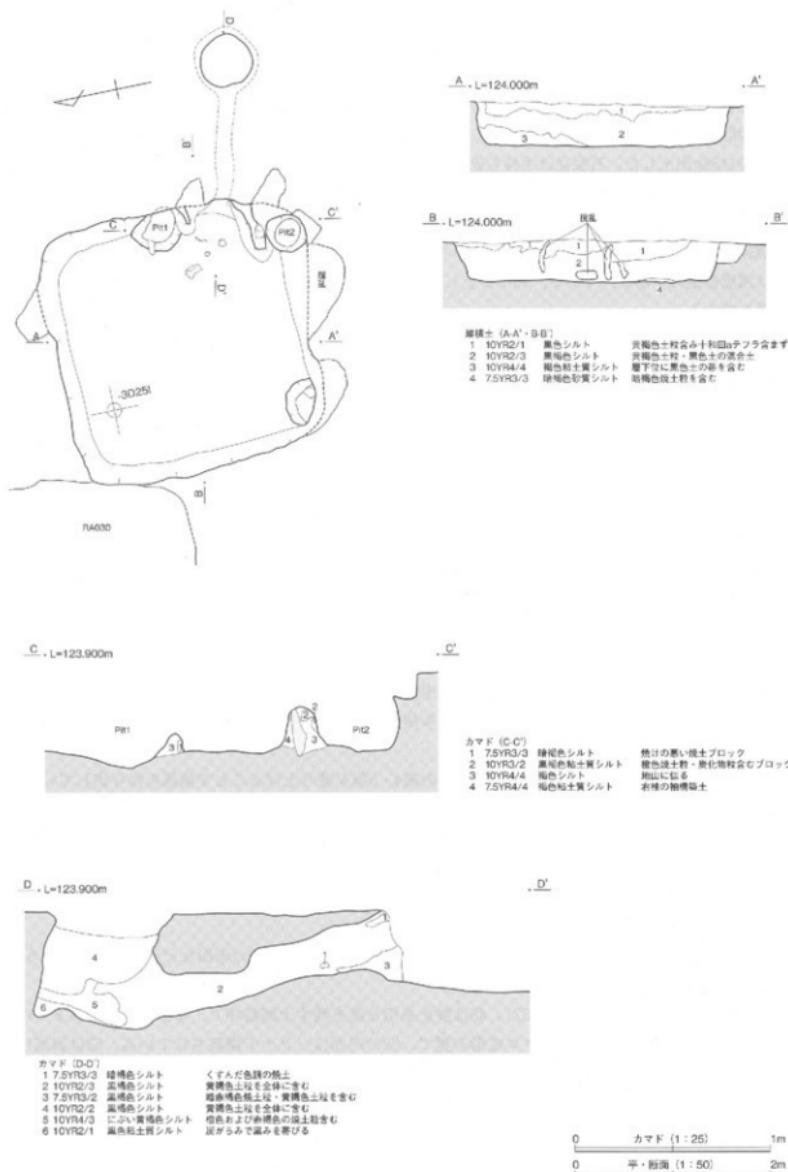
〈堆積状況〉 上位は黄褐色土粒を含む黒色土、中位から下位は褐色土粒を含む黒褐色土を主体とする。北側からは最下部に褐色土が堆積している。

〈床面〉 Ⅲ層を床面とするが、縮まりはそれほどではない。全体に平坦である。

〈カマド〉 東壁南東隅に設置される。煙道から煙出しにかけての残存状況は良好である。

（本体部） 幅は100cm前後で、これも袖部は地山削り出しである。右袖の内側には礫が芯材として地山に埋め込まれている。燃焼部焼上は確認できなかった。

（煙道・煙出し部） 例り貫き式の煙道で、堆積土は黄褐色土粒を全体に含む黒褐色土を主体である。底面は煙出しに向かって10度前後の角度で緩やかに下り、奥壁からの長さは約1.2mである。煙道方位はN-192°-Eである。煙出しの堆積土には炭化物や焼土粒が多く含む層が見られ、わずかにオーナメントが見つかっている。



第9図 RA029

バーはぎしながら立ち上がっている。

〈柱穴・土坑〉 土坑は3基（Pit 1～3）確認された。Pit 1は壁が袋状にふくらんでいるもの、Pit 3は南西コーナーに位置する不整形の土坑である。いずれも貯蔵に関する用途をもつものであろう。

出土遺物（第62・63図、写真図版47・48）

〈出土状況〉 土器類は、堆積土を主体としてカマド内や煙道などから出土している。土師器は1,951g、

須恵器は88g出土した。石製品は手持ち砥石1点、鉄製品は釘と思われる製品が1点出土している。

〈掲載遺物〉 18点掲載した。30～40が土師器の壺で、30のみ内面に黒色処理が施される。31・32・35・40あたりは還元しきれなかった個体か？それ以外は非黒色処理の壺である。38は外面に線刻がある個体、39は灯明皿に転用されている。41・42は非ロクロ成形の壺、43・44はロクロ成形の壺である。45は須恵器壺の体部破片である。46は釘とした鉄製品の欠損品、47は4面が使用される凝灰岩製の磨き砥石である。

時期 出土した遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀初）に属するものと思われる。

R A030 穴穴住居

遺構（第10図、写真図版4）

〈位置・検出状況〉 調査区南部の住居群のうちの1棟で、-3 D24 j グリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で確認した。

〈重複関係〉 東壁とR A029の西隅が重複しているが、本遺構の方が古い。検出状態ではトレンチャーケイが至る所に確認されたため、重複関係の把握にかなり手間取った。

〈規模〉 2.17×2.28m 〈平面形〉 四角形 〈床面積〉 3.42m²

〈壁の高さ・状態〉 23～36cmで、いずれも直立ぎみに立ち上がる。

〈堆積状況〉 上位は黄褐色土粒を含む黒色土、下位は褐色土粒を含む黒褐色土からなる。部分的に炭化物が多く含まれる箇所がある。

〈床面〉 Ⅲ層を床面とし、周辺よりもわずかに中央部付近が深い。

〈カマド〉 北壁中央やや西寄りに設置される。本体部・煙道・煙出し部とも残存状況は良好であったが、燃焼部焼土が確認できなかった。

（本体部） 幅は80cm前後である。断面aラインの第4・5層を盛り上げることで袖部を作り出している。先に述べたように燃焼部焼土は確認できなかった。

（煙道・煙出し部） 剥り書き式の煙道で、底面は煙出しに向かって12度前後の角度で下る。奥壁からの長さは80cmである。煙道方位はN-2°-Wである。

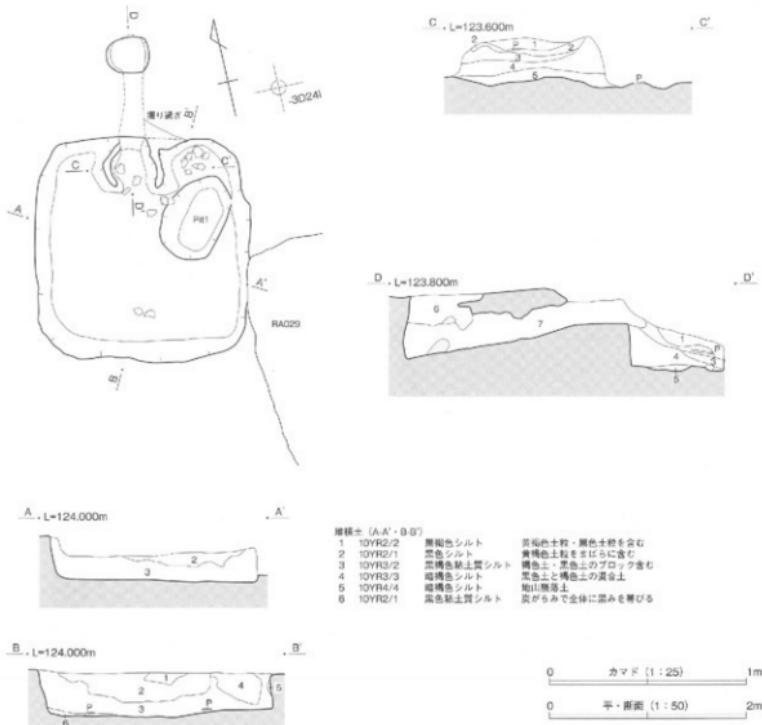
〈柱穴・土坑〉 カマド左横に1基確認された。Pit 1は61×91cmの稍円形で深さは5cmほどである。

出土遺物（第64図、写真図版48）

〈出土状況〉 土器類は、堆積土を主体としてカマド内や煙道、カマド右の床面などから出土している。土師器は1,100g、須恵器は100gほど出土した。

〈掲載遺物〉 5点掲載した（48～52）。48は静止糸切り痕を残す土師器壺で、体部から口縁部まで内彎して立ち上がる。50～52はロクロ成形の壺で、52の内面はヘラナテ調整されている。53は器面にロクロ調整の痕跡が明瞭に残り、内外面の凹凸が著しい須恵器壺である。

時期 出土した遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀初）に属するものと思われる。重複関係からR A029より古い住居であるが、出土した土器の特徴に差が認められないことから、両者に時期差があったとしてもわずかであろう。



第10図 RA030

R A031堅穴住居**遺構 (第11・12図、写真図版5)**

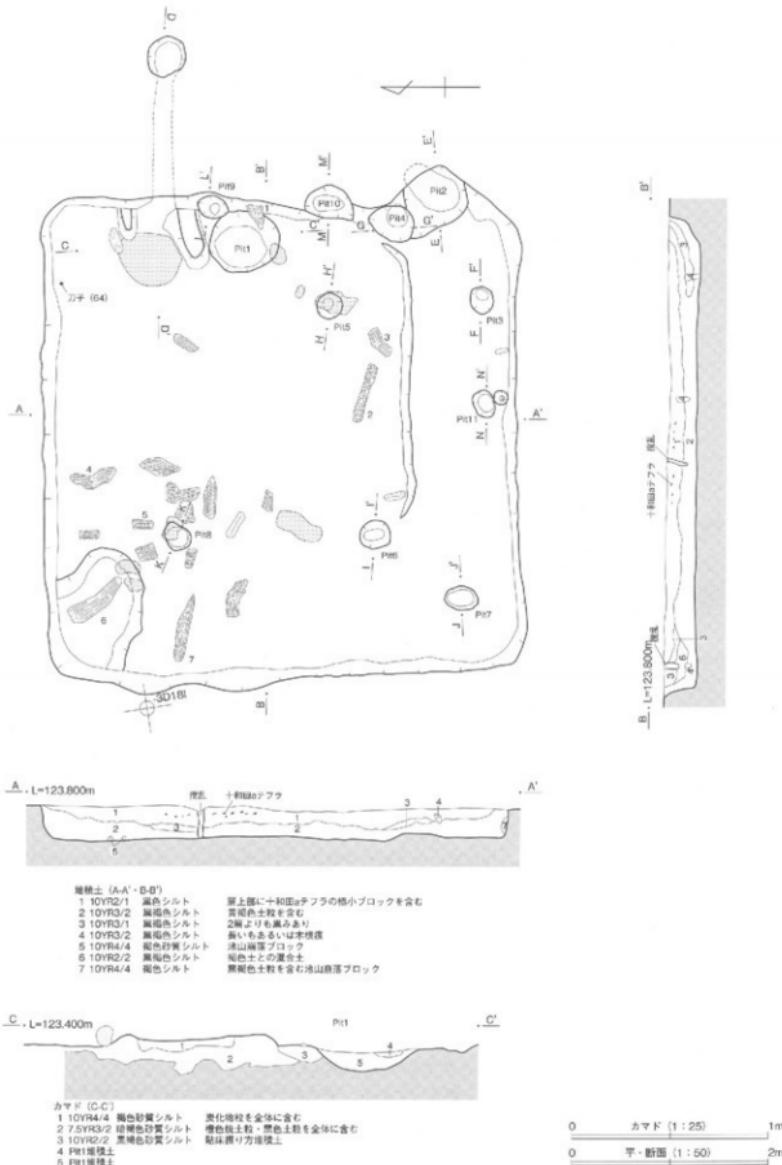
〈位置・検出状況〉 調査区南部にある住居群の中で最も北側の -3D18m付近に位置し、RA032とは東北東に約5mの距離を置く。Ⅲ層上面で検出した。カマドを含む本遺構の東側約1/4は第7次調査区に伸びていたが、同時期に調査を行っていたため、本遺構の精査はすべて第12次調査側で行った。
 〈重複関係〉認められない。

〈規模〉 4.78×5.05m 〈平面形〉一部張り出しを有する方形 〈床面積〉 21.46m²

〈壁の高さ・状態〉 24~35cmで、いずれも直立ぎみに立ち上がっている。

〈堆積状況〉 上位は十和田aテフラを含む黒色土、下位は黄褐色土粒を含む黒褐色土からなる自然堆積層である。火山灰は中央部に極小ブロックとして点在していた。

〈床面・建て替え〉 Ⅲ層を床面とし、硬く縮まっている。全体的に平坦であるが、建て替え拡張された痕跡(段差)を残している。その段差から判断して、拡張された方向は南側と西側、拡張前の規模は一辺が3.5~3.7mほどであったものと思われる。



第11図 RA031 (1)



第12図 RA031 (2)

（カマド）東壁北東隅寄りに設置される。残存状況は良好である。

（本体部）本体の幅は約100cmである。袖部は両袖とも地山の削り出しによるが、左袖は残りが悪い。燃焼部焼土は53×64cm、厚さは最大で11cmである。焼け具合は極めて良好である。

（煙道・煙出し部）削り貫き式の煙道で、堆積土はカマド側から吹き込まれた焼上粒を含む褐色土である。煙道の底面は13度前後の角度で緩やかに下りながら煙出しに至り、奥壁からの長さは約120cmである。煙道方位はN-100°-E。煙出し部には数個の礫が落ちこんでいるが、煙出し上部の施設に伴うものであるかは判断できない。

（柱穴・土坑）柱穴状のピットは8個確認された。位置と深さからPit 4・6～8の4個が主柱穴となる可能性がある。土坑はカマド右にPit 1、拡張部の南東隅にPit 2の2基が確認された。いずれも貯蔵用と考えられる。

出土遺物（第64・65図、写真図版49・50）

〈出土状況〉土器類は、堆積土やカマド内、貯藏穴を主体として、土師器が1,293g、須恵器が1,226g出土している。この他には、鉄製品（刀子）が1点出土している。

（掲載遺物）17点掲載した（53～69）。53～57が土師器の壊である。53は内面が黒色処理されるもので、それ以外は非黒色処理である。58・60は非ロクロ成形の壺で、58は短い口縁部が直立気味に立ち上がる。59・61はロクロ成形の壺で、61の底部には回転糸切り痕を残す。62～66は須恵器の壊、67・68は同じく須恵器の壺である。67は住居南壁の床面から正立状態で出土したもので、焼成後にあけられた孔を1個、肩部に残す。色調は若干赤味を帯びている。頸部より上の破片は見つかっていない。69は5分割になった状態で見つかった刀子で、最先端部のみを失っている。

時 期 出土した遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀初）に属するものと思われる。

R A 032壓穴住居**遺 構（第13図、写真図版6）**

〈位置・検出状況〉調査区南部の住居群で最も西側の－3 D20 h付近に位置する。東北東約5mにはR A031、南東5.5mにはR A030がある。Ⅲ層上面で検出した。

〈重複関係〉認められない。

〈規模〉3.03×3.27m 〈平面形〉不整形方 〈床面積〉7.16m²

〈壁の高さ・状態〉27～30cm程度で、いずれも外傾しながら立ち上がる。

〈堆積状況〉黒褐色土が主体となるが、黄褐色土粒などの混入の割合で上下2層に分層できた。それ以前の堆積土は壁際にある黒色土である。

〈床面〉Ⅲ層を床面とし、全体に平坦である。床面の硬さはさほどではない。

〈カマド〉東壁北東隅寄りに設置される。全体に残りは良い。

（本体部）幅は最大で75cmと小さめである。左袖は地山の削り出し、右の袖は黒色のシルト質土と礫で構築されている。燃焼部焼土は28～33cmの範囲で形成され、厚さは最大で2cm、焼け具合は良好である。燃焼部の奥壁側には支脚の礫が一つ置かれている。

（煙道・煙出し部）割り貫き式の煙道である。堆積土は焼土粒を含む黒褐色土からなる。底面は煙出しに向かって15度前後の角度で緩やかに下る。奥壁からの長さは約110cmである。煙道方位はN-103°-Eである。煙出し部には黒褐色土と暗褐色土が堆積し、壁は外傾して立ち上がっている。底面は煙道のそれよりも10cm前後深く掘り込まれている。

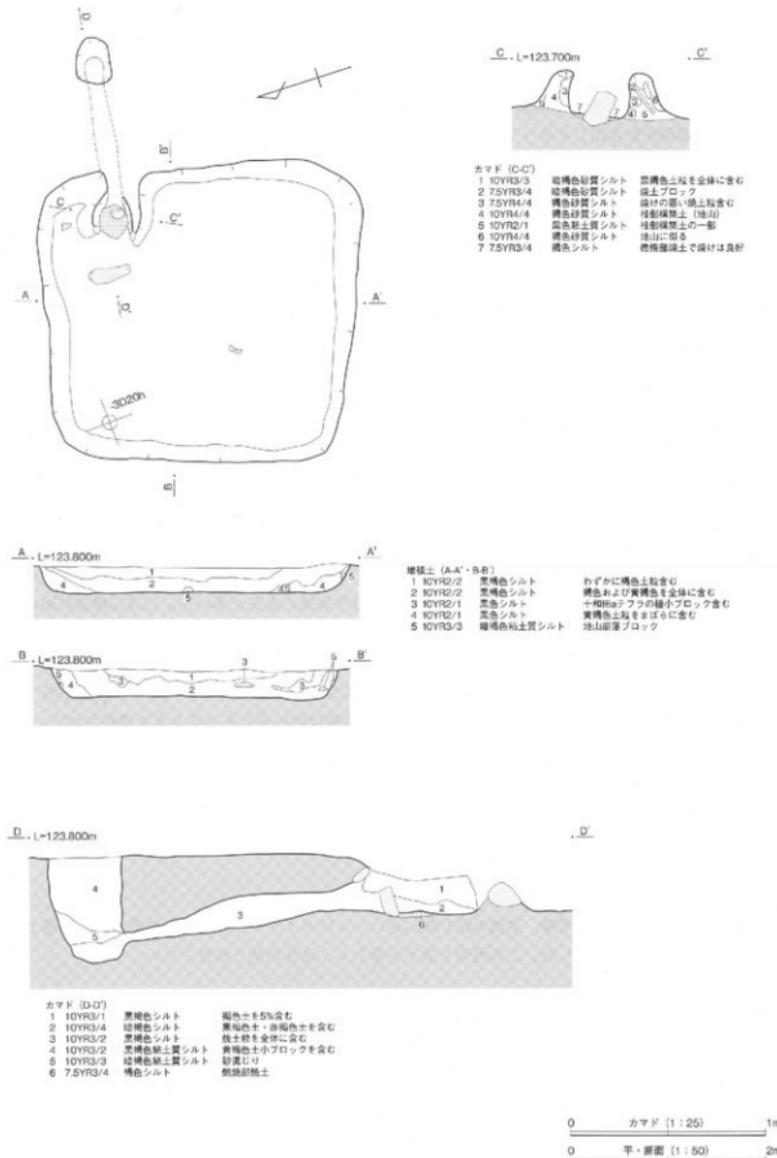
〈柱穴・土坑〉いずれも確認されなかった。

出土遺物（第65図、写真図版49）

〈出土状況〉堆積土から土師器78gと鉄鐸1点が出土したのみである。

（掲載遺物）2点掲載した（70・71）。70は赤焼きの壊の破片、71は鉄鐸と思われる筒形の鉄製品である。筒の部分は全周せず、数ミリの隙間を有する。内部には振り子状の可動部があり、上端部分は鉤状に丸みをもっていたものと思われる。錫杖状鉄製品井上分類I-a類（井上2002）に付属する鉄鐸か？

時 期 出土した遺物から、平安時代（9世紀後半～10世紀初）に属するものと思われる。



第13図 RA032

R A 033壁穴住居

遺構 (第14図、写真図版7)

〈位置・検出状況〉遺跡範囲の東側の境界となる段丘線に近い - 4D11 j - 4D12 j 付近に位置する。Ⅲ層上面で黒褐色土のプランを確認した。この周辺は大きく削平を受けており、表土を除去しただけで数個体の遺物がむき出しどとなってしまった。〈重複関係〉認められない。

〈規模〉 $2.25 \times 2.35\text{m}$ 〈平面形〉不整形 〈床面積〉 4.23m^2

〈壁の高さ・状態〉 $3 \sim 10\text{cm}$ ほど残存する。上述のとおり、遺構上部は削られている。

〈堆積状況〉黄褐色土粒を含む黒褐色土で、自然堆積と思われる。

〈床面〉Ⅲ層を床面とする。細かな凹凸が見られるが全体的に平坦である。

〈カマド〉北西壁のわずか西寄りに設置される。袖部・燃焼部焼土・煙道・煙出し部が残る。

(本体部) 左右の袖は暗褐色土や黒褐色土などのシルト質土を被覆して構築されている。燃焼部焼土は $25 \times 42\text{cm}$ の長方形に形成され、厚さは最大で 4cm である。支脚等は見られない。

(煙道・煙出し部) いずれも上部が削られているため、構造等は不明である。煙道の底面は14度前後で緩やかに上り煙出し部に続く。このように煙道底面が立ち上がるものは他の住居には見られないで、煙道の構造は掘り込み式の可能性がある。壁からの長さは 90cm で、方位はN-33°-Wである。

〈柱穴・土坑〉いずれも検出されなかった。

出土遺物 (第65～67図、写真図版49～51)

〈出土状況〉図示した土器類の壺4個体、甌4個体(総重量 $7,170\text{g}$)と、堆積土から細片が数g出土した。ほぼ完形に近いこの土器群は、地表に近い部分が掘削により失われていた。

〈掲載遺物〉10点掲載した(72～81)。72～75は4枚が重なって出土した非口クロ成形の壺で、いずれも内外面が丁寧にヘラミガキ調整されている。底部は平底風の丸底が多い。72は口縁部外面に横ナデされた痕跡を残す。体部には明らかな段は認められない。73～75は体部外面に比較的明瞭な段を有する。74のみ底部までヘラミガキ調整が及んでいる。80は片口である。形状的には口縁部と体部の境は不明瞭であるが、器面調整の違いではきれいに分かれる。底部はヘラケズリ調整されている。81は無底式の甌と思われ、体部上半部に段をもつ。器面は内外面ともヘラミガキ調整されている。76・77は長胴甌、78・79はいわゆる球刷甌で、いずれの個体も口縁部は横ナデ、体部はヘラナデ調整を主体とする。この2点は、最大径自体とその高さが異なるため、見た日の趣は多少異なっている。

時期 出土遺物から、奈良時代(8世紀中頃～後半か)に属すると思われる。

R A 034壁穴住居

遺構 (第15図、写真図版8)

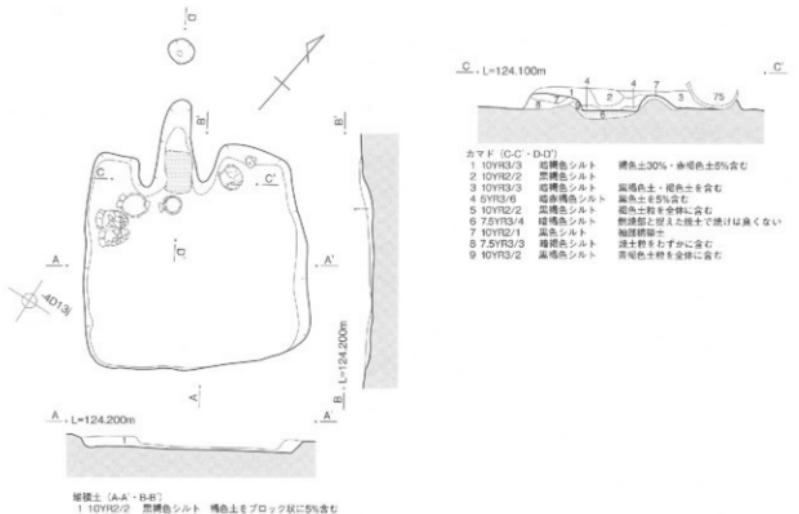
〈位置・検出状況〉R A 033同様、東側の段丘線に近い - 4D 8 f グリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で黒褐色土のプランを確認した。この周辺も削平が著しく、全体の残りは良くない。

〈重複関係〉認められない。

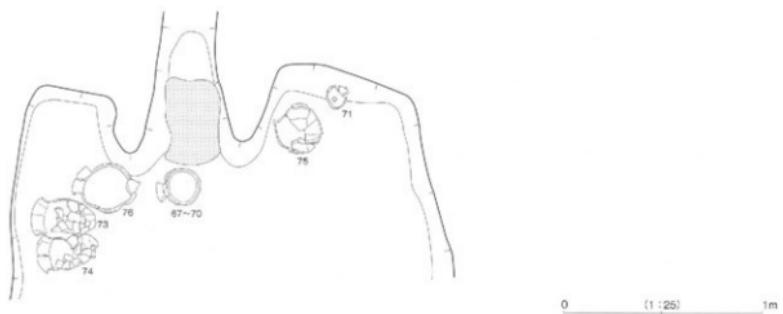
〈規模〉 $2.88 \times 3.03\text{m}$ 〈平面形〉不整隅丸方形 〈床面積〉 7.73m^2

〈壁の高さ・状態〉 $3 \sim 10\text{cm}$ ほどである。これも遺構上部はかなり削られている。

〈堆積状況〉黄褐色土粒を含む黒褐色土で、自然堆積と思われる。北側のみ褐色土が黒褐色土より先に堆積したようである。



カマド付近の遺物出土状況



第14図 RA033

〈床面〉 III層を床面とする。細かな凹凸が見られる。

〈カマド〉 北壁のわずか北寄りに設置される。燃焼部焼土と支脚の可能性がある礫1個のみ残存する。

〈本体部〉 燃焼部焼土は27×43cmほどの不整円形に形成される。厚さは2cmで焼けは良くない。

〈煙道・煙出し部〉 削平を受けており、煙出しの一部が残るだけである。その深さは25cmほどである。方位はN-85°-Wである。

〈柱穴・土坑〉 カマド左脇に長椭円形プランのPit 1がある。大きさは65×105cm、深さは20cmほどで、堆積土に遺物を若干含んでいた。貯蔵に関するものかと思われる。

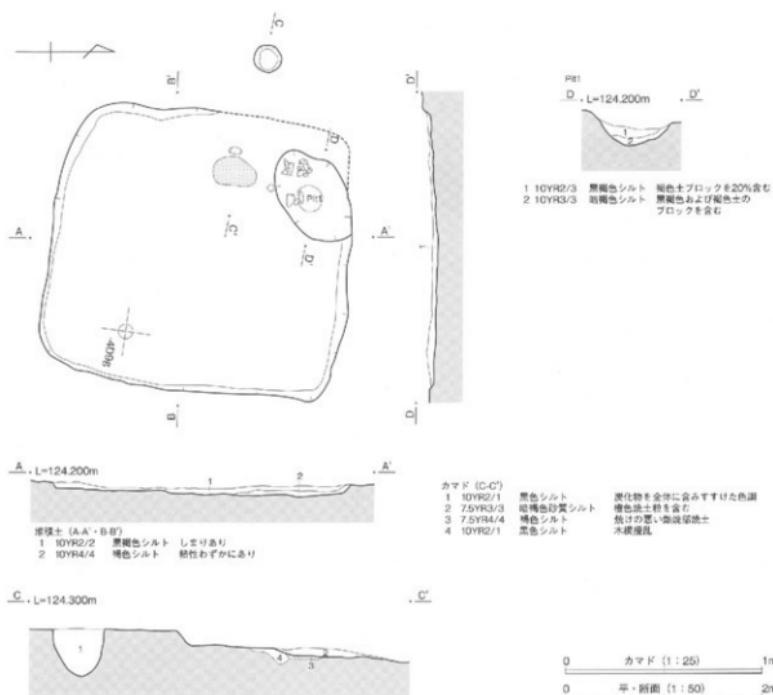
出土遺物 (第67図、写真図版51)

〈出土状況〉 床面およびPit 1から非ロクロ成形の土器器が1,150g出土している。

〈掲載遺物〉 2点掲載した(82・83)。2点とも床面から出土した長胴壺で、いずれも最大径は口縁部にあると思われる。83は若干下膨れのタイプである。器面調整は、内外面とも口縁部が横ナデ後に一部ヘラミガキ、体部にも同様の調整が施されている。

時期 出土遺物から、奈良時代(8世紀中頃～後半)に属するものと思われる。

(浜田)



第15図 RA034

RA035竪穴住居

遺構（第16・17図、写真図版9）

〈位置・検出状況〉 調査区東側住居群の西端、-3 D21a～23c グリッドに位置する。周囲はⅢ層下部～Ⅳ層上面で、一部耕作痕等で黒土が点々と残る状態であった。検出されたプランは、上部が崩れているせいか不整形であり、炭化物や焼土粒の出土はなく、煙出しの位置も不明瞭であった。

〈精査状況〉 明瞭な柱穴が床面に1つしか見つからなかったため、住居の周囲も縦密に捜したが、やはり見つけることはできなかった。カマド東西断面（Cライン）、C側の煙出しの上場、おそらく測り間違いのため、断面図と平面図合わない。上面に露出している東西両側の石も、おそらく高低差があつて測りにくかったため合わない。焼土（焚き口）の位置も、平面図作成時には第11層上面を火床面と考え、さらにそのC側が下に潜り込んでいたため合わない。カマド南北断面（Dライン）、おそらく断面図作成時にセクション・ポイントを垂直ではなく斜めに地面に落としたため、D'の位置合わない。焼土（焚き口）の位置も、理由ははっきりしないが、合わない。

〈規模〉 約3.4×3.2m 〈平面形〉 隅丸方形 〈床面積〉 10.70m²

〈壁の高さ・状態〉 検出面から10cmくらい下までⅢ層、その下は砂質のⅣ層である。

〈堆積状況〉 1層と2～3層と4層の、大きく三つに分けられ、上半は1層、下半分の大部分は2～3層が占め、4層の黒土はごく僅かで西側の壁際に認められた。1層は黒土で、下部に灰白色火山灰がブロック状に広がる。下部は、黒土と褐色土の混合土で、3層の方が褐色土の割合が多い。ただし地点によってその割合は異なり、明瞭に2層と分けられるのはカマド南側のベルト付近のみ。3層はカマドのある東壁方向から供給されたようである。住居内への堆積が自然か人為か見極めるのは容易ではないが、2～3層が掘削された土であることは間違いないであろう。

土層観察用ベルトを残しての掘削の際には、上、中、下層の3層に分けて遺物の取り上げを行っている。ベルトに沿ってトレーナーを入れた結果、火山灰の上の黒土（上層）、火山灰を含む中層、その下の黄褐色土を顕著に含む下層に分かれるように見えたためであるが、その後の観察から火山灰は点々と存在してその周囲の土も上の層とは顕著な違いがなく、上層と下層は分けられないことが分かった。したがって、上～中層が1層、下層が2～4層に相当する。

〈床面〉 砂質のⅣ層の掘り方の上に同じく砂質のⅣ層を貼っている。第16図に示したように、カマド側3/4の範囲は土間状に非常に硬く縮まるが、貼った土は変わらない。掘り方は、該期に一般的な凹凸の著しい“うねうね掘り方”である（カマド袖下にも認められた）。

〈カマド〉 東壁の北寄りに設置される。

（本体部） 焚き口は、竪穴の掘り方の上面に砂質のⅣ層を貼り、壁に掘られた煙道に向かって上昇するように傾斜が付けられている。規模が約50×30cm、厚さ約10cmの焼土が形成されているが（南東側、掘りすぎたため、規模不正確）、形成面が砂のためか、硬く縮まらない。上面に拳大より二周りほど大きい礫が認められたが、火は受けていないようで、支脚ではなく、袖に含まれていた礫が転がったものと思われる。袖部は、原形をとどめず砂質のⅣ層の再堆積土と焼土の残骸、拳大より大きい礫（2点？）、土器小片が認められるのみであった。

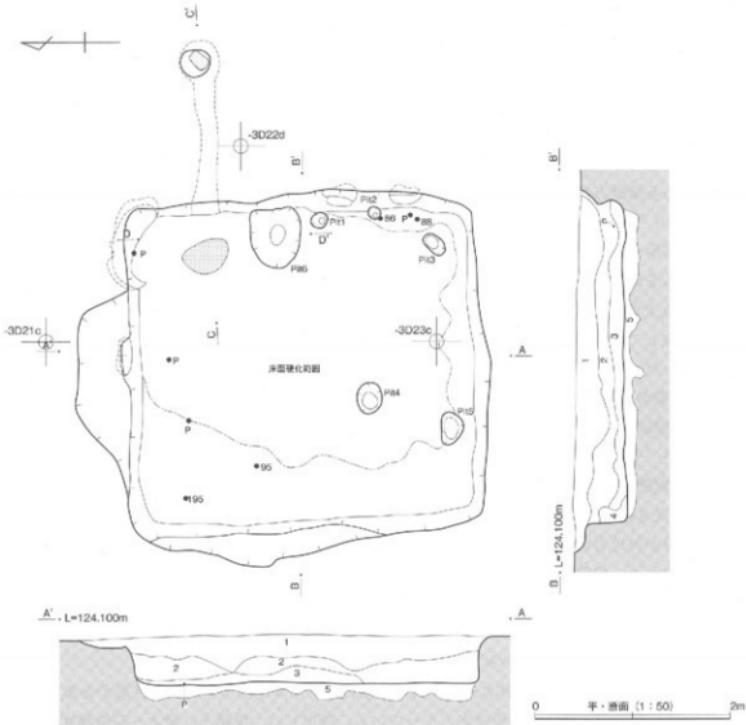
（煙道・煙出し） 煙道は、剃り貫き式で砂質のⅣ層にトンネルを穿っていて、住居から離れるに従つて深くなり、熱を強く受けた場所は赤くなっている。煙出しへは、堆積土に拳大～石皿程度の大きさの礫が10点認められ（石皿大のもの1点を含めた5点に、砥石として使われたと推測される凹面が見られる）、拳大の礫1点が赤みを帯びていたが、明瞭に火を受けたものはなかった。煙道の堆積土は、比較的単純な構成で、人為による埋め戻しの可能性を推測させる。袖部の堆積土は、竪穴そのものと

同じだが3層が大部分を占める。

〈柱穴・土坑〉住居内外含めて丹念に検出し、あやしいものも全て断ち割り、床面を掘り方まで全面下げるが、柱穴らしいものは中央から南西に寄った1つしか認められなかった。床からの深さは約40cm、底面は周囲が砂質であるのに対して径10cmほどの範囲がテカテカ光ってグラ化している。堆積土は、上部10cmほどに椀状に10YR2/1黒土（砂質シルト、IV層粒子含む）が堆積し、下位には10YR4/4褐色地に霜降り状の10YR2/1黒～10YR4/1褐色土が混入する層である（シルト、粘性あり、柱の掘り方埋め土？）。

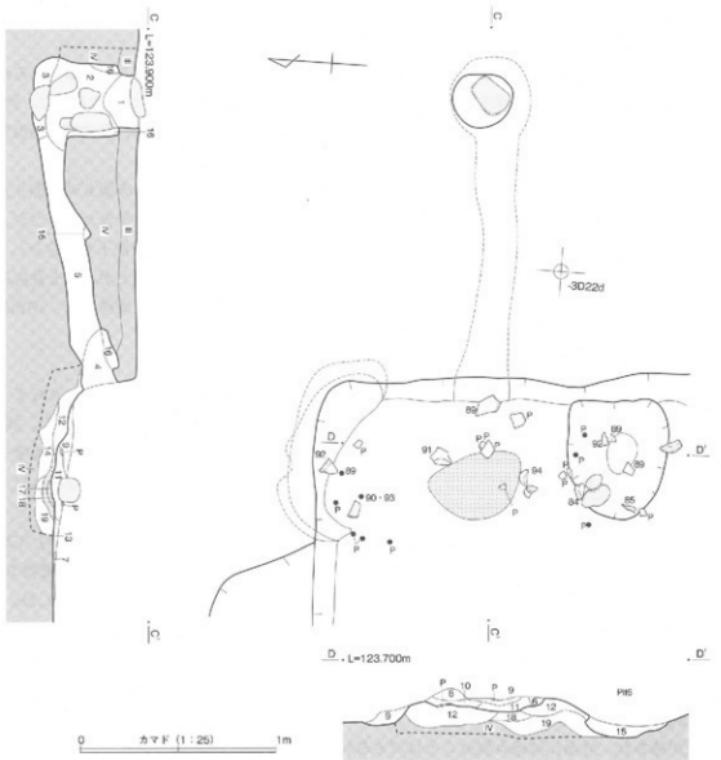
この柱穴の南西側にも、柱穴状の凹みが認められたが、深さ10cm程度の浅いもので、床面の凹み程度のものである。堆積土は10YR4/6褐色地に霜降り状に10YR4/1褐色土が入るもので（粘土質シルト、粘性あり）、住居掘り方埋土状である。

この他、東壁南半分に小穴が3つ認められた。北側の2つは、形も堆積土もほぼ同じで、堆積土は



- 堆積土（A-A'・B-B'）
- 10YR2/1 褐色シルト　B層の再堆積　層下部中心に若干灰白色土塊が含まれ、上面はより黒く所々塊状で褐色土のブロック入る
 - 10YR2/1褐色地に10YR4/6褐色地の斑点、シルト、層内に砂質層を含む
 - 10YR4/4褐色地に10YR3/1褐色地の斑点、シルト、粘性ややあり、層内に砂質層を含む
 - 10YR1/7/1 黄れシルト　粘性ややあり、もう少し 北壁の再堆積に10YR3/1褐色土入り
 - 10YR5/6赤褐色地に霜降り状に10YR3/1褐色土混じる サブ 黃褐色土の入り方は地点により異なる 埋り方堆積土

第16図 RA035 (1)



カマド (C-C・D-D)

- 1 10YR4/3 黒褐色土と10YR3/1 黒褐色土の層土 砂質 IV層粒子
ブロッケ状・含む III-IV層の変色した層
2 10YR3/1 黒褐色砂質シルト もろい IV層コロッカ含む 大きな礫多く含む
3 10YR2/1 黒褐色砂質シルト もろい IV層粒子、粒土、大きな礫含む
4 10YR3/1 黑褐色土に10YR4/4褐色土の層 (端部は灰褐色) シルトIV層粒子多く含む
5 10YR3/1 黑褐色砂質シルト 反り全く無くなる層
6 10YR3/1 黑褐色砂質シルト 反り全く無くなる層
7 10YR3/1 黑褐色 砂質 2mm程度の陶片含む 下に硬い层面
8 10YR4/4 硫化 砂質 IV層の再堆積で カマドの熱落土と思われる
9 10YR4/3 黑褐色砂質シルト 砂質 粒子大粒 砂質 IV層の熱落土と思われる
10 7.5YR3/3 黑褐色砂質シルト もろい 砂土多い カマド下部の熱落土と思われる
11 5YR4/4 に近い黒褐色砂質シルト 砂土 砂土粒が二次堆積して置か
- 12 10YR4/3 に近い黒褐色砂質シルト 硬く縮まる IV層の再堆積で、掘り方堆積土
13 7.5YR2/2 黒褐色砂質シルト 砂土粒混在
14 10YR3/1 黒褐色シルト 固り方堆積土
15 10YR4/2 黒褐色砂質シルト 固り方堆積土
16 10YR4/3 黒褐色シルト 大きな礫含む IV層の変色した層
17 5YR4/6 黒褐色 砂質 土 (火災灰)
18 5YR3/3 黑褐色 砂質 粒性あり IV層 (窓) が火を受けて変色したものらしい
19 10YR5/6 黑褐色土に粘土状に10YR4/1褐色入る 砂質 壊り方堆積土

第17図 RA035 (2)

10YR3/1 黑褐色、砂質シルトでややもろく、IV層砂粒子を多く含むものである。南側の1つは、形・堆積土ともやや異なり、隣の1つに向かって傾斜するような形で、10YR3/1 黑褐色地に霜降り状に 10YR3/4 褐色土、砂質シルトで硬く縮まる。

以上のように、本住居は、柱で上屋を支えるのは不可能と思われる。前述の3つの小穴、後述の壁に認められた3つの穴、さらに特徴的に垂直に近く立ち上がる壁や、床面の硬化範囲が北東隅に片寄ることからその外側に何かがあった可能性があることなどから、壁立もしくはそれに近い施設で上屋

を支えていたものと考えられる。周溝が認められず、また壁および壁際の床が特に硬化しているわけではないので、単純に板材などで支えていたのではないようだが。

（その他の付属施設）カマドの北側脇、竪穴北西隅に棚状施設がある。また、これと似ているが、壁に洞窟状に掘り込まれた柱穴程度の大きさの穴が、東壁に2、北壁に1、計3つ認められた。何れも、黄褐色土中に黒土と、明瞭に検出され、底が直線的に明確に存在することから、根穴等の疑似現象ではないと思われる。

棚状施設は、後者とは形も堆積土も異なり、こちらは断面形が椀に近い形で床面も若干掘り込んでいる。ただし、特に硬く締まるということもない。堆積土は、基本的な特徴は後者と同じだが、顆粒に黒くIV層粒子を含む、10YR2/1黒～10YR3/1黒褐色土（シルト、細かいIV層粒子多く含む）。

壁に洞窟状に掘り込まれた柱穴程度の大きさの穴は、断面形が、垂直に立ち上がる壁を垂直に掘り込んで底を斜辺とする直角三角形状を呈し、床面まで掘り込まれてはいない。堆積土は、10YR2/1黒～10YR3/1黒褐色土に霜降り状に10YR4/4褐色土（シルト）。

出土遺物（第67・68図、写真図版52）

（出土状況）土師器は1155g、須恵器は194g出土した。上半層にはほとんど含まれておらず、さらにカマドを中心とした竪穴東半分に著しく偏る。ベルト除去の際、1～2層の出土ではなく、2層と思われた遺物も出土状況から3層上面と考えた方が良さそうであったことから、上～中層（堆積土の項参照）として取り上げられた遺物も僅かにあるが、実際には2層以下、特に3層およびそれ以下（カマド崩落土など）からほとんど出土していると見て良いようである。

床面および床面直上（3層）出土遺物については、原則として番号を付けて図面に記録して取り上げた（No. 1～20、以下No.○は取り上げ番号）。No.21以下は、原則としてカマド崩落土下の遺物である。No.19が鉄滓（写真図版52-195）である以外は、何れも土器の小破片で、比較的大きなものは、No. 1（坏底部）、No.11（壺胴部）、No. 8（坏底部）程度である。カマド崩落土上およびその周囲のNo. 6～15は、基本的に竪穴東壁上から流れ込んだような状態で出土している。

（金子）

（掲載遺物）15点掲載した（84～97・195）。84～88はロクロ成形の土師器坏である。84は内面に黒色処理が施され、外面には読み取ることはできないが墨書きの痕跡が認められる。85～88は非黒色處理坏で、比較的直線的に立ち上がるタイプ（85・86）と丸みをもって立ち上がるタイプ（87・88）がある。89～91は非ロクロ成形の土師器壺である。外面にケズリ、内面にハケないしヘラナデ調整が施されている。底部は91がケズリ調整、90は砂底である。92・93はロクロ成形の土師器壺である。いずれも体部上半～中央に最大径をもつタイプで、口縁部は「く」の字状に屈曲する単純口縁である。94・95はロクロ成形の須恵器坏で、内外面ともにロクロナデ調整が施される。96は須恵器長頸瓶の口縁部で、外面は横ナデ調整によって段が形成される。97は凝灰岩製の砥石である。横断面形は三角形で残存部分全面に擦痕が認められる。

時期 出土した遺物から、平安時代（9世紀後半代）と考えられる。

（村田）

R A 036竪穴住居

遺構（第18・19図、写真図版10）

（位置・検出状況）調査区中央の住居群のうちの1棟で、-3C 7oグリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で検出した。〈重複関係〉認められない。

（規模）南北2.6m×東西2.5～2.6m 〈平面形〉南壁より北壁が短い台形状 〈床面積〉6.77m²

〈壁の高さ・状態〉 42cm前後で、崩落のため上部はハの字状に外方に開く。

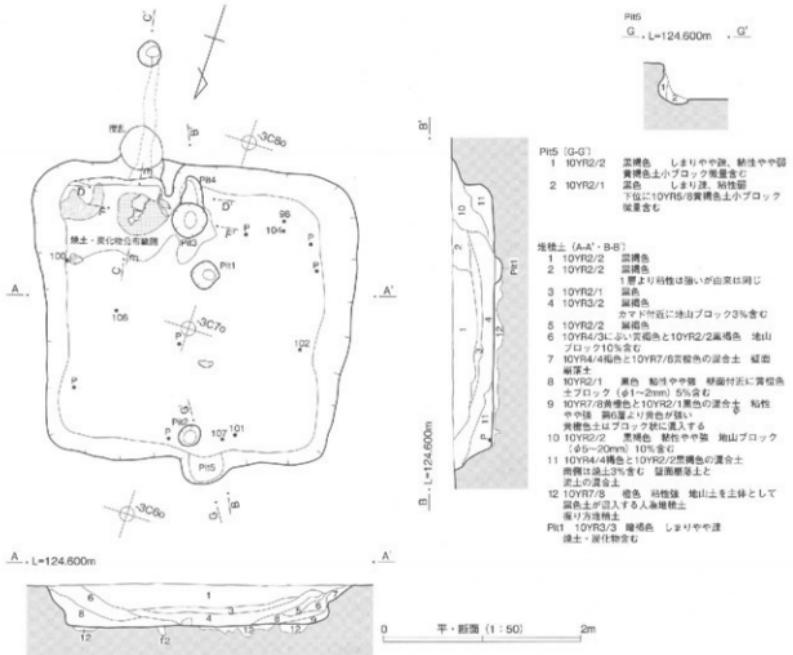
〈堆積状況〉 堆積土は11層に細分した。黒褐色土を基調としているが、下位層ほど壁面崩落土の混入が多いため色調が明るくなる。カマド付近の堆積土には燃焼時とは異なる段階で形成された焼土や炭化物が多く混入している。明確に形状を把握できるものは無かったが、本住居は焼失あるいはカマド周辺のみ火を受けている可能性がある。

〈床面〉 地山及び第12層を床面とする。第12層は分布範囲が狭いため貼床とはい难以が、性質から床面を水平に整えるために人為的に埋めた土と考えられる。また、カマド周辺は被熱の影響で黒く変色している。

〈カマド〉 南壁南東隅に設置される。東側の袖が失われていたが、残存状況は良好である。

(本体部) 袖は躰を芯材とし、地山由来の粘質土などを利用して構築されており、被熱の影響で表面はもろく崩れやすい。東袖がないため推定になるが幅は50~60cmと考えられる。燃焼部焼土の範囲は50×40cm、被熱深度は20cm程度で非常によく焼けている。

(煙道・煙出し部) 刈り貫き式の煙道で、方位はN-165°-Eである。堆積土は地山ブロックを含む黒褐色土で構成される。燃焼部との境界ではほぼ垂直に18cm程度立ち上がるが、そこから煙出しに向かって約3度の角度で緩やかに下っている。煙出しはほぼ垂直に立ち上がるが、中位でわずかにオーバーハングする。煙出し内は粒径の小さい地山ブロックを含む黒褐色土が堆積しており、土器片も若干混入する。

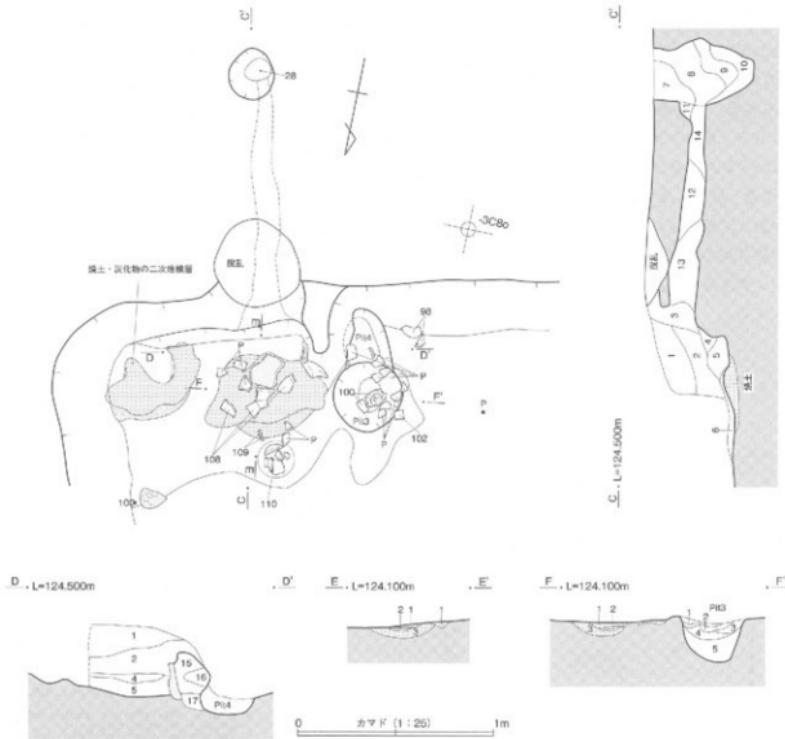


第18図 RAO36 (1)

〈柱穴・土坑〉 5個確認された。このうちPit 1・2は柱穴、Pit 3・4は貯蔵に関わる土坑の役割をしていたものと考えられる。また、Pit 5は袋状に膨らむ形状のものでPit 3・4と同様の役割をもつた施設とも考えられるが、カマドと対峙する位置に設置されているため判然としない。

出土遺物 (第68~70図、写真図版52・53)

〈出土状況〉 カマド周辺の床面直上・堆積土下位とPit 3を中心とした土師器が3,580g、須恵器が166g出



第19図 RA036 (2)

土している。現位置を保つ状態で出土したものは少ないが、Q2・Q3区出土の破片が接合するなど遺構内全地点・層位にわたって接合できたため復元率は高い。

〈掲載遺物〉17点掲載した(98~114)。98~105はロクロ成形の土師器壺である。98~100には内面に黒色処理が施されるが、101~105には施されずロクロナデの痕跡のみ確認される。底部はいずれも回転糸切で、103と105は内面にススが付着している。106~111は非ロクロ成形の土師器壺である。口縁部は「く」の字状に短く立ち上がる単純口縁で、外面上にはケズリ、内面上にはヘラナデまたはハケ調整が施される。112はロクロ成形の土師器壺である。ロクロナデ調整が施されているが磨耗が著しく不明瞭である。口縁部は単純口縁のように見えるが、口縁端部に粘土を貼り付けている様子が断面で観察できる。磨石(114)は砂岩製で、4面に使用痕が認められる。

時期 出土した遺物から、平安時代(9世紀後半)と思われる。カマドの残存状況及び床面直上出土遺物の分布状況から、人為的に取り壊しを行なった住居の可能性がある。

R A 037堅穴住居

遺構(第20図、写真図版11)

〈位置・検出状況〉調査区中央の住居群のうちの1棟で、-3C 3iグリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で検出した。〈重複関係〉認められない。

〈規模〉南北2.8×東西2.6~2.9m

〈平面形〉略方形であるが、東壁の立ち上がりが不明瞭で張り出し状になる。〈床面積〉7.86m²

〈壁の高さ・状態〉25~30cmで、崩落のため上部はハの字状に開く。また、東壁は立ち上がりが不明瞭で、階段状になって上面へと至る。

〈堆積状況〉堆積土は13層に細分した。大部分が黒褐色を基調としており、中位までの層には十和田テフラが若干混入する。また、黒褐色土層の間に薄く層状に壁面崩落または地山流土と考えられる黄褐色系の粘質土が堆積していた。ほとんどの層がレンズ状堆積なし三角堆積をしていることから自然堆積と考えられる。

〈床面〉第14・15層を床面としている。第14・15層は貼床と考えられる黒褐色土であるが、しまりは弱く硬化範囲は認められなかった。ただし、カマド付近だけは縛まりのある黄褐色系の粘質土を使用して周囲より固く縛まるように構築されている。

〈カマド〉東壁北東側に設置される。煙道の天井部が削平されているものの残存状況は良好である。

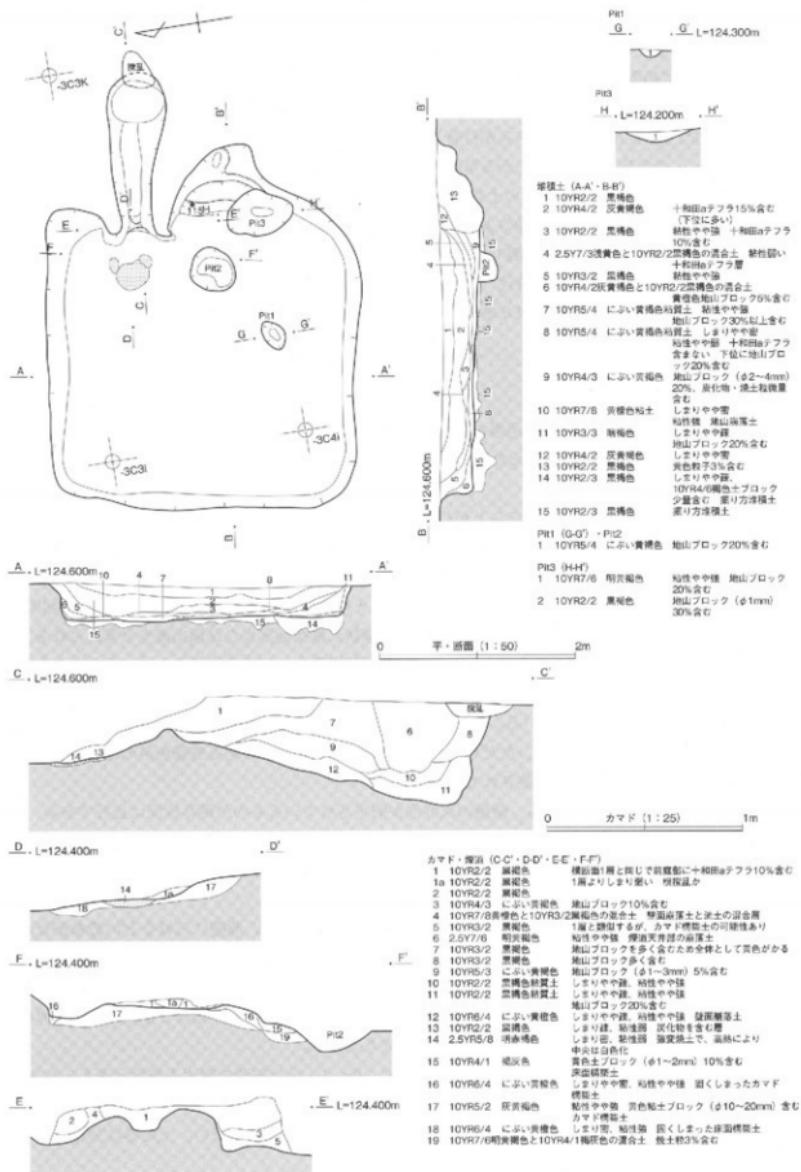
(本体部) 残存する袖部は地山削り出しにより造られているが、非常に規模が小さい。燃焼部は袖部より20cm程内側に認められる。燃焼部の焼成は良好で、焼土周辺には炭化物の散布と被熱による床面の白色化現象が認められた。

(煙道・煙出し部) 天井部が削平されていたため構造は不明であるが、周囲に石材などの散布がないことから割り貫き式と考えられる。煙道方位はN-95°-Eである。堆積土は黒褐色土を主体とし、各層に天井または壁面の崩落土と考えられる地山ブロックが混入する。燃焼部付近から35cm程の地点まで緩やかに立ち上がるが、そこから煙出しに向かって約15度の角度で傾斜するが、煙出しとの境界は不明瞭である。煙出しはわずかに外方に開きながら立ち上がる。

〈柱穴・土坑〉3個確認された。このうちPit 1は柱穴、Pit 2・3は貯蔵に関する施設と考えられる。

出土遺物(第70図、写真図版53)

〈出土状況〉土器類は、カマド付近や煙道から出土しているが出土量は少ない。土師器は300g、須恵器は17g出土している。



第20図 RA037

〈掲載遺物〉 6点を掲載した(115~120)。115・116は内面に黒色処理が施されるロクロ成形の土師器坏である。116は外面に墨書き認められるが、小片のため詳細は不明である。117は高台坏の底部破片で、体部内面には黒色処理が施される。118はロクロ成形の土師器坏で、内外面ともロクロナデ調整が施される。内面非黒色処理の坏である。119はロクロ成形の壺で、口縁端部は外側に折り返されている。120はロクロ成形の須恵器坏で、内外面ともロクロナデ調整が施される。

時 期 出土した遺物と十和田aテフラの堆積状況から、平安時代(9世紀後半~10世紀初)と考えられる。

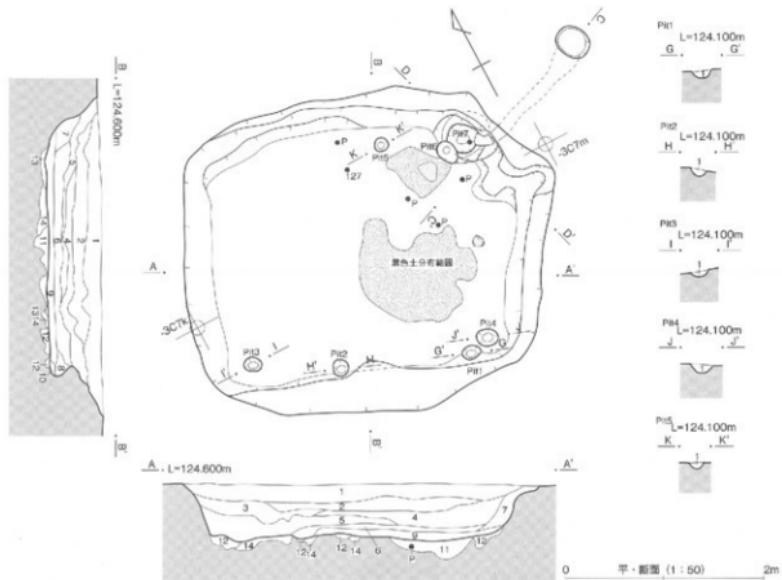
R A038堅穴住居

遺 構 (第21・22図、写真図版12)

〈位置・検出状況〉 調査区中央の住居群のうちの1棟で、-3C 71グリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で検出した。(重複関係)認められない。

〈規模〉 2.95×2.45m 〈平面形〉 略方形 〈床面積〉 6.84m²

〈壁の高さ・状態〉 深さは54cm前後で、壁面は崩落のため上部がハの字状に開く。



地盤上(A-A'・B-B')

- | | |
|---|---|
| 1 10YR3/2 黄褐色 十和田aテフラ(φ5mm程度のブロック)10%含む | 13 10YR3/4 黄褐色 しまり難、粘性やや薄 黒褐色土微量含む
走り方堆積土 |
| 2 10YR3/3 遺構色 明黄褐色土ブロック(φ1~2mm)20%、泥土粒1%含む | 14 10YR3/2 黄褐色 しまりやや薄、粘性中、走り方堆積土 |
| 3 10YR3/3 遺構色 レモンやや薄 黄褐色土ブロック2%含む 2層より色調濃い | |
| 4 10YR3/2 遺構色 黄褐色土ブロック15%含む | |
| 5 10YR2/2 黑褐色 沈没地一要紹色ブロック15%含む 黒くしまる | P11 (G-G')
1 10YR2/1 黑色 しまりやや薄 |
| 6 10YR4/3 にじい黄褐色、白色やや薄 黄褐色土ブロック20%含む 壁面は少ない | P12 (H-H')
1 10YR2/1 黑色 しまりやや薄 |
| 7 10YR4/3(にじい黄褐色と)10YR2/2緑褐色の混合土 沈没ブロック5%含む 綠面衝突土 | P13~5 (I-I'・J-J'・K-K')
1 10YR2/2黒褐色と10YR7/8黄褐色の混合土 |
| 8 10YR3/2 黑褐色 地山ブロック15%含む | |
| 9 10YR3/2 黑褐色(10YR7/8黄褐色の混合土) 沈土質でしまり難い | |
| 10 10YR3/2 黑褐色 | |
| 11 10YR2/3 黑褐色 しまりやや薄 残褐色土ブロック少量含む 残り方堆積土 | |
| 12 10YR2/3 黑褐色 しまりやや薄 残褐色土ブロック少量含む 残り方堆積土 | |

第21図 RA038 (1)

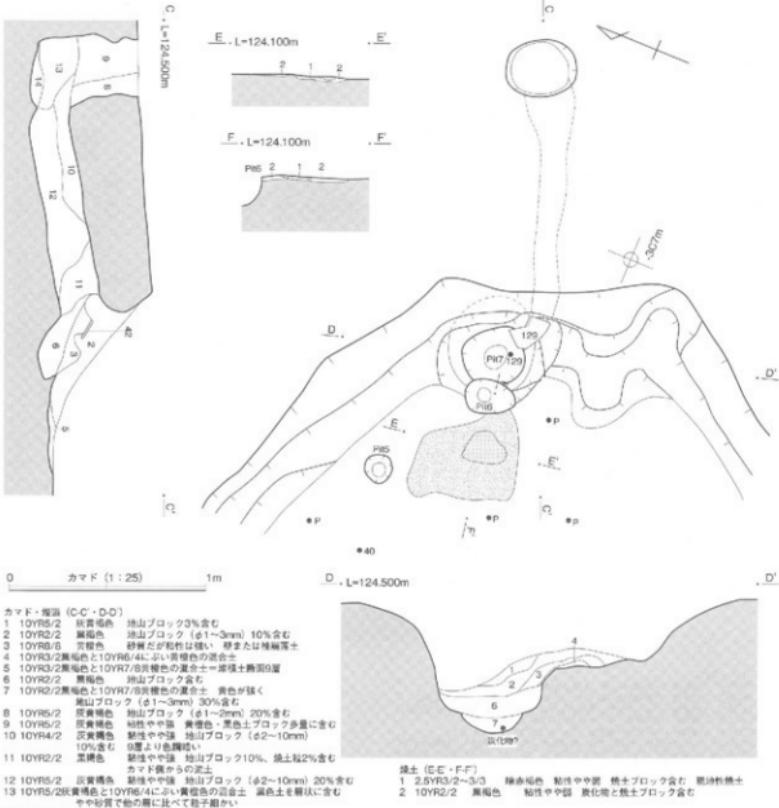
〈堆積状況〉堆積土は10層に細分した。上位は黒褐色土、下位は暗褐色土を主体としており、下位層ほど粘性が強くなる。最上位には十和田aテフラがブロック状に混入していた。堆積状況からは自然堆積と判断できる。

〈床面〉第11～14層を床面とする。いずれも褐色土を混和物とした貼床であるが、いずれも縛まりは弱く硬化範囲は認められない。

〈カマド〉北東コーナー部に設置される。煙道直前に土坑を設ける左右非対称の特殊な構造である。

(本体部) 袖は右側のみ確認されている。地山削り出しで造られており、張り出しまし微弱なものである。左袖の位置には土坑(Pit 7)が設けられている。住居構築以前に存在した土坑の可能性もあるが、上部に袖の痕跡は認められなかった。燃焼部範囲は20×15cmと狭く、被熱深度も浅い。ただし、周囲には炭化物が多量に分布していたことから、現地性焼土であると考えられる。

(煙道・煙出し部) 削り貫き式の煙道である。堆積土は灰黄褐色土が主体であり、崩落土である地山ブロックを多く含む。煙道はPit 7の東端から約10度の角度で煙出しに向かって傾斜しており、



第22図 RA038 (2)

煙出しとの境界は一段高くなっている。煙出しへ底面からほぼ垂直に立ち上がる。

〈柱穴・土坑〉 7個確認されている。非常に浅く、位置関係にも規則性が無いため柱穴となるかは検討を要する。

出土遺物（第70・71図、写真図版54）

〈出土状況〉 カマド内とQ 2区を中心に土師器950gと須恵器1,067g、堆積土中から土錘1点が出土している。

〈掲載遺物〉 10点を掲載した（121～130）。121～124は土師器壺である。いずれもロクロ成形で、121のみ内面に黒色処理が施される。122は口縁部のナデ調整が強く、端部が短く外折する。125～127は非ロクロ成形の土師器壺である。126は台状の底部破片で、底部にはケズリ調整が施される。127も台状の底部破片であるが、底部調整は行なわれず木葉痕が明瞭に残る。128はロクロ成形の須恵器壺である。129は須恵器大壺の体部破片である。外面とも叩き・当て具の痕跡が明瞭に残る。130は土錘である。ほぼ完形で、色調はにぶい黄褐色である。

時期 出土した遺物と十和田aテフラの堆積状況から、平安時代（9世紀後半～10世紀初）と思われる。

R A039堅穴住居

遺構（第23・24図、写真図版13）

〈位置・検出状況〉 調査区中央の住居群のうちの1棟で、-3C 7iグリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で検出した。〈重複関係〉認められない。

〈規模〉 2.4×2.35m 〈平面形〉 略方形 〈床面積〉 5.58m²

〈壁の高さ・状態〉 35～40cmで、壁面は垂直に立ち上がる。

〈堆積状況〉 堆積土は6層に細分した。ほとんどの層ににぶい黄褐色土であり、混和物の割合によって細分できるのみである。とくに第2層以下は地山ブロックが大きく、残存状況が良好である割に十和田aテフラも確認されていない。自然堆積で埋没した遺構と比べて不自然な印象を受ける堆積状況であることから、本住居については廃絶後に人為的に埋め戻しが行われた可能性がある。

〈床面〉 第7層を床面とする。硬化範囲は認められないが、粘性の強い土を用いている。

〈カマド〉 北壁東隅付近に設置される。煙道は良好に残っているが、袖部は崩落している。

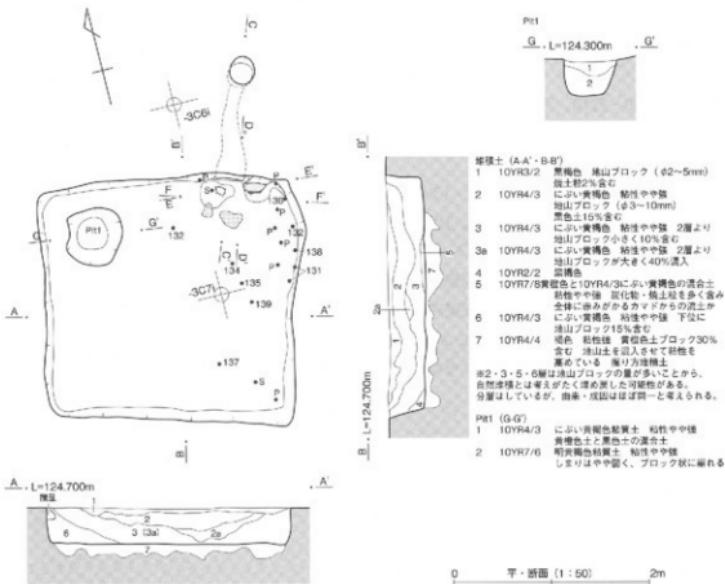
〈本体部〉 袖は礫を芯材としてやや粘性の強い土を用いて構築されているが、崩落が著しく残存状況は良くない。焼土は袖より手前で2つ確認されているが、いずれも範囲は狭く被熱深度も浅いことから現地性焼土か否かは判断できない。

〈煙道・煙出し部〉 刈り貫き式の煙道で、方位はN-21°-Eである。ある。堆積土は黒褐色土主体で構成されており、しまりの弱い層と粘質土の層が交互に確認される。燃焼部との境界がわずかに立ち上がり、そこから煙出しへ向けて約17度の角度で傾斜する。煙出しへ底面からほぼ垂直に立ち上がる。

〈柱穴・土坑〉 1基確認された。Pit 1は大きさから貯蔵に関わる施設の可能性があるが、堆積土中からはそれを示すものは出土していない。

出土遺物（第71・72図、写真図版54・55）

〈出土状況〉 土器はカマド付近を中心に、土師器750gと須恵器630gが出土した。カマドの設置されるQ 2区では床面直上から小破片の状態で出土しているが、接合率は高く出土重量に比して復元点数は多い。また、隣接するR A038出土の破片と接合するものもあった。



第23図 RA039 (1)

〈掲載遺物〉10点を掲載した(131～140)。131は内面に黒色処理が施されるロクロ成形の土師器坏である。外面には「M」字状の墨書きが書かれているが、読み方は不明である。133は土師器高台である。高台はハの字状に外方に開く貼付高台である。134は非ロクロ成形の土師器小窓である。外面にケズリ、内面にハケ調整が施され、口縁部と底部付近は最終調整に横ナデが施される。135～138はロクロ成形の須恵器坏で、内外面ともロクロナデ調整が施される。140は瑪瑙製の石器剥片である。当初火打石と考えていたが、使用痕が認められないため今回は剥片とした。

時 期 出土した遺物から、平安時代（9世紀後半）と思われる。

R A 040堅穴住居

遺 構 (第25図、写真図版14)

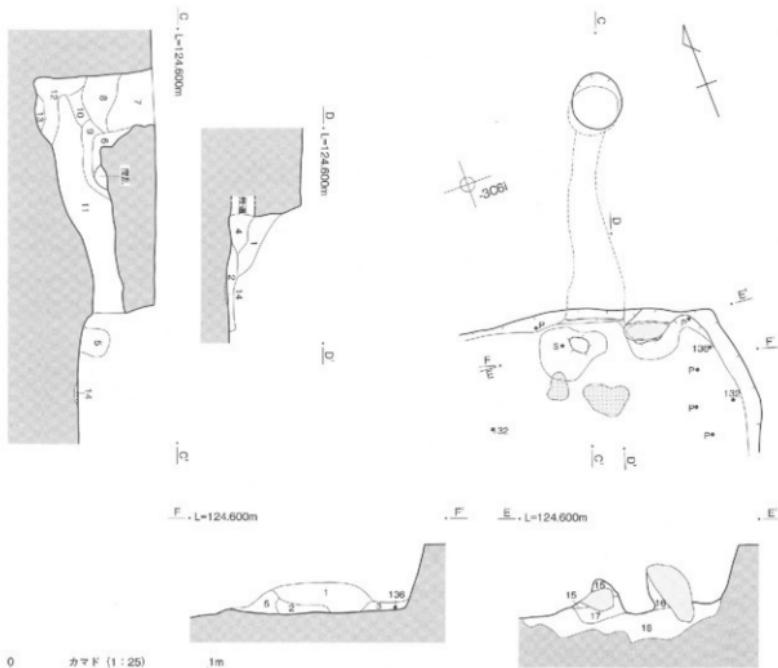
〈位置・検出状況〉調査区北側 - 5 C 24 y グリッド付近に位置する。Ⅲ層上面で検出された。

〈重複関係〉R D144と重複関係にあり、R D144の埋没後に本住居が構築されている。

〈規模〉2.6×2.35m 〈平面形〉略方形 〈床面積〉6.03m²

〈壁の高さ・状態〉崩落が著しいため壁面の立ち上がりはほとんどなく、床面からハの字状に広がるように立ち上がる。後述するように床面は平坦ではないため検出面からの深さは地点によって異なるが、全体に浅く最も深い中央部分でも20cm程度である。

〈堆積状況〉黒褐色土が主体であり、5層に細分した。全体として縮まりは弱く、炭化物や焼土の粒を多く含む。床面上直上やカマド付近の堆積土中から炭化材や焼土の広がりが検出されていることか



- カマド・様式堆積土 (C-C・D-D・E-E'・F-F')
- 10YR3/2 黒褐色 地山ブロック (φ2~4mm) 30%含む 全体に黄褐色がかる
 - 2 25YR4/3 こいい赤褐色 岩化3%、前庭部に粘土粒 (φ1~3mm) 10%含む 粘土の堆積層で全体として蛭子扱い
 - 3 10YR2/2 黑褐色 地山ブロック5%含む
 - 4 10YR2/2 こいい赤褐色 黒褐色の堆積層で全体として蛭子扱い
 - 5 10YR5/4 こいい赤褐色 地山堆積土が変色したものか
 - 6 10YR4/2 底黄褐色 しづりやや薄、粘性やや弱 耐熱や揮の影響などで黒く 变色した層
 - 7 10YR2/2 黑褐色 地山ブロック3%含む
 - 8 10YR3/2 黑褐色 こいいやや薄 地山ブロックをわずかに含むためや黄色がかる
 - 9 10YR2/2 黑褐色 粘性やや強
 - 10 10YR6/4 こいい黄褐色 粘性やや強、壁面底面土が変色した層
 - 11 10YR2/2 黑褐色 全体として蛭子扱いや様くマド内には黄色地山ブロック5%含む
 - 12 10YR1.7/1 黒色 黏性やや弱、泥炭物を多量に含む 残子粗くしまり弱い
 - 13 10YR3/2 黑褐色 黄色済山ブロック (φ1~2mm) 5%含む 全体にしまり弱い
 - 14 2.5YR4/6 黑褐色 黒褐色地山であるが若干干すんでいる
 - 15 10YR6/6 黄褐褐色 粘性やや強 黄褐色土10%含む 特徴粘土
 - 16 10YR6/6 黄褐色 地山の堆積層で全体として15%含む
 - 17 7.5YR3/3 黑褐色 壁面に粘土粒混入、特徴粘土
 - 18 10YR4/4 黑褐色 粘性土ブロック30%含む 地山土を混入させて粘性を高めている 粘り力増強土

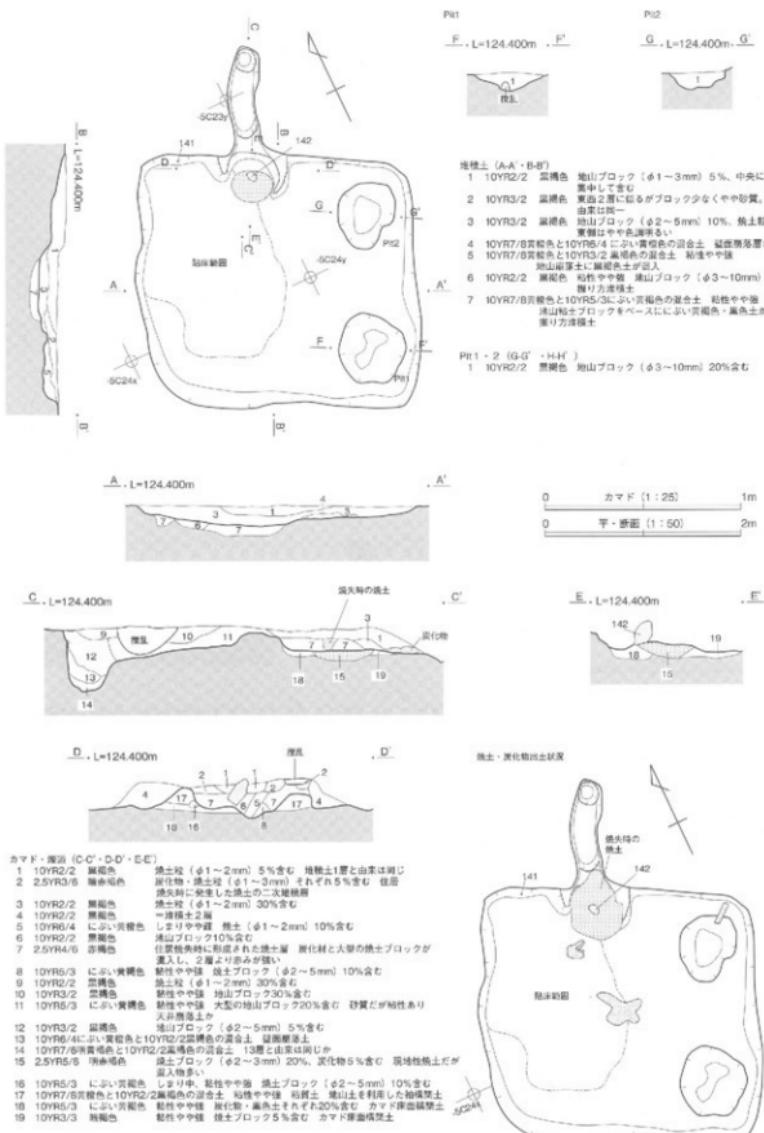
第24図 RA039 (2)

ら、本住居は焼失家屋と考えられる。

〈床面〉 地山であるⅢ層と第6・7層を床面としているが、焼失時の影響か全体的に黒みがかかるおり、縮まりも弱い。貼床である第6・7層は、床面西側半分弱にのみ敷設されており、これらの層を除去するとRD144の検出面となることから、住居構築以前に窯んでいた範囲を埋めるためのものと考えられる。ただし、貼床敷設後も地山削り出しの床面よりは若干低く、そのため貼床範囲のみ窪地状になっている。

〈カマド〉 北壁やや西寄りに設置されている。煙道の天井部は削平されていたが、全体として残存状況は良好である。

〈本体部〉 地山土を利用した袖をもち、両袖間の距離は約40cmである。焼失時の被熱のためか全体に



第25図 RA040

もろく崩れやすくなっている。部分的に赤色化している。燃焼部焼土は両袖のほぼ中央に位置しており、範囲は40×30cmの円形である。燃焼部焼土はよく焼け締まっており、炭化物を含み暗赤褐色の焼失焼土とは明確に判別できる。また、焼土の直上では礫(142)が出土しているが、掘り込みの痕跡などが確認できないため支脚であったか否かは不明である。

(煙道・煙出し部) 刈り貫き式の煙道と考えられ、方位はN-27°-Eである。堆積土は黒褐色でやや粘性の強い土が主体となっており、壁面崩落土である黄橙色土ブロックを含む。燃焼部と煙道との境界は土手状に高くなっている。煙道はそこから約9度で緩やかに傾斜して煙出しへと至る。煙出しある上面が若干崩落しているが、底面からはほぼ垂直に立ち上がる。

〈柱穴・土坑〉 東壁付近で土坑状のプランを2個確認している。位置関係から柱穴としたが、いずれも底面が不整形であり、根の侵食も著しいことから根攪乱の可能性もある。

出土遺物 (第72図、写真図版55)

〈出土状況〉 全体として乏しく、北西壁付近で土師器46gと焼土直上で礫1点が出土したのみである。

〈掲載遺物〉 土師器と敲磨器類をそれぞれ1点ずつ掲載した(141・142)。141は土師器壺で、内外面ともミガキ調整の後に黒色処理が施される。外面下半にはさらにハケ調整の痕跡も認められる。142は磨石で、1面にのみ使用痕が認められる。

時 期 出土遺物に乏しいため根据として弱いが、両面黒色処理された壺が出土していることから平安時代に属すると思われる。なお、本住居は焼失家屋であるが、先述したRA031に比べて炭化材の残存状況は良くないため、構築材の樹種を特定することはできなかった。

RA041堅穴住居

遺構 (第26・27図、写真図版15)

〈位置・検出状況〉 調査区北側-4D 3bグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面で、黒褐色の方形プランとして検出された。

〈重複関係〉 R Z029占墳と重複し、本遺構の煙道部が周溝の一部を破壊している。

〈規模〉 3.2×2.7m 〈平面形〉 隅丸方形 〈床面積〉 8.37m²

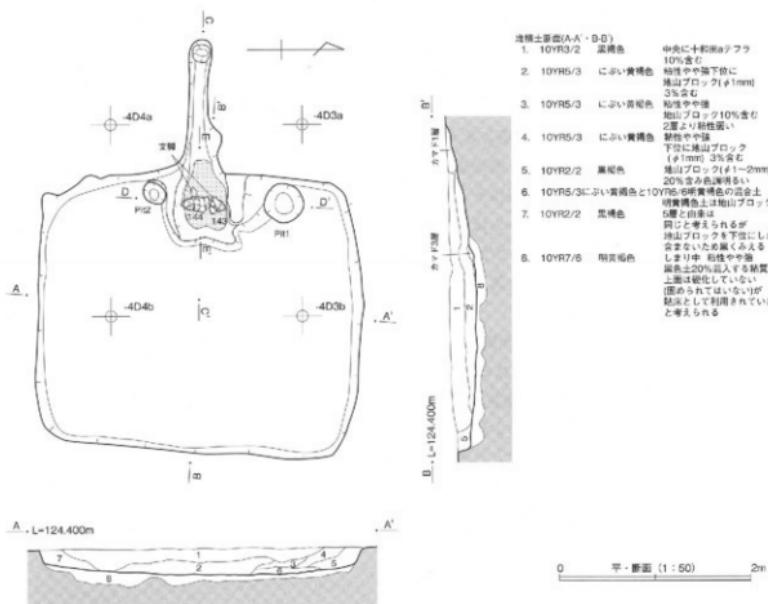
〈壁の高さ・状態〉 壁面は崩落のためハの字状に広がりながら立ち上がる。検出面からの深さは25cm前後である。

〈堆積状況〉 堆積土は7層に細分した。にぶい黄褐色土と黒褐色土が主体であり、最上位層である第1層には十和田aテフラがブロック状に混入する。壁面付近にはⅡ層の流土と考えられる黒褐色土が堆積していたため、堆積土と壁面との判別は比較的容易であった。

〈床面〉 第8層を床面としている。第8層は黒色土が混入する明黄褐色の粘質土で、上面は硬化していないが貼床と考えられる。

〈カマド〉 西壁中央に設置される。煙道の天井部が削平されているが、残存状況は良好である。

〈本体部〉 床面より一段高い台状の高まりとなっており、袖は右袖のみ残存する。床面及び袖は貼床と同様の明黄褐色粘質土を用いているが、被熱のため表面はもろく崩れやすい。燃焼部焼土は煙道側に広く、70×40cmの長辯円形に広がっている。焼土内には礫が2点見つかっているが、被熱痕跡があることと設置状況から焼成前に設置された支脚と考えられる。支脚の手前側には土師器の長胴壺2個体が合わせ口のように横倒しの状態で出土している(143・144)。土師器壺の外面にはススが付着し、さらに143の内面には喫水線が認められることから実際に煮炊きに使用されていたことは明らかである。なお、土師器壺の設置部分は良く焼け締まっていることから、この部分が燃焼部の中心と考えら



第26図 RA041 (1)

れる。

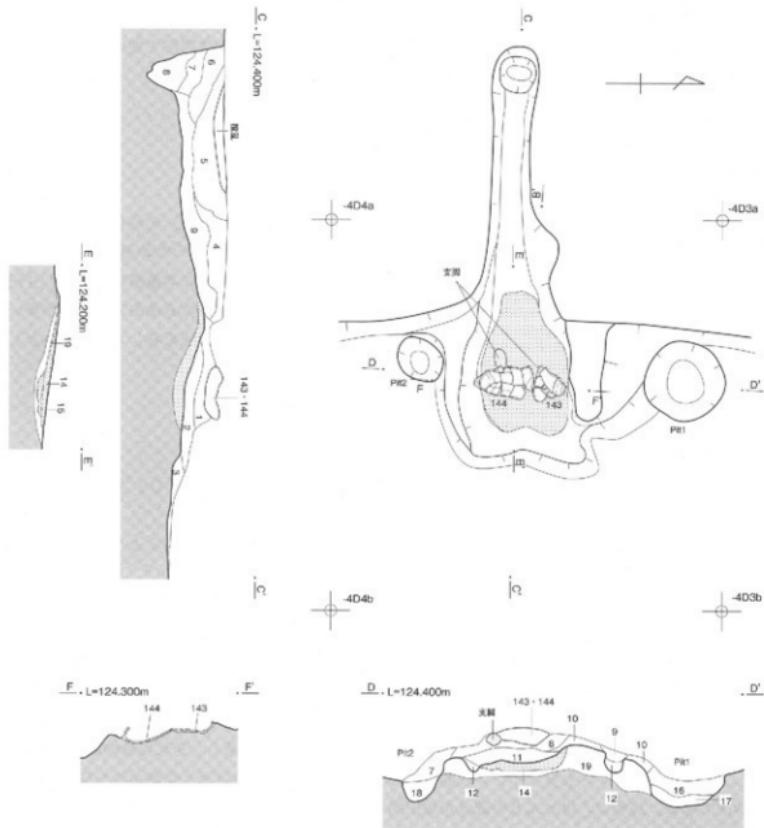
(煙道・煙出し部) 煙道は燃焼部焼土の西端から約7度の角度で緩やかに傾斜しながら煙出しへと至る。堆積土は黒褐色土主体で、焼土と炭化物を少量含んでいる。煙出しは縦断面形が鋭角な逆三角形状であり、ハの字状に立ち上がって上面へと至る。

(柱穴・土坑) カマドの両脇に2個確認しており、位置関係から両者とも柱穴と考えられる。ただし、これらの対になる柱穴については床面を掘り方まで掘り下げても検出することができなかった。

出土遺物（第72図、写真図版55）

〈出土状況〉 カマドの燃焼部直上から土師器壺の破片が2,760g出土している。

〈掲載遺物〉 燃焼部焼土直上の土師器壺2点を掲載した（143・144）。143は口縁部に最大径をもつ長胴壺である。底部脇が強く屈曲しながらハの字状に立ち上がり、体部上半は直立気味となる。頸部には段が形成され、そこから口縁部はハの字状に開きながら立ち上がる。口縁端部は強い横ナデ調整が施されているため直立気味となる。体部は内外面ともヘラナデ調整が施され、さらに外面下半から底部脇にかけてナデ調整が施される。底部はわずかに上げ底で、単位の細かいケズリ調整が施される。144も口縁部に最大径をもつ長胴壺である。底部脇から斜め上方に立ち上がり、体部上半は直立気味となる。頸部には弱い段をもち、口縁部は直線的に外方へと開く。口縁部には横ナデ調整が施されており、端部はわずかに外方につまみ出される。体部は内外面ともにハケ調整が施され、底部にはケズリ調整が施される。



カマド・窓跡・柱穴(C-C'、D-D'、E-E')

1. 10YR3/2 薄褐色粘質土 粒性やや粗 岩山ブロック5%含む
2. 10YR3/2 黄褐色 地山ブロック5%含む やや砂質
3. 10YR2/6 黄褐色 地山ブロック5%含む 黄褐色
4. 黄褐色 土色やや暗 黃褐色
5. 10YR6/4 にじい黄褐色 地山や少々 黑褐色土含む
6. 10YR7/6 黄褐色 粒性やや粗 黑褐色細粒るく粒性や強い
7. 10YR2/2 黄褐色 地山ブロック10%含む 黑褐色土含む
8. 10YR2/2 黄褐色 地山ブロック10%含む 黑褐色土含む
9. 2.5YR6/6 黄褐色 地山や少々 黑褐色土含む 後上の二層は複数層
10. 10YR7/6 明るい褐色 やや砂質 黑褐色土含む 地球帶土の混土か
11. 10YR6/3 にじい黄褐色 下部に灰化物3%、淡土10%含む
12. 7.5YR2/2 黑褐色
13. 10YR4/2 反対褐色 地山や少々 地山ブロック3%含む
14. 8YR6/6 黄褐色 地山や少々 黑褐色土含む
15. 8YR6/6 褐色 第1層と異なり凹地堆土を含まない地盤堆土で この層の上面が直接地面
16. 10YR1.7/1 黑褐色 地山ブロック5% (約1~2mm)10%含む やや粒子粗い PI1地盤土
17. 10YR6/4 にじい黄褐色 地山や少々 黑褐色土10%含む PI1地盤土
18. 10YR2/2 黄褐色 PI1地盤土
19. 10YR7/6 黄褐色 粒性や少々 黑褐色土10%混入する砂質土でカマド構築土(=玄瓦3層)

0 (1:25) 1m

第27図 RA041 (2)

時 期 土師器壺のみの出土であるため年代的根据としては弱いが、両者とも奈良時代（8世紀中頃～後半か）に属するものと考えられ、使用痕の観察からこれらは実際に本住居跡で使用されていた可能性が高いことから、本住居の構築年代もこの頃と考えておきたい。

(村田)

3 古 墳 (RZ)

17基検出されている。中央に円形や方形の墳丘を築き、その周囲に溝（周溝）を巡らすという形態の遺構で、古代墓制の一形態である。ただし、今回検出したものは削平が著しいため遺存状況は悪く、加えて出土遺物も多くないため性格や年代について不明な点が多い。一般的に本遺構には「古墳」・「円形周溝」・「周溝状遺構」など様々な呼称が用いられる。平地の遺跡では周溝のみ検出される例が多いことから「円形周溝」と呼称されることが多いが、本報告では本来的には墳丘を有しており、墓としての機能を備えた遺構ととらえ、「古墳」の名称を用いることにしたい。

R Z014古墳

遺 構 (第28図、写真図版16)

〈位置・検出状況〉 -4 C19 1～-4 C24 o グリッドに位置する。Ⅲ層上面で「C」字状に巡る黒褐色プランとして検出された。

〈重複関係〉 R G032、R D116と重複関係にあり、R G032は本遺構の中央を横切るように掘削されているが、一方で本遺構がR D116の一部を壊して掘削されている。

〈墳丘〉 平面形は円形で、現存規模は直径9.90mである。削平によりⅢ層が露出しており墳丘は残存していない。そのため墳丘の高さ・構築方法などの情報を得ることはできなかった。

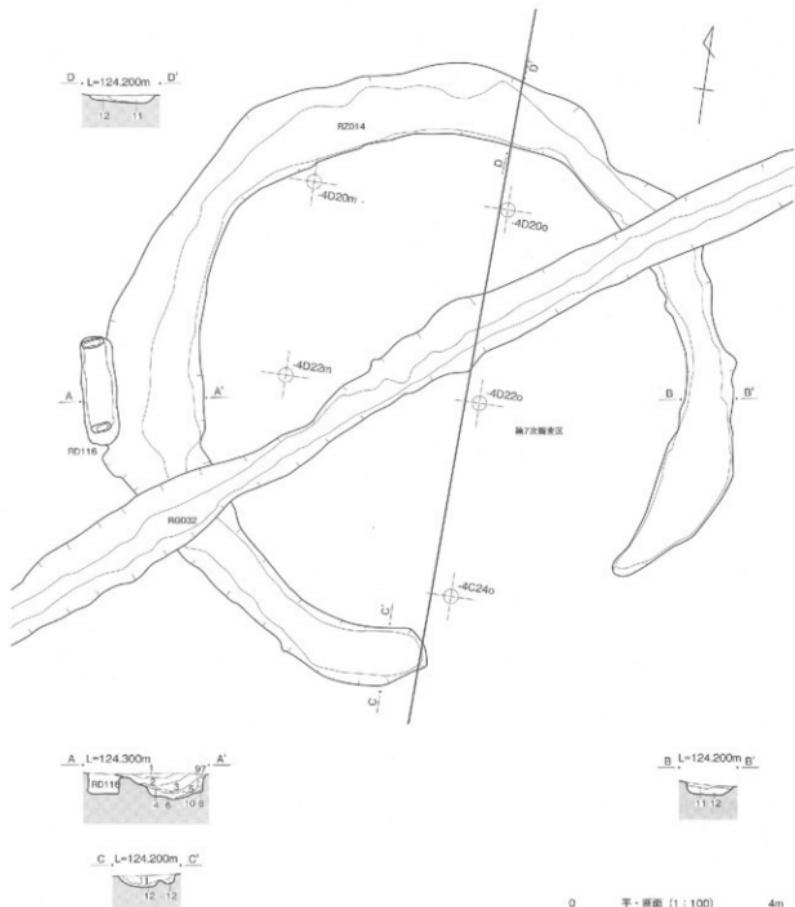
埋葬施設も墳丘とともに削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。

〈周溝〉 南東方向が開く「C」字状プランの周溝である。断面形は浅い皿形ないし逆台形で、墳丘側壁面はほぼ垂直に立ち上がる。検出面からの深さは一定ではなく、上面が東側に向かって傾斜するようく削平されているためR D116との重複部分（断面Aライン）付近が深く、それ以外の部分は浅い。ただし、実際にはAラインとBラインの底面標高はほぼ等しく、開口部付近と北側がやや高くなるという状況である。底面は、ほとんどの部分が地山削り出しによって水平に整えられている。上面幅は0.78～2.00m、検出面からの深さは断面Aライン付近で0.52m前後である。

〈堆積状況〉 黒褐色の粘質土と砂質土が主体であり、12層に細分した。最も残りの良い断面Aラインの観察によると、墳丘側から流れ込んだと思われる層が多く、これらは墳丘盛土の崩落土（第3・5・12層）と地山崩落土（第7・8層）と考えられる。墳丘は既に削平されているため推定ではあるが、本古墳では墳丘の構築には黒褐色粘質土と地山上（もしくは掘削土）が用いられていたようである。なお、R D116との重複関係は先に述べているが、断面観察から本古墳はR D116埋没（埋め立てか）後に構築されたものと考えられる。

出土遺物 第7次調査区に位置する断面Bラインの南側から土師器片が1点（6 g）出土している。非黒色処理坏の破片であるが、細片であり図示することができなかった。

時 期 重複関係からR G032より古く、R D116より新しい遺構と判断できるが、出土遺物が乏しく詳細は不明である。ただし、堆積土上位に十和田aテフラを含む層が確認されていることから、10世紀初頭には既に周溝は埋没していたものと考えられる。



- | | | | | | | |
|-----------|-----------|-----------------|-----------------------------|------------|-------------------------|---------------------|
| 1 10YR4/4 | 褐色砂質シルト | 赤みを帯びる
褐色シルト | 十種田テフラの極小ブロックを含む
褐色砂質シルト | 7 10YR3/3 | 暗褐色砂質シルト | 堆山麻尾ブロック |
| 2 10YR2/1 | | | 十種田テフラの極小ブロックを含む
褐色砂質シルト | 8 10YR2/2 | 褐色砂質シルト | 褐色土粒を全体に含む
堆山麻尾土 |
| 3 10YR3/2 | 黒褐色砂質シルト | | 十種田テフラの極小ブロックを含む
褐色砂質シルト | 9 10YR4/4 | 褐色シルト | 堆山麻尾土 |
| 4 10YR1/2 | 黒褐色粘土質シルト | | 十種田テフラの極小ブロックを含む
褐色砂質シルト | 10 10YR2/2 | 褐色粘土質シルト | 褐色土粒を全体に含む
堆山麻尾土 |
| 5 10YR3/1 | 深褐色砂質シルト | | 十種田テフラの極小ブロックを含む
褐色砂質シルト | 11 10YR2/2 | 褐色シルト | 地山ブロック5%含む
堆山麻尾土 |
| 6 10YR2/3 | 深褐色粘土質シルト | 黄褐色土粒の混入は5箇所が多い | 黄褐色土粒を全体に含む
褐色砂質シルト | 12 10YR7/8 | 黄褐色粘土質土と10YR2/2深褐色土の混合土 | 粘性や中層
黄褐色土は堆山麻尾土 |

第28図 RZ014

R Z017古墳

遺構（第29図、写真図版17）

〈位置・検出状況〉 -3C8t～-3C12xグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、「C」字状に巡る黒褐色プランとして検出された。〈重複関係〉認められない。

〈墳丘・埋葬施設〉平面形は円形で、現存規模は7.40×8.10mである。墳丘は既にⅢ層まで削平されており、部分的に根摺乱による黒色土が分布するのみであった。そのため墳丘の高さ・構築方法などの情報を得ることはできなかった。

埋葬施設も墳丘とともに削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。〈周溝〉南東方向が開く「C」字状プランの周溝である。自然崩落や削平のため上面幅や深さは一定ではなく、現存規模は幅0.70～2.05m、深さ0.25～0.50mである。断面形は逆台形または箱形であるが、墳丘側がほぼ垂直に立ち上がる部分が多く、底面は掘り方のまま凹凸が著しいため不整形な部分が多い。深さも一定ではなく、北側（断面B・Dライン付近）は深く、南西側（断面Aライン付近）と開口部付近は浅い。なお、当初は人為堆積土と思われる第11層がほぼ全域で確認されたため、底面を整地している可能性が考えられた。しかし、第11層は墳丘側が厚く、外側が薄いという部分が多く上面レベルが一定しないことから墳丘側から流れ込んだ盛土とみなし、整地行為は行われていないものと判断した。

〈堆積状況〉地山ブロックを含む黒褐色土が主体であり、11層に細分した。堆積状況をみると墳丘側もしくは墳丘外から流れ込んだ状況を示していることから、ほとんどが自然堆積土と考えられる。墳丘が残存していないため断定はできないが、流入方向から第4・5・8・9・11層は墳丘（盛土）の崩落土と考えられる。

〈付属施設〉周溝西側の底面や墳丘寄りの位置で土坑を1基検出した。北西～南東方向に長軸をとる長方形プランの土坑で、規模は上面1.08×0.58m、底面0.92×0.43m、深さ0.34mである。周溝内堆積土掘削時に角礫を含む黒褐色の長方形プランとして検出したため、当初から古墳の從属埋葬施設である可能性を考慮して上面プランの実測を行った後に掘り下げたところ、南東側底面で「C」字状の礫1点と北西側底面で棒状礫1点が設置されたような状況で検出された。副葬品や人骨などの出土が皆無であるが、礫の設置状況や構築位置を考慮してR Z017に伴う從属埋葬施設と判断した。なお、底面で検出されていることから周溝埋没前構築されたことは確実であるが、出土遺物が無いため具体的な構築年代については不明である。

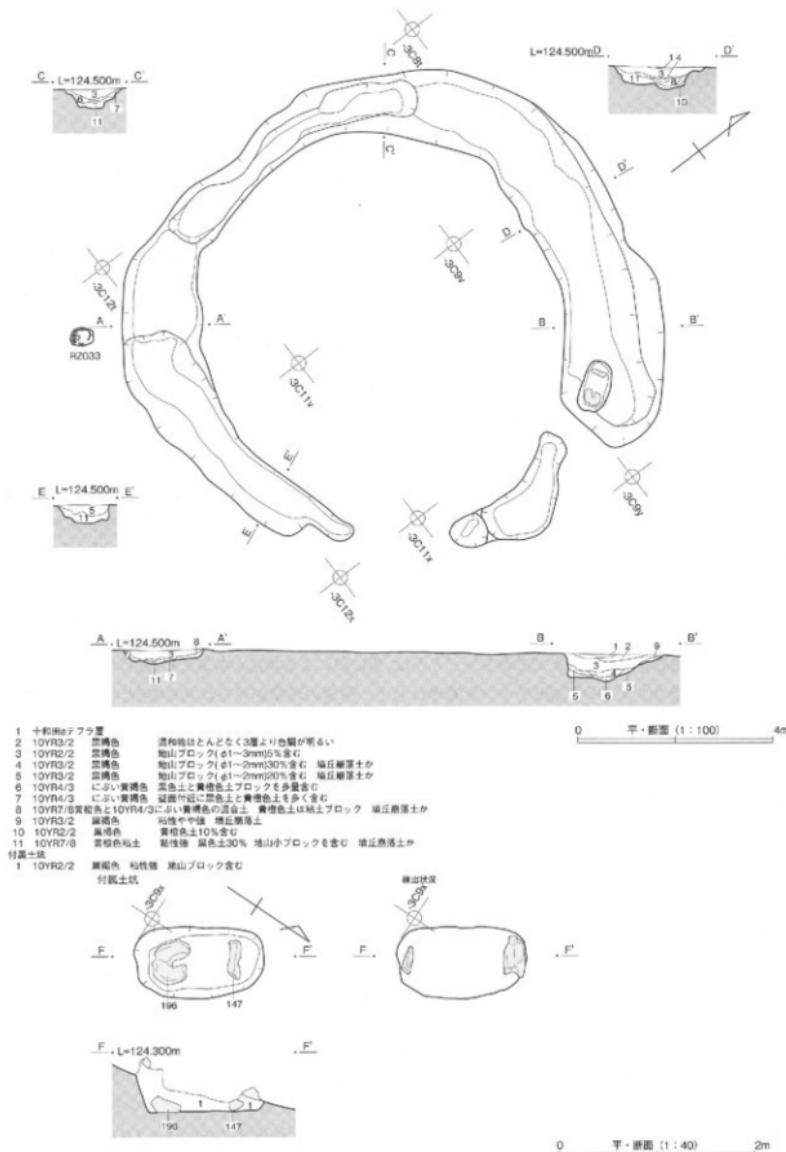
出土遺物（第73図、写真図版56）

〈出土状況〉検出面から土師器24g、断面Bライン東側の底面付近から刀子1点が出土している。また、付属土坑の底面からは枕状と棒状の礫が設置された状態で出土している。

〈掲載遺物〉周溝内出土の土師器1点と刀子1点、付属土坑出土の礫を2点掲載した（145～147、写真図版56～196）。145はロクロ成形の土師器壺である。外面には読み方は不明だが刻書が認められる。146は刀子である。圓部は斜闊で、刃部側より柄部側が太い。

147は付属土坑出土の礫で、加工痕及び使用痕は確認できない。196は「C」字状に中央部が削られている。ホルンフェルス製で、147と正対する位置に設置されており、枕のようにも思われるが、用途については不明である。なお、196は検出段階から風化が著しく実測不可能な状況であったことから写真のみ掲載した。

時期 出土遺物が乏しく、重複する遺構もないため構築年代は不明である。墳丘が削平された時期についても定かではないが、検出面からロクロ成形の土師器壺が出土していることと十和田aテテフ



第29図 RZ017

ラが上面に堆積していることから平安時代には周溝は既に埋没していたものと考えられる。また、付属土坑については枕状の礫が設置されていることから本古墳の從属埋葬施設であると考えられるが、被葬者の性格については不明である。

R Z018古墳

遺構（第30図、写真図版18）

〈位置・検出状況〉 -4 C 24 q ~ -3 C 5 s グリッドに位置し、周溝のみ検出されている。検出面はⅢ層下部～Ⅳ層上面で、植物の痕跡か、所々黒土が残る。この黒土は地山が汚れたといった感じで良く縮まり、遺構の堆積土とは比較的明瞭に異なる。周溝が途切れる部分にも、比較的広い範囲にこの土があり、その下に周溝の続きが出るかと一部下げてみたが、存在しなかった。

〈精査状況・図〉重複の項に詳述したように、重複関係の把握に最後まで悩んだ。堆積土は一部地山再堆積土でわかりにくい部分もあったが、全体的には判断に迷うものは少なく順調に進んだ。ただし、深いためもあって掘削に作業員約7名で約6日、ベルト除去に2名で約1日費やしている。

〈重複関係〉周溝の南西隅で、R G056と重複している。新旧関係は検出面でははっきりせず、灰白色火山灰を含む3層が両方の溝を横断するよう広がっていたため、むしろR Z018の方が新しいとさえ見えた。掘り下げ始めしばらくも堆積土の様子から同様に見えた。掘り上がった後もR G056が、R Z018との重複部分だけ前後より深く掘り込んでいるため、他の地点と異なった特徴を示すこと、堆積土が、灰白色火山灰が混じる以外は、基本的に黒～黒褐色土と黒褐色土に黄褐色土が混じったものの2種類しかなくて区別がつきがたいこと、さらに、底面はR G056も地山まで掘り込んでいるため、間に分水嶺状の高まりがあるのだが、それを挟んで両遺構の土層が比較的似た特徴を示すため明瞭にどちらの遺構に帰属するか分けがたいこと（両遺構とも原則として上半分は黒～黒褐色土、下半分は黄褐色土混じりの土）から、新旧関係は明瞭とは言えなかった（特に断面Aラインの部分で、3層が本当に古墳の墳丘側いっぱいまで広がるかどうかは、間に根による搅乱があるため、断言はできない）。

結局、重複がなくて深い断面Cラインを基準にして、同様の堆積が見られR G056との重複関係が比較的はっきりしている断面Dラインから、R Z018→R G056と判断した。第3層は、R Z018の最上面にも存在するが、基本的には第1～7層がR G056、それ以下がR Z018に帰属すると考える。第6・7層及び第11～16層は、地山掘削土の沖堆積であろう。

何故、R G056はR Z018と重複している部分を他と比べて深く掘り、上部を古墳の墳丘側にかなり幅広く掘ったのか（特に断面Aラインの所）、不明だが、Aラインの部分で3層が墳丘側いっぱいまで広がっているところは、周溝の上部に不連続な段が形成されており、異なる遺構が重複し、この部分を覆う3層が主体的に存在するR G056の方が新しいことの傍証になると思われる。

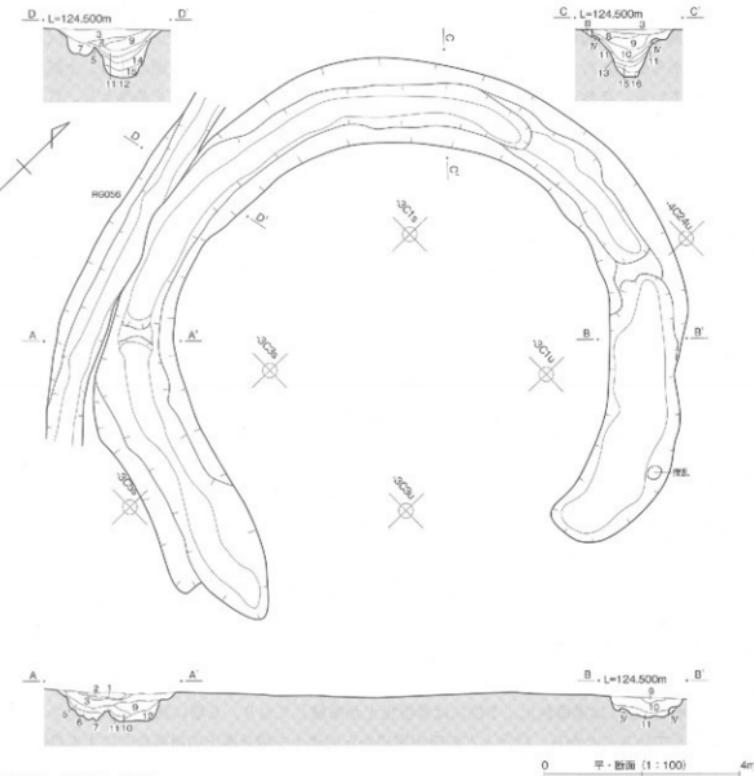
また、上記のような重複関係であり、3層はR Z018のR G056と重複しない最上部からも検出されたことから、両者の時期差はそれほど大きくないと推測される。

〈墳丘・埋葬施設〉平面形は円形で、現存規模は8.30×8.90mである。墳丘は既にⅢ層まで削平されており、墳丘の高さ・構築方法などの情報を得ることはできなかった。

埋葬施設も墳丘とともに削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。

〈周溝〉南東方向が聞く馬蹄形で、検出面での幅は1.75mである。検出面からの深さ・断面形は、地点による違いが大きい。断面形は逆台形～かまぼこ形を基本とするが、断面Cライン付近は非常に深いためV字形に近い。R G056と重複する付近～断面Cライン付近までは0.70～1.00mと深いが、

周溝が途切れる部分では浅く0.5m以下で、次第に消えていくといった状態に近い。壁面は、検出面から下に10cmほどがⅢ層で、その下が砂質のⅣ層となり、底は深い場所（断面A→D→Cライン付近の大部分）ではV層（粗砂）、それ以外の場所では砂質のⅣ層となる。底面は、掘り方そのままの様相で凹凸が著しい。以上から、周溝には“形を整える”という意識があまり窺えず、古墳の墳丘の土量確保という目的の“結果”に過ぎないのではないかと推測される。



- 1 10YR2/2 黒色 シルト 粘性あり
- 2 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性あり 4・8層と並んで最も高い
- 3 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性あり 下部にブロック状に灰白色火山灰含む 灰化物含む
- 4 10YR1.7/1 黒色 シルト
- 5 10YR2/1 黒色 シルト 粘性あり 微くかき混じる 植被乱れ 有機物子含む
- 6 10YR3/1 黒褐色地に10YR5/6赤褐色の大きめブロック シルト 粘性強 有機質土の再堆積
- 7 10YR3/1 黒褐色地に黒褐色地に10YR5/6赤褐色のブロック シルト 粘性強 有機粒子多く 有機ブロック含む 11層によく似る
- 8 10YR1.7/1 黒色 シルト 粘性あり
- 9 10YR2/1 黒色 シルト 粘性強
- 10 10YR3/1 黑褐色地に黒褐色地に10YR5/6赤褐色のブロック シルト 粘性強 4・8層に次いで高い
- 11 10YR3/1 黑褐色地に黒褐色地に10YR5/6赤褐色のブロック シルト 粘性強 有機粒子多く含み 有機ブロック含む 7層によく似る
- 12 10YR1.7/1 黑色の下部に10YR4/4褐色のブロック シルト 粘性強 下部に有機粒子多く含む
- 13 10YR3/1 黑褐色地に黒褐色地に10YR5/6赤褐色のブロック シルト 粘性強 有機粒子多く含む
- 14 10YR3/1 黑褐色地に黒褐色地に10YR5/6赤褐色のブロック シルト 有機土に有機質土層じり
- 15 10YR4/2 黑褐色地に10YR5/6赤褐色のブロック シルト 有機土に有機質土層じり
- 16 10YR5/6 黄褐色地に10YR3/1赤褐色の シルト 黃褐色 V層 (弱) 有機土に黑褐色土層じり

第30図 RZ018

〈堆積状況〉周溝内堆積土は、上半部（8～10層）黒～黒褐色土、下半部（11～16層）は黒～黒褐色土に黄褐色土が混じる層で地山掘削土の再堆積と思われる。堆積方向から考えると、ほとんどの層は墳丘側から供給されたことが分かる。3層の下部にある火山灰はブロック状で層をなさない。3層は、RG056との重複部分ではRG056の方に帰属し、重複しない部分でも、他層と異なって周溝の中央付近に浅くレンズ状に堆積していないこと、さらに周溝の堆積土上面で3層は不連続に点在することなどから考えると、本来的には3層は本道構の堆積土ではない可能性もある。

出土遺物（第73図、写真図版56）

〈出土状況〉遺物の出土は非常に少ない。何れも土師器・須恵器の小破片で、本道構に伴うものではないと判断される。断面Aラインの辺りから比較的多くの土器片が出土したが、本来はRG056の第5層上面から出土したようである。断面Bラインの北側の第10層、第11層上面からも、土器片の出土を確認している。なお、遺物取り上げの区画として、断面図A～Dのベルトを基準とし、CとDの間をQ1 A、DとAの間をQ1 B、CとBの間をQ2、Aより南をQ3、Bより南をQ4と呼称した（ベルトは含まない）。
（金子）

〈掲載遺物〉須恵器大甕の体部破片2点と凝灰岩製の磨石1点を掲載した（148～150）。大甕はいずれも内外面に叩きの痕跡が認められる。磨石は2面に使用痕が認められる。

時 期 重複関係からRG056より古い古墳と判断できるが、厳密に本道構に伴う遺物がないため構築時期については不明である。周溝の埋没時期についても不明な点が多いが、十和田aテフラと第3層の堆積状況から平安時代にはほぼ埋没していたものと考えられる。
（村田）

RZ019古墳

遺 構（第31図、写真図版28・30）

〈位置・検出状況〉～4C19k～～4C22lグリッドに位置する。検出面はII層下位で、弧状の黒褐色プランが向かい合うよう状況で確認された。周溝のみ残存しており、墳丘及び埋葬施設は削平のため消滅している。（重複関係）認められない。

〈墳丘・埋葬施設〉平面形はやや不整な円形で、現存規模は直径約4.90mである。II層まで削平されていたため墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

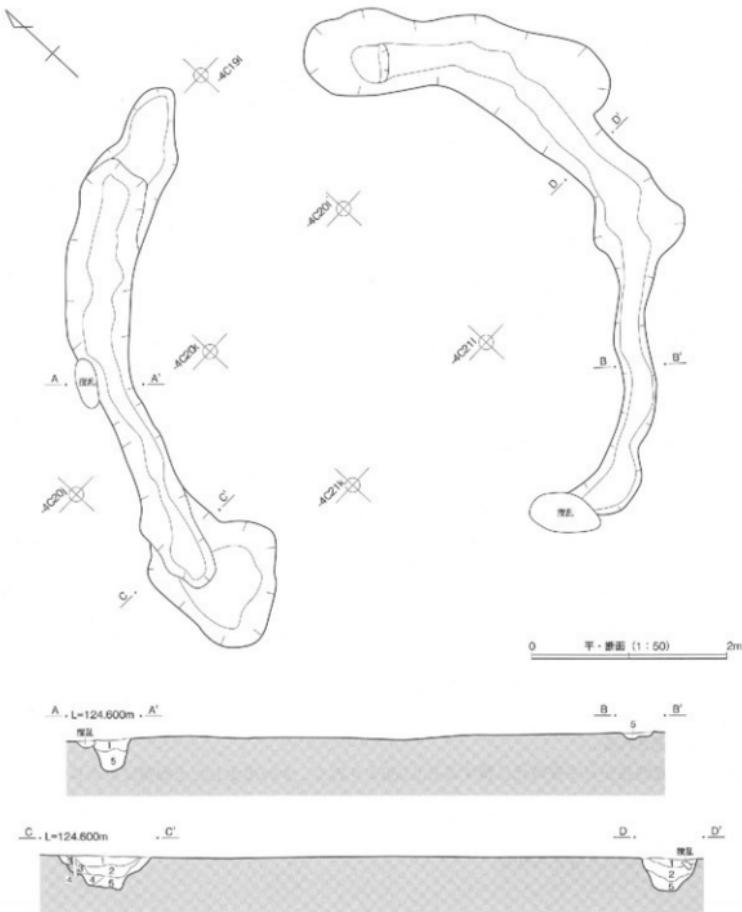
また、埋葬施設も削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。

〈周溝〉2ヶ所が途切れるタイプの周溝で、北東側と南西側に開口部をもつ。削平と擾乱の影響で幅や深さが一定ではなく、西側周溝のほうが東側周溝よりも深い。断面形は逆台形を基調としており、深さは5～35cmと一定ではないが両側とも中央部が最も深くなる。底面の凹凸は少ないが、幅も高さも一定ではなく、平坦に整えるという意識は高くなかったものと考えられる。

〈堆積状況〉上位には黒褐色土、下位には黄橙色土が堆積しており、5層に細分した。レンズ状の堆積状況をしていることから、ほとんどの層が周辺からの流土や墳丘盛土の崩落などによる自然堆積と考えられる。

出土遺物 東側周溝から土師器片が1点（3g）出土しているが、細片のため図示できなかった。

時 期 出土遺物が乏しく、重複する遺構もないため構築年代は不明である。



- 1 10YR2/2 黒褐色 地山ブロック5%含む
- 2 10YR2/2 黒褐色 地山ブロック15%含む 1層と由来は同じ
- 3 10YR3/2緑褐色～10YR5/4に近い黄褐色 墓丘頂上土
- 4 10YR7/8 黄褐色 地山ブロック5%含む 墓丘頂上に水平に入する
- 5 10YR7/8黄褐色と10YR3/2黒褐色の混合土 粘性やや強 黃褐色土は粘質土で地山層落ブロック

第31図 RZ019

R Z020古墳**遺構（第32図、写真図版19）**

〈位置・検出状況〉 -4 C15 g ~ -4 C20 i グリッドに位置する。検出面はⅡ層下位～Ⅲ層上面で、「C」字状の黒褐色プランとして確認された。周溝のみ残存しており、墳丘及び埋葬施設は削平のため消滅

している。

〈重複関係〉周溝南側でR G056、東側でR D114陥し穴状造構と重複し、R D114の上面を本造構が壊している。R G056との新旧関係については、十和田aテフラ混入層である第1層が両造構のほぼ中央に堆積していたため検出段階では不明であったが、断面観察の結果、R G056堆積土がR Z020の周溝内堆積土を切るように堆積している状況が確認されたことからR Z020の周溝埋没後→R G056掘削と判断した。

〈墳丘・埋葬施設〉平面形は円形である。北東側に2股に分かれた溝があり、どちらかが本古墳の周溝と考えられる。ただし、重複部分と考えられた断面Bライン付近の堆積状況を観察しても堆積土が全く同じで分層できなかったため、どちらが周溝となるのかは不明である。墳丘規模は内側の溝を周溝と仮定すると直径約8.00m、外側の溝と仮定すると直径約8.50mとなる。

なお、Ⅲ層まで削平されていたため墳丘と埋葬施設は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

〈周溝〉北西側が大きく開く形状の周溝である。西側と東側にも周溝が途切れる部分があるが、この部分は元々浅かったために削平によって消滅したものであり、本来的には北西側を除いて周溝は全て繋がっていたと考えられる。断面形は皿形の部分が多いが、削平の影響で浅くなっているため本来の形状は不明である。底面・壁面とも掘り方のままの部分がほとんどであり、凹凸が著しい。

〈堆積状況〉重複するR G056堆積土とあわせて11層に細分しており、そのうち第6～10層が周溝内堆積土である。上位には黒褐色土、底面付近には黒褐色土と黄橙色土の混合土が堆積する。全体に浅いため堆積要因については不明である。

出土遺物（第73図、写真図版56）

〈出土状況〉周溝内から土師器が328g出土している。R G056との重複部分であるA・Dライン付近からの出土がほとんどで、このなかで第9・10層出土のものについてのみ本古墳に帰属するものとみなしている。

〈掲載遺物〉土師器壺を1点掲載した（151）。成形にロクロを用いない丸底の壺であるが、体部上半を欠損しているため全形は不明である。外面には横位・斜位にヘラ削り調整、内面にはミガキ調整と黒色処理が施される。

時 期 重複関係から平安時代に属するR G056より古く、かつ出土した土師器にロクロ成形のものが含まれないことから奈良時代までに構築された古墳と考えられる。墳丘の削平時期については不明であるが、R G056が本古墳周溝の堆積土を切るように構築されていることから、平安時代前半には周溝は埋没していたと考えられる。

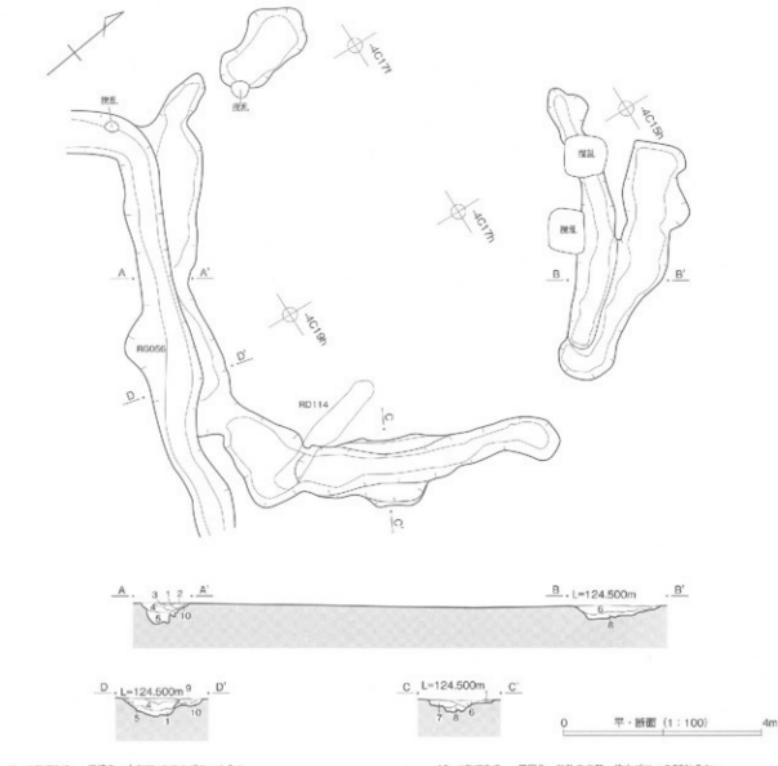
R Z021古墳

遺 構（第33図、写真図版28・30）

〈位置・検出状況〉-4 C14 k～-4 C16mグリッドに位置する。検出面はⅡ層最下位～Ⅲ層上面で、「C」字状の黒褐色プランとして検出された。周溝のみ残存しており、墳丘及び埋葬施設は削平のため消滅している。（重複関係）認められない。

〈墳丘・埋葬施設〉平面形は円形で、直径は約3.8mである。削平のため墳丘は既に消滅しており、樹木根と考えられる黒色土が点々と分布しているのみであった。そのため、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

また、埋葬施設も削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。



- 1 10YR2/2 黄褐色 十字凹田アフラック含む
- 2 10YR2/2 黄褐色 粘土や砂質
- 3 10YR4/3 にい黄褐色 地山ブロック (3~10mm) 20%含み、色調が若干黄色がかる 1~5層がRG056堆積土、6~10層がRZ2020堆積土
- 4 10YR3/2 黄褐色粘性土 粘土や砂質
- 5 10YR7/8 黄褐色 と10YR3/2層相接の泥炭土 粘土や砂質 黄褐色土は地山層面ブロック
- 6 10YR2/2 黄褐色粘性土 粘土や中砂質 地山ブロック含む
- 7 10YR2/2 黄褐色粘性土 3~10mmの砂質を含む 20%含む 壁面堆積土
- 8 10YR2/2 黄褐色 と10YR7/8層相接の泥炭土 粘土や砂質 やや砂質 粘土層
- 9 10YR3/2 黄褐色 粘土や砂質 4mmに相当する地山ブロックを15%含む
- 10 10YR3/2 黄褐色 粘土や砂質 地山ブロック30%含む
- 11 10YR6/3 にい黄褐色 基本土層下・巨礫の間移層

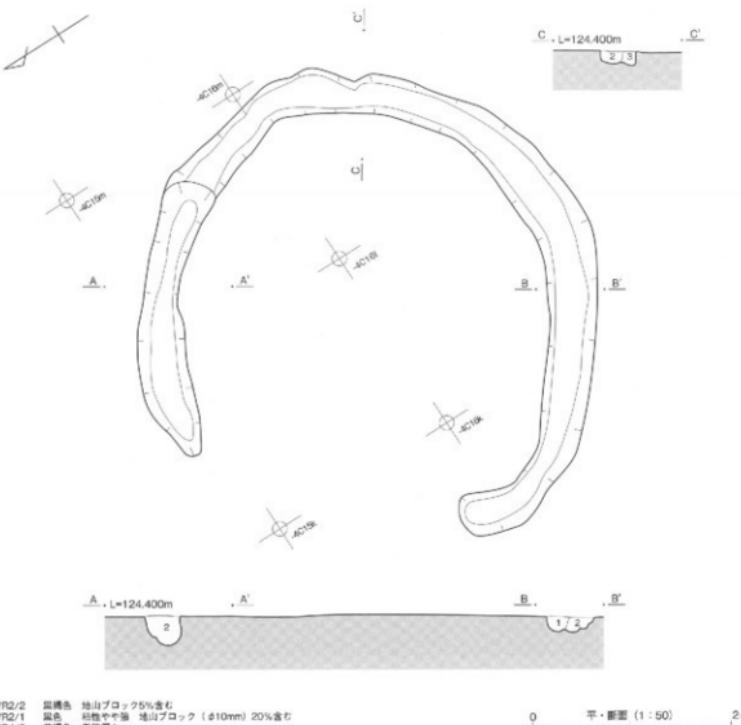
第32図 RZ2020

〈周溝〉北西側が開く「C」字状プランの周溝である。大幅に削平されているが、上面の幅は比較的一定であり、現存規模は0.33~0.58mである。断面形は箱型を基準としており、深さは0.15m前後である。底面は根攪乱以外の凹凸はほとんどなく、水平を意識して平坦に整えられている。ただし、北側（Aライン付近）は2段に掘り込まれているため断面形は蒲鉾形となり、深さも0.30m前後と若干深くなる。

〈堆積状況〉3層に細分できるが、非常に浅いため各層の由来や流入方向は判然としない。

出土遺物 なし。

時 期 出土遺物・重複関係ともにないため構築年代は不明である。今回検出されたなかでは最も小



第33図 RZ021

規模な古墳であり、かつ唯一北西方向のみに開口部をもつものである。

R Z022古墳

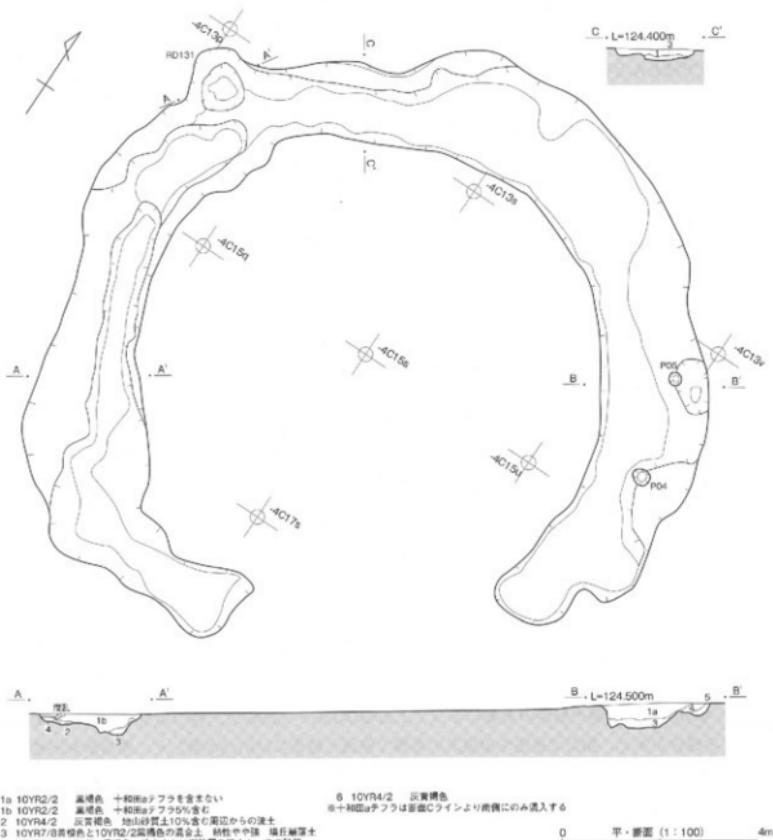
遺構（第34図、写真図版20）

〈位置・検出状況〉 -4 C 12 q ~ -4 C 18 s グリッドに位置する。検出面はII層下位で、「C」字状の黒褐色プランとして検出された。

〈重複関係〉 R D131土坑、P04・05と重複関係にある。R D131との関係については、R D131堆積土には十和田aテフラは混入せず、さらにR D131堆積土を切るように本古墳の第1層が堆積していることからR D131埋没後→R Z022周溝掘削と判断した。P04・05については周溝内堆積土と性質がほとんど変わらないため新旧関係を把握することはできなかった。

〈墳丘・埋葬施設〉 平面形は円形で、現存規模は直径約9.30mである。II層下位まで削平されていたため墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

また、埋葬施設も削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。



第34図 RZ022

〈周溝〉 南東側が聞く「C」字状プランの周溝である。規模は開口部付近とその反対側が上面幅1.00～1.60m、深さ0.20m、その両脇にあたるA・Bライン付近が上面幅2.0m前後、深さ0.40～0.50mである。壁面は墳丘側が垂直ないし銳角に立ち上がり、外側がハの字状に聞く形状である。底面は掘り方の凹凸と根摺乱が著しく、底面のレベルは一定ではない。なお、後述するように本古墳には貼床状の堆積土は認められず、底面は墳丘盛土確保のための掘り方そのままである。

〈堆積状況〉 黒褐色土と黄褐色系の砂質土が主体であり、5層に細分した。このうち最上位層である第1層は周溝内堆積土の大半を占めており、ブロック状に十和田aテフラが混入する。ただし、堆積状況は一様ではなく、十和田aテフラはCラインから南側でのみ確認されており、それより北側は混和物のほとんどない黒褐色土である。堆積状況から第1・2・4・5層は自然堆積層と考えられるが、

第3層のみ人為堆積とも判断できる水平堆積が確認されている。第3層については周溝底面を平坦に整えるための貼床状堆積上とも考えたが、上面レベルが一定でないことと掘り方の凹凸が著しいAライン付近ではほとんど確認されていないことから墳丘盛土の崩落土と判断した。

出土遺物（第73図、写真図版56）

〈出土状況〉周溝内から土師器が500g出土している。出土地点は周溝南側（Q 4 = Aラインより東側）と北側（Q 1 = B - Cライン間）に限られており、それぞれ壺1個体分の破片が出土している。

〈掲載遺物〉土師器壺2点を掲載した（152・153）。いずれも成形にロクロを用いない丸底の壺で、内面にはミガキ調整と黒色処理が施される。152は丸みをもって立ち上がり、中位に段を形成して口縁部は直線的に外方に開く。153も類似した形態であるが、152よりも段の位置が低く、屈曲も明瞭ではない。

時 期 出土した土師器壺が8世紀代に位置づけられることから奈良時代には構築されていたと考えられる。墳丘の削平時期及び周溝の埋没時期については、最上位に十和田aテフラが混入することから平安時代と考えられる。なお、今回調査した古墳のなかでは墳丘規模・周溝幅とも最大である。

R Z023古墳

遺 構（第35・36図、写真図版21）

〈位置・検出状況〉-4 C21y～-3 D 1cグリッドに位置する。検出面はⅡ層最下位～Ⅲ層上位で、「C」字状の黒褐色プランとして検出された。周溝のみ残存しており、墳丘及び埋葬施設は削平のため消滅している。

〈重複関係〉認められない。

〈墳丘〉平面形は隅丸方形に近く、推定規模は8.50×7.20mである。北側に幅1.80m程の張り出し部をもっているため、この部分のみ周溝幅が非常に狭くなる。樹木根は多々見られるが、削平によって墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

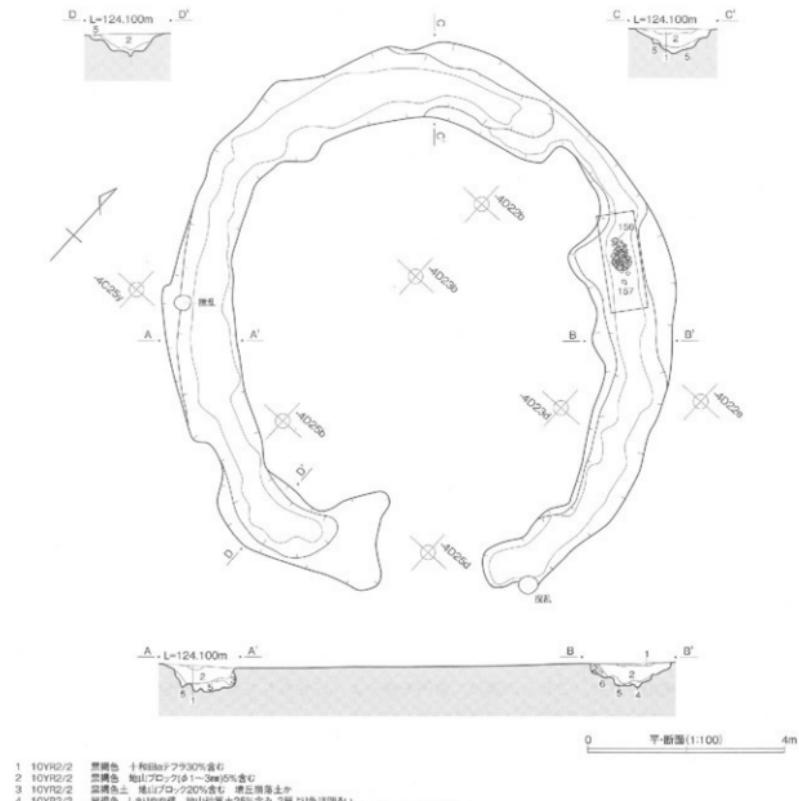
また、埋葬施設も削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。

〈周溝〉墳丘張り出し部や崩落の影響によって上面幅は0.80～1.50mと一様ではない。底面は掘り方のままの部分が多く、加えて崩落や根攪乱の影響で壁面と底面には凹凸が著しく、断面形も不整形な部分がほとんどである。

〈堆積状況〉黒褐色土主体で6層に細分した。南東側開口部付近を除く全域で最上位に十和田aテフラを多く含む黒褐色土（第1層）が薄く堆積し、その下位に地山ブロックを含む黒褐色土（第2層）が厚く堆積する。第2層の直下には黒褐色土と黄褐色土の混合土である第5層がほぼ全域で堆積している。地山ブロックを多く含むことと本層の上面及び直上の層で遺物の出土がみられることから底面を平坦にするために人為的に埋めた土とも考えられるが、上面の高さが一定でないことや人為堆積土としては縮まりや粘性が弱いことなどから墳丘盛土の崩落土の可能性もある。

出土遺物（第74図、写真図版56・57）

〈出土状況〉第2層下位と第5層直上で土器片が出土している。断面Bライン北西側で須恵器大甕長頸瓶の破片が4.017g出土している。大甕は、底部の残存状況から第4層中に立て置かれていたものと考えられる（第36図）。上部は破片状態であり、長頸瓶の破片も混在していたが、接合の結果ほぼ欠損無く復元することができた。なお、大甕内部及び周辺の土壤をサンプリングして室内整理の段階で洗浄を行ったが、須恵器の微細破片以外には何も出土しなかった。また、断面Cライン南西側では土師器壺1個体分（100g）の破片が出土している。

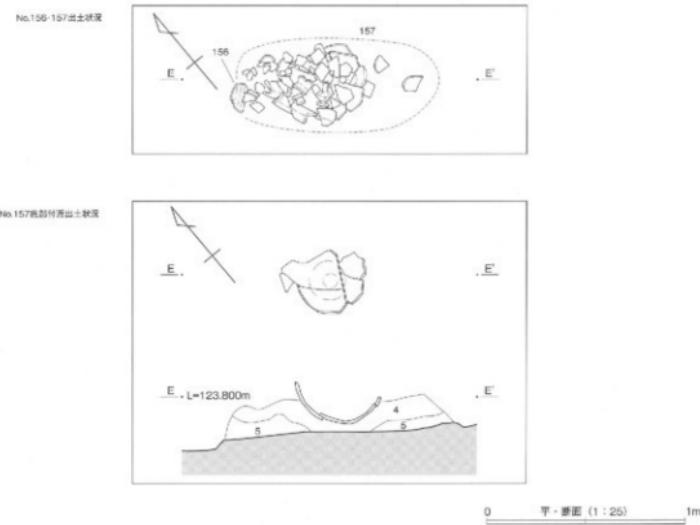


- 1 10YR2/2 黒褐色 十和田テフラ30%含む
- 2 10YR2/2 黒褐色 地山ブリッキ61~3cm5%含む
- 3 10YR2/2 黒褐色 地山ブリッキ20%含む 地上部黒色土
- 4 10YR2/2 黒褐色 地山ブリッキ25%含む 地上部黒色土
- 5 10YR2/2 黒褐色と10YR7/8茶褐色砂質土の混合土 しかしや深、颗粒やや粗 全体的には少い 黒褐色
- 6 10YR7/8 黑褐色砂質土 地山無漂土
- ※埴山は北側(西面B-C部)が黄褐色砂質土、南側(底面A-D間)が黄褐色砂質土。いずれも基本土層N層相当

第35図 RZ023 (1)

〈掲載遺物〉土師器1点、須恵器3点を掲載した(154～157)。154は内黒土師器の丸底壺である。体部は開き気味に立ち上がり、口縁部はナデ調整によって外反する。外面中央には段が形成されるが、内面にはそれに対応するものは認められない。155は須恵器長頸瓶の口縁部、156は体部の破片であり、外面の色調や胎土の特徴から接合はしないが同一個体と考えられる。157は須恵器大壺である。底部は尖底気味の丸底で、体部中央やや上に最大径をもつ。口縁部はハの字状に立ち上がり、端部はナデ調整によって外方に引き出されたよう見える。

時 期 堆積上位から出土した土師器が奈良時代、最上位に十和田aテフラが混入することから平安時代には既に埋没していたものと考えられる。



第36図 RZ023 (2)

R Z024・025古墳

遺構 (第37図、写真図版22)

〈位置・検出状況〉 -4C7o～-4C11rグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面で、弧状の溝が途切れながら複数検出された。これらの溝は二重円を描くように分布しており、今回は内側のプランをR Z024、外側のプランをR Z025として調査を行っている。

〈重複関係〉 両者は東側周溝で重複関係にあるが、両者とも遺存状況が良くないため断面観察でも新旧関係を判断することはできなかった。なお、R Z025は南側周溝でR D132土坑と重複関係にあるが、こちらについても堆積土が酷似していたため新旧関係を判断することができなかった。

〈墳丘・埋葬施設〉 両者とも円形の墳丘であったと考えられるが、削平が著しいため全形は不明である。残存する周溝間から規模を推定するとR Z024が直径約6.5m、R Z025が直径約7.5mとなる。開口部についても不明な点が多いが、周溝の位置関係から南東側や西側に存在した可能性がある。

また、両者とも埋葬施設は削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。

〈周溝〉 R Z024は北西側と東側のみ残存する。両者とも比較的直線的な溝で、現存規模は北西側が上面幅0.4m、深さ0.25m、東側が上面幅0.6～0.8m、深さ0.15mである。断面形は逆台形で、北西側の底面は平坦であるが、東側は握り方のままで凹凸がある。

R Z025は北側・東側・南側が残存するが、削平と宅地造成時の擾乱によって非常に残りが悪い。

断面形は逆台形で、深さは0.2～0.3mである。底面は全地点とも握り方のままで凹凸が著しい。

〈堆積状況〉 黒褐色土が主体であり、性質も非常に似ていたため両古墳をあわせて6層に細分した。削平の影響で遺存状況がよくないため各層の由来や堆積時期などは不明である。

出土遺物 (第75図、写真図版57)

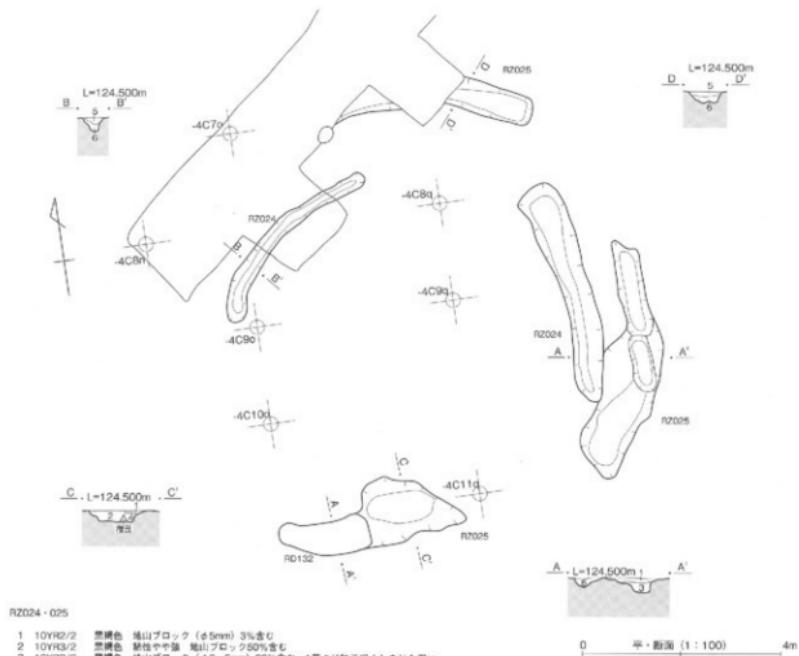


図37 図 RZ024・025

〈出土状況〉重複する東側周溝で土師器片45gと陶磁器1点、R Z025周溝内から土師器片22gが出土している。東側周溝では検出面と第1層で出土しており、出土地点からみるといずれもR Z025に帰属すると考えられるが、陶磁器も含まれているため周囲からの混入も考慮する必要がある。

〈掲載遺物〉検出面出土の陶磁器1点を掲載した(158)。瀬戸産の磁器端反碗で、外面に海浜風景文が描かれ、全面に透明釉が施される。土師器についてはいずれも細片で接合しなかつたため図示することができなかつた。

時一期 R Z025の検出面へ堆積土上位で近世陶磁器と土師器が出土している。しかし、後世に混入したものである可能性が高く判断根拠とするには弱いため、具体的な構築・埋没時期については不明である。また、両古墳及びR Z025と重複関係にあるRD132とも堆積土が酷似していることから新旧関係も把握することができなかつた。ただし、古墳が立体構造物であるという点を考慮すると、いずれかの墳丘が削平、あるいは周溝埋没後にもう一方が構築されたと考えられる。規模の点からいえば、先に小型のR Z024が構築されており、それが削平・埋没した後に一回り大きなR Z025が構築されたと考えるのが妥当であるが、先述したように周溝の重複部分が非常に少ないとこれについても判断できなかつた。

R Z026古墳

遺 構（第38図、写真図版23）

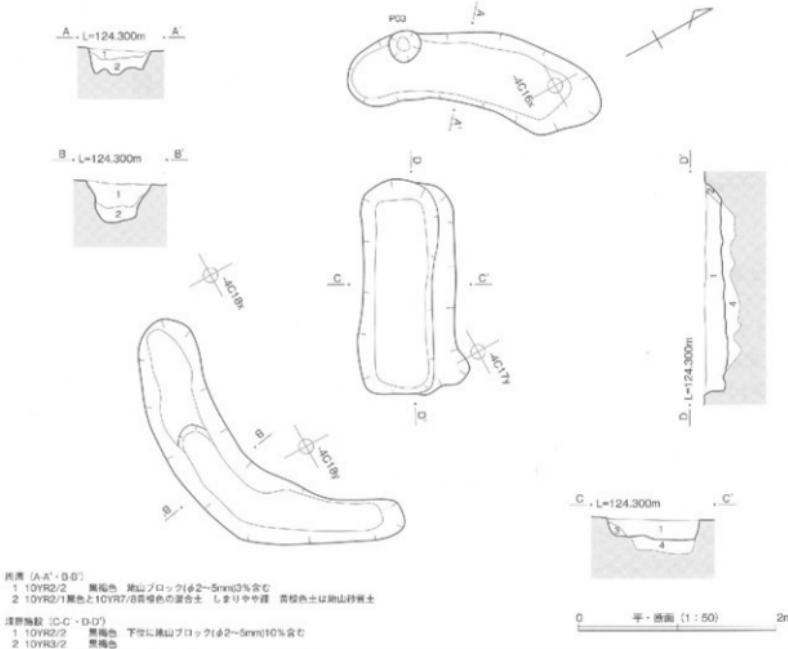
〈位置・検出状況〉 -4 C 16w～-4 C 18y グリッドに位置する。検出面はII層下位である。

〈重複関係〉 北西側周溝とP03が重複関係にある。堆積土は類似しているが、検出状況からP03が新しいと判断した。

〈墳丘・埋葬施設〉 長方形プランの埋葬施設とその周囲を巡る周溝からなる。ただし、II層まで大幅に削平されているため埋葬施設と北西側・南東側周溝しか残存しておらず、墳丘の高さや構築方法は不明である。残存する周溝から推定すると、平面形は円形で、規模は直径約4.30mである。

埋葬施設は北西・南東方向に長軸をとる長方形プランの土坑として検出した。上面規模22×0.94m、底面規模1.95×0.80m、検出面からの深さ0.20mである。主軸方位はN-62°～Wである。上面プランより一回り小型に掘り込み、そのなかに縮まりのある黄橙色土と黒褐色土の混合土を充填して床面を構築している。床面は根搅乱の影響で凹凸もみられるが、基本的には平坦に整えられている。木棺が設置されていたと考えられるが、棺の痕跡を確認することはできなかった。また、副葬品や人骨なども出土していないため、被葬者の性格についても不明である。

〈周溝〉 埋葬施設の北西側と南東側にのみ残存する。両者とも弧状プランであり、上面幅は0.7m前後である。深さは北西側が0.25m前後、南東側が0.40m前後となり南東側のほうが深い。南東側は砂質のIV層まで掘り込んでいるため比較的平坦であるが、北西側は根搅乱と掘り方によって凹凸が



第38図 RZ026

著しい。断面形は逆台形を基調としており、両端とも立ち上がりの角度はほぼ同じである。

〈堆積状況〉 墓葬施設内には黒褐色土が主体となって堆積していた。堆積状況から第2・3層は地山崩落土や流土と考えられるが、第1層は人為堆積の可能性がある。なお、底面は縮まりのある黄橙色と黒褐色の混合土を貼床として用いているが、床面の硬化は認められなかった。

周溝内は上位に地山ブロックを微量含む黒褐色土、下位に黑色土と地山砂質土(IV層)の混合土が堆積していた。各層ともレンズ状堆積をしていることから自然堆積と考えられる。

出土遺物 なし。

時 期 重複関係からP03より古いと判断できるが、両者とも出土遺物がないため年代は不明である。今回検出した古墳のなかで唯一墓葬施設が検出されているが、副葬品などが全く出土していないため被葬者の性格についての情報を得ることはできなかった。

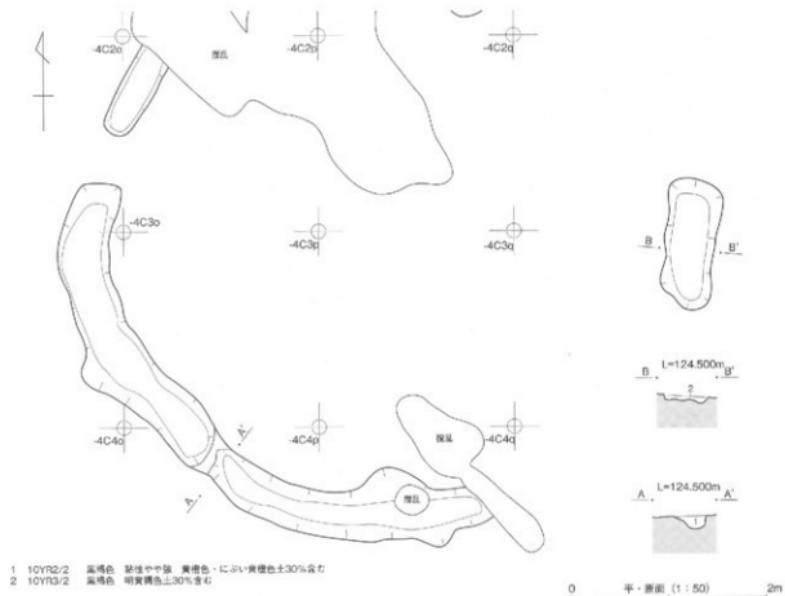
R Z 027古墳

遺 構 (第39図、写真図版29・30)

〈位置・検出状況〉 -4C2o～-4C4qグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、半円形の弧状プランとして検出された。

〈重複関係〉 他遺構との重複はないが、搅乱により墳丘部分・周溝とともに大きく壊されている。

〈墳丘〉 平面形は円形と考えられるが、北西側が大幅に削平されているため規模は不明である。Ⅲ層まで削平が及んでいたため墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。



第39図 RZ027

埋葬施設についても墳丘とともに削平されていたため不明である。

〈周溝〉北西側と南側、東側の周溝が残存している。最も残りの良い南側周溝をみると、上面幅は0.45m前後である。深さは0.30m前後であるが、周溝の中央部（断面Aライン付近）のみ島状に高くなつて深さ0.15mとなる。断面形は漁鉢形であるが、底面は後世の搅乱が著しいため凹凸が多い。なお、東側で検出されたプランについては、南側周溝とは大きく離れているが墳丘推定部分の外縁に位置するため周溝の一部と判断した。現存規模は長さ1.20m、幅0.50m、深さ0.80cmである。

〈堆積状況〉若干色調は異なるものの、ほぼ全域で地山崩落土と考えられる黄模～黄褐色土を含む黒褐色土が堆積していた。非常に浅いため堆積の由来や時期については不明である。

出土遺物 なし。

時 期 出土遺物・重複関係ともにないため詳細は不明である。

R Z028古墳

遺 構（第40図、写真図版24）

〈位置・検出状況〉 -5C22r～-4C2uグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、「C」字状の黒褐色プランとして検出された。

〈重複関係〉周溝南側でP08～11と重複する。柱穴はいずれも周溝掘り下げ中に南壁際で検出しているが、重複関係については不明である。墳丘部分より西側には明治～大正時代に建てられた農業試験場の基礎が残っており、それによって周溝の一部が壊されている。

〈墳丘〉平面形は円形で、現存規模は直径約9.20mである。Ⅲ層まで削平されていたため墳丘は既に消滅しており、農業試験場の基礎跡が全域で確認されている。このような状況であったため、墳丘の高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

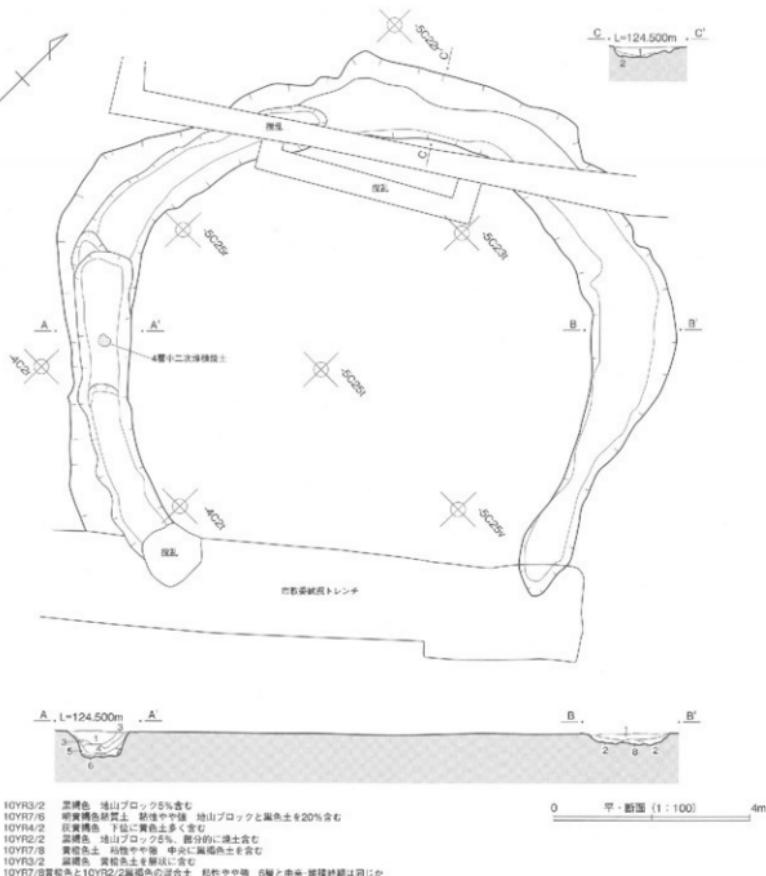
埋葬施設も削平されたものと考えられ、その痕跡を確認することはできなかった。

〈周溝〉南東側が開く「C」字状プランの周溝である。上面幅は0.55～1.75mで、北東側開口部付近のみ幅が狭くなる。削平によって上面が大幅に失われているため断面形は皿形で、深さは0.25m前後である。ただし、周溝南側（断面Aライン付近から東側）は底面をさらに二段に掘り込んでいるため、断面形は逆台形となり深さも0.50m前後となる。底面は二段に掘りこんだ部分は比較的平坦に整えられているが、その他の部分は掘り方のままで搅乱による凹凸が著しい。

〈堆積状況〉上位に黒褐色土、それ以下に黄褐色系の土と黒褐色土が互層となって堆積しており、8層に細分した。各層とも地山崩落土あるいは周辺から流れ込んだ状況であることから自然堆積と考えられる。なお、Aライン東側の第4層上面では焼土が検出されており、当初は周溝埋設途中に火を使つた何らかの行為が行われた痕跡と考えて検出状況の記録と周辺の精査を行つた。しかし、周辺には関連する痕跡が無く、堆積土の土壤洗浄を行つても炭化物などが検出されなかつたことから周辺から流れ込んだ焼土と判断した。

出土遺物 なし。

時 期 出土遺物が皆無であるため詳細は不明である。近代の農業試験場の基礎跡によって壊されており、柱穴とも重複関係にあるが、年代のわかる遺構との重複関係がないため削平された時期についても不明である。



第40図 RZ028

R Z029古墳

遺構（第41図、写真図版29・30）

〈位置・検出状況〉 -4C 2w ~ -4C 5xグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、「C」字状の黒褐色プランとして検出された。

〈重複関係〉 RA041と重複しており、RA041に北側周溝の東端が壊されている。

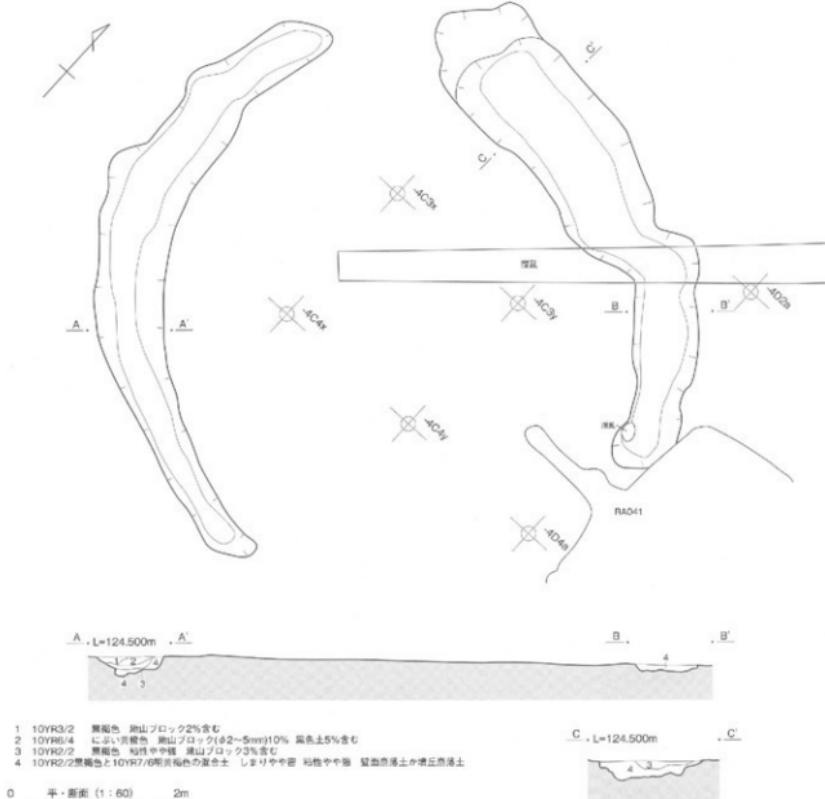
〈墳丘〉 平面形は円形で、周溝の位置関係から推定される規模は直径約5.20mである。Ⅲ層まで削平が及んでいたため墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。埋葬施設についても墳丘とともに削平されていたため不明である。

〈周溝〉 北側と南側に弧状プランの周溝が残存しており、南東側と北西側に開口部を有する。断面形は逆台形を基調とするが、削平の影響で浅い皿形となる部分がある。底面と壁面は掘り方のままであり凹凸が著しく、そのため壁面の立ち上がりも一定ではない。

〈堆積状況〉 黒褐色土主体であり、4層に細分した。堆積状況から第1～3層は周辺からの流土、第4層は縮まりのある混合土であることから墳丘盛土の崩落土の可能性がある。なお、RA041との重複部分について断面観察を行ったところ、本古墳の第4層を切るようにRA041の堆積土が確認された。このことから本古墳→RA041の順で構築されたものと判断した。

出土遺物 なし。

時 期 出土遺物は皆無であるが、奈良時代に属するRA041に切られていることから、奈良時代もしくはそれ以前に構築されたと考えられる。また、RA041の煙道が本古墳の墳丘部分に及んでいることと北側周溝の堆積土を切るようにRA041が掘削されていることから、RA041構築直前には墳丘は消失しており、周溝も埋没していたと考えられる。ただし、墳丘消失の具体的な時期と要



第41図 RZ029

因（人為か自然か）については不明である。

R Z030古墳

遺構（第42・43図、写真図版25）

〈位置・検出状況〉 4D3c～4D7fグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面で、R Z031とともに「C」字状の黒褐色プランが2個連結した状態で検出された。

〈重複関係〉 R Z031、R G057、P14・17・31と重複関係にある。R Z031の周溝内堆積土には本古墳周溝の堆積土にはほとんど含まれない十和田aテフラが混入していたため、検出状態ではR Z031のほうが新しいものと考えられた。しかし、両古墳にまたがる形でベルトを設定して掘り下げたところ、R Z031の周溝内堆積土を切るように本古墳の周溝が掘削されている状況が確認されたことからR Z031→本古墳の順に構築されたものと判断した。なお、R G057、P14・17・31についてはいずれも検出時から周溝を壊している状況が確認されたため本古墳より新しいと判断している。

〈墳丘〉 平面形は隅丸方形に近い円形で、推定規模は750×730mである。Ⅲ層まで削平が及んでいたため墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

また、埋葬施設についても墳丘とともに削平されていたため不明である。

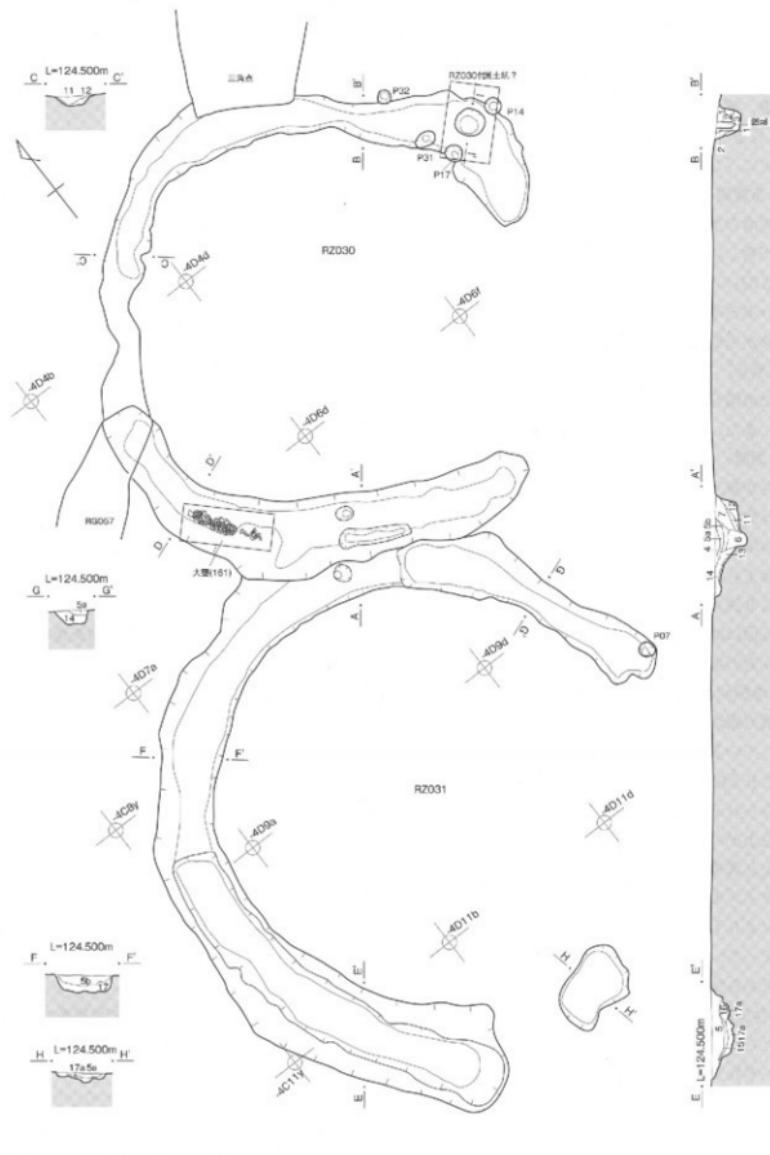
〈周溝〉 南東側が聞く「C」字状プランの周溝である。断面形は逆台形を基調とするが、上面幅や深さが様々であるため地点によって形状が異なる。とくにR Z031との重複部分（断面Aライン付近）は他の部分よりも幅広で深く掘削されているが、これは先述したR Z018とR G056の関係と同様、本古墳構築時にはR Z031の周溝が完全に埋没せずに残っていたために周辺よりも深く掘削したものと考えられる。一方で、周溝西側（断面CラインからR G057との重複部分の間）はもとより他の部分より浅かったと考えられ、底面の掘り方の痕跡が残るのみで壁面の立ち上がりは確認できなかった。底面は断面A・B・Dライン付近は比較的平坦に整えられているが、その他の部分は壁面を含めて掘り方の痕跡が残っており凹凸が著しい。

〈堆積状況〉 重複するR Z031とあわせて17層に細分している。堆積状況から第1～12層までは本古墳の周溝内堆積土であるが、このうち第4・5層は断面Aライン付近で両古墳にまたがるよう堆積しているため本古墳に帰属するかは不明である。とくに第5層は十和田aテフラの割合を抜きにするとR Z031に堆積しているほうが多いが、厳密にはR Z031の周溝内堆積土であり、断面AラインでみられるものはR Z031側から流入した層と考えられる。周溝北側には粘性の強い暗褐色土や灰黄褐色土がみられるが、基本的には黒褐色土主体であり、部分的に墳丘盛土の崩落土と考えられる黒褐色土と黄橙色土の混合土が墳丘側から流れ込んでいる状況が確認できる。なお、後述するように断面Dライン東側では第7層下位～第10・11層上位で須恵器大甕が敷き詰められた状態で出土している。これより下位の層は堆積状況をみると自然堆積と考えられるが、須恵器大甕の周辺のみ若干固く締まっていることから、周溝埋没途中に大甕を使った祭祀などを行っていた可能性がある。ただし、付近からは大甕の破片以外に出土遺物が無いため具体的な状況については不明である。

〈付属施設〉 土坑1基がある。周溝北東隅で第3層掘り下げ時に土器が混入する円形の黒褐色プランとして検出された。平面形は円形で、規模は0.60×0.55m、深さ0.20mである。堆積土は3層に細分でき、いずれも周溝内堆積土と性質は類似している。

出土遺物（第75図、写真図版57）

〈出土状況〉 周溝内全域で土器片が出土しているが、断面Dライン南側で須恵器大甕1個体分(5,360g)、



第42図 RZ030・031



第43図 RZ030 遺物出土状況

周溝南東隅で土師器壺1個体分(172g)、付属土坑検査面で須恵器小型壺1個体分(136g)と地点は偏る。なかでも第7層下位～第10・11層上位で出土した須恵器大甕(161)は、口縁部から底部まで破片が確認されたため当初は周溝内祭祀などに用いられたものが周溝埋没途中で潰れたものと考えた。しかし、詳細に観察すると破片の重なり方や表裏が自然に割れた場合にはなりえない状態であったことから、意図的に破片を敷き詰めるように設置したものと判断した。

〈掲載遺物〉土師器1点、須恵器2点、鉄製品2点を掲載した(159～163)。159は成形にロクロを用いない内面黒色処理壺である。丸底の底部から開きながら立ち上がり、口縁端部は横ナデ調整により尖り気味となる。体部外面中位には沈線状の段が形成されるが、内面にはそれに対応する段は認められない。160は須恵器小型壺である。焼成は良好で、口縁部から肩部にかけて淡緑色に発色した自然釉が付着している。肩部が張る形状で、外面にはロクロナデ調整の後に中位～下位に回転ヘラケズリ調整が施される。口縁部はわずかに直立て受口状となる。底部は切り離しの後に回転ヘラケズリ調整が施され、さらに断面台形の高台が貼り付けられる。161は須恵器大甕である。体部中央や上位に最大径をもち、体部は外外面に叩きによる工具痕が認められる。口縁部は頭部からハの字状に開く形状で、端部はわずかに外方に引き出される。なお、159～161はいずれも焼成後に底部穿孔が行われている。162・163は鉄釘であるが、欠損しているため全形は不明である。

時 期 重複関係からR G057より古くR Z031より新しい古墳と判断できる。なお、出土した土師器壺は8世紀代、付属土坑の上位から出土した須恵器小壺が9世紀代に位置づけられることから9世紀には周溝の埋没は進んでいたと考えられる。

R Z031古墳

遺構（第42図、写真図版26）

〈位置・検出状況〉 -4 D7a～-4 D12bグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、R Z030とともに「C」字状の黒褐色プランが2個連結した状態で検出された。

〈重複関係〉 R Z030と重複関係にある。R Z030の項で記したように、十和田aテフラの混入状況から検出時には本古墳のほうが新しいと考えられたが、周溝内堆積土の切り合いから本古墳のほうが古いと判断した。

〈墳丘〉 平面形は円形で、推定規模は直径約8.20mである。Ⅲ層まで削平が及んでいたため墳丘は既に消滅しており、高さや構築方法などの情報を得ることはできなかった。

埋葬施設についても墳丘とともに削平されていたため不明である。

〈周溝〉 南東側が開く「C」字状プランの周溝である。断面形は断面Fラインより北東側は箱形で、墳丘側の壁面がほぼ垂直に立ち上がる。断面Fラインの2m南側から開口部までは二段に掘り込まれているため北東側よりも幅広で深く掘削されている。なお、この付近も断面形は箱形を基調としているが、壁面の上部が崩落しているためハの字状に開いた形状となっている。なお、開口部付近で検出された土坑状のプラン（断面Hライン付近）については堆積土が類似していたことから周溝の残存部分としたが、周溝の円周上より若干墳丘側に位置することから本古墳の周溝ではない可能性もある。

〈堆積状況〉 R Z030とあわせて17層に細分しているが、このうち本古墳の周溝のみに堆積するのは第13～17層の5層である。R Z030と同じく上位には黒褐色土である第5層が厚く堆積しており、開口部付近では十和田aテフラのブロックが検出されている。第5層より下位は地山ブロックを含む黄褐色土と黒褐色土が堆積している。堆積状況から第14・17層は墳丘盛土の崩落土、第15層は周辺からの流入土と考えられる。

出土遺物 R Z030との重複部分（断面A～Gライン間）から土師器片が1点（4g）出土しているが、細片のため図示できなかった。接合はしなかったが内黒の土師器片であることからR Z030に帰属するものの可能性が高い。

時期 重複関係からR Z030より古い古墳であると判断できるが、出土遺物がほとんどないため具体的な構築時期などは不明である。ただし、本古墳の周溝が完全に埋没する前にR Z030が構築されていることから両者の時期差はそれ程大きくないと考えられる。なお、墳丘の削平時期は不明であるが、堆積土上位に十和田aテフラが若干混入することから平安時代前半には既に埋没が進行していたものと考えられる。

R Z032古墳

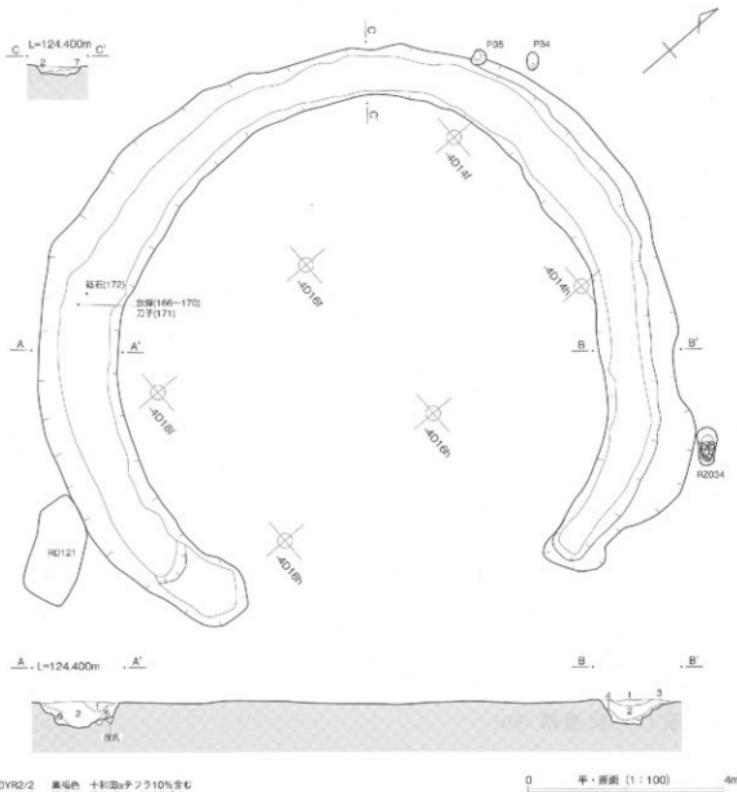
遺構（第44図、写真図版27）

〈位置・検出状況〉 -4 D13e～-4 D19hグリッドに位置する。検出面はⅢ層上面で、「C」字状の黒褐色プランとして検出された。

〈重複関係〉 周溝の南側でR D12l土坑と接しているが、接している部分が非常に少ないと両者とも上面を大幅に削平されていることから新旧関係を把握することはできなかった。

〈墳丘〉 平面形は円形で、推定規模は直径約9.8mである。表土直下で既にⅢ層が露出するという状況であったため墳丘の高まりは全く残存しておらず、高さや構築方法などについては不明である。

埋葬施設についても墳丘とともに削平されたものと考えられ、痕跡は確認できなかった。



- 1 10YR2/2 黒褐色 十和田テフラ10%含む
- 2 10YR2/2 黒褐色 地山ブロック10%含む
- 3 10YR4/3 にじい黄褐色 地山ブロック10%含む
- 4 10YR2/2 黒褐色
- 5 10YR4/2 黄褐色 しりやかな地山ブロック20%含む 全体とてしまり薄い 墓丘崩落土か
- 6 10YR3/2黒褐色と10YR4/2にじい黄褐色の混合土 下部に地山ブロック含む
- 7 10YR7/8 黄褐色 黒褐色土20%含む 墓丘崩落土か

第44図 RZ032

〈周溝〉南東方向が開く「C」字状プランの周溝である。上面幅は残りの良い断面Aライン付近で1.6m、最も狭い断面Cライン付近で0.95mである。検出面からの深さは、A・Bライン付近が0.5mと最も深く、開口部の反対側である断面Cライン付近が0.2mと最も浅い。断面形は逆台形で、墳丘側壁面は垂直気味に立ち上がる。底面には若干握り方の痕跡が残るもの、凹凸は少なく平坦に整えられている。〈堆積状況〉黒褐色土が主体であり、7層に細分した。最上位に十和田テフラブロックを含む黒褐色土（第1層）が薄く堆積しているが、堆積土の大部分は地山ブロックを含む黒褐色土（第2層）である。堆積状況から第4・5・7層は墳丘（盛土）の崩落土、第6層は周辺からの流土と考えられる。なお、第1層は断面Cライン付近では確認されていないが、これは削平によって消失したため

であり、本来は断面A・Bライン付近と同様の堆積状況をしていたと考えられる。

出土遺物（第76図、写真図版58）

〈出土状況〉 土器類は北東側開口部付近で出土した土師器小甕をはじめ、断面B-Cライン間の堆積土上～中位を中心に約450g出土している。その他には断面Aラインの西側、底面より5cmほどの位置で鉄鐸・刀子・砥石がまとめて出土している。鉄鐸と刀子は一塊の鉄滓のような状態で出土したが、取り上げ後に鏽落しを行ったところ6点の鉄製品が鏽着したものであることがわかった。

〈掲載遺物〉 土師器2点、鉄製品6点、石製品2点を掲載した（164～173）。

土師器はいずれも非クロ成形の製品である。164は丸底の壺で、内面にミガキ調整と黒色処理が施される。165は小甕である。体部は内外面ともハケ調整が施され、さらに底部は焼成後に意図的な穿孔が行われている。

鉄製品には鉄鐸と刀子がある。166～169は鉄鐸の本体で、長さ3.5～5.1cm、中央部の直径1.9～2.1cmで、いずれも上端より下端が広がる円錐形をしている。鉄板の厚さは約1mmで、板の合わせ目は166が左上、167・168が右上である。なお、全ての資料についてX線写真撮影を行ったが、上端部に穿孔が施されているものは皆無であった。170は舌と考えられる棒状の鉄製品で、168の内部に鏽着した状態で出土しているが、168よりも長いため全体の半分弱が外にはみ出していた。また、167は外面に刀子と考えられる鉄製品が鏽着していた。171は刀子である。先端部と柄部を欠損しているため全形は不明であるが、関部の造作は刃部・棟側とともに斜闊である。

石製品には砥石と磨石がある。172は凝灰岩製の砥石で、全面に使用痕が認められる。173は砂岩製の磨石で、使用痕は非常に微弱である。

時 期 R D121と接しているが、接点が少ないため新旧関係は不明である。出土した土器類は奈良時代に属するものであるが、堆積土上～中位からの出土であり本古墳に伴うものは検討を要する。なお、周溝底面直上から出土した鉄鐸は型的には8世紀後半に属するものであり、それを考慮すると周溝の埋没は8世紀後半以降と考えられる。

4 陥し穴状遺構 (RD)

今回検出した土坑のうち、平面形が溝状のもの11基を陥し穴状遺構とした。遺物の出土が皆無であるため詳細な年代は不明であるが、いずれも縄文時代に属するものと考えられる。

R D104陥し穴状遺構

遺 構（第45図、写真図版31）

〈位置〉 -3D 8 b グリッドに位置する。〈重複関係〉認められない。

〈規模〉 上端1.20×3.05m、下端0.13×2.65m 〈深さ〉 1.13m

〈長軸方位〉 N-65°-W

〈平面形・横断面形〉 溝形で直線的な形状である。横断面形はV字形である。

〈壁・底面〉 長軸方向の壁はオーバーハングして立ち上がる。底面は平坦である。

〈堆積状況〉 上位は黒色土と黒褐色土のⅡ層起源の地山崩落土、中～下位は黄褐色の砂質土を主体とする。最下部には黒褐色土が認められる。自然堆積である。

出土遺物 なし。

時 期 出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

R D 105陥し穴状遺構

遺構 (第45図、写真図版31)

〈位置〉 - 3D 8 f - 3D 8 g グリッドに位置する。〈重複関係〉認められない。

〈規模〉 上端1.08×3.77m、下端0.05～0.42×3.46m 〈深さ〉 1.24m

〈長軸方位〉 N-50°-W

〈平面形・横断面形〉 溝形で長軸側の両端部が広がる。横断面形はY字形である。

〈壁・底面〉 長軸方向の壁はオーバーハングして立ち上がる。底面はほぼ平坦である。

〈堆積状況〉 上位は黒褐色土と暗褐色土、中～下位は粘性の強いにぶい黄褐色土と褐色土からなる自然堆積である。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

R D 106陥し穴状遺構

遺構 (第45図、写真図版31)

〈位置〉 - 3B12 x - 3B12 y グリッド付近に位置する。〈重複関係〉認められない。

〈規模〉 上端0.34×2.57m、下端0.09×2.62m 〈深さ〉 0.56m

〈長軸方位〉 N-50°-E

〈平面形・横断面形〉 溝形で直線的な形状である。横断面形はV字形である。

〈壁・底面〉 いずれの壁も直立気味に立ち上がる。底面は礫層まで掘り込まれ、ほぼ平坦である。

〈堆積状況〉 遺構上部は深く削られているが、上～中位は黒褐色土、下位は黑色土と地山崩落土から構成される。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

R D 107陥し穴状遺構

遺構 (第45図、写真図版31)

〈位置〉 - 3C 4 a - 3C 4 b グリッド付近に位置する。〈重複関係〉認められない。

〈規模〉 上端0.60～0.76×2.72m、下端0.16～0.57×2.44m 〈深さ〉 1.20m

〈長軸方位〉 N-54°-W

〈平面形・横断面形〉 溝形で長軸側の両端部が広がる。横断面形はY字形で、最下部で広がる

〈壁・底面〉 長軸方向の壁は緩く外傾して立ち上がる。底面にも緩い凹凸がある。

〈堆積状況〉 上位は黒褐色土と暗褐色土、中位は暗褐色土、下位は黒褐色土と褐色の地山崩落土からなる。最下部には粗砂の堆積（崩落？）が見られるが、底面との境は不明瞭であった。

出土遺物 なし。

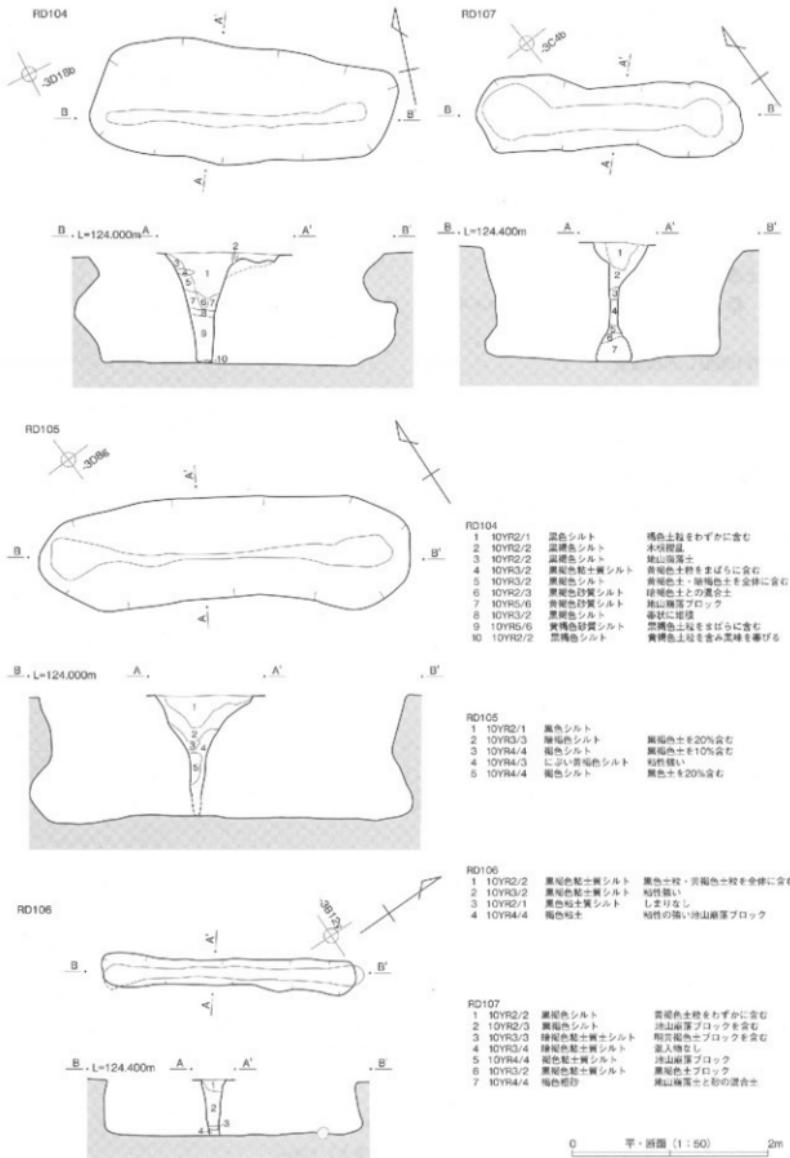
時期 出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

R D 108陥し穴状遺構

遺構 (第46図、写真図版32)

〈位置〉 - 3C 2 a - 3C 2 b グリッド付近に位置する。〈重複関係〉認められない。

〈規模〉 上端0.67×2.75m、下端0.08～0.22×2.73m 〈深さ〉 1.20m



第45図 RD104 ~ 107

〈長軸方位〉 N-11°-E

〈平面形・横断面形〉 溝形で長軸側の両端はわずかに広がる。横断面形はY字形で、最下部で広がる。

〈壁・底面〉 長軸方向の壁は緩く外傾して立ち上がる。底面にも緩い凹凸がある。

〈堆積状況〉 上位は黒褐色土と暗褐色土、中位は黄褐色土粒を含む暗褐色土、下位は黒褐色土と褐色の地山崩落土からなる。最下部には粗砂の堆積（崩落？）が見られるが、壁・底面との境はいずれも不明瞭であった。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

R D109陥し穴状遺構

遺構（第46図、写真図版32）

〈位置〉 -3B9s・-3B9tグリッド付近に位置する。

〈重複関係〉 R G056と北側で重複する。本遺構の方が古い。

〈規模〉 上端0.56×3.93m、下端0.09～0.67×3.84m 〈深さ〉 0.95m

〈長軸方位〉 N-30°-W

〈平面形・横断面形〉 溝形で長軸側の両端は大きく広がる。横断面形はV字形である。

〈壁・底面〉 長軸方向の壁はわずかにオーバーハングして立ち上がる。底面は中央部に段差を有する。

〈堆積状況〉 上位は褐色土と黒褐色土、中位は暗褐色土、下位は黒褐色土と最下部に砂混じりの褐色土が堆積している。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

R D110陥し穴状遺構

遺構（第46図、写真図版32）

〈位置〉 -3B11m・-3B11nグリッドに跨る。〈重複関係〉認められない。

〈規模〉 上端0.34×2.94m、下端0.07～0.26×2.74m 〈深さ〉 0.52m

〈長軸方位〉 N-41°-W

〈平面形・横断面形〉 溝形で長軸側の両端はわずかに広がる。横断面形はY字形である。

〈壁・底面〉 長軸方向の壁は緩やかに外傾して立ち上がる。底面は大きく波打つ。

〈堆積状況〉 上位は褐色土と暗褐色土、中位は褐色土、下位は褐色の地山崩落ブロックからなる自然堆積層である。遺構の上部は削られている。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

(濱田)

R D111陥し穴状遺構

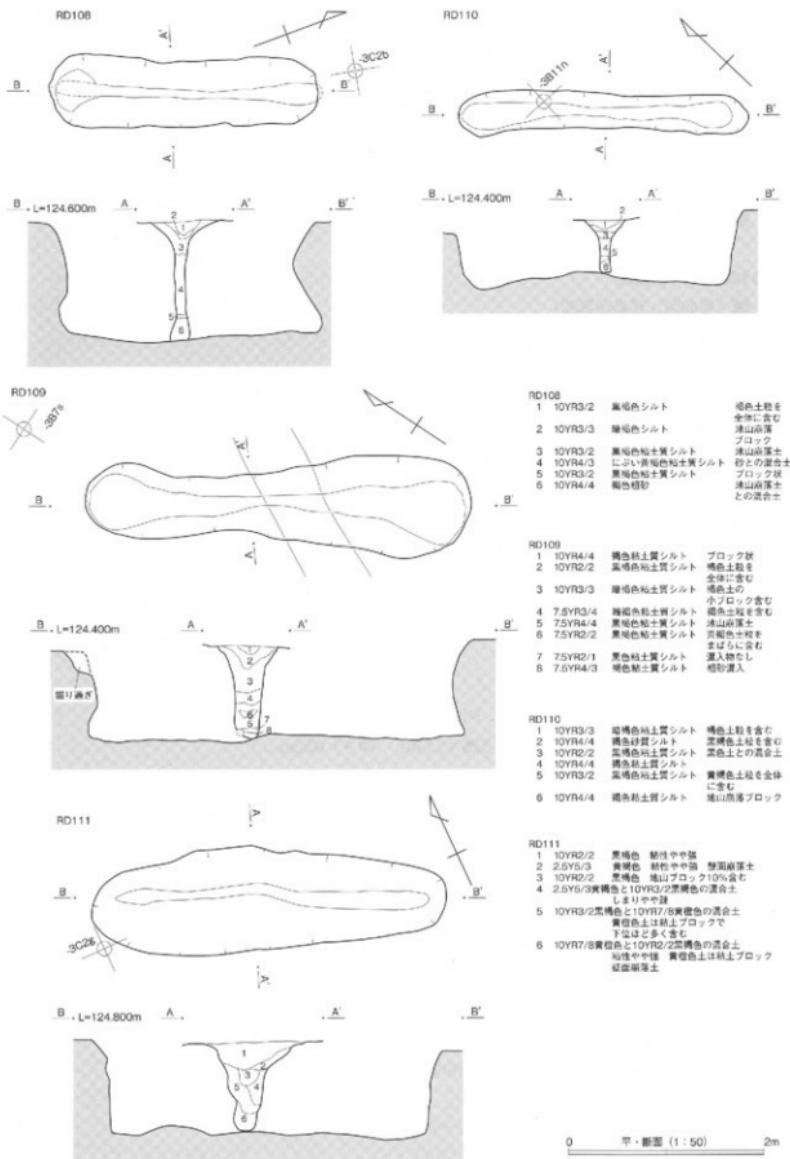
遺構（第46図、写真図版32）

〈位置〉 -3C2gグリッドに位置する。検出面はR A037と同じくⅢ層上面である。

〈重複関係〉認められない。

〈規模〉 上端0.70～1.06×3.60m、下端0.10～0.20×3.30m 〈深さ〉 0.90m

〈長軸方位〉 N-65°-W



第46図 RD108 ~ 111

〈平面形・横断面形〉溝形で直線的な形状をしている。横断面形はV字形で、上部は崩落のためハの字状に広がる。

〈壁・底面〉長軸方向の壁は底面から垂直に立ち上がるが、上部は崩落のためハの字状に広がる。底面はほぼ平坦である。

〈堆積状況〉上位は黒褐色土で周辺からの流土と壁面崩落土、下位は黄橙色土と黒褐色土の混合土で構成される。堆積状況をみると、北西から南東に向かって三角形状に堆積していることから、おそらく自然堆積と考えられる。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

R D112陥し穴状遺構

遺構 (第47図、写真図版33)

〈位置〉 -4 C14mグリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。〈重複関係〉認められない。

〈規模〉上端0.80×3.40m、下端0.08～0.36×3.08m 〈深さ〉1.05m前後

〈長軸方位〉N-68°-W

〈平面形・横断面形〉溝形で長軸側の両端はわずかに広がる。横断面形はY字形で、最下部が広がる。

〈壁・底面〉長軸方向の壁は底面から垂直に立ち上がるが、上部は崩落のためハの字状に広がる。底面はわずかに凹凸がみられるが、おおむね平坦である。

〈堆積状況〉上位には周辺からの流土である黒褐色土、中位以下は黄橙色土と黒褐色土が互層になって堆積している。壁面崩落土と考えられる第2層は南側、その他の層は北西側から流れ込んでいることから自然堆積と考えられる。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

R D113陥し穴状遺構

遺構 (第47図、写真図版33)

〈位置〉 -4 C22lグリッドに位置する。

〈重複関係〉RG056溝と東側で重複し、RG056に上面を一部壊されている。

〈規模〉上端0.56×2.52m、下端0.05～0.18×2.30m 〈深さ〉0.96m

〈長軸方位〉N-40°-W

〈平面形・横断面形〉溝形で直線的な形状をしている。横断面形はV字形である。

〈壁・底面〉長軸方向の壁は直立するが、北西側の底面は緩やかに立ち上がる。北西側の上面は崩落によって若干ハの字状になっているが、南東側はRG056構築の際に崩落部分が削平されている。底面は中央部に段差があり、北西側が高くなっている。

〈堆積状況〉第1層以外は壁面崩落土または崩落土を含む黄褐色～黄橙色系の粘質土である。最下部には黄橙色砂質土が堆積しており、壁面との境界は不明瞭であった。堆積土の状況を見ると、西から東へレンズ状に堆積していることから、自然堆積と考えられる。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

R D114陥し穴状遺構

遺構（第47図、写真図版33）

〈位置〉 - 4 C19 h グリッド付近に位置する。

〈重複関係〉 RZ020古墳と重複し、RZ020の周溝に上面を破壊されている。

〈規模〉 上端0.40～0.50×2.80m、下端0.05～0.30×2.65m 〈深さ〉 1.00m

〈長軸方位〉 N-18°-W

〈平面形・横断面形〉 溝形で直線的な形状をしている。断面形はV字形で、底面は非常に狭い。

〈壁・底面〉 長軸方向の壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部はわずかに崩落している。底面はほぼ平坦であるが、北から南に向かって若干傾斜している。

〈堆積状況〉 上位が黒褐色土、下位層ほど黄褐色土が多くなる。底面付近には壁面崩落土である黄橙色粘質土が堆積しており、壁面との境界は不明瞭であった。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、縄文時代に属する遺構と思われる。

(村田)

5 土坑・墓坑(RD)

今回検出した土坑のうち、陥し穴状遺構としたもの以外を土坑とした。また、このなかでも平面形や堆積状況から7基を墓坑とした。

R D115土坑

遺構（第48図、写真図版33）

〈位置・検出状況〉 - 3 D11 1～- 3 D11 m グリッドに位置する。Ⅲ層で黒色土の広がりを検出した。

〈重複関係〉 認められない。

〈平面規模〉 上面2.43×1.08m、底面2.0×0.8m 〈深さ〉 0.4m

〈長軸方位〉 N-45°-W

〈平面形・横断面形〉 長方形・逆台形状

〈壁・底面〉 壁はいずれも緩く外傾して立ち上がる。底面は細かな凹凸が認められる。

〈堆積状況〉 全体に黒色土を基調とし、最下部には7cm前後の褐色土が堆積する。その状況は人為的に埋め戻された様子ではない。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物がなく詳細な時期は不明だが、形状から古代に属する墓坑の可能性がある。

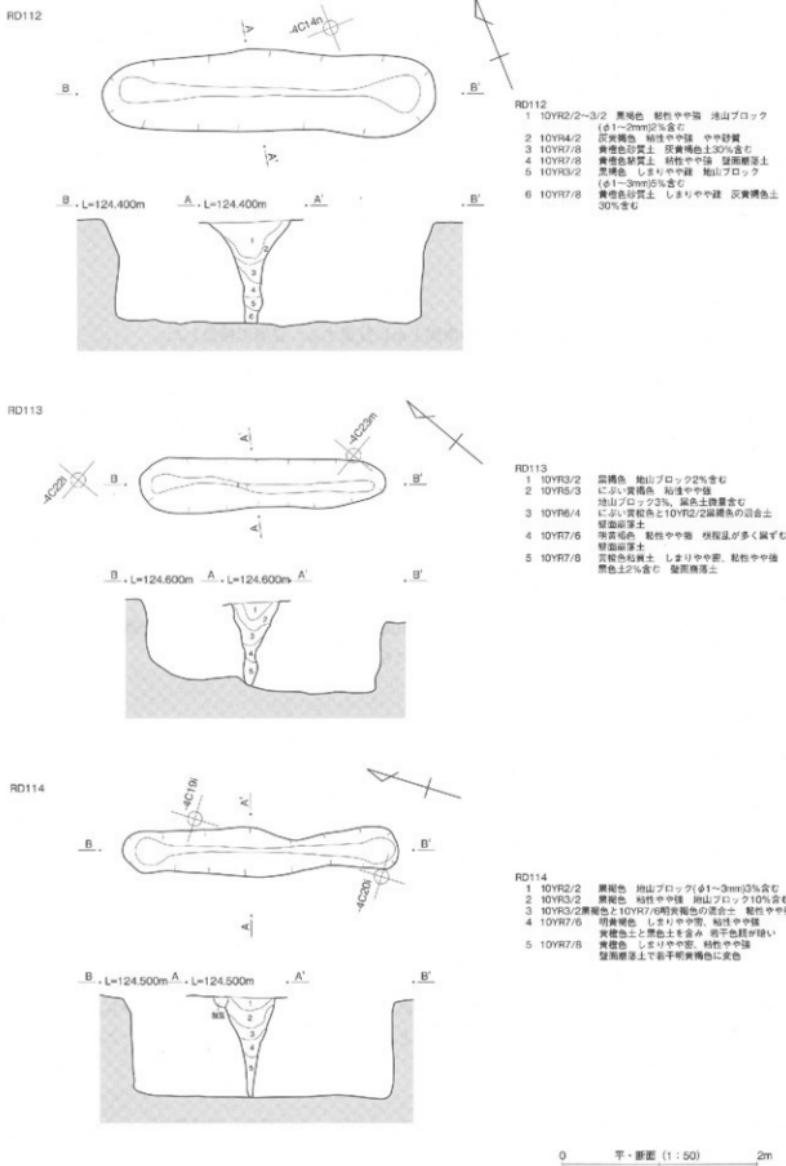
R D116土坑

遺構（第48図、写真図版34）

〈位置・検出状況〉 - 4 D21 k グリッド杭付近に位置する。Ⅲ層上面で灰白色火山灰を含む白みのある黒褐色土の広がりで検出した。

〈重複関係〉 R Z014古墳とその西側で重複している。検出した段階では本遺構のほうが新しく見えたが、断面観察の結果は逆であった。したがって本遺構はR Z014よりも古いと判断できる。

〈平面規模〉 上面2.23×0.70m、底面1.91×0.52m 〈深さ〉 0.43m



第47図 RD112 ~ 114

〈長軸方位〉 N-9° - W

〈平面形・横断面形〉 平面形・横断面形とも長方形である。

〈壁・底面〉 壁はいずれも直立して立ち上がる。底面は中央部がわずかに盛り上がり、長軸方向の端部には幅17cm、長さ45cm、深さ10cmあまりの長方形の小孔を有する。

〈堆積状況〉 上位は黒～黒褐色土、中位は黒色土を含む暗褐色土、下位は黄褐色土と暗褐色土の混合土からなる。少なくとも中位以下は人為的に埋め戻されている。

出土遺物 なし。

時期 形状と遺構が人為的に埋め戻されていることから、古代の墓坑と考えられる。

R D117土坑

遺構（第48図、写真図版34）

〈位置・検出状況〉 -4 C23 n グリッド杭の南側1mに位置する。Ⅲ層で検出した。

〈重複関係〉 R G056と重複し、R G056に南東側約1/3を壊されている。

〈平面規模〉 上面 ? × 1.95m前後、底面 ? × 1.71m 〈深さ〉 0.23m

〈長軸方位〉 N-65° - W

〈平面形・横断面形〉 南東側をR G056に壊されているため全形は不明であるが、平面形は長方形と考えられる。横断面形は残存する東壁の状況から逆台形と考えられる。

〈壁・底面〉 壁は直立ぎみに立ち上がり、底面は長軸方向の北西側に緩く下がる。全体に波打つ。

〈堆積状況〉 上～中位は黒色土、下位は粘土質の暗褐色土からなる。水平に堆積しているが、埋め戻されているか否かの判別はできない。

出土遺物 なし。

時期 形状から墓坑と判断した。堆積土に十和田aテフラ（灰白色火山灰）を含む溝跡（R G056）に切られることから、10世紀前半以前に構築されたものと考えられる。

（濱田）

R D118土坑

遺構（第48図、写真図版34）

〈位置・検出状況〉 -4 C22 v グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。

〈重複関係〉 認められない。

〈平面規模〉 上面1.58×0.50m、底面1.4×0.35m 〈深さ〉 0.60m

〈長軸方位〉 N-62° - E

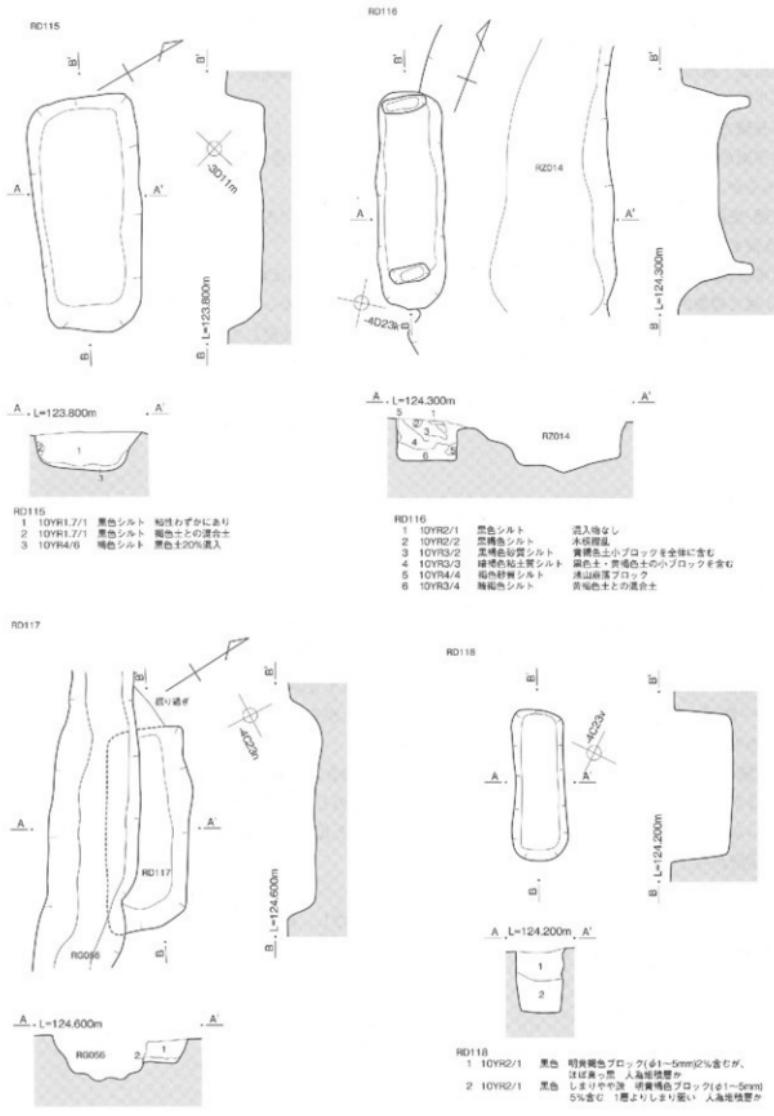
〈平面形・横断面形〉 平面形は長方形で、コーナー部は若干丸みをもつ。横断面形は箱形で、壁面は崩落も無くほぼ垂直に立ち上がる。

〈壁・底面〉 長軸方向の壁は垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

〈堆積状況〉 黒色土が堆積しており、縞まりの程度により2層に分離した。ただし、若干混和物が異なるのみであることから、本来は同一由来・性質のものと考えられる。第2層は北側から流れ込んだようにもみえるが、他の自然堆積した遺構の状況と比較しても不自然な印象を受ける。これらの状況から、人為的に埋め戻した土の可能性もある。

出土遺物 なし。

時期 形状的には木棺を納めた墓坑と考えられる。ただし、出土遺物、重複関係とともに無いため詳細な年代は不明である。



第48図 RD115～118

0 平・断面 (1 : 50) 2m

R D119土坑

遺構（第49図、写真図版34）

〈位置・検出状況〉 -4 C 13mグリッド付近に位置する。〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面2.20×0.80m、底面1.90×0.50m 〈深さ〉0.35m

〈長軸方位〉N-35°-W

〈平面形・横断面形〉平面形は長方形で、壁面に沿って幅10cm前後の周溝が巡る。横断面形は箱形であるが、周溝部分のみ深くなっている。

〈壁・底面〉壁面は4面とも垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、周溝の深さは一定ではなく、底面も凹凸が多い。

〈堆積状況〉堆積土は4層に細分した。堆積状況から第1～3層は東側からの流土と考えられる。第4層と周溝内堆積土との境界は不明瞭であったため分層できなかった。ただし、混和物の割合などはほとんど変わらないことから、周溝から底面直上まで一度に埋め戻している可能性もある。

出土遺物 なし。

時期 形状的には木棺を納めた墓坑と考えられる。ただし、出土遺物、重複関係とともに無いため詳細な年代は不明である。仮に墓坑であるとすると、底面を巡る周溝は棺を据える為の施設と考えられる。

R D120土坑

遺構（第49図、写真図版35）

〈位置・検出状況〉 -4 C 5 t グリッドに位置する。Ⅲ層上面で検出した。

〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面1.92×0.60m前後、底面1.80×0.45m 〈深さ〉0.32m

〈長軸方位〉N-16°-W

〈平面形・横断面形〉平面形は長方形で、コーナー部は若干丸みをもつ。横断面形は箱形である。

〈壁・底面〉長軸方向の壁は底面から丸みをもって立ち上がる。底面には根撲乱による小穴が数ヶ所認められるが、全体としては平坦である。

〈堆積状況〉黒褐色土が堆積しており、粘性と混和物の割合から2層に細分した。ただし、両層の境界は不明瞭であることから、本来は同一山來・性質のものと考えられる。第2層はレンズ状に堆積しているようにもみえるが、他の自然堆積した遺構の状況と比較しても不自然な印象を受ける。これらの状況から、人為的に埋め戻した土の可能性もある。

出土遺物 なし。

時期 形状的には木棺を納めた墓坑と考えられる。ただし、出土遺物、重複関係とともに無いため詳細な年代は不明である。

R D121土坑

遺構 (第49図、写真図版35)

〈位置・検出状況〉 - 4 D19 f グリッドに位置する。検出面は R Z032古墳と同じくⅢ層である。

〈重複関係〉 R Z032古墳の南側周溝に接しているが、両者とも上面を大幅に削平されているため平面的には新旧関係を把握することはできなかった。

〈平面規模〉 上面2.12×0.96m、底面1.50×0.76m 〈深さ〉 0.28m

〈長軸方位〉 N-34°-W

〈平面形・横断面形〉 上面は長方形を基調としているが、北西壁中央が外方へ向かって突出しているため長五角形状となっている。横断面形は左右非対称の台形状で、南西壁は外方に開き、北東壁はほぼ垂直に立ち上がる。

〈壁・底面〉 長軸方向の壁面は大きく外方に開きながら立ち上がる。また、底面も平坦であるため、断面形は浅い皿形に近い逆台形となる。

〈堆積状況〉 黒褐色土の單層である。性質的には R Z032古墳の第2層とはほぼ同じである。人為的に埋め立てた土の可能性もあるが、上面を大幅に削平されているため断定はできない。

出土遺物 1部器片が7.3g出土しているが、網片のため図示できなかった。

時期 出土遺物が乏しく、重複関係も無いため詳細な年代は不明である。底面の造作と堆積状況、古墳周溝に接していることを考慮すると、古墳に伴う從属埋葬用の墓坑の可能性が高いが、平面形や長軸断面形などが他の墓坑と異なっている。

(村田)

R D122土坑

遺構 (第49図、写真図版35)

〈位置・検出状況〉 - 3 C14 b グリッド杭付近にある。Ⅲ層で陥し穴状遺構として検出した。

〈重複関係〉 認められない。

〈規模〉 開口部径0.20～0.46×5.00m、底部径0.05～0.35×4.87m 〈深さ〉 0.17m

〈長軸方位〉 N-13°-E

〈平面形・横断面形〉 溝形・逆台形

〈壁・底面〉 壁は外傾して立ち上がる。底面は全体に大きく波打っている。

〈堆積状況〉 3層に分層した。黒～黒褐色土、褐色土からなる。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物、重複関係ともにないため詳細な年代は不明である。なお、検出されたプランから当初は陥し穴状遺構としていたが、他の陥し穴状遺構と比べて非常に浅く、一方で長軸方向の長さが1.5倍近くあることから土坑に変更して報告した。

(浜田)

R D123土坑

遺構 (第49図、写真図版35)

〈位置・検出状況〉 - 3 C 1 m グリッドに位置する。Ⅲ層で検出した。

〈重複関係〉 R D124と重複関係にあり、本遺構がRD124の一部を壊している。

〈平面規模〉 開口部径1.45×1.30m、底部径1.05×1.02m 〈深さ〉 0.28m

〈形状〉 平面形はほぼ正方形で、コーナー部が丸みをもつ隅丸方形である。横断面形は逆台形である。底面はほぼ平坦であり、重複する R D124より深く掘り下げられている。

〈堆積状況〉周辺からの流土である黒褐色土、壁面崩落土である黄橙色土と褐色土で構成される。

出土遺物 なし。

時期 重複関係から平安時代に属するR D124より新しく、平安時代以降に掘削された遺構と考えられる。

R D124土坑

遺構 (第49図、写真図版36)

〈位置・検出状況〉 -3 C 11～nグリッドに位置する。Ⅲ層で検出した。

〈重複関係〉 R D123土坑と重複し、R D124に西側の一部を壊されている。

〈平面規模〉 上面0.5～0.8×4.55m、底面0.2～0.5×3.85m 〈深さ〉 0.15m

〈長軸方位〉 N-91°-E

〈形状〉 平面形は溝形で、中央がわずかに膨らんでいるがほぼ直線的に東西方向に延びる。東側に向かうにつれて徐々に浅くなっている、東端は一段高くなっている。横断面形は逆台形と考えられるが、根摺乱の影響があり底面・壁面ともに凹凸が多い。

〈堆積状況〉 地山崩落土である黄橙色土を含む黒褐色土が単層で堆積する。重複するR D123の堆積土とは黄橙色土の混入割合が大きく異なるため、分層は比較的容易であった。

出土遺物 (第76図、写真図版58)

中央から東寄りの堆積土中から土師器が62g出土しており、2点を掲載した(174・175)。174はロクロ成形の坏である。体部は丸みをもって立ち上がり、口縁部は外方に開く。口縁部付近は横ナデ、外面下半から底部にかけてケズリ調整が施される。また、内面にはミガキ調整と黑色処理が施される。175もロクロ成形の坏である。口縁部は横ナデ調整によってわずかに外方に開く。内面にはミガキ調整と黒色処理が施される。なお、読み取ることはできなかったが、外面には墨書きの痕跡が認められる。

時期 出土した土師器がいずれも平安時代(9世紀後半)に属するものであることから、本遺構の掘削年代も同様と考えたい。

R D125土坑

遺構 (第50図、写真図版38)

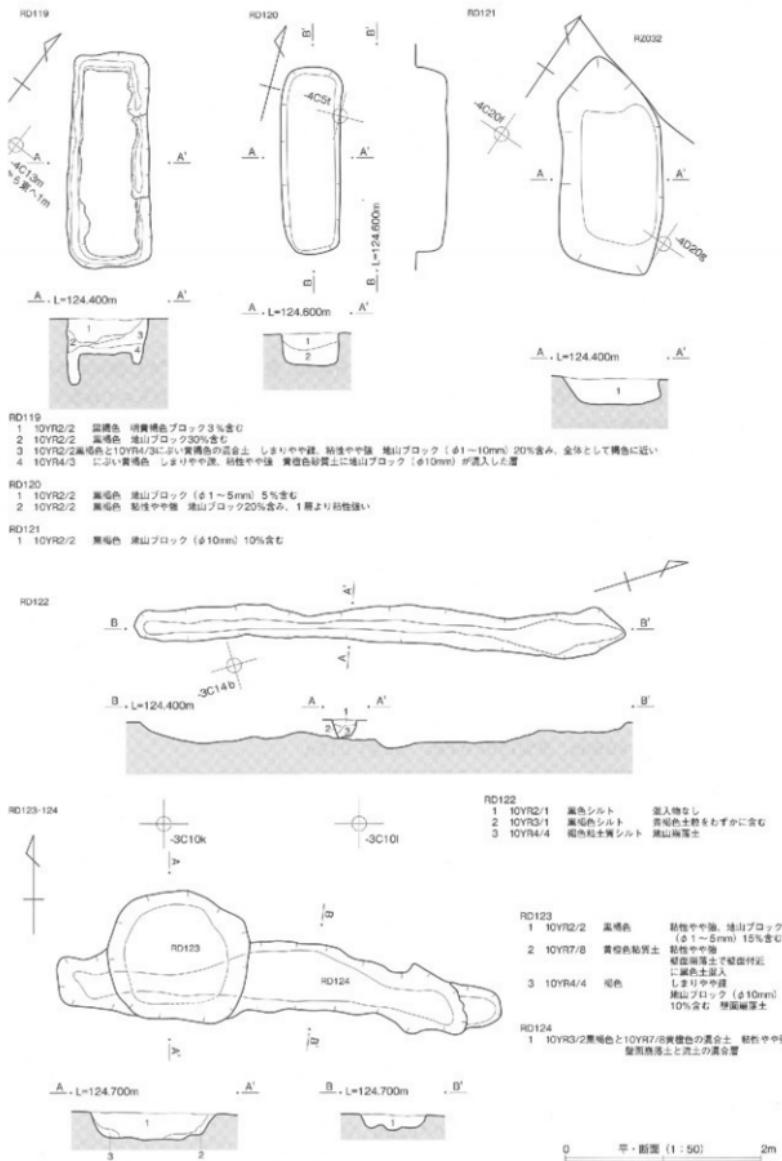
〈位置・検出状況〉 -4 C 25mグリッドに位置する。検出面はⅢ層で、黒色の方形プランとして検出した。

〈重複関係〉 認められない。

〈規模〉 上面1.30×0.90m、底面0.95×0.50m 〈深さ〉 0.18m

〈形状〉 平面形は上面が長方形で、コーナー部は若干丸みをもつ。底面も長方形を基調とするが、北東壁中央に土橋状の張り出しがあるため「門」字状となる。断面形は不整形で、根摺乱の影響もあるが底面の深さは一定ではなく、壁面の立ち上がりも緩やかであることから人為的な掘り込みではない可能性もある。

〈堆積状況〉 炭化物を多量に含む黒色土が主体となって堆積している。ただし、堆積土および遺構の周辺に焼土は確認されていないことから、炭化物は本遺構内で生成されたものではないと考えられる。なお、材としての形状を保っているものは無いため樹種同定を行うことはできなかった。そのため炭



第49図 RD119～124

化物が堆積した契機や年代についても明らかにすることはできなかった。

出土遺物（第76図、写真図版58）

須恵器壺の破片が1点出土している（176）。底部破片で内外面にロクロナデ調整が施される。

時期 出土した須恵器壺から平安時代に属すると思われる。ただし、人為的な掘り込みではないとすれば、単に窪地を利用した炭化物の廃棄場所であった可能性もある。

R D126土坑

遺構（第50図、写真図版36）

〈位置・検出状況〉 -4 C21 s グリッド付近に位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面2.55×0.85m、底面2.35×0.47m 〈深さ〉0.40m

〈長軸方位〉N-48°-W

〈形状〉平面形は長楕円形で、上面は所々に根搅乱が認められる。底面中央はわずかに窪んでいるが、この付近は堆積土中から根が多く認められたことから、人為的に二段に掘り込んだものではなく、根の侵食によって窪地状になったものと考えられる。断面形は逆台形で、若干崩落しているため上部は広がっている。

〈堆積状況〉周辺からの流水である黒褐色土と壁面崩落土である褐色土が互層になって堆積する。断面観察のかぎりでは北西側から流れ込んだ自然堆積と考えられる。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

R D127土坑

遺構（第50図、写真図版36）

〈位置・検出状況〉 -4 C20 v グリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面1.98×0.68m、底面1.70×0.40m 〈深さ〉0.17m

〈形状〉平面形は長楕円形で、上面は所々に根搅乱が認められる。底面は平坦であったと考えられるが、根搅乱によって部分的に凹凸がある。断面形は箱形で、崩落により上面は若干広がる。

〈長軸方位〉N-1°-E

〈堆積状況〉黒褐色土を主体とし、下位層は地山崩落土である黄橙色土ブロックを多く含む。上面が削平されているため不明な点も多いが、堆積状況をみると自然堆積と考えられる。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

R D128土坑

遺構（第50図、写真図版37）

〈位置・検出状況〉 -4 C21 x グリッドに付近に位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面2.12×0.34～0.50m、底面1.60×0.22m 〈深さ〉0.22m

〈形状〉平面形は溝形で、上面・底面ともわずかに弧状に屈曲する。底面は平坦であるが、根搅乱に

よって部分的に凹凸がある。断面形は箱形であったと考えられるが、崩落により上面が広がっているためやや不整形である。

〈堆積状況〉 黒褐色土を主体とし、下位は地山崩落土である黄橙色土ブロックを多く含む。上面が削平されているため不明な点も多いが、堆積状況をみるかぎり自然堆積と考えられる。

出土遺物（第76図、写真図版59）

検出面から土師器坏が1点（46g）出土している（177）。非ロクロ成形の土師器坏で、底部脇から外方に立ち上がる。口縁部は横ナデの後にミガキ調整が施される。体部中央は横ナデ調整によって内側に張り出しが、明瞭な段は形成しない。底部は丸底であるが、ケズリ調整の影響で半底風になっている。内面にはミガキ調整と黒色処理が施される。

時 期 出土した土師器坏は古墳時代末～奈良時代初めに位置づけられるものであり、本遺構もその時期に属する可能性があるが、検出面からの出土であるため検討を要する。

R D129土坑

遺 構（第50図、写真図版37）

〈位置・検出状況〉 - 4 C 11x グリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉 認められない。

〈平面規模〉 上面1.00×0.38m、底面0.90×0.28m 〈深さ〉 0.10m前後

〈形状〉 平面形は楕円形で、上面・底面とも中央の幅が若干狭くなっている。底面は平坦であるが、根攪乱によって凹凸が認められる。断面形は箱形であるが、壁面も根攪乱による凹凸があつて不整形である。

〈堆積状況〉 黒褐色土の単層であるが、底面付近は根攪乱によって若干変色している。

出土遺物 なし。

時 期 出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

R D130土坑

遺 構（第50図、写真図版37）

〈位置・検出状況〉 - 4 C 10u グリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉 認められない。

〈平面規模〉 上面0.90×0.48m、底面0.72×0.28m 〈深さ〉 0.29m

〈形状〉 平面形は長方形で、東壁上面は崩落のため若干広がっている。底面は根攪乱の影響が著しく高さは一定ではない。断面形も底面と同じく根攪乱の影響で不整形である。

〈堆積状況〉 上位に黒褐色土、下位に地山崩落土を多く含むにぶい黄褐色土が堆積している。上面が削平されているため不明な点も多いが、堆積状況をみるかぎり自然堆積と考えられる。

出土遺物 なし。

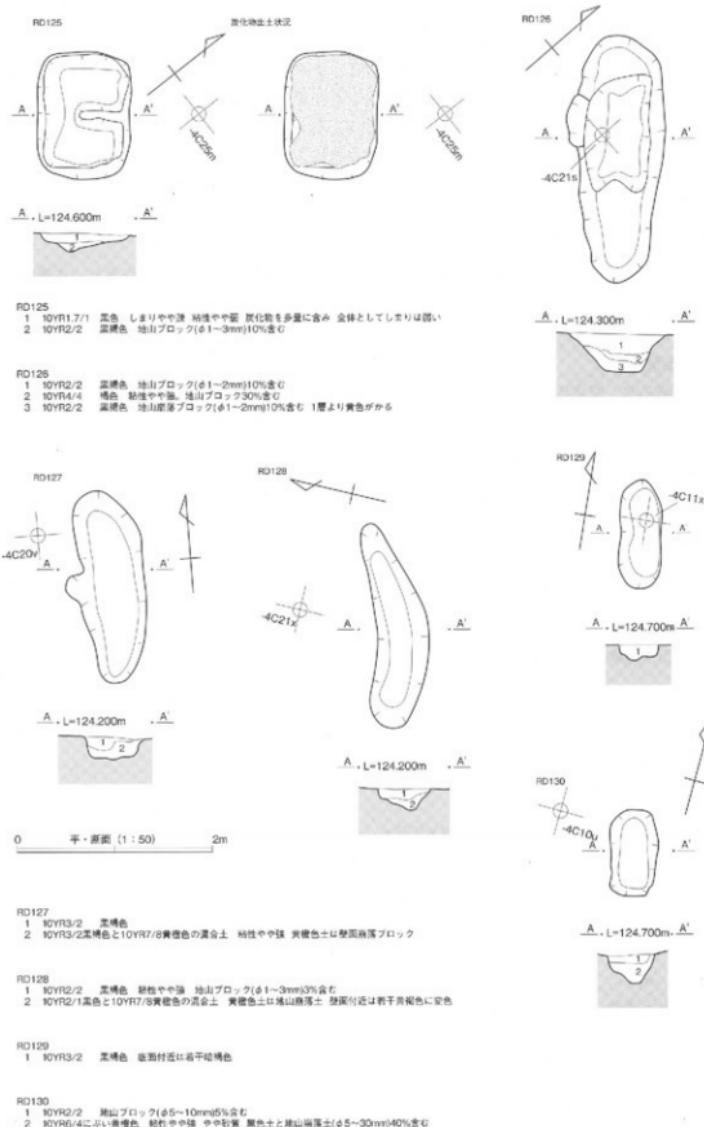
時 期 出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

R D131土坑

遺 構（第51図、写真図版37）

〈位置・検出状況〉 - 4 C 13 p グリッドに位置する。検出面はR Z022と同じくⅢ層である。

〈重複関係〉 R Z022古墳と重複関係にある。検出段階では新旧関係はわからなかったが、R Z022の



第50図 RD125 ~ 130

周溝を掘り下げた結果、周溝内堆積土が本遺構の堆積土を切っている状況が確認されたため、R Z 022の周溝掘削の際に南東側を大幅に削平されたものと判断した。

〈平面規模〉 上面 ? × 1.45m、底面 0.4 × 0.5m 〈深さ〉 0.44m

〈形状〉 南東側を大幅に削平されているため全形は不明であるが、円形もしくは梢円形プランの土坑と考えられる。上面に比べて底面は狭く、下位はほぼ垂直に立ち上がるが、上面は崩落が著しいため断面形は朝顔形となる。

〈堆積状況〉 すべて黒褐色土であり、粘性と混和物の割合で3層に分類している。重複するR Z 022の周溝内堆積土と比較すると黒味が強く、地山ブロックの割合が大きく異なることから分層は比較的容易であった。

出土遺物 なし。

時期 重複関係からR Z 022構築以前には埋没していたものと考えられる。R Z 022が奈良時代に属するものであるため、年代的にはそれより古いと考えられるが、本遺構からの出土遺物が無いため詳細は不明である。壁面の立ち上がりは明瞭であり、人為的に掘り込まれた土坑であるが、その性格については不明である。

R D 132土坑

遺構 (第51図、写真図版38)

〈位置・検出状況〉 - 4 C 11oグリッドに位置する。検出面はR Z 024・025と同じくⅢ層である。

〈重複関係〉 R Z 025古墳の周溝に重なるように検出された。検出段階では周溝と一連のものと判断していたが、掘り下げの結果、周溝とは走行方向が異なっており、深さも異なることから別遺構と判断した。ただし、後述するように堆積土は非常に類似しており、明確に分離することができなかつたため、最後まで新旧関係を把握することができなかつた。

〈平面規模〉 上面 1.8 × 0.45 ~ 0.72m 〈深さ〉 0.38m

〈形状〉 平面形は長方形を基調とするが、上面は西側が狭く弧状になるため不整形である。底面の深さは一定ではなく、東端から西端に向かって高くなっている徐々に消滅する。底面中央には 0.9 × 0.5 m の小土坑が確認されているが、人為的に掘り込まれたものかは不明である。断面形は逆台形と考えられるが、根摺乱の影響で底面・壁面とも凹凸が多くみられる。

〈堆積状況〉 粘性の強い黒褐色土が堆積している。R Z 025古墳の周溝内にも同様の黒褐色土が堆積土しており、断面観察では両者の判別は困難であった。そのため両遺構にまたがる形でトレチを設定して断ち割りを行ったが、新旧関係を把握するには至らなかつた。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物が無いため詳細な年代は不明である。R Z 025との関係についても判然としなかつたが、堆積土の状況から両遺構の埋没時期にそれほどの時間差は無いと考えられる。

R D 133土坑

遺構 (第51図、写真図版38)

〈位置・検出状況〉 - 4 C 2oグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉 認められない。

〈平面規模〉 上面 1.34 × 0.58m、底面 1.0 × 0.32m 〈深さ〉 0.15m

〈形状〉 平面形は長梢円形である。断面形は皿形で、底面はほぼ平坦である。

〈堆積状況〉黒褐色土の単層である。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物、重複関係ともにないため詳細な年代は不明である。

R D134土坑

遺構 (第51図、写真図版38)

〈位置・検出状況〉 - 4 C 2n グリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面1.05×0.40m、底面0.80×0.22m 〈深さ〉0.05m前後

〈形状〉平面形は長楕円形である。上面は大幅に削平されており不明な点が多いが、断面形は皿形、底面はほぼ平坦である。

〈堆積状況〉黒褐色土の単層である。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

R D135土坑

遺構 (第51図、写真図版38)

〈位置・検出状況〉 - 4 D11 h グリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉認められない。

〈平面〉上面2.58×0.60m、底面2.34×0.48m 〈深さ〉0.15m

〈形状〉南北方向に長軸をとる長楕円形プランの土坑で、北端は緩やかに屈曲する。断面形は箱形で、壁面は垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦であるが、根攪乱により若干黒く変色している。

〈堆積状況〉黒褐色土の単層である。

出土遺物 (第76図、写真図版59)

底面付近から土師器小甕の破片が112g出土している。後述する R D140土坑出土の破片と接合関係にあり、ほぼ完形に復元された(178)。破片数としてはR D140からの出土が多いが、出土状況と残存部位を考慮すると本遺構に帰属する遺物と考えられる。非クロ成形の小甕で、体部外面には縱方向、内面には横方向にハケ調整が施される。頭部には明瞭な段が形成され、口縁部は強い横ナデ調整が施されており、端部はほぼ垂直に引き上げられる。底部には切り離し後に再調整が施されているようであるが、磨耗が著しいため工具は不明である。

時期 出土した土師器小甕が奈良時代に位置付けられることから、本遺構もその時期に掘削されたものと考えられる。

R D136土坑

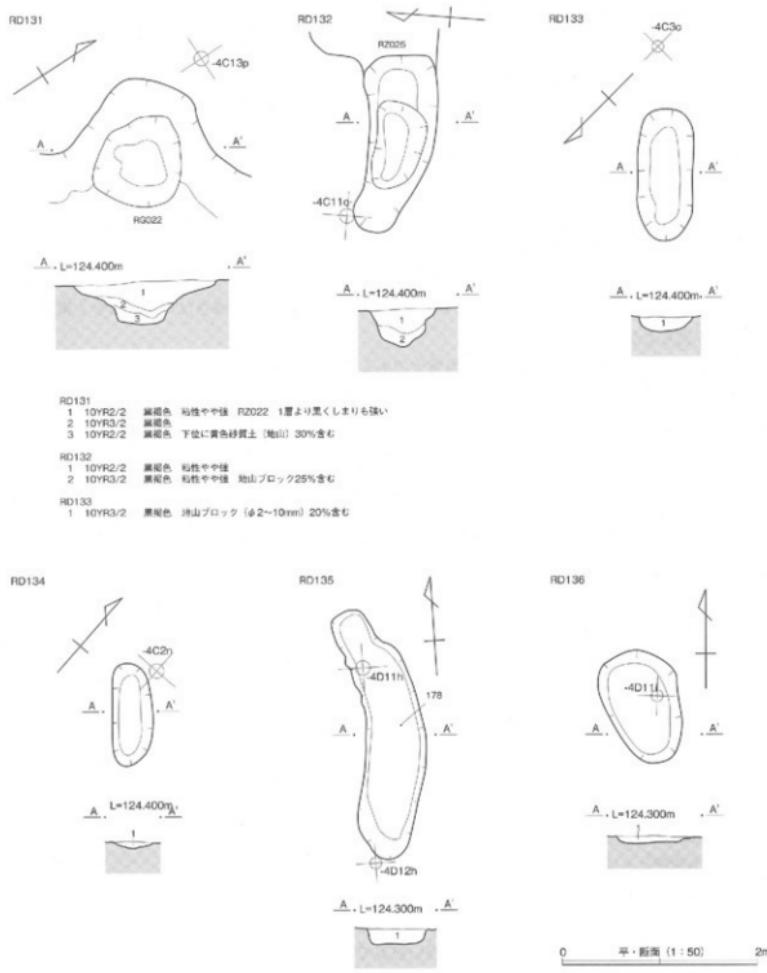
遺構 (第51図、写真図版39)

〈位置・検出状況〉 - 4 D11i グリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面1.20×0.75m、底面0.96×0.54m 〈深さ〉0.08m前後

〈形状〉平面形はほぼ円形に近いプランである。上面を大幅に削平されているため断面形は不明である。底面は若干根攪乱が認められるがおおむね平坦である。



第51図 RD131 ~ 136

〈堆積状況〉 黒褐色土の単層である。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

R D 137土坑

遺構 (第52図、写真図版39)

〈位置・検出状況〉 - 4 D16 j・17 j グリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉 認められない。

〈平面規模〉 上面2.30×0.55～0.75m 〈深さ〉 0.28m

〈形状〉 平面形は長楕円形で、中央が緩やかに屈曲する。南端側は崩落のため広がっている。断面形は逆台形であるが、西壁の崩落が著しいため左右非対称である。底面の深さは一定ではなく東端は段差をもって立ち上がる。

〈堆積状況〉 上位に黒褐色土、下位に地山崩落土である黄橙色土が堆積する。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

R D 138土坑

遺構 (第52図、写真図版39)

〈位置・検出状況〉 - 4 D 18 j グリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉 認められない。

〈平面規模〉 上面2.10×0.65m、底面1.80×0.42m 〈深さ〉 0.15m

〈形状〉 平面形は長楕円形で、北西端が若干屈曲する。断面形は箱形であるが、底面・壁面とも根摺乱により凹凸がみられる。

〈堆積状況〉 地山崩落土ブロックを含む黒褐色土の単層である。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

R D 139土坑

遺構 (第52図、写真図版39)

〈位置・検出状況〉 - 4 D 10 f グリッド付近に位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉 認められない。

〈平面規模〉 上面1.54×0.57m、底面1.20×0.44m 〈深さ〉 0.10m前後

〈形状〉 平面形は長楕円形である。断面形は浅い皿形であるが、底面・断面ともに根摺乱により凹凸がみられる。

〈堆積状況〉 上位に黒褐色土、下位ににびい黄橙色土が堆積する。堆積状況から北側から流れ込んだ自然堆積と考えられる。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。

R D140土坑

遺構 (第52図、写真図版40)

〈位置・検出状況〉 - 4 D12 g グリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面1.50×0.50～1.02m 〈深さ〉0.28m

〈形状〉円形の土坑と不整形の土坑が2基結合した鼓形に近いプランの土坑である。底面西側（円形プラン側）はほぼ平坦であるが、東側（不整形プラン側）は根搅乱も多く一定ではない。壁面の立ち上がりも弱く、外方に開きながら立ち上がる。なお、本的には2基の土坑が重複している可能性があるが、堆積土の状況から判断できなかつたため今回は同一遺構として報告している。

〈堆積状況〉黒褐色土とぶい黄橙色土の混合土で、根搅乱が多いため全体として締まりは弱い。

出土遺物 (第76図、写真図版59)

堆積土上位から土師器小甕の破片が出土している。前述したR D135土坑出土の破片と接合関係にあり、ほぼ完形に復元された（178）。

時期 堆積土上位から奈良時代に属する土師器小甕が出土していることから、奈良時代以降に埋没したものと考えられる。

R D141土坑

遺構 (第53図、写真図版40)

〈位置・検出状況〉 - 4 D10 k グリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉認められない。

〈平面規模〉上面0.72×0.36m、底面0.58×0.23m 〈深さ〉0.08m

〈形状〉平面形は長方形である。断面形は浅い皿形で、根搅乱により凹んでいる部分もあるが、底面はほぼ平坦である。

〈堆積状況〉黒褐色土と地山崩落土である黄橙色粘質土の混合土が堆積している。

出土遺物 (第76図、写真図版59)

底面直上から土師器壺が口縁を伏せた状態で出土した（179）。ロクロ成形の壺で、体部は丸みをもつて立ち上がり、内縫気味に口縁部へと至る。外面はロクロナデ、内面にはミガキ調整と黒色処理が施される。底部はヘラ削り調整によって切り離し痕跡が消されている。器壁は非常に厚く重みがある。

時期 出土した土器から平安時代（9世紀後半代）と考えられる。

R D142土坑

遺構 (第52図、写真図版40)

〈位置・検出状況〉 - 4 D10 f グリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉認められない。

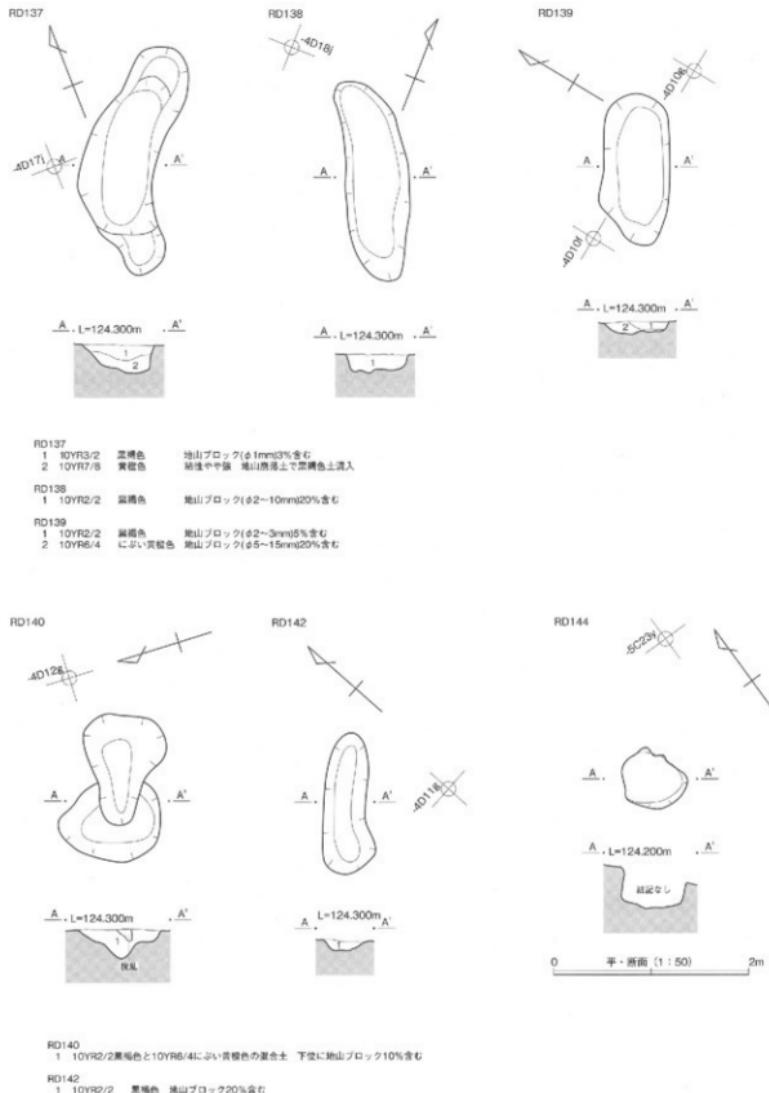
〈平面規模〉上面1.44×0.42m、底面1.08×0.17m 〈深さ〉0.10m

〈形状〉平面形は長楕円形である。断面形は浅い皿形で、根搅乱により凹んでいる部分もあるが、底面はほぼ平坦である。

〈堆積状況〉地山ブロックを含む黒褐色土の単層である。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物、重複関係ともに無いため詳細な年代は不明である。



第52図 RD137 ~ 140 · 142 · 144

R D143土坑

遺構（第53図、写真図版41）

〈位置・検出状況〉 - 4D 2eグリッドに位置する。検出面はⅢ層である。

〈重複関係〉 P43・56と重複関係にあり、いずれも本遺構より新しい。

〈平面規模〉 上面 (1.56×1.20) m、底面 (1.35×1.02) m 〈深さ〉 0.22m〈形状〉 三角点が設置されていたため東側が未調査であるが、検出された範囲をみると平面形は長方形と考えられる。平面形は箱形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦で、西壁付近では焼土の広がりを確認した。焼土は 0.45×0.30 m の範囲に広がっており、被熱深度は浅いが良く焼け縮まっていることから現地性の焼土と考えられる。

〈堆積状況〉 上層が黒褐色土、壁面付近に地山ブロックを含むにぶい黄橙色土が堆積する。焼土の影響もあり底面付近の堆積土には炭化物が混入して若干黒ずんでいる。

出土遺物 なし。

時期 P43・56より新しい遺構といえるが、いずれも出土遺物が無いため詳細な年代は不明である。

規模・形状および焼土の検出状況から古代の小型竪穴遺構もしくは土坑墓の可能性もあるが、全形が不明であることから今回は土坑として報告した。

R D144土坑

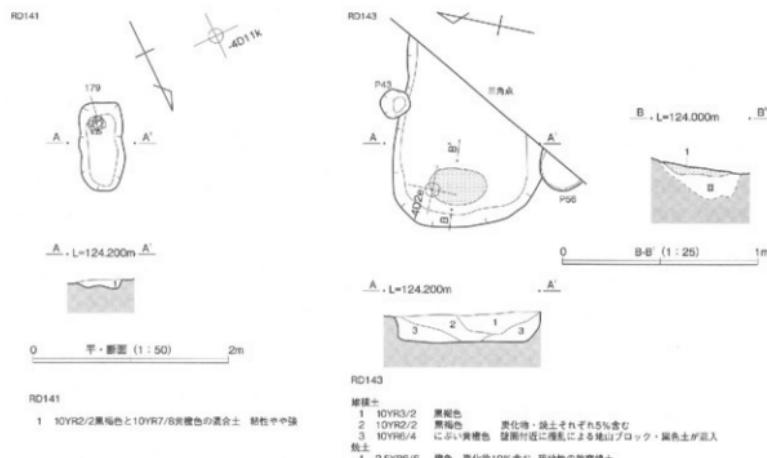
遺構（第52図、写真図版41）

〈位置・検出状況〉 - 5 C23 x グリッドに位置する。R A040の貼床除去中に検出したものであるが、当初は R A040の掘り方として認識しており、完掘後に別遺構であることが判明した。

〈重複関係〉 R A040と重複関係にあり、本遺構埋没後に R A040が構築されている。

〈規模〉 上面 0.65×0.52 m、底面 0.60×0.50 m 〈深さ〉 0.40m

〈形状〉 平面形はほぼ円形である。断面形は箱形で、壁面はほぼ垂直に立ち上がる。底面はほぼ平坦



第53図 RD141・143

であるが、根の影響か部分的に凹凸がある。

〈堆積状況〉 RA040の掘り方の一部として掘り下げを行ったため断面図の作成と写真撮影を行っていない。ただし、掘り下げ途中の状況をみるかぎりではRA040第7層と色調はほぼ同一であった。

出土遺物 なし。

時 期 RA040構築以前の遺構ではあるが、出土遺物が無いため詳細な年代は不明である。

(村田)

6 溝 跡 (RG)

R G032溝

遺 構 (第28・55図、写真図版43・44)

〈位置・検出状況〉 -3Cグリッドから-4Dグリッドへ斜行するように位置する。Ⅲ層上面で黒褐色の溝状プランとして検出された。

〈重複関係〉 RZ014古墳と重複関係にあり、本遺構がRZ014の中央を横切るように構築されている。

〈規模〉 北東-南西方向に走る直線的な溝で、中央付近は削平されているが、第7次調査区分とあわせて約60m検出された。上幅は0.56～1.30mである。

〈深さ〉 0.15～0.20m前後 〈断面形〉 浅い皿形または逆台形

〈堆積状況〉 底面付近や壁面付近には灰黄褐色土と地山崩落土である黄橙色土、上位には周辺からの流土である黒褐色土が堆積していた。

〈性格〉 水が流れた痕跡が認められないことから、古代における何らかの区画溝と思われる。

出土遺物 なし。

時 期 重複関係からRZ014より新しい遺構であると判断できるが、出土遺物に乏しいため詳細は不明である。なお、RZ014と同様、一部は第7次調査区に位置しているため記載内容は第7次調査区分を含んでいる。

R G055溝

遺 構 (第54図、写真図版43・44)

〈位置・検出状況〉 -2B～-3Bグリッドに位置する。Ⅲ層上面で黒褐色の溝状プランとして検出された。

〈重複関係〉 RG056溝と重複関係にあり、本遺構がRG056より新しい。

〈規模〉 東西に走る直線的な溝で、調査区内では37.8m検出された。上幅は0.8m前後である。

〈深さ〉 0.25m前後 〈断面形〉 浅い皿形または逆台形

〈堆積状況〉 黒褐色土主体で4層に細分した。後述するRG056堆積土と性質は類似しているが、十和田aテフラを含まないことから判別は容易であった。堆積要因については明らかではないが、堆積状況から自然に埋没したものと考えられる。

〈性格〉 水が流れた痕跡が認められないことから、古代における何らかの区画溝と思われる。

出土遺物 なし。

時 期 重複関係からRG056溝より新しいと考えられる。RG056は十和田aテフラを堆積土中に含むもので平安時代に属すると考えられることから、本遺構はそれ以後に掘削されたと考えられる。

R G056溝

遺構（第54・55図、写真図版42）

〈位置・検出状況〉調査区南東側に位置する。

〈重複関係〉RG055溝と重複関係にあり、一部をRG055に破壊されている。

〈規模〉五角形に巡る溝で、調査区内では約166m検出された。上幅は0.55～1.20mである。

〈深さ〉0.30～0.50m 〈断面形〉浅い皿形または逆台形

〈堆積状況〉5層に細分した。上位に十和田aテフラを含む黒色土、その直下に二次堆積と考えられる十和田aテフラが薄く層状に堆積する。中～下位は黒褐色土が堆積しており、下位ほど粘性が強くなる。前述の通り古墳（R Z018・022）との重複部分は他の部分より深く掘り込まれており、古墳の周溝内堆積土が流入しているためその他の部分と堆積状況は異なる。なお、R Z018との重複部分のようにどちらの遺構に帰属するか不明な堆積土もあるが、流入方向などからいずれも自然に堆積した層と考えられる。

〈性格〉水が流れた痕跡が認められないことから平安時代に掘削された区画溝と思われる。溝内部にはほぼ同時期（9世紀後半～10世紀初頭）の竪穴住居が検出されており、これらと外部を区画するための施設の可能性はあるが、竪穴住居はわずか4棟のみであることからこれらのみを区画するための溝とするには疑問が残る。しかし、それ以外に同時期と考えられる遺構も検出されていないため、本遺構掘削の目的と用途については不明と言わざるをえない。

出土遺物（第77図、写真図版59）

〈出土状況〉R Z018-020との重複部分と西側部分を中心に土師器518gと須恵器188gが出土している。とくにR Z020との重複部分で多く出土しているが、接合関係からR Z020から流れ込んだと思われる破片が多く、純粹に本遺構内のみで接合したものは少ない。

〈掲載遺物〉8点を掲載した（180～187）。182～184は非黒色処理坏で、内外面ともに回転ナデ調整が施される。185は壺類の底部である。体部外面にはヘラ削り調整が施され、底部基は高台風に引き出される。186は把手である。

時期 重複関係からRG055溝より古く、かつ十和田aテフラを堆積土中に含むことから平安時代前半に掘削されたものと判断できる。

（濱田・村田）

R G057溝

遺構（第56図、写真図版43・44）

〈位置・検出状況〉～4C7yグリッド付近に位置する。検出面はⅢ層上面～Ⅳ層上面である。

〈重複関係〉R Z030古墳と重複関係にあり、R Z030の周溝の一部を破壊している。

〈規模〉北東～南西方向に走る直線的な溝で、走行方向はN-49°-Eである。全長は16.30m、上幅は0.80m前後である。南西側に向かうにつれて浅くなり、南端は自然消滅する。

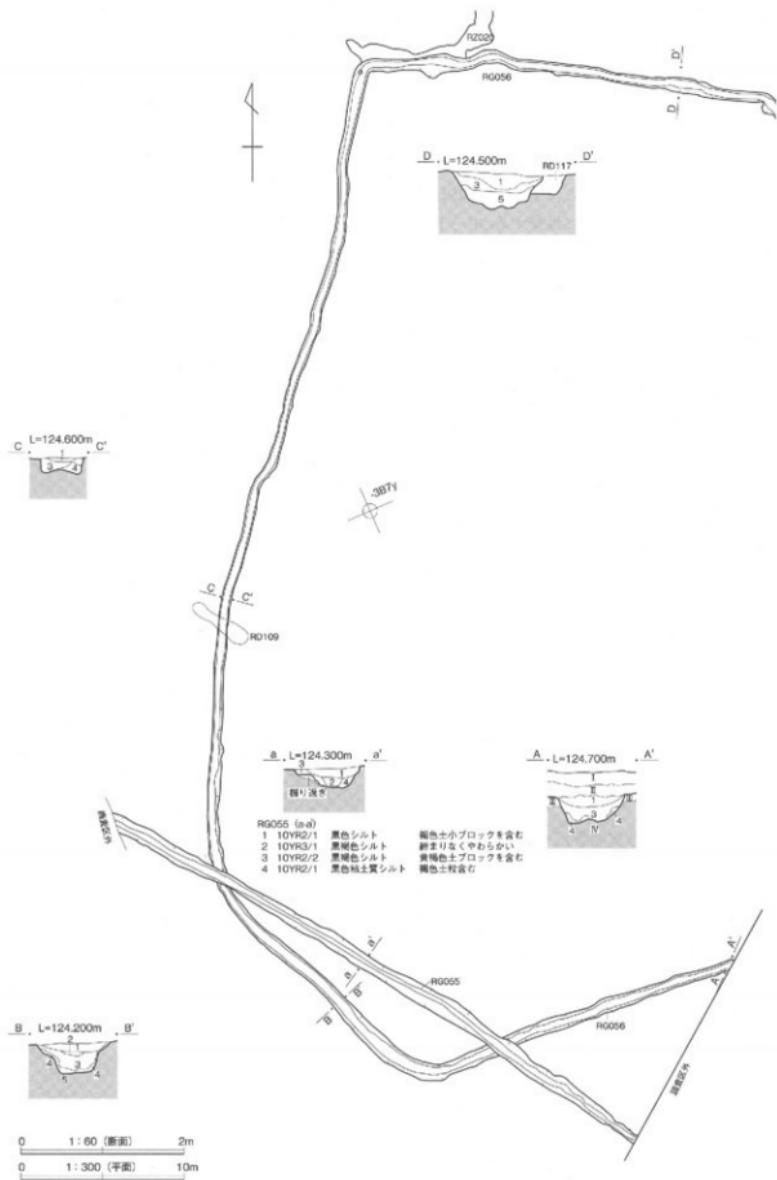
〈深さ〉0.10m前後 〈断面形〉皿形

〈堆積状況〉粘性の強い黒褐色土と地山崩落土である黄褐色土が堆積しているが、上面が削平されているためいずれも層厚は薄い。

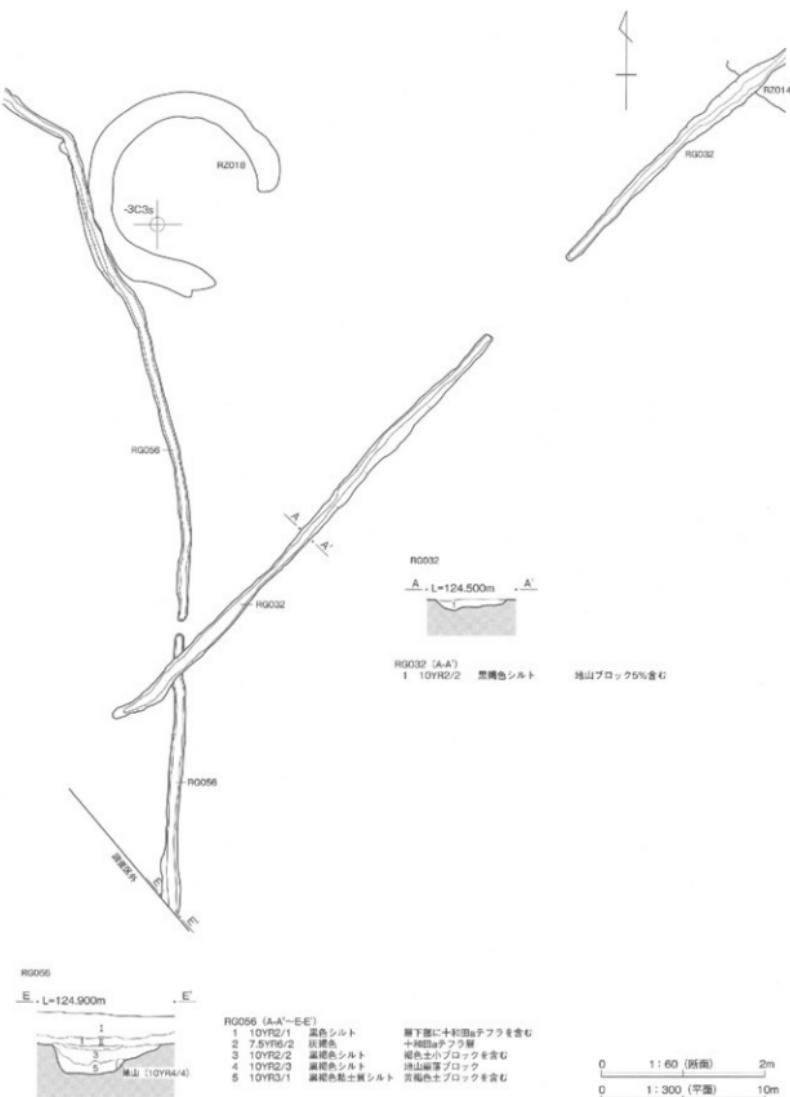
〈性格〉不明である。

出土遺物 土師器片が2点（20g）出土しているが、細片のため図示することができなかった。

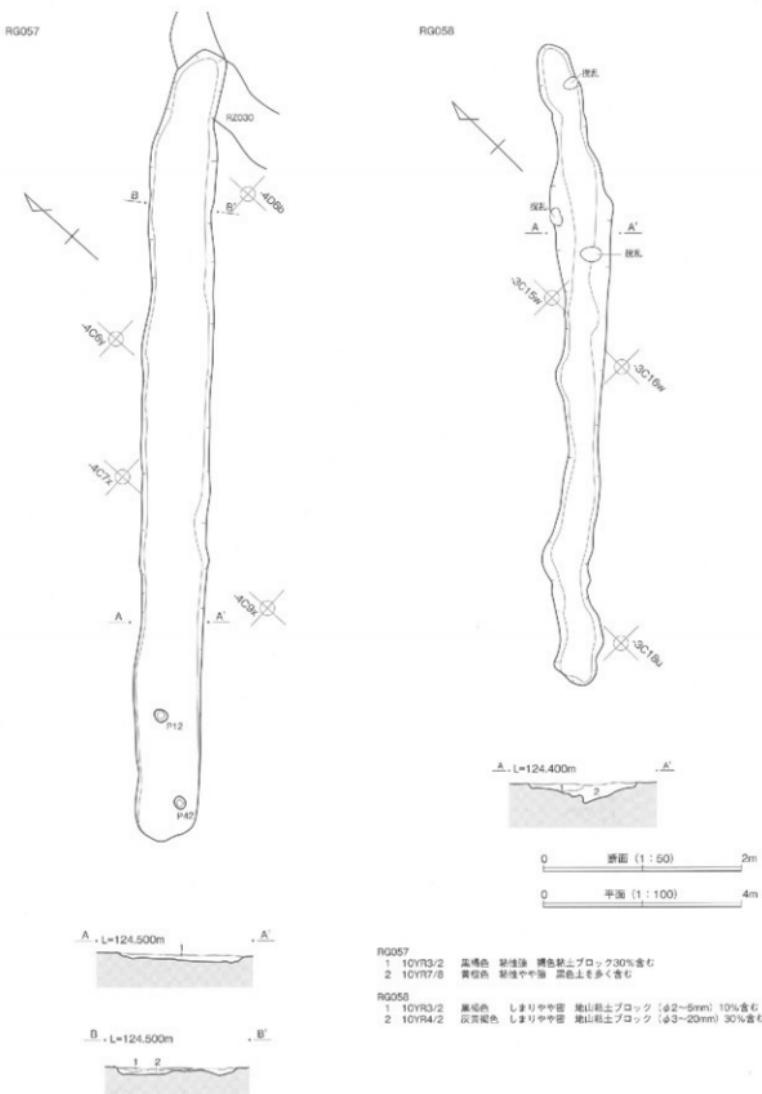
時期 重複関係からR Z030より新しい遺構と判断できるが、出土遺物が乏しいため不明である。



第54図 RG055・056 (1)



第55図 RG032・056 (2)



第56図 RQ057・058

R G058溝

遺構 (第56図、写真図版43・44)

〈位置・検出状況〉 -3 C15w グリッド付近に位置する。検出面はIV層上面及びIV層下位の礫層上面である。黒褐色～灰黄褐色の直線的なプランとして検出された。

〈重複関係〉認められない。

〈規模〉 北東～南西方向に走る直線的な溝で、走行方向はN-42°-Eである。全長は13.20m、上幅は0.60～1.30mである。南西端付近は底面が礫層となり、プランの把握が困難であった。

〈深さ〉 10～15cm 〈断面形〉 皿形を基調とするが、根擾乱が多く不整形

〈堆積状況〉 地山ブロックを多く含む黒褐色土と灰黄褐色土で構成される。

〈性格〉 不明である。

出土遺物 なし。

時期 出土遺物・他遺構との重複関係が無いため不明である。

7 土器埋設遺構 (R Z)**R Z033土器埋設遺構**

遺構 (第57・77図、写真図版41・59)

〈位置・検出状況〉 RZ017古墳の南側、-3 C12t グリッドに位置する。検出面はIV層中で、黒褐色土の中に土器が散布するという状態で検出された。同様の状況で検出されたR Z034が土器埋設遺構であったことから、本遺構も同様の可能性を想定しながらプランが明確になるまで遺構の周囲を薄く掘り下げていった。掘り下げの結果、検出面から4cmの深さで柱穴状の円形プラン内に土器が横倒し状態で設置されている状況が確認されたことから、本遺構も土器埋設遺構であることが判明した。

〈形状・設置方法〉 土器を埋設する土坑（掘り方）は椿円形プランをしており、平面規模は0.46×0.36m、検出面からの深さは0.21mである。埋設される土器よりも一回り大きく、盤面は外傾しながら立ち上がる。堆積土は3層確認されており、このうち第3層は土器埋設の際に人為的に埋めた裏込め土と考えられ、土器は第3層の上面に口縁部を南東方向に向けた横位の状態で設置されていた。遺構の上面が削平されているため全形は不明であるが、おそらく土器全体を裏込め土で覆った形態であったと考えられ、土器棺墓として設置された可能性が高い。

〈土器の特徴〉 188は体部中央やや上に最大径をもつ長胴形の土器器表である。ロクロを用いて成形されており、頸部は「く」の字状に外方に屈曲し、口縁部外面は横ナデ調整により受け口状となるが、内面は斜め上方に立ち上がる。体部外面には縱方向のヘラ削り調整、内面は底部付近にハケメ調整が施される。なお、体部内面中央やや下位で突水線と思われるバンド状のコゲの痕跡が確認できる。底部は磨耗により不明瞭であるが、ヘラ削り調整が施されていた可能性がある。

時期 土器の年代を考慮すると平安時代（9世紀後半）に構築されたものであり、古墳構築以後に設置された埋葬施設と考えられる。ただし、土壤洗浄・フローテーションでも骨や副葬品の類は検出できなかった。

R Z034土器埋設遺構

遺構 (第57・78図、写真図版41・60)

〈位置・検出状況〉 RZ032古墳の北東側、-4 D14j グリッドに位置する。検出面はⅢ層上面で、に

ぶい黄褐色土の楕円形プラン内に土器片が散布するという状態で検出された。当初は小型の土坑と考えていたため從来どおり2分法で掘り下げていったところ、底面付近で同一個体の土器の口縁部破片が堆積土に押し潰された状態でみつかった。このことから、意図的に土器を埋設した遺構であることが判明した。

〈重複関係〉 R Z032の周溝外縁部に位置しているが、直接的な重複関係はない。

〈形状・設置方法〉 土器を埋設する土坑（掘り方）は楕円形プランをしており、平面規模は0.78×0.40m、検出面からの深さは0.16mである。長軸方向は埋設される土器の1.5倍ほど大きいが、短軸方向は土器より若干広い程度である。底面は浅い皿形で、南西壁はオーバーハングしながら立ち上がる。堆積土は2層確認されており、このうち第2層は土器埋設の際に人為的に埋めた裏込め土と考えられる。土器は底面直上に口縁部を北西方向に向けた横位の状態で設置されており、断面計測ラインから北西側が堆積土に押し潰されている以外は、ほぼ元位置を保った状態で出土している。遺構の上面が若干削平されているため推定になるが、おそらく土器全体を裏込め土で覆った形態であったと考えられ、土器棺墓として設置された可能性が高い。

〈土器の特徴〉 189は口縁部に最大径をもつ長胴形の土師器甕である。成形にロクロは用いられておらず、体部には輪積み痕が認められる。頸部の屈曲は弱く、わずかに外方に角度を変えながら口縁部へと至る。口縁部は短く、微弱な横ナデ調整が施されるのみである。体部は外面に綫方向のヘラ削り、内面に横方向と綫方向のヘラナデ調整が施される。底部には木葉痕が明瞭に認められる。

時 期 土器の年代を考慮すると平安時代（9世紀後半以降）に構築されたものであり、古墳構築以後に設置された埋葬施設と考えられる。ただし、土壤洗浄・フローテーションでも骨や副葬品の類は検出できなかった。

（村田）

8 焼 土 遺 構 (R F)

R F 002焼土

遺 構（第57図、写真図版40）

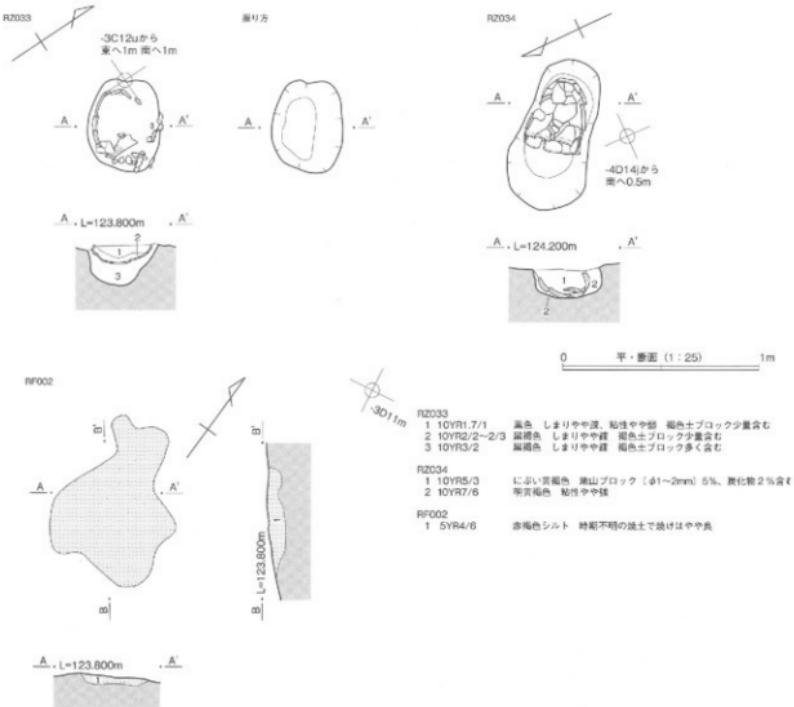
〈位置・検出状況〉 -3D111に位置する。II層上面で検出した。精査後にこの周辺をIII層上面まで掘削したところ、新たにR D115土坑が確認された。遺構確認面は異なるが、本遺構はR D115上部に存在していたものであり、一連の遺構であった可能性がある。

〈規模・平面形〉 23～62×80cmあまりの不整円形

〈厚さ〉 4～8cmの赤褐色シルト質土で焼けは良くない。

〈遺構の性格・時期〉 先に述べたが、R D115との関連は不明確であり性格は不明である。時期は検出面から古代と考えたい。

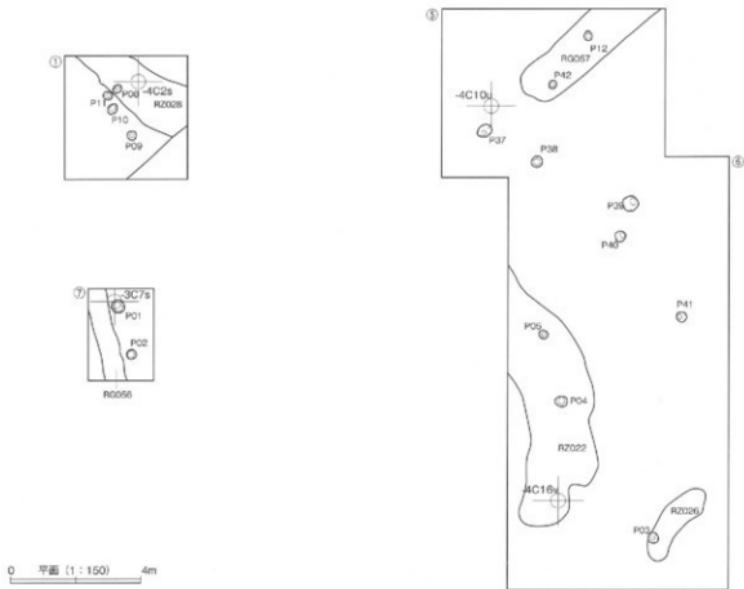
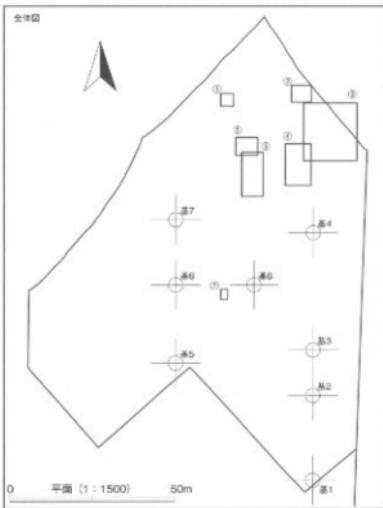
（濱田）



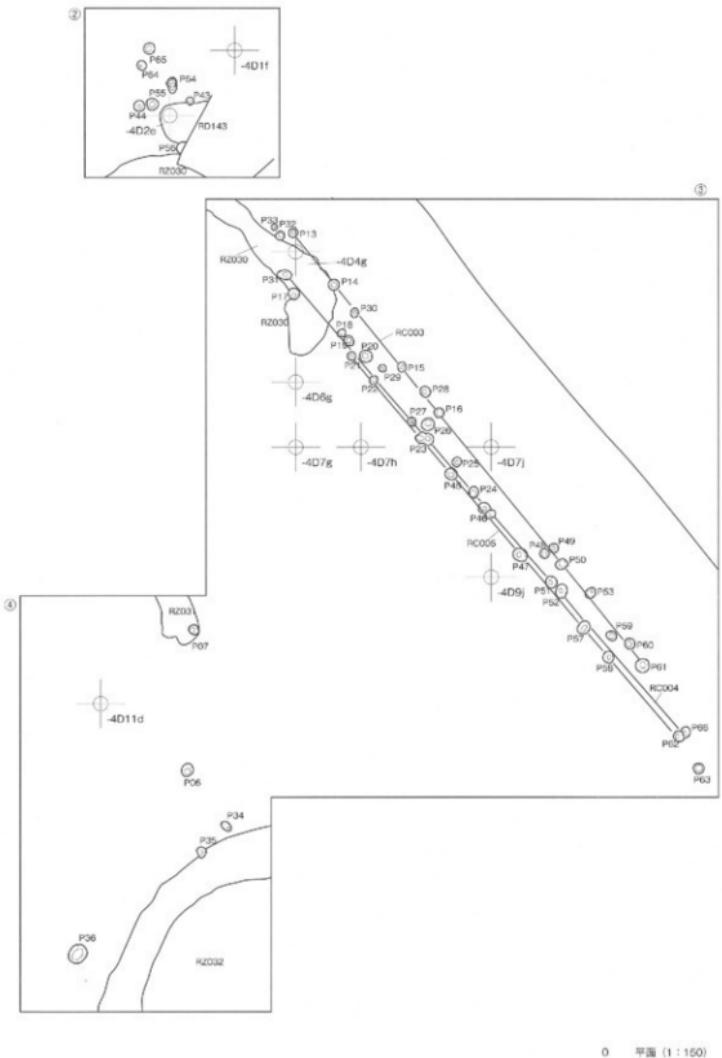
第57図 RZ033・034、RF002

9 柱穴列・柱穴 (RC・P) (第58・591図、第3表、写真図版44)

柱穴は、調査区北側を中心に66個検出している。とくに調査区北端の旧河道の肩部付近に列状に集中する傾向があり、間隔に規則性は無いものの、直線的に並ぶ柱穴列が3列 (RC003～005) 確認された。出土遺物はP22から陶器香炉の破片が1点出土したのみで、掘削年代は不明なものがほとんどである。ただし、柱穴列に関しては遺跡の北西端に位置する農業試験場（明治～大正時代に建設・使用されたと考えられる）に関連する柵列の可能性があるため、近～現代に属すると考えられるが今回は遺構として登録した。



第58図 柱穴列・柱穴 (1)



第59図 柱穴列・柱穴（2）

第3表 柱穴計測表

Pit番号	計測値(cm) 直径or長軸	土層 深さ	土層 バターン
1	37	22	A
2	29	15	B
3	31	55	x
4	38	30	x
5	28	45	x
6	40	17	B
7	30	40	D
8	27	19	A
9	28	10	A
10	35	50	A
11	27	16	C
12	29	-	B
13	28	16	A
14	32	17	B
15	30	29	A
16	30	12	A
17	38	36	A
18	26	23	A
19	36	32	A
20	39	39	A
21	28	28	A
22	28	28	A

Pit番号	計測値(cm) 直径or長軸	土層 深さ	土層 バターン
23	39	26	A
24	38	35	A
25	26	25	A
26	39	40	A
27	28	7	A
28	32	19	B
29	24	19	A
30	24	-	x
31	44	20	A
32	26	20	A
33	19	21	C
34	37	8	B
35	32	19	B
36	59	10	C
37	42	55	A
38	35	30	A
39	48	14	A
40	32	25	A
41	30	35	A
42	26	11	A
43	25	20	A
44	34	38	A

上層バターン

A 10YR2/2 黒褐色 粘性強く地山ブロック10~30%含む

B 10YR3/2 黒褐色 地山ブロック5%含む

C 10YR2/2 黒褐色 地山ブロック5%含む

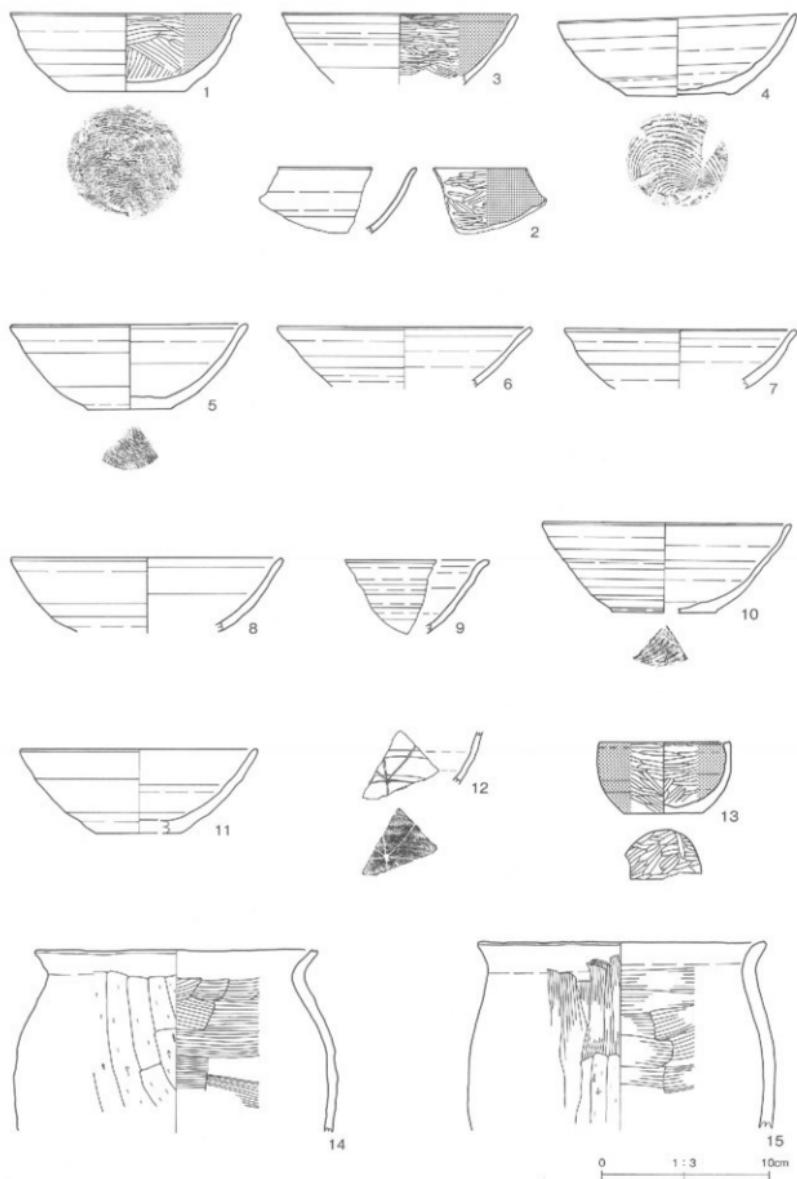
D 10YR1.7/1 黒色

10 遺構外出土遺物（第78図、写真図版60）

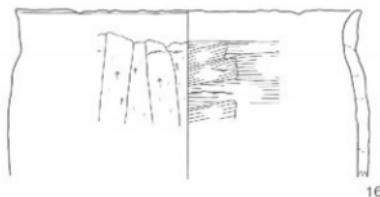
遺構外から出土した遺物の総量は、当センターの遺物収納用小コンテナ（容量:14ℓ）1箱弱である。内訳は土師器・陶磁器・鉄製品で、総量で1.0kg弱である。

土師器は調査区中央の竪穴住居や古墳の周辺から出土しており、実測可能な2点を掲載した（191・192）。191はロクロ成形の土師器壺で、内面にはミガキ調整と黒色処理が施される。192は内外面に黒色処理が施された小型壺で、内外面ともにミガキ調整が施される。

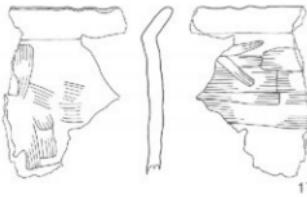
陶磁器と鉄製品は調査区南端側で出土している。陶磁器は近世～現代に属するもので、2点を掲載した（193・194）。193は肥前産の磁器丸碗で、外面には木葉文もしくは木賊文、底部内面には隸字体の銘款が描かれている。194は角型の火鉢と考えられ、内外面に黒色処理が施される。鉄製品は近～現代に属する釘の破片であるが、小片のため図示できなかった。



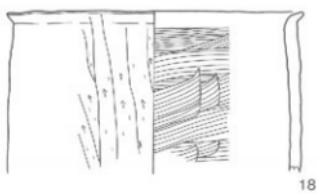
第60図 RA028出土遺物（1）



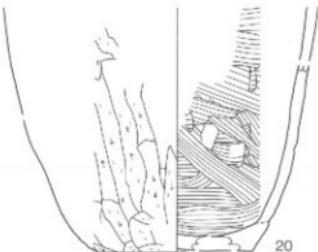
16



17



18



20



19



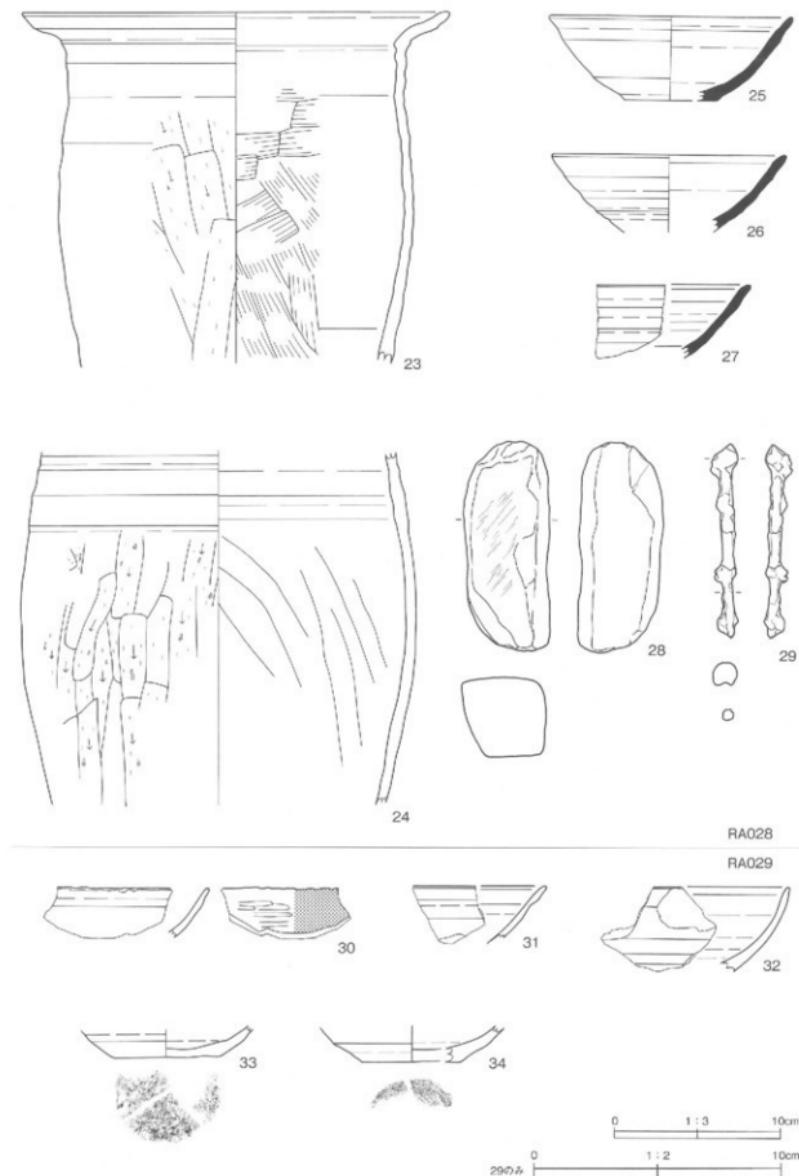
21



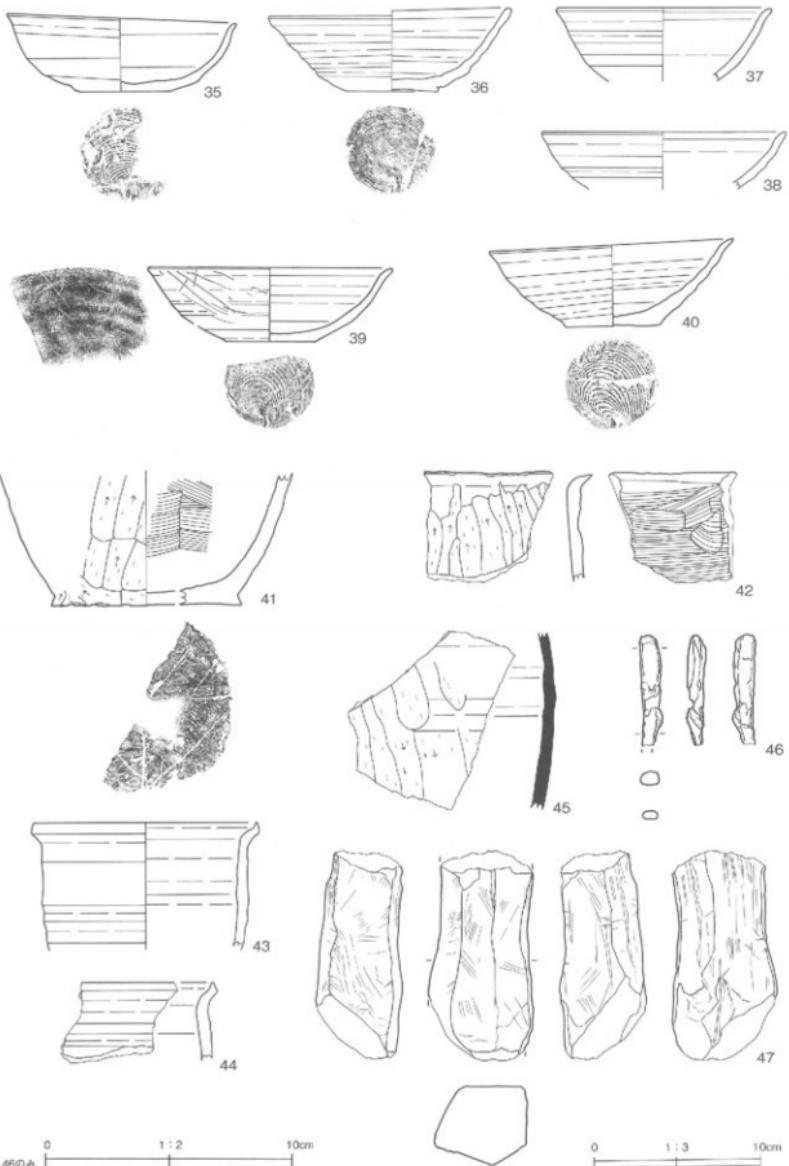
22

0 1:3 10cm

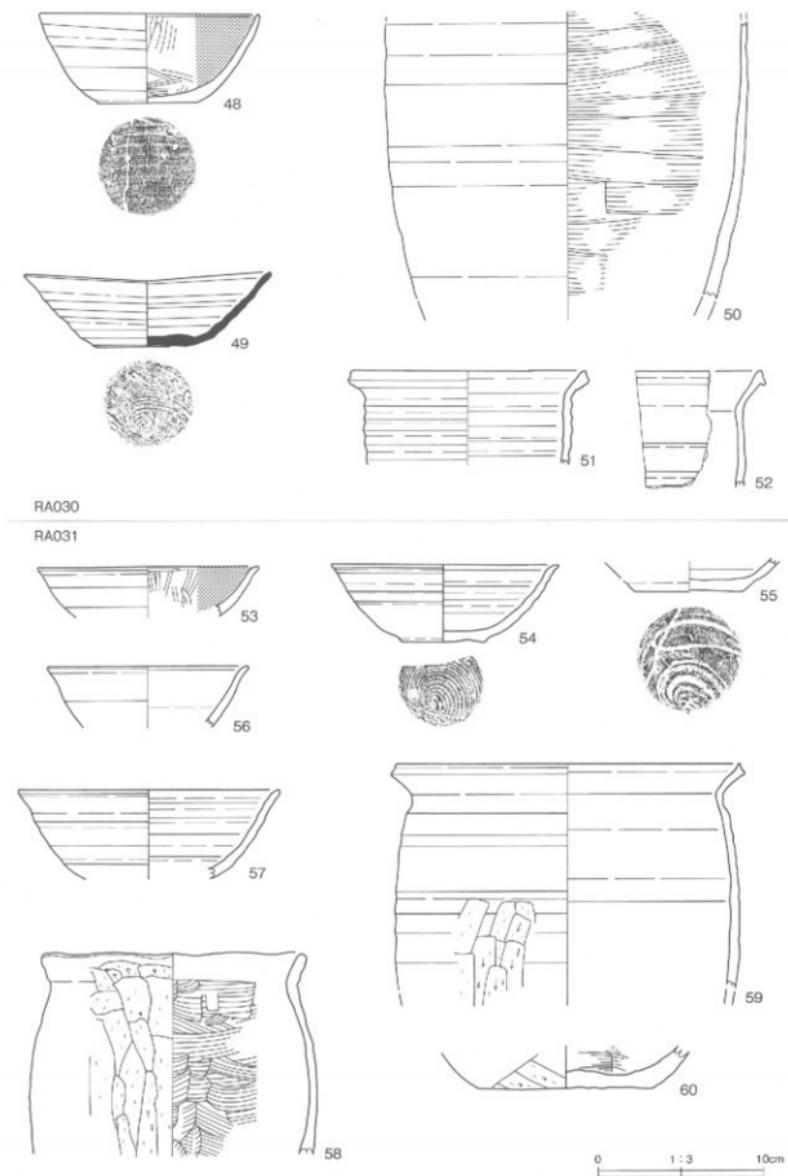
第61図 RA028出土遺物（2）



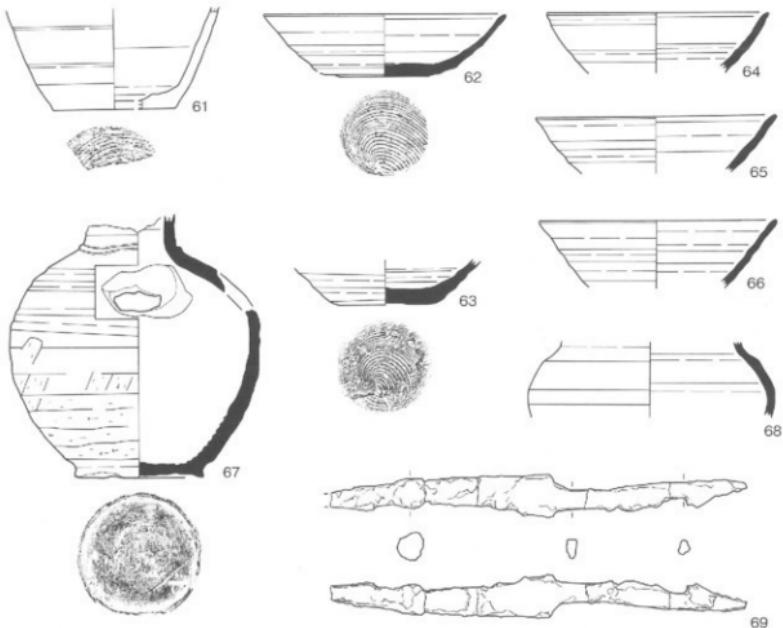
第62図 RA028・029出土遺物



第63図 RA029出土遺物



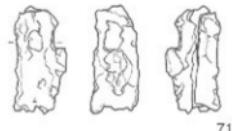
第64図 RA030・031出土遺物



RA031

RA033

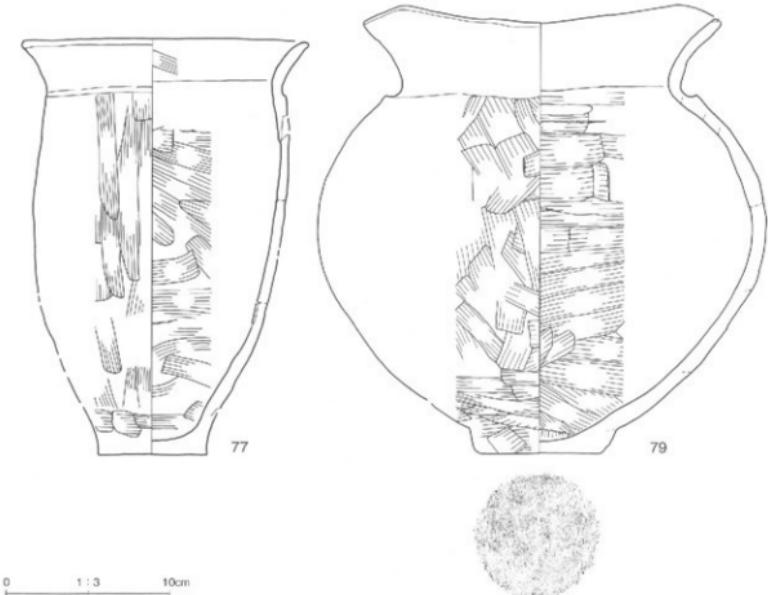
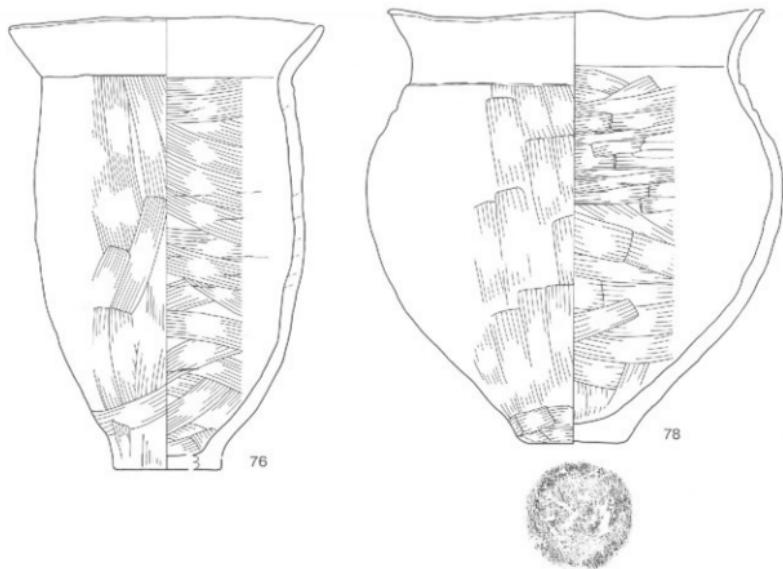
RA032



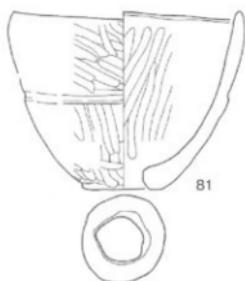
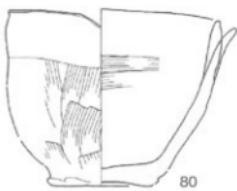
0 1:2 10cm
69 - 71

0 1:3 10cm

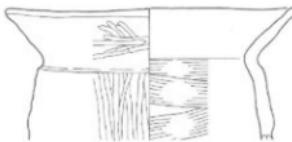
第65図 RA031 ~ 033出土遺物



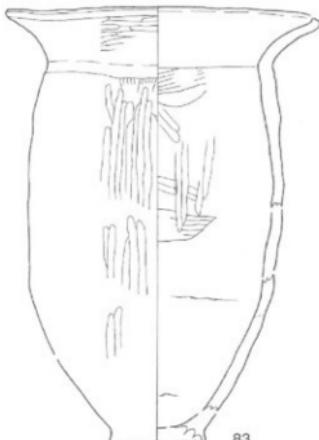
第66図 RA033出土遺物



RA033



82



83

RA034

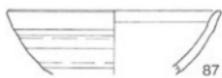
RA035



85



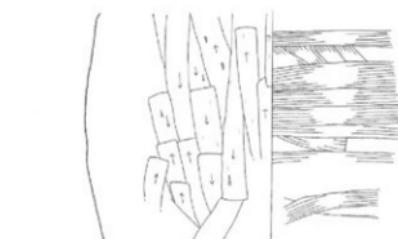
86



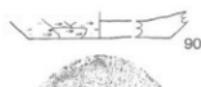
87



88

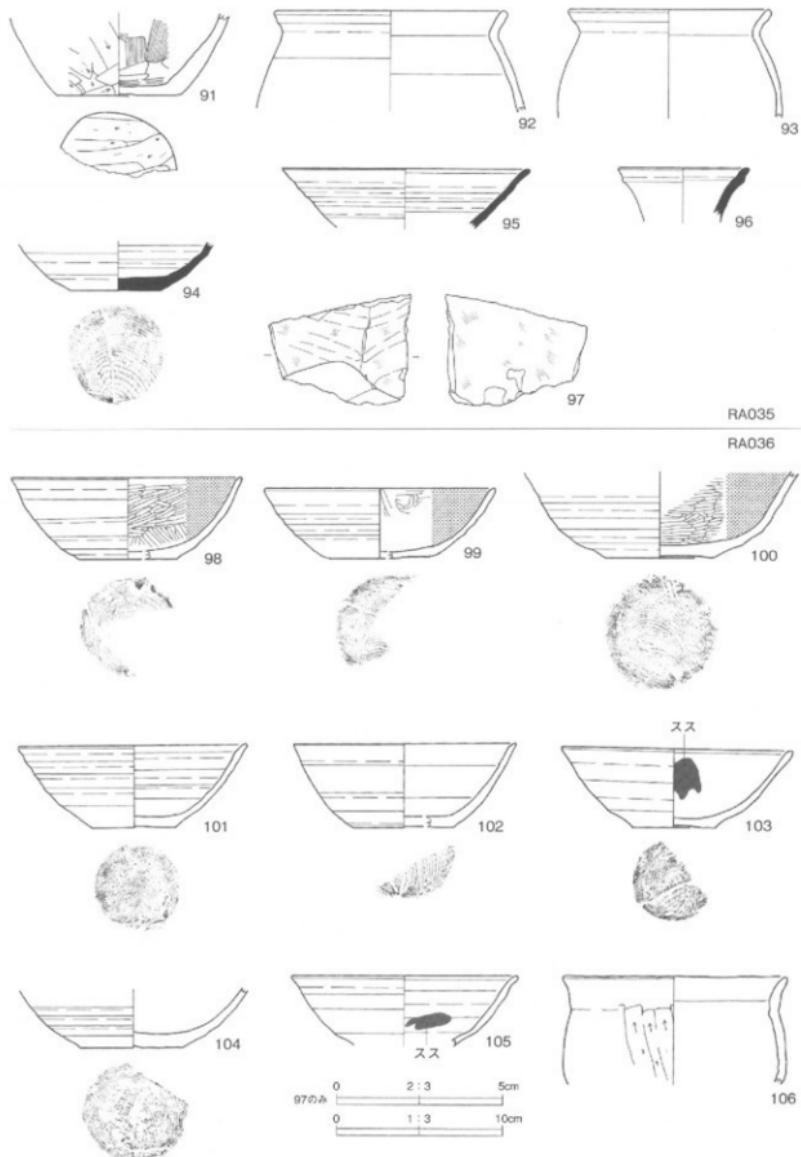


89

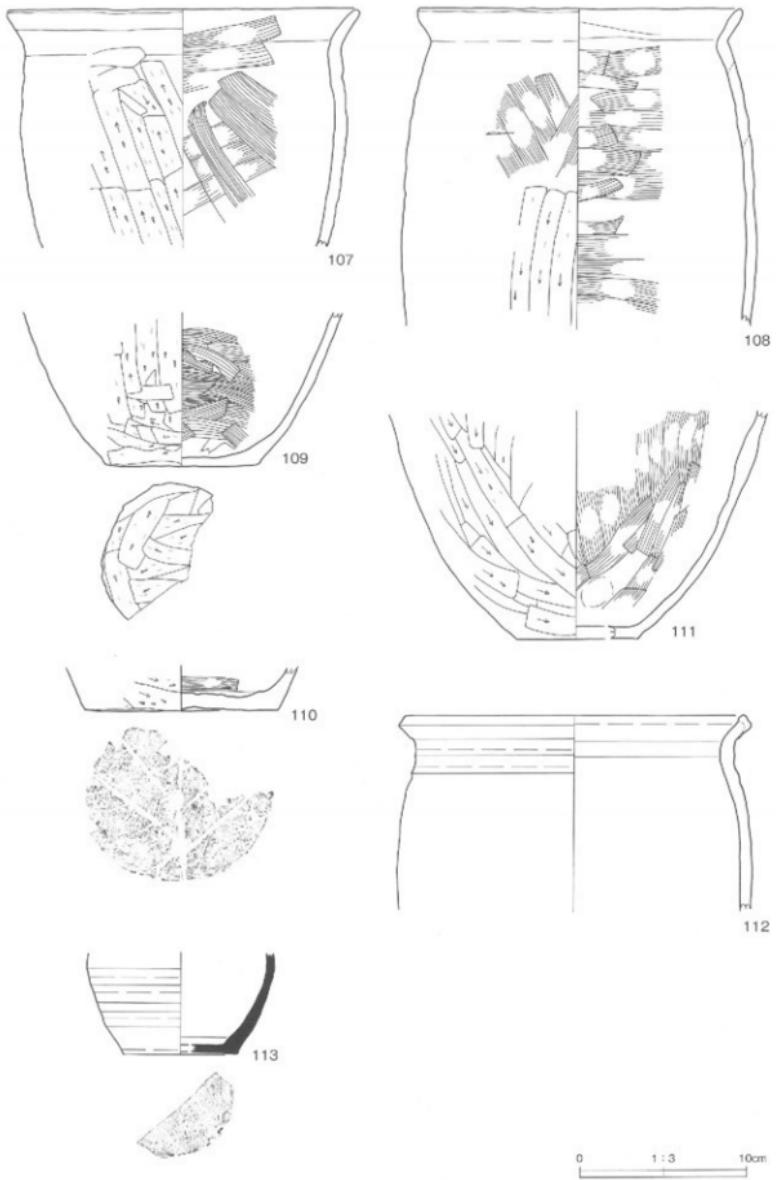


第67図 RA033～035出土遺物

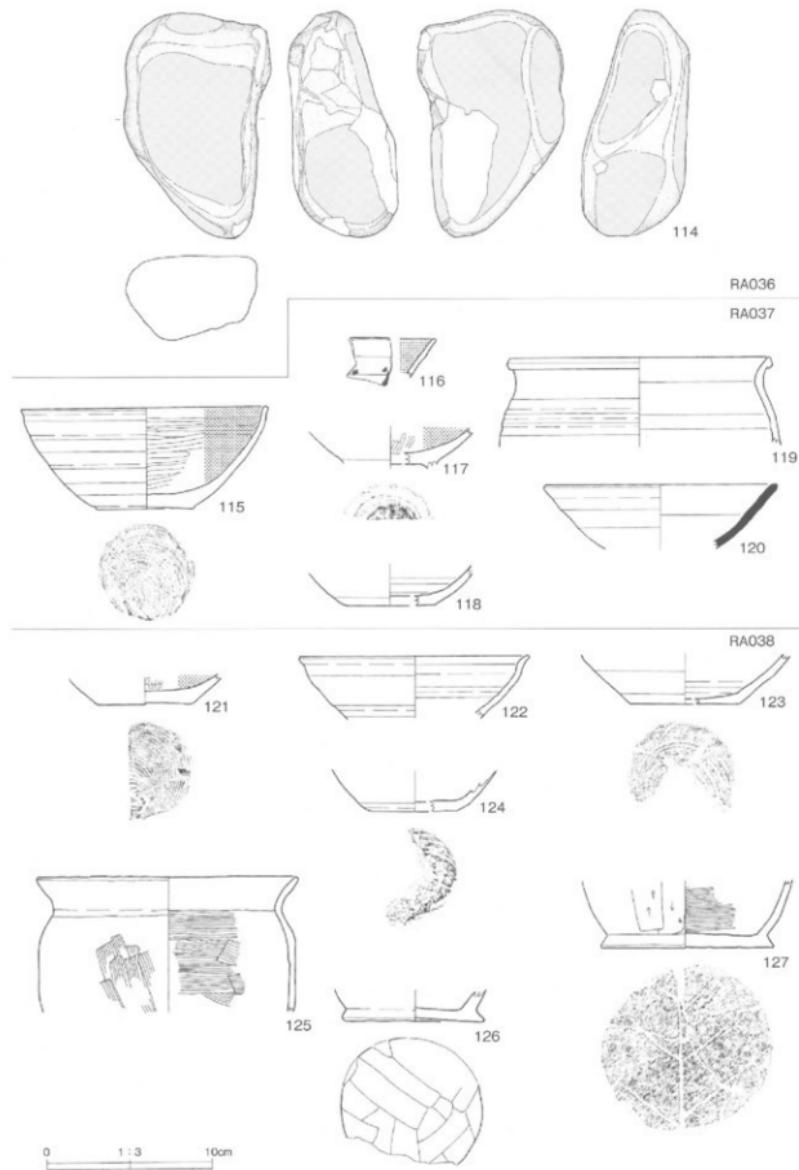
0 1 : 3 10cm



第68図 RA035・036出土遺物



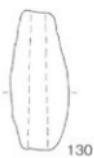
第69図 RA036出土遺物



第70図 RA036～038出土遺物



128



130

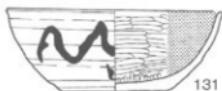


129 (S=1/6)



RA038

RA039



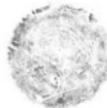
131



132



133



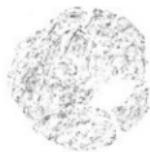
134



135



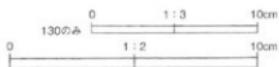
136



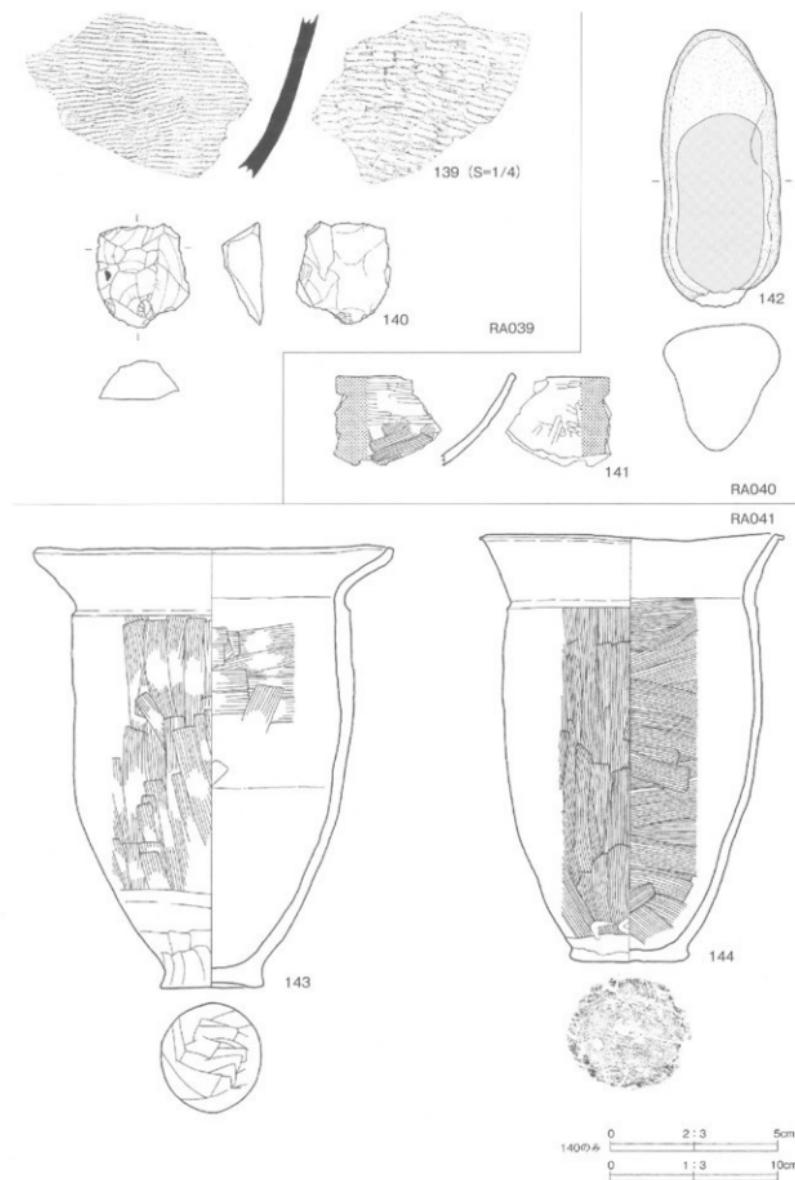
137



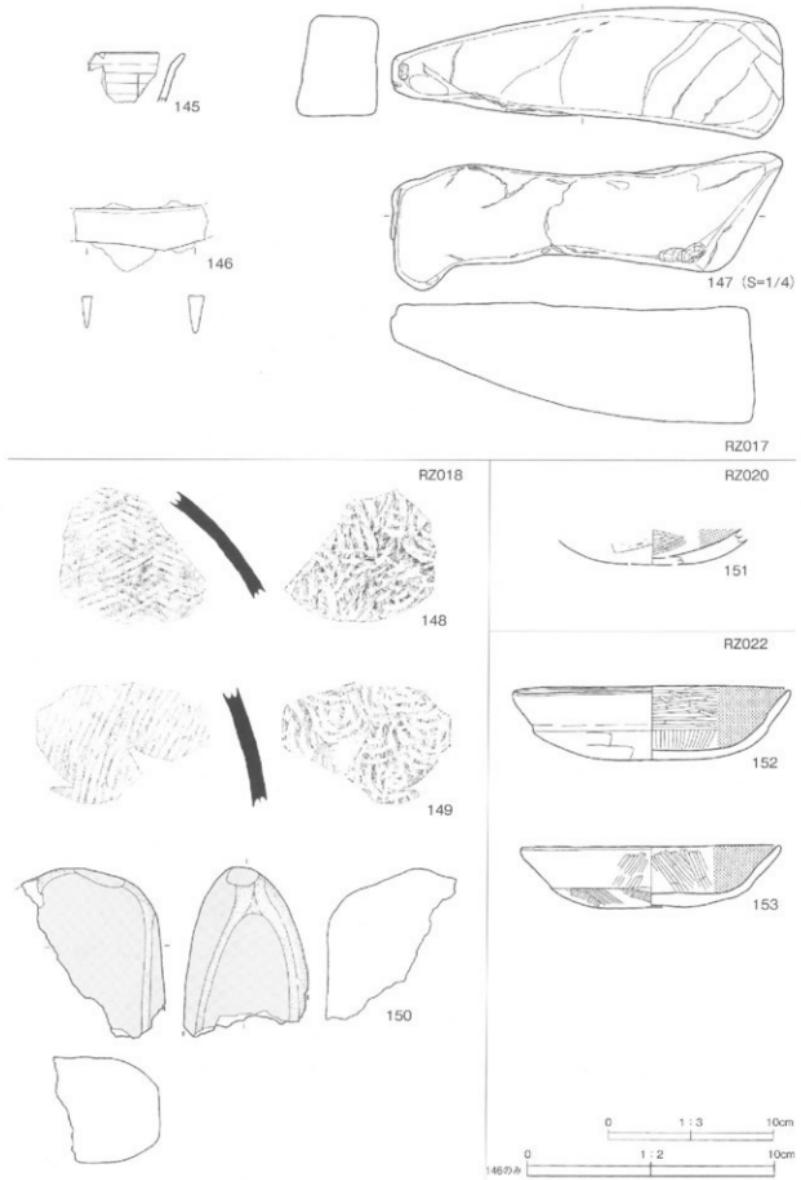
138



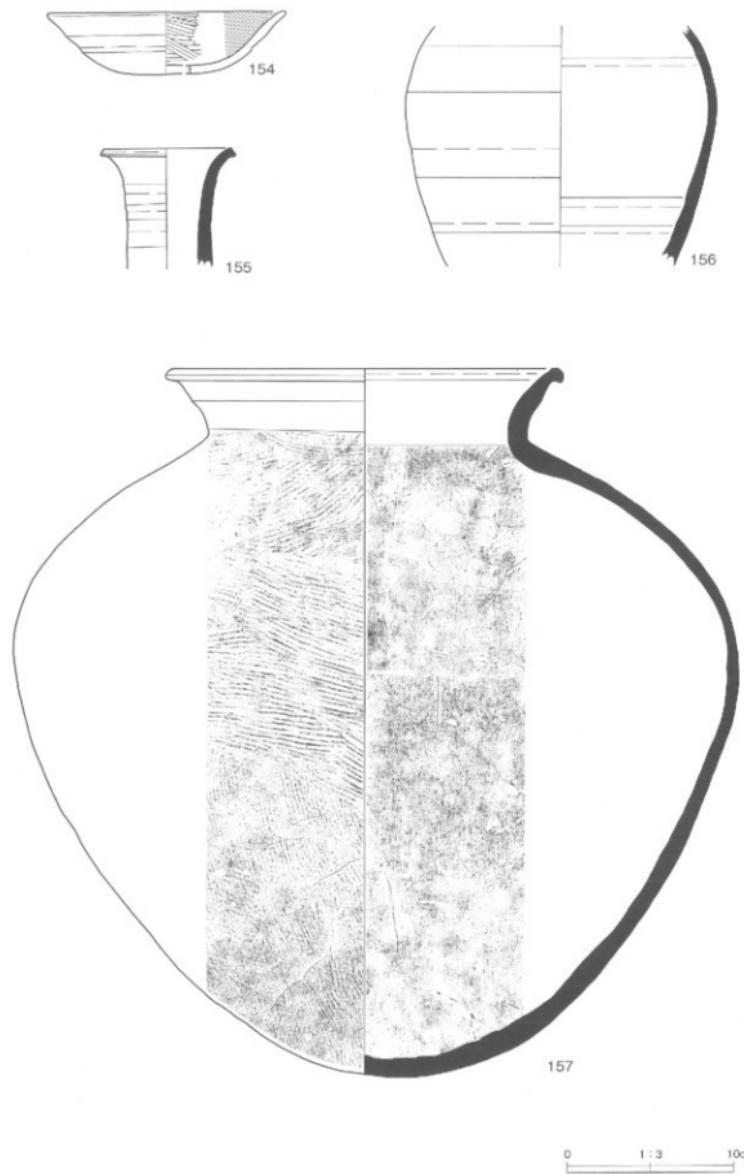
第71図 RA038・039出土遺物



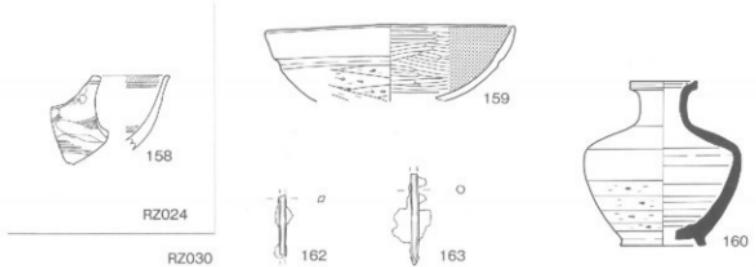
第72図 RA039～041出土遺物



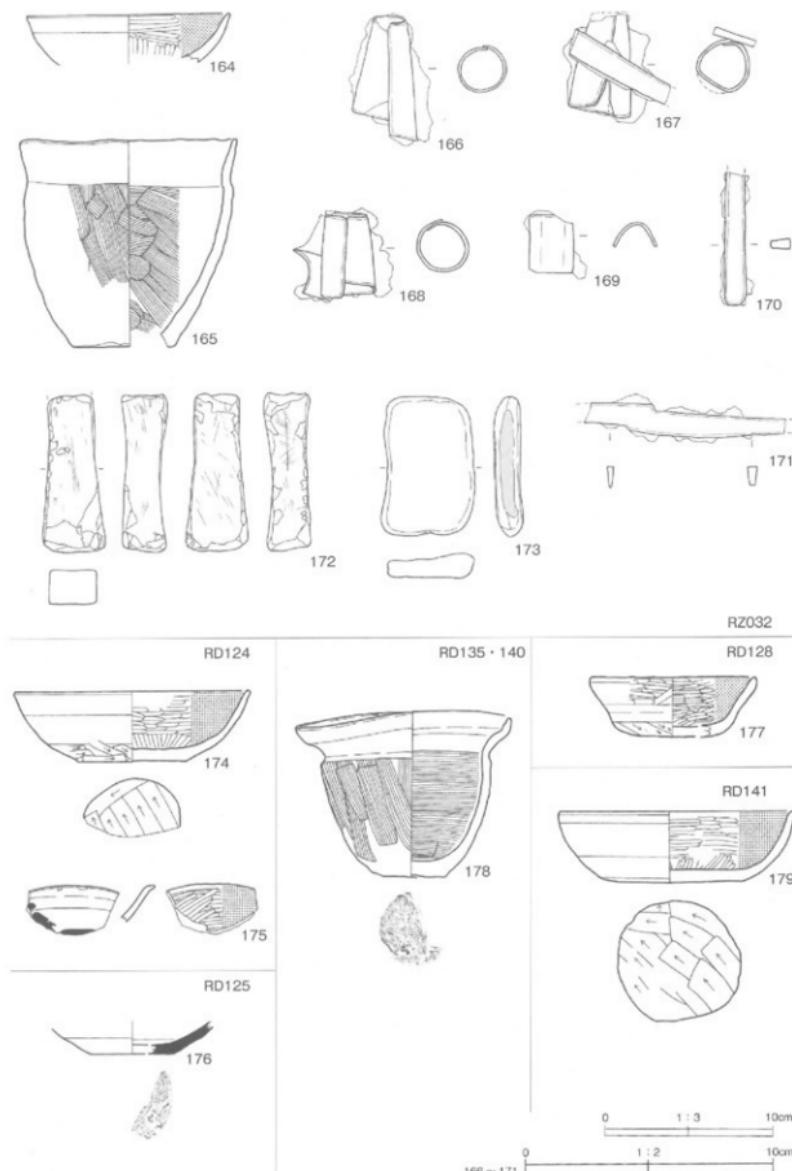
第73図 RZ017・018・020・022出土遺物



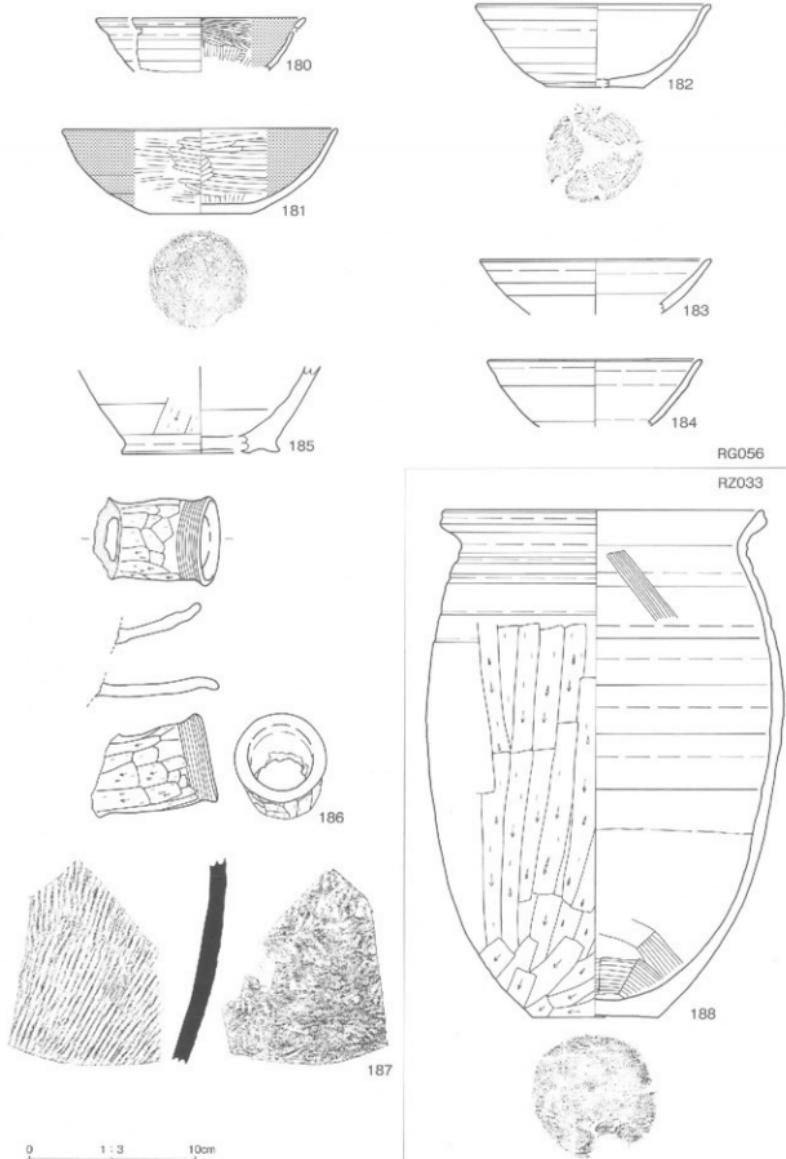
第74図 RZ023出土遺物



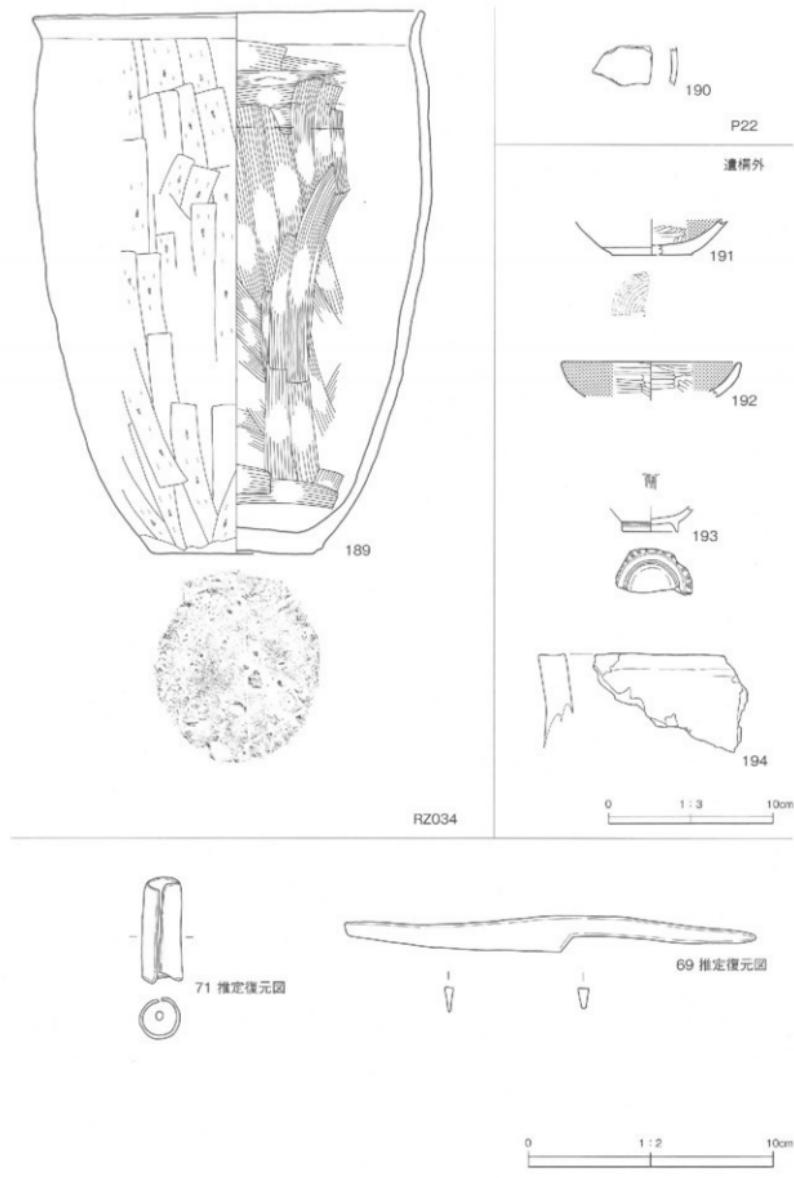
第75図 RZ024・030出土遺物



第76図 RZ032、RD124・125・128・135・140・141出土遺物



第77図 RG056、RZ033出土遺物



第78図 RZ034、P22、遺構外出土遺物

剖面図 (cm)				容積 (l)	残存部位	残存率 (%)	外面色調	備考	採集 No.
L1径	底深	最高	壁厚		口縁	口縁	褐色	胎土に金雲母含む	1
(140)	72	4.8	0.7	0.30	口～底	25	100	胎土に金雲母含む	2
-	-	(4.0)	0.35	-	口～全体	10	0	褐色	
(141)	-	(4.3)	0.4	(0.35)	口～全体	25	0	褐色	
144	62	5.1	0.5	0.32	口～底	70	100	褐色	
(143)	5.0	5.2	0.5	0.36	口～底	20	25	褐色	
(154)	-	(3.6)	0.4	(0.32)	口～全体	25	0	褐色	
(140)	-	(3.6)	0.55	(0.26)	口～全体	35	0	褐色	
(140)	-	(4.5)	0.5	(0.48)	口～全体	30	0	褐色	
-	-	(4.5)	0.4	-	口～全体	10	0	褐色	
(150)	6.2	5.5	0.35	0.43	口～底	15	20	褐色	
(144)	(5.0)	5.1	0.5	0.34	口～底	15	15	褐色	
-	-	(3.1)	0.4	-	全体	0	0	褐色	
(80)	1.6	4.3	0.45	0.11	口～底	50	30	黑色	
(171)	-	(11.1)	0.55	(2.05)	口～全体	50	0	褐色	
(179)	-	(11.4)	0.8	(1.94)	口～全体	20	0	明褐色	
(210)	-	(10.2)	0.7	(2.53)	口～全体	25	0	にぶい褐色	
-	-	(10.1)	0.8	-	口～全体	10	0	褐灰色	
(180)	-	(9.8)	0.75	(1.66)	口～全体	25	0	明赤褐色	
-	(113)	(8.0)	0.7	(0.66)	全体～底	0	25	明赤褐色	
-	9.2	(15.0)	0.85	(2.26)	全体～底	0	90	明赤褐色	
-	(10.6)	(2.4)	0.8	-	底部	0	10	褐色	
(214)	-	(21.9)	0.6	(2.09)	口～全体	45	0	褐色	
(258)	-	(21.3)	0.6	(5.41)	口～全体	15	0	褐色	
-	-	(21.3)	0.55	(7.12)	全体	0	0	褐色	
(148)	6.6	5.1	0.55	(5.78)	口～底	30	25	灰白色	
(142)	-	(4.7)	0.55	(0.29)	口～全体	35	0	灰白色	
-	-	(4.4)	0.65	-	口～全体	10	0	灰白色	
-	-	-	-	-	完形	-	-	凝灰岩 (奥羽山脈産)	28
-	-	-	-	-	完形	-	-		29
-	-	(3.0)	0.35	-	口縁部	15	0	浅黄褐色	
-	-	(3.5)	0.4	-	口縁部	10	0	褐色	
-	-	(5.2)	0.45	-	口～全体	5	0	褐色	
-	6.4	(1.7)	0.4	-	全体	0	70	褐色	
-	(6.0)	(2.0)	0.5	-	底部	0	35	にぶい褐色	
138	5.6	4.8	0.4	0.27	口～底	35	70	浅黄褐色	
146	5.5	5.1	0.45	0.31	口～底	80	100	褐色	
(130)	-	(4.5)	0.45	(0.27)	口～全体	10	0	にぶい褐色	
(147)	-	(3.5)	0.5	(0.31)	口～全体	20	0	褐色	
(148)	5.5	4.5	0.45	0.35	口～底	20	65	褐色	
147	5.7	6.3	0.7	0.30	口～底	70	100	浅黄褐色	
(114)	(8.1)	0.85	(0.85)	-	全体～底	0	55	明赤褐色	
-	-	(6.6)	0.75	-	口～全体	20	0	明赤褐色	
135	-	(7.7)	0.65	(0.58)	口～全体	40	0	明赤褐色	
-	-	(4.8)	0.7	-	口～全体	15	0	灰白色	
-	-	(10.9)	0.75	-	全体	0	0	褐灰色	
-	-	-	-	-	一部欠損	-	-		46
-	-	-	-	-	一部欠損	-	-	凝灰岩 (奥羽山脈産)	47
133	5.6	6.0	0.5	0.34	口～底	15	100	褐色	
(150)	5.6	4.5	0.45	0.32	口～底	30	100	灰白色	
-	-	(18.5)	0.65	(4.59)	全体	0	0	黄褐色	
(149)	-	(5.7)	0.55	(0.40)	口～全体	20	0	褐色	
-	-	(7.1)	0.45	-	口～全体	5	0	褐色	
(134)	-	(3.0)	0.45	(0.20)	口～全体	10	0	浅黄褐色	
(137)	5.2	4.7	0.5	0.28	口～底	25	70	褐色	
-	6.4	(2.0)	0.5	-	底部	0	100	褐色	
(122)	-	(3.7)	0.45	(0.21)	口～全体	10	0	褐色	
(158)	-	(5.3)	0.5	(0.52)	口～全体	5	0	明赤褐色	
160	-	(12.4)	0.45	(1.77)	口～全体	25	0	浅黄褐色	
(208)	-	(14.7)	0.65	(3.05)	口～全体	10	0	褐色	
-	(10.6)	(2.6)	0.75	-	底部	0	15	明赤褐色	
-	(7.4)	(6.1)	0.6	(0.38)	全体～底	0	25	褐色	
(146)	5.2	(3.8)	0.4	0.25	口～底	5	100	灰白色	
5.6	-	(2.7)	0.45	-	底部	0	100	灰白色	
(133)	-	(3.7)	0.45	(0.26)	口～全体	15	0	褐灰色	
(145)	-	(3.5)	0.45	(0.30)	口～全体	10	0	灰白色	
(144)	-	(4.1)	0.4	(0.33)	口～全体	10	0	灰白色	

V 調査のまとめ

今回の調査では、陥し穴状遺構・堅穴住居・古墳・墓坑・土器埋設遺構などの遺構・土師器・須恵器・鉄製品など主に古代に属する遺物が確認されている（第79図）。最後に主要な遺構・遺物について若干の検討を加えることで調査のまとめとしたい。

1 陥し穴状遺構

溝状プランのものが11基確認されている。ほとんどが北東-南西方向に長軸をとる。年代の根拠となる遺物が出土していないため推定になるが、形態から縄文時代に属すると考えられる。削平の影響をあまり受けない底面の規模をみると、長軸2.30～3.90m、幅0.05～0.67mで、壁面崩落によって変形しているものもあるが横断面形はV字形である。

配置状況は必ずしも整然としていないが、北東-南西方向に長軸をとるものは10～20m間隔で並んでおり、とくに調査区の南西側ではR D106～114が遺跡範囲の西側の境界となる旧河道に平行するように配置されている。過去の調査でも遺跡範囲の南側（第5・6次調査区）で旧河道と考えられる黒色土層付近で同様の状況が確認されており、水場に集まる動物を対象とした罠獵が行われていたと考えられることから、今回検出されたものについても同様の意図を持って設置された可能性が高い。

2 土器の分類

今回の調査で出土した土器はいずれも土師器・須恵器で、形態・成形技法（ロクロ使用・黒色処理の有無）から奈良時代のものと平安時代のものとに分類することができる。ここでは出土点数の多い土師器壺・壺を中心として分類と年代について検討を行う。

奈良時代

ロクロ不使用の土師器壺・壺・瓶？・須恵器大甕・瓶類がある。

土師器壺はR A033、R Z020・022・023・030・032、R D128から出土している。全て丸底で内面に黒色処理を施すものであり、体部外面に段を有するA類（152・153・154）、沈線・稜線をもつB類（73～75・159・177）、段・沈線をもたないC類（72・164）に分類できる。東北地方で出土する古墳～奈良時代の土師器壺は体部の「段」と底部形状の二点を指標として変化の方向性が考えられてきた。具体的には段の省略化・丸底から半底への変化ということであり、これらはロクロ技術の導入と製作工程の簡略化に起因するものと考えられる⁽¹⁾。本遺跡出土事例をこの変化に対応させると、体部外面に段を有するA類→内面の段が消失し外面が沈線化するB類→内外面ともに段・沈線をもたないC類という変遷を考えることができる。

周辺遺跡をみると、A類は盛岡市野古A遺跡R A047・滝沢村高柳遺跡E a60住居跡・岩手町仙波堤遺跡1号住居跡などに類例がある。高柳遺跡は7世紀末～8世紀初頭、その他は8世紀前半に位置付けられていることから、A類は8世紀前半に属すると考えられる。B類は、盛岡市台太郎遺跡R A130・野古A遺跡R A048・矢巾町船畑遺跡S 104などで出土しており、いずれも8世紀後半に位置づけられている。ただし、口径が17cm近くと大きいこと（73～75）、8世紀前半に属する野古A遺跡R A047からも159と同形態のものが出土していることから、B類は8世紀後半を主体とするも一部中葉に遡



第79図 飯岡才川遺跡主要遺構配置図

ると考えられる。なお、C類については沈線の有無を除けばB類と形状は同じであり、B類より後出するものの8世紀後半に属するものと考えておきたい。

土師器壺はR A033・034・041、R Z032、R D135から出土している。体部形状から球胴形のA類(78・79)と長胴形で器高が25cm前後のB類(76・77・82・83・143・144)、器高10cm程度のC類(165・178)に分類できる。A類は体部中央に最大径をもち、頸部に明瞭な段を形成する。B類は、底部脇は屈曲するが体部がほぼ直立しながら頸部へと至るもので、最大径は口縁部にある。頸部の段は明瞭で、口縁部は「く」の字状に外方へ開く。C類は頸部の段は明瞭であるが、頸と異なり底部脇は屈曲しない。口縁部形状は、単純口縁のものと受口状のものがある。なお、B類は体部形状が類似するもの(D類)が平安時代にもあるが、頸部の段が明瞭であることと底径が小さく底部脇が屈曲する点が大きく異なるため判別は比較的容易である。ただし、型式変化に乏しいため奈良時代のなかでの詳細な時期決定は難しく、供伴関係から8世紀後半に属するものを主体として178(C類・受口状口縁)のみ8世紀前半に属する可能性があるとしておきたい。

須恵器小壺(160)についても若干触れておきたい。本例のような形状の小壺は周辺遺跡での出土はないが、長頸瓶など大型器種を含めると猿投・陶邑窯で平城1期(8世紀前葉)に属する製品のなかに類例がある。器種が異なり产地も不明なため単純に同一視はできないが、本例は8世紀前葉を上限として奈良時代に属する可能性があることは指摘しておきたい。

供伴関係をみると、R A033で土師器壺B・C類と土師器壺A・B1類、R Z023で土師器壺A類と須恵器長頸瓶・大壺、R Z030で土師器壺B類と須恵器小壺・大壺、R Z032で土師器壺C類と土師器壺C類が供伴している。その他ではR A034・041では土師器壺B類、R Z022は土師器壺A類が2点以上出土している。以上から、堅穴住居では土師器壺と壺、古墳では土師器壺と須恵器が基本的なセットであったと考えられる。なお、土師器壺を指標とするとR Z022・023、R D128・135は8世紀前半、R A033、R Z032は8世紀後半、土師器壺B類のみ出土したR A034・041も8世紀後半に属する。このことから、奈良時代に属する遺構のうち古墳は8世紀前半から一部後半、堅穴住居は8世紀後半に構築されたものと考えられる。ただし、古墳出土の土器はいずれも周溝内出土であり、古墳については周溝埋没の年代(下限年代)を示しているにすぎない。

平安時代

土師器壺・高台壺・壺・鉢・須恵器壺・壺・瓶類がある。このうち土師器壺にはロクロ使用・不使用が混在するが、その他は全てロクロ成形の製品である。

土師器壺は全て平底で、黒色処理を施すものと施さないものがある。体部形状から、体部が内彎しながら立ち上がるD類、口縁部がナデ調整によって外反するE類、底部脇が屈曲して体部下半は内彎しながら立ち上がるF類に分類できる⁽²⁾。土師器壺はロクロ不使用のD類とロクロ使用のE類に分類できる。いずれも長胴で、D・E類ともに口縁部形態によってさらに細分できる可能性はあるが、点数が少ないと今回分類を行っていない。また、後述するように土師器高台壺も年代決定の有効な指標となるが、点数が少ないと分類を行っていない。

平安時代の土器については供伴関係をもとに年代を考えていきたい。上記の分類をもとに遺構ごとの器種構成をまとめると、幾つかのポイントがあることがわかる。とくに土師器壺F類と高台壺の有無の2点が有効な指標であり、両者を含まないものをI群(R A028・030・035・036・038)、含むものをII群(R A029・031・037・039)として検討を加える。

まず、両者の前後関係について土師器壺の器形に注目してみていく。これまでの研究成果によると、ロクロ使用の土師器壺は断面形が「椀形」を嗜好するものから口縁部が外反するもの、さらに底部脇

が屈曲するものへ変化すると考えられている（白鳥1980・村田1995・西澤2005）。これを参考すると、本遺跡では相対的にD類が占く次いでEからF類へと移行するものと考えられ、D・E類のみで構成されるI群のはうがF類を含むII群よりも古いと判断できる。その他の器種についてみると、土師器壺はC・D類が混在しており両群における比率はほとんど変わらない。

このようにみていくと、I群は土師器壺がD・E類のみで構成されること、断面形が逆台形を志向した7世紀以来の伝統を引くタイプがみられないことから白鳥良一のいう「C群土器」（以下、白鳥○群とする）以降の土器群であり、さらに白鳥E群以降に出現する土師器高台壺が含まれていないことから白鳥D群に併行する土器群と考えられる。白鳥D群は村田晃一のいう「1群土器」（村田1995）に相当し、多賀城周辺では黒筆90号式期の施釉陶器と併伴することから9世紀後半代と考えられている。II群については、土師器壺にD・E類より後出の要素をもった土師器壺F類と高台壺がみられる事から、白鳥E群以降に併行する土器群と考えられる。ただし、底部脇が屈曲するF類は依然として客体的な存在であることから、F類が主体となる時期（10世紀前半）よりは古いと考えられる。これらを総合すると、II群は9世紀後半～10世紀初頭に属するものと考えておきたい。この他、R Z034の土師器壺D類は9世紀後半代に位置付けられる「北奥型壺」（伊藤2006）であることからI群、R Z033の土師器壺E類も同時期と考えておきたい。

3 壺穴住居

14棟検出した。調査区中央～南側を巡るR G056内に4棟（RA036～039）、調査区南東側に6棟（RA028～032・035）、調査区北側に4棟（RA033・034・040・041）と3ヶ所に集中して造られている。出土土器の年代観から調査区北側の3棟（RA033・034・041）は奈良時代、それ以外のものは平安時代（9世紀後半～10世紀初頭）に属すると考えられる。構築年代の根拠については前節の通りであるため、ここでは構造に関する点についてみていくことにしたい。

平面形はいずれも方形で、床面積は3.42～21.46m²である。建て替え拡張を行ったと考えられるRA031が最も大きいが、その他はほとんどが10m²以下と小型である。本遺跡における過去の調査で検出された壺穴住居と規模的にはほぼ同じであり、構築年代による差異も見出せない。また、近隣の遺跡で壺穴住居の床面積が掲載されている事例（細谷地第4・5次・本宮熊堂B第25次・野古A第23・24・29次など）と比較しても突出したものはないことから、本遺跡の壺穴住居は遺跡周辺では平均的な規模のものといえる。検出面からの深さは10～54cmで、削平の影響もあって構築当時より浅くなっている。ただし、廻縁の天井部が残存しているものについては比較的本来の深さに近いと考えられる。なお、柱穴については大型のRA031で規則的な配置が見られるものの、小型のものは配置が不規則なものや検出されないものがほとんどであった。

床面の構築には、①掘り方を掘り、貼床を敷設するもの（RA035～041）と②貼床を敷設せずⅢ層を平坦に整えるもの（RA028～034）がある。①には凹凸が著しいもの（RA035・039）と細かい凹みを埋める程度のもの（RA036～038）があるが、いずれも壁面付近が深く、中央が浅いといったような掘削時の法則性は見出せなかった。②に属するものは、上面が黒く変色・硬く締まった部分があるため一見すると貼床が敷設されているように見えるが、断ち割りによる断面観察ではこの変色部分は2cm以下と非常に薄いことから、これらは住居使用の痕跡として生じたものと考えられる。

カマドは、奈良時代に属するものは西壁（北西壁）中央に設置されているのに対し、平安時代に属するものは東壁のいずれかのコーナー付近に設置されるものが多い。ソテの構築方法は、地山削り出

しをベースにするもの（RA028・029など）、礫を芯材として使用するもの（RA039）、芯材を用いないものがある（RA036など）。いずれも主体となるのは粘性の高い土である。煙道は、平安時代のものは全て割り貫き式である。燃焼部の端から煙出しに向かって下っており（平均15度）、煙道と煙出し底面の境界が不明瞭なものが多い。奈良時代のものはいずれも天井部が削平されているが、周辺に礫の散布が見られないことから割り貫き式であったと想定される。残存部分の観察からは、平安時代のものに比べて煙道の傾斜は緩やかで、煙出しがピット状で煙道底面より深く掘り込まれている。なお、煙道の状況に比べてどの住居もカマド燃焼部付近はソデが崩落しているなど残存状況は悪く、なかにはカマドの袖部分を壊したり（RA036）、人為的な埋め戻しの後に煙出しに襷を詰めたりする例（RA035）が見られた。このことから、住居廃絶時には意図的にカマド周辺を壊す（機能を失わせる）といった行為が行われていたと考えられる。

付属施設としては、貯蔵用と考えられる土坑が設置される住居が多いが、この他にRA035では壁面を抉り込むように掘り込んだ「横穴状土坑」（高木2002）が検出されている。横穴状土坑は細谷地遺跡など本遺跡周辺の同時期の壺穴住居で確認例があるが、人為的に掘削されたという点を除いて用途に関しては不明である。

4 墓制関連の遺構

古墳

17基検出した（RZ014・017～032）。隣接する第7次調査を含めると、遺跡範囲の北側では24基の古墳が発見されたことになる⁽³⁾。遺跡範囲北側の境界となる旧河道に沿って分布しており、RZ030・031を除いて古墳同士が重複関係にあるものではなく、それぞれが5～20mの間隔で分布している。なお、出土土器の年代観と8世紀後半の壺穴住居に切られるもの（RA029）があることから、本遺跡の古墳は8世紀前半に属するものが多いと考えられる。

墳丘はいずれの古墳でも残存していないため構築方法は不明であるが、周溝の形態から円墳と考えられる。埋葬施設はRZ026で1基検出されており、棺の痕跡は確認できなかったが石材の出土がないことから「土壙型」の古墳（八木1996）と考えられる。なお、構築当時の地表面ごと墳丘が削平されているため、埋葬施設と墳丘の構築順序を判断することはできなかった⁽⁴⁾。また、周溝に比べて埋葬施設の残存する古墳が極端に少ないとから、相対的に周溝より高い位置に構築されていたと考えられる。すなわち埋葬施設よりも掘削深度が深かったため、墳丘・埋葬施設が消滅するほどの削平を被っても周溝は残存したものと考えられる。

本遺跡の古墳には周溝が全周するものではなく、全て開口部を有する。開口部は墳丘上へ登る通路の残存部分と考えられ、ほとんどのもので南東側に存在する。なお、周溝の開口部が1ヵ所のものと2ヵ所以上のものがあるが、周溝底面の深さに注目すると、①1ヵ所のみ開口する古墳では開口部に直行する側面部分が深く、開口部の反対側が浅いものが多い。②2ヵ所以上のものでは向かい合う開口部の一方の幅が狭く、周溝端部も緩やかに消滅する、という傾向がみられる。このことから、本遺跡の古墳にみられる開口部には古墳構築時に意図的に作り出されたものと周溝底面まで削平されることで開口部状になった部分があると考えられる。残存状況からの推定であるため例外もあると思われるが、本遺跡の古墳は1ヵ所のみ開口部を有する形態が基本形であったと考えておきたい。

零石川右岸域では、本遺跡のほかに太田船夷森古墳群・高館古墳群・飯岡沢田遺跡で古墳が確認されている。とくに旧河道を挟んで北側に位置する飯岡沢田遺跡では7世紀後半～9世紀前半頃に属す

る40基以上の「古墳（円形周溝）」が検出されており、年代・構築方法の点で本遺跡との共通点が多い。このことは、零石川右岸地域では奈良時代の前後に古墳を築くという風習があったこと、そして旧河道を挟んだ一帯が古代の墓域として利用されていたことを証明するものといえる。

墓 塚

副葬品の出土が皆無であったため、今回は①方形基調の平・断面形をしており底面が平坦に整えられている、②堆積土中（とくに中～下位）に人為堆積と考えられる層がある、という2点を根拠として7基を墓坑とした（R D115～121）。

古墳の分布域内に単独で存在しており、配置に規則性は認められないが、古墳の開口方向と同じく北東～南西方向に長軸をとるものが多い。棺の痕跡が残るものが少なく、鉄釘など木棺の存在を窺わせる遺物も出土していないため棺の有無・構造については不明な点が多い。しかし、底面の状況からR D116は小口板埋め込み式、R D119は四辺埋め込み式の木棺であったと考えられる。その他も木棺を使用したと考えたいが、底面幅が0.5m以下と狭いことから成人の仲展葬であれば直葬の可能性もある。被葬者の性格についても不明であるが、成人用とは考え難い規模のものが多いことから幼児埋葬用の墓坑の可能性もある。なお、年代については重複関係からR D116が8世紀代、R D117が10世紀以前と推定されるが、その他は出土遺物・重複関係とともに無いため不明である。

本遺跡の周辺では墓域と推定される飯岡沢田遺跡で84基、集落遺跡である細谷地遺跡・野古A遺跡などでも数基が確認されている。いずれも方形基調のプランで人為堆積層があるという点で共通しており、本遺跡周辺では奈良～平安時代には墳丘を築かない土坑墓（木棺墓）が墓制の一形態として存在しており、かつ古墳と異なり集落遺跡内でも使用された埋葬方法であったといえる。

土器埋設遺構

2基検出した。成形技法に相違はあるがいずれも9世紀後半代に位置付けられる特徴をもった土師器長胴壺が古墳の周溝脇の上坑内に1個体設置されているという状況で検出された。理由については後述するが、本遺跡の土器埋設遺構はいわゆる土器棺墓としての機能を有するものと考えられ、9世紀後半に土器を使用した埋葬が行われていたことを示す資料といえる。

古代の土器埋設遺構⁽³⁾については東北地方では古くから検討が行われており、とくに岩手県・青森県で出土例が多い（齐藤・沼山1974、沼山1980・1981）。ただし、発見された事例はいずれも土師器長胴壺を2個体以上使用した「合口壺棺墓」であり、単体で埋設される事例は本遺跡が初めてである。沼山によると、東北地方で出土する土師器合口壺棺墓は、①単独で設置され群集しない、②顯著な墳丘はなく地表下に埋納、③平面橢円形の土坑に横位に設置、④使用される壺は日常用のものを転用、⑤副葬品が出土するものは少ない、⑥多くは幼児埋葬用の可能性が高い、⑦構築時期は平安時代前半期、といった特徴があるとされている（沼山1981）。一方で、宮城県多賀城跡周辺では道路交差点付近に設置された事例があること、資料数の僅少さや丘陵部に立地する生産遺跡から検出される事例があることなどを根拠として「道」や生産に関係する祭祀施設として捉えられる可能性があるとし、壺棺墓という性格付けに対する疑惑も提示されている（佐藤1996、山口1996）。確かに岩手県木宿羽場遺跡や青森県野尻（1）遺跡における自然科学分析の結果からヒト遺体が埋葬された可能性が高いと考えられるが、東北地方では墓域内に存在するものやこれらで墓域を形成するものがないことから、祭祀に関連する施設であった可能性も十分考えられる。

本遺跡出土例に關してもヒト遺体の埋葬を示すものが検出されていないこと、古墳の脇に設置されているものの古墳の構築年代とは1世紀近い開きがあることなど、土器棺墓とするには根拠として弱い部分はある。しかし、沼山の提示した壺棺墓としての特徴をほぼ備えていること、近畿地方の事例

では古墳周辺に古墳構築後一定期間を置いて設置されることが大半であることから（山田1979、角南2007）、設置状況・年代に共通点がある本遺跡出土例については近畿地方の事例と同様の意図をもつて設置された土器棺墓であったと考えておきたい⁽⁶⁾。

なお、土器棺墓とした場合、被葬者の性格が問題となってくる。本遺跡出土事例は出土遺物がないことと脂肪酸分析を行っていないことから推定になるが、火葬骨が検出されなかつことと成人埋葬用としては小型であることなどを根拠として、子供（幼児）用の埋葬施設と考えておきたい（沼山1981、角南2007）。この推定が正しいとすれば、本遺跡には幼児埋葬用の施設として土器棺墓と土坑墓（木棺墓）という二種類が存在していた可能性がある。

5 鉄鐸に関する検討

R A032堅穴住居から1点(71)とR Z032古墳の周溝から4点(166～169)出土している。鉄鐸とは薄い鉄板を卷いて円筒形にしたもので、内部に棒状の舌を取り付けて音を鳴らす道具と考えられており、単独で使用されるものと錫杖状鉄製品の付属品がある⁽⁷⁾。古墳時代中期（5世紀後半～6世紀）の事例を初現として平安時代（11世紀代）まで全国各地で出土する遺物であり、とくに単独で使用される鉄鐸は長野県、錫杖状鉄製品の付属品は東北地方（とくに岩手県と青森県）での出土が多い（原1996、井上2002・2006、小保内2005）。以下では、先学の研究成果を参考に本遺跡出土の鉄鐸について若干の検討を行ってみたい。

形態的特徴

本遺跡出土例は、大きく上端と下端の直径がほぼ同じ円筒形(71)と上端より下端が広がる円錐形(166～169)に分類することができる⁽⁸⁾。このうち71と168は内部に舌と考えられる棒状鉄製品が認められる。いずれも全長は4.5cm以下で、穿孔が施されているものは皆無であった。

単独で使用される鉄鐸は日光男体山頂遺跡のものを祖形として全国に広まったものと考えられており（井上2006）、宮城県東山遺跡や石川県寺家遺跡出土例のように内部に舌を伴う円錐形が多い。一方で錫杖状鉄製品に付属するものは円筒形で舌を伴わないものが主流であり、全長が5cmを超えるものは少ない。ただし、両者の形態は混在しており、単独使用の鉄鐸でも舌を伴わない円筒形（青森県熊野草遺跡例）、錫杖状鉄製品の付属品でも円錐形（青森県野木遺跡）は確認されている。また、出現から消滅まで大きな型式変化が認められない遺物であり、鉄鐸のみの出土では単独使用のものか否か、そして製作年代を判断するのは困難である。したがって本遺跡出土例についても推定となるが、今回は舌の有無を根拠として円筒形だが舌を伴う71は単独で使用された鉄鐸、円錐形だが舌を伴わない166・167・169、及び舌を伴うが168は錫杖状鉄製品の付属品になるものとしておきたい。

出土遺跡の分布・年代

東北地方における鉄鐸出土遺跡の分布をみると、青森県の津軽平野南東部と太平洋沿岸（八戸市周辺）、岩手県の北上川中・下流域と太平洋沿岸（宮古市周辺）に集中している。出土する遺跡は集落が9割近くを占め、次いで工房（製鉄関連）・古墳群・墓地・官衙関連遺跡となっている⁽⁹⁾。出土遺構をみると、集落遺跡では堅穴住居からの出土が多く、その他には土坑・堅穴状遺構がある。古墳からの出土は岩手県長根I遺跡の22号古墳と本遺跡のR Z032古墳の2例である。しかも長根I遺跡22号墳では主体部の堆積土最上位から錫杖状鉄製品に伴って出土しており、R Z032のように周溝底面付近から出土した事例は初めてである。この他には秋田県湯ノ沢F遺跡7号土坑墓に副葬された例や青森県貝ノ山遺跡のように錫杖状鉄製品の一部として土坑内に埋納された例などがあるが、当時の

使用状況を推定できるような出土状況の資料はほとんどない。

併伴遺物の年代観を参照して年代についてみていくと、東北地方では8世紀後半の岩手県山田町沢田Ⅱ遺跡出土例を最古として10世紀後半～11世紀前半の青森県林ノ前遺跡出土例まで確認されている。ただし、出土点数は各時期一様ではなく8世紀に遡る事例はごくわずかであるが、9世紀後半～10世紀には出土遺跡・点数が飛躍的に増加する。本遺跡出土例のうち堅穴住居出土の71は9世紀後半、古墳出土の166～169は8世紀後半のものと考えられる。とくに後者は東北地方における鉄錘（錫杖状鉄製品）導入期に属する新たな資料を追加したという点で意義があると考えられる。

用 途

鉄錘・錫杖状鉄製品を含めた東北地方の古代鉄製祭祀具は栃木県日光男体山頂遺跡出土仏具との共通性から雜密による影響下で儀礼に用いられた祭祀具と考えられており（井上2006）、本遺跡でも堅穴住居出土の71については祭祀具として使用されたと考えられる。しかし、周囲からの混入とは考え難い状況で出土した166～169についてはR Z 032古墳に関連する祭祀に使用された可能性は高いと考えられる。このことは、東北地方における導入期（8世紀後半）の鉄錘は雜密系の祭祀のみではなく葬送儀礼にも使用されていた可能性を窺わせるものといえるが、本遺跡と同様の状況で出土した事例が皆無であるためあくまで推定の域を出ない。これについては出土事例の増加を待って検討すべき課題であろう。

註

1. 今回は出土点数が少ないため参考にしていないが、この他に法量の小型化という変化も認められている（宇部2002）。
2. 須恵器壺も同様の器形が確認できるが、全形がわかる資料が少ないと今は細分を行っていない。
3. 遺跡範囲の東側に位置する第3次調査でも時期不明の円形周溝が2基検出されており、これらを含めると26基となる。
4. 末期古墳ではまだ埋葬施設を掘削して棺を設置し、その後に埋葬施設の埋め戻しと壇丘盛土確保のために周溝を掘削する方法が一般的と考えられている（藤澤1997、小谷地2007）。
5. この種の遺構については「合口埋葬遺構」・「土師器合口壺棺墓」・「合口壺棺」と様々な名称が使用されてきた（沼山1981、山口1996など）。しかし、本遺跡出土例は「合口」ではないこと（状態）、埋葬以外にも用いられる事例があること（用途）、壺以外の器物も使用されること（器種）などの点を考慮して、本書では状態・用途・器種に影響を受けない名称として「土師壺棺遺構」を用いている。
6. 合口のものより少數ではあるが土師器壺を単体で使用するものも確認されている（角南2007）。
7. 錫杖状鉄製品に付属する鉄錘については筒形金具・無舌鉄錘など別の名称を用いるべきとの指摘もあるが（小保内2006）、形態的に分類できないものも存在するため今回は専門家を一括して「鉄錘」と呼称する。
8. 今回は、実測図上で「下端幅＝上端幅 > 3 mm」のものを円錐形とした。
9. 東北地方と同じく出土例の多い長野県でもほとんどが集落遺跡または墓跡からの出土である。

〈参考文献〉

- 伊藤伸幸 2006 「陣屋型壺・出羽型壺・北欧型壺」『古岡康輔先生古希記念論集 陶磁器の社会史』同刊行会
 井上雅孝 2002 「錫杖状鉄製品の研究」『岩手考古学』第14号 岩手県考古学会
 井上雅孝 2004 「錫杖状鉄製品の研究（2）」『岩手考古学』第16号 岩手県考古学会
 井上雅孝 2006 「古代鉄製祭祀具から見た般若の信仰と儀礼 一錫杖・三筋鏡・鉄錘・錫杖状鉄製品」『立正史学』第99号
 岩田明広 1998 「床の深化を考える」『土壁』第2号 考古学を楽しむ会
 小保内裕之 1999 「2 吉森県」『考古学論究』第5号 立正大学考古学会
 小保内裕之 2005 「古代錘（考古学からみた古代）」『福地村史 上巻』
 本村 高 2000 「第301号土器埋設遺構について」『野尻（1）進藤田』青森県埋蔵文化財調査報告書第277集
 小松則也 2004a 「故岡才川遺跡第5次調査」『岩手県埋蔵文化財発掘調査報告（平成15年度）』岩手県文化振興事業団埋蔵文

- 化財調査報告書第455集
- 小松則也 2004b 「飯岡才川遺跡第6次調査」[岩手県埋蔵文化財発掘調査報告（平成15年度）] 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第455集
- 小谷地章 2007 「第Ⅱ章 考察」[阿光坊古墳群発掘調査報告書] おいらせ町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 今野公顯編 2006 『貴水への人口～古代般夷首長の墓～』感闇市遺跡の学び館 第5回企画展記録
- 齊藤直巳・沼山澤喜治 1974 「東北地方の合口埋蔵遺構について」[北奥古代文化] 第6号
- 佐藤敏幸 2001 「赤井遺跡1～牡鹿横・郡家推定地～」矢本町文化財調査報告書第14集
- 佐藤則之 1996 「3. 土器埋設遺構について」[山干遺跡 IV] 宮城県教育委員会
- 島原弘征・村田淳 2007 「土器・陶磁器の容量・計測の目的と方法について」[紀要X-XVI] (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
- 白鳥良一 1980 「多賀城出土上器の変遷」[研究紀要 IV] 宮城県多賀城跡調査研究所
- 杉沢昭太郎 2001 「台太郎遺跡第26次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第416集
- 角南聰一郎 2007 「土師器使用土器棺について～近畿地方を中心とした検討～」[元興寺文化財研究所創立40周年記念論文集] クバプロ
- 高木 晃はる 2002 「細谷地遺跡第4・5次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第414集
- 滝浩二郎 1999 「飯岡才川遺跡第2次調査」[岩手県埋蔵文化財発掘調査報告（平成10年度）] 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第311集
- 中田 達 2001 「飯岡才川遺跡第4次調査」[岩手県埋蔵文化財発掘調査時報（平成12年度）] 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第370集
- 中田 達 2002 「飯岡才川遺跡第3次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第393集
- 西澤正晴ほか 2005 「西川口・塙向II遺跡発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第464集
- 西澤正晴ほか 2006 「飯岡沢田遺跡第9・10次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第489集
- 沼山源喜治 1980 「東北北部の古代・中世墓について」[口高見園 菊池啓悟郎学兄連署記念論集] 同刊行会
- 沼山源喜治 1981 「土御器合口壺棺墓について～東日本における諸例を中心に～」[考古学雑誌] 第66巻第4号
- 濱田 宏 2007 「飯岡才川遺跡第8・9次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第494集
- 原 明芳 1996 「信濃の鉄鋤」「信州の人と鉄」信濃毎日新聞社
- 半澤武彦 2001 「飯岡才川遺跡第3次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第393集
- 東日本埋蔵文化財研究会 1995 「東日本における奈良・平安時代の幕刺」
- 東日本埋蔵文化財研究会 1997 「遺物からみた伴侶国家と蝦夷」
- 福島正和ほか 2007 「野古A遺跡第23・24・29次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第501集
- 藤澤 敦 1997 「東北北部の末期古墳の主体部構造」[東北史学会考古部会研究発表要旨・発表資料]
- 村木 敏次 2006 「本宮熊堂A遺跡第24次・本宮熊堂B遺跡第25次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第470集
- 村田晃一 1995 「宮城郡における10世紀前後の土器」[福島考古] 第36号
- 村田 淳はる 2008 「飯岡才川遺跡第7・13次・細谷地遺跡第12次・久盛遺跡第9次発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第508集
- 八木光則 1996 「東北北部の終末期古墳群」[岩手考古学] 第8号
- 柳沢和明 1994 「東北の施釉陶器－陸奥を中心にして－」[古代の土器研究－律令的土器様式の西・東3 施釉陶器－]
- 山口博之 1996 「山形県の古代のひとびとはどんな墓に入ったのか」[西村山の歴史と文化 III] 西村山地域史研究会
- 山田良三 1979 「土師器合口壺棺墓について」[櫻原考古学研究所論集 第四] 吉川弘文館

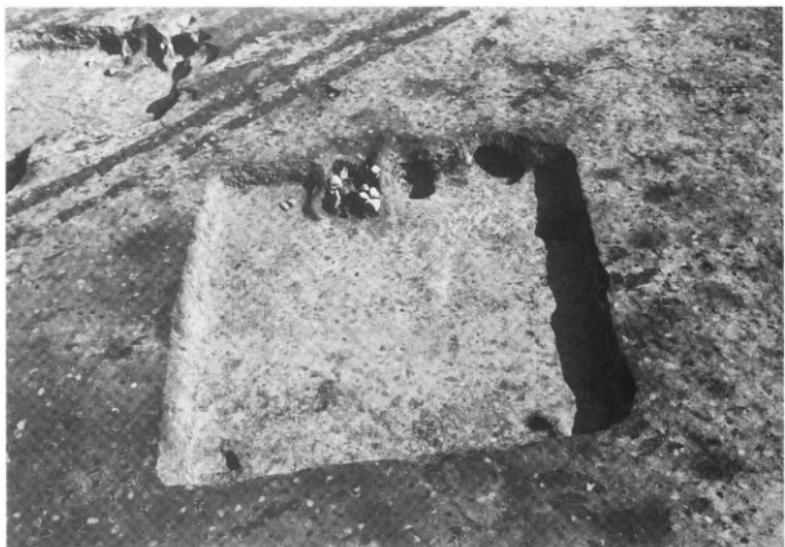
写 真 図 版



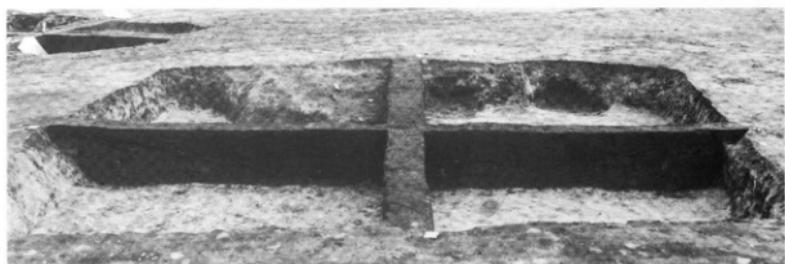
調査区北側古墳検出状況（東から）



調査区南東側竪穴住居群（北から）



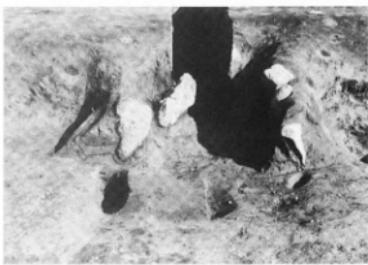
完掘（西から）



堆積土断面（西から）



カマド断面（西から）



カマド（西から）



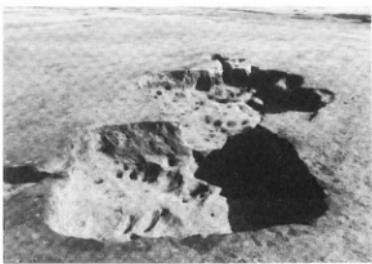
完掘（西から）



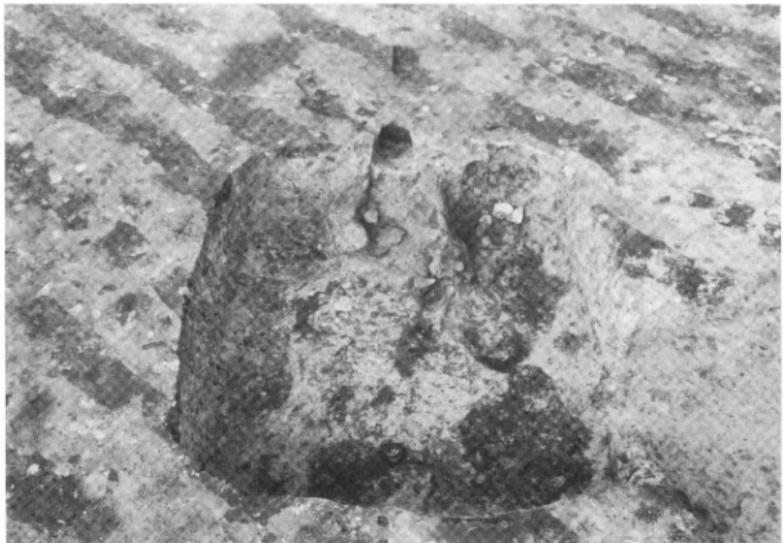
堆積土断面（南から）



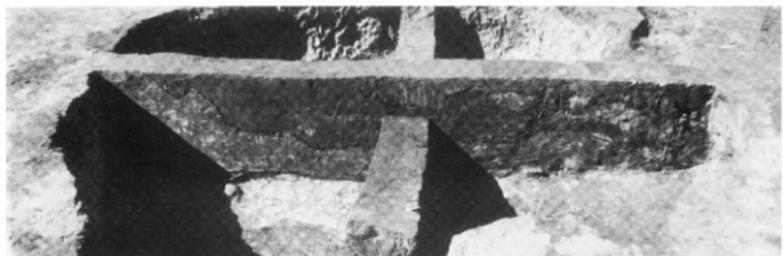
カマド（西から）



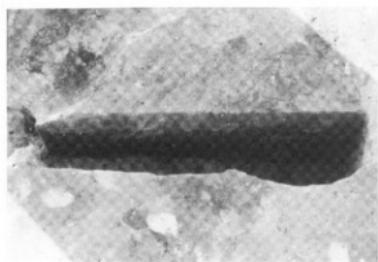
床面除去（RA029・030 西から）



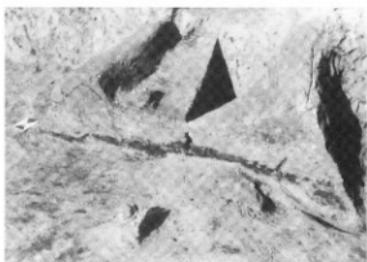
完掘（南から）



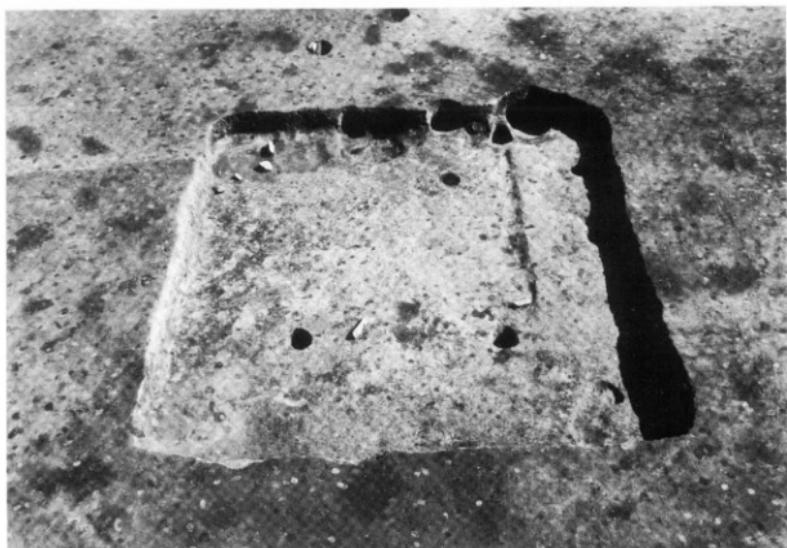
堆積土断面（東から）



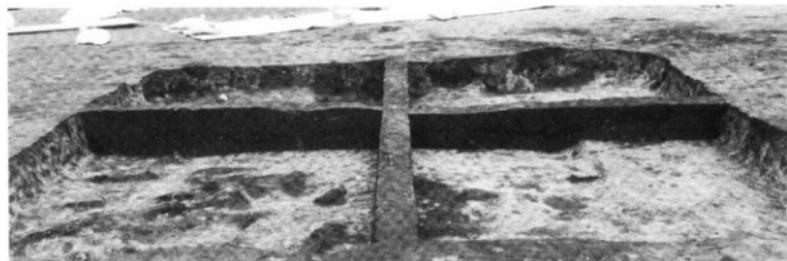
煙道断面（東から）



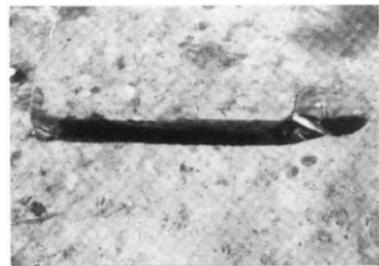
カマド断面（南から）



完掘（西から）



堆積土断面（西から）



煙道断面（南から）



カマド（南西から）



穴掘（西から）



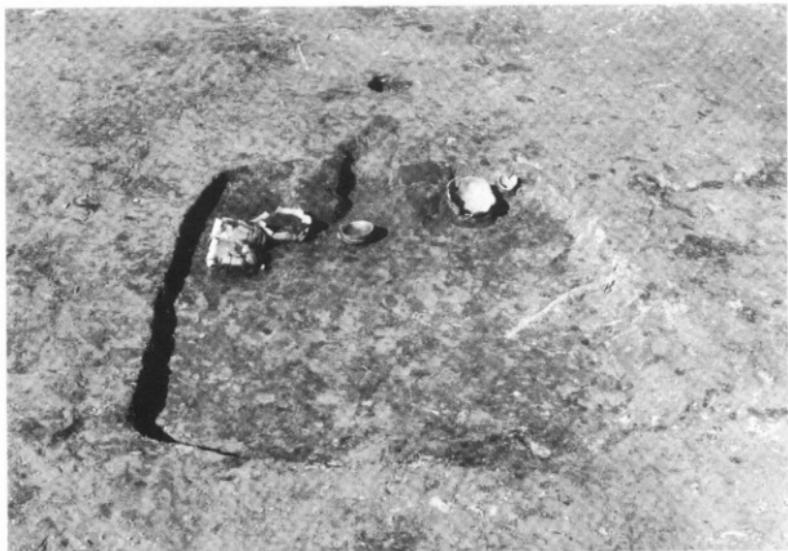
堆積土断面（南から）



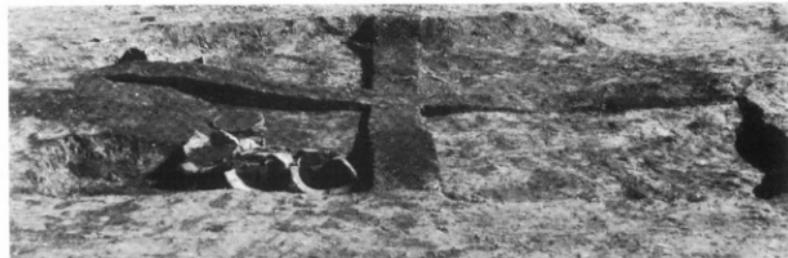
煙道断面（南から）



カマド断面（西から）



完掘（南東から）



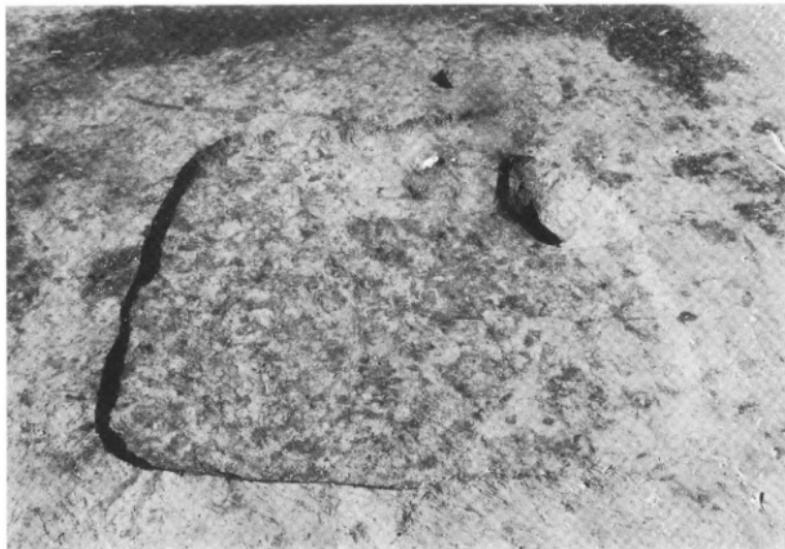
堆積土断面（南西から）



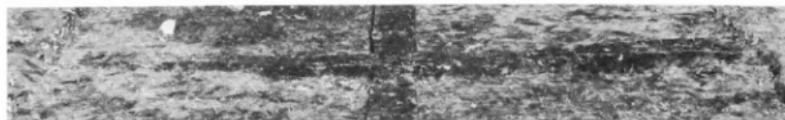
カマド断面（西から）



遺物出土状況（東から）



窓掘（東から）



堆積土断面（南から）



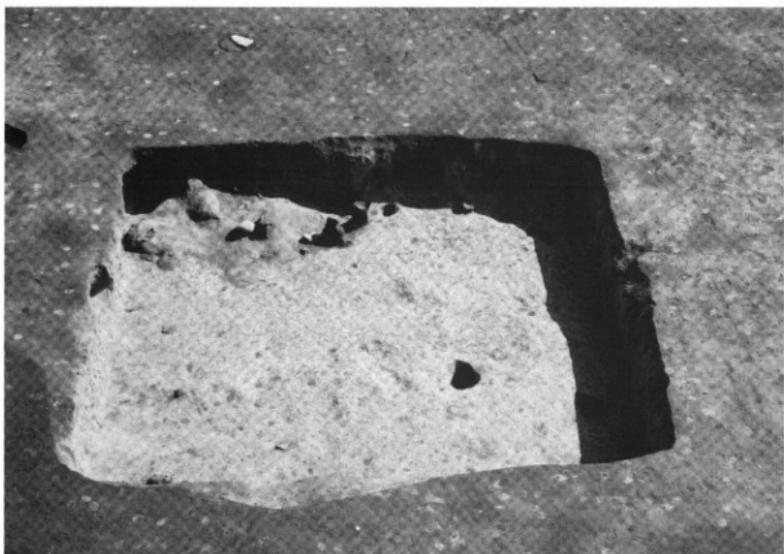
堆積土断面（西から）



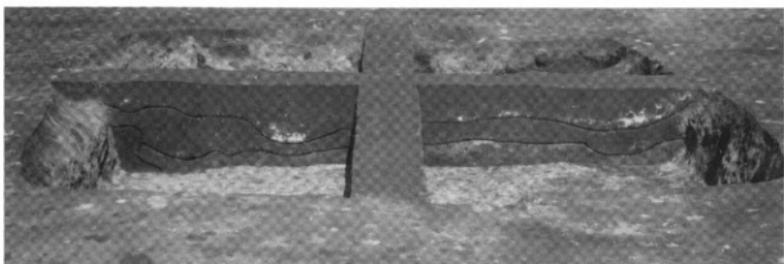
焼土たちわり（南から）



Pit1 断面（南から）



窓枠（西から）



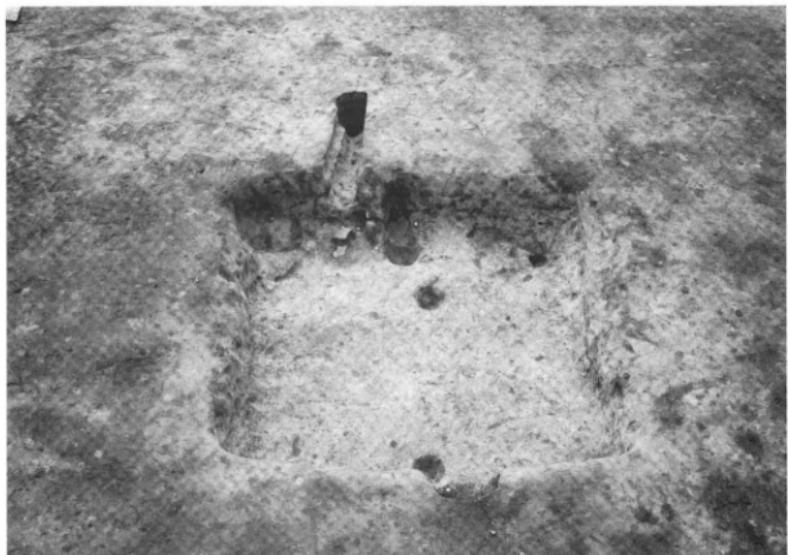
堆積土断面（南から）



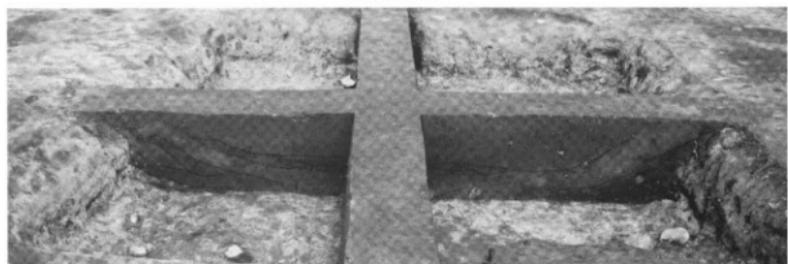
煙道断面（北から）



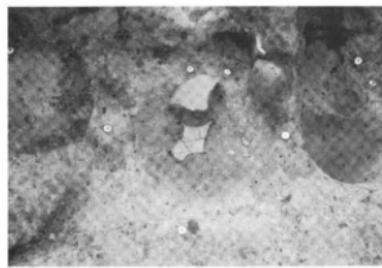
焼土たちわり（北から）



実掘（北から）



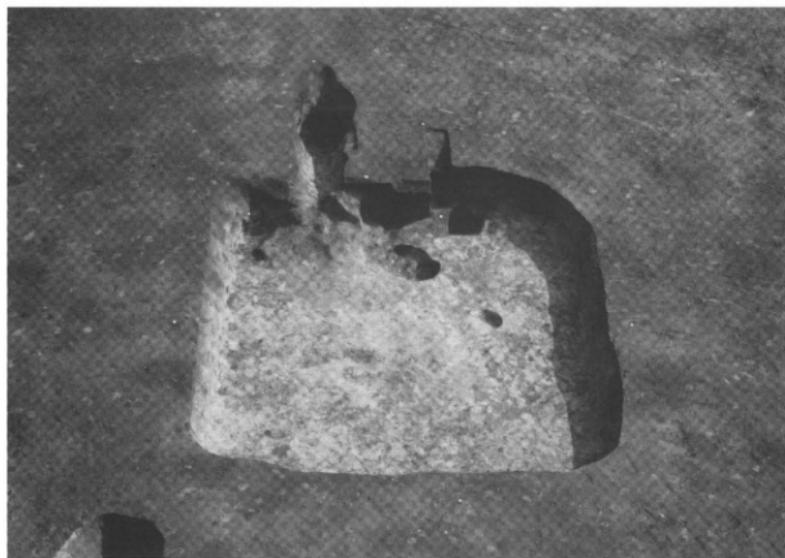
堆積土断面（南から）



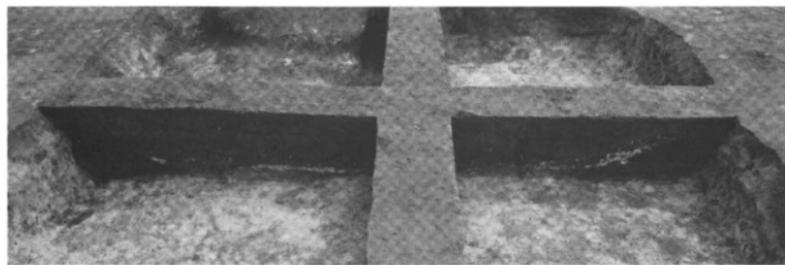
焼土（北から）



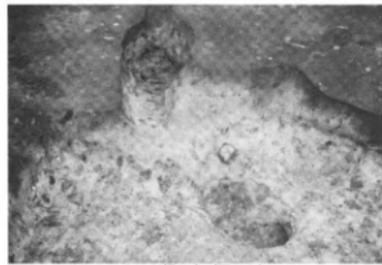
遺物出土状況（東から）



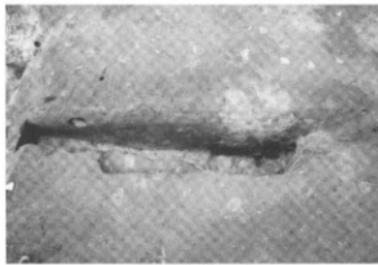
窯場（西から）



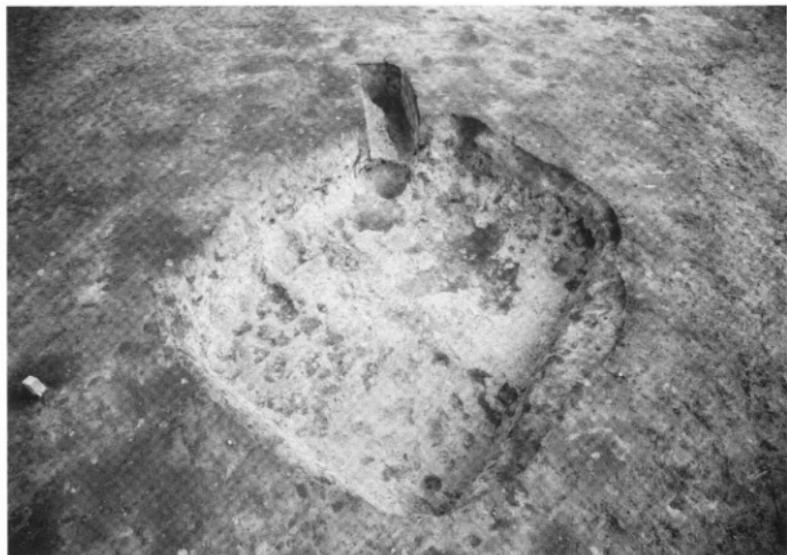
堆積土断面（西から）



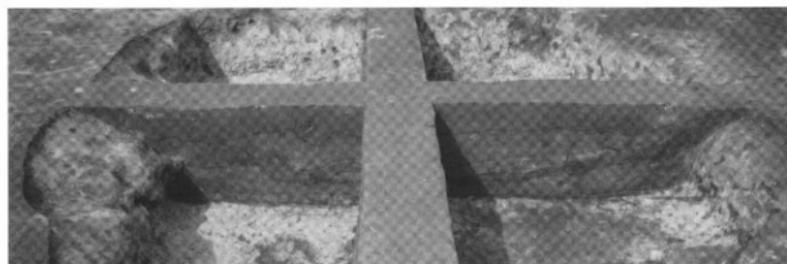
カマド掘り方（西から）



窯道断面（南から）



完掘（南西から）



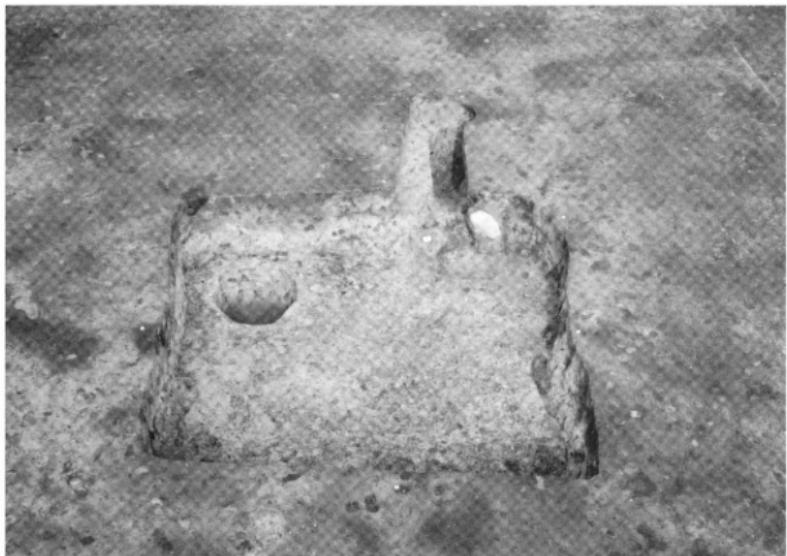
堆積土断面（東から）



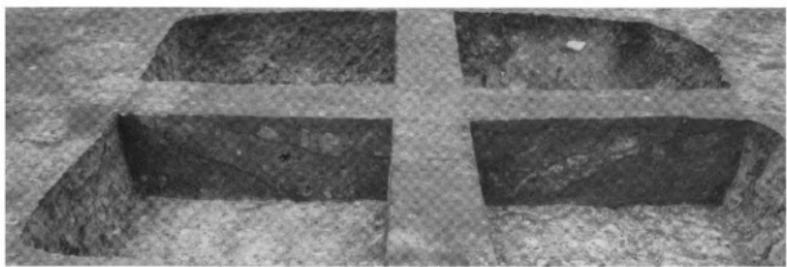
カマド（南西から）



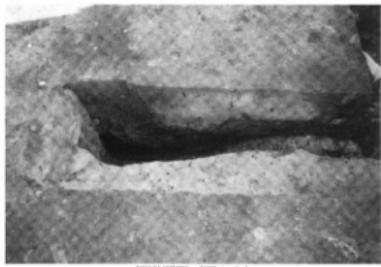
カマド断面（南西から）



完掘（南から）



堆積土断面（南から）



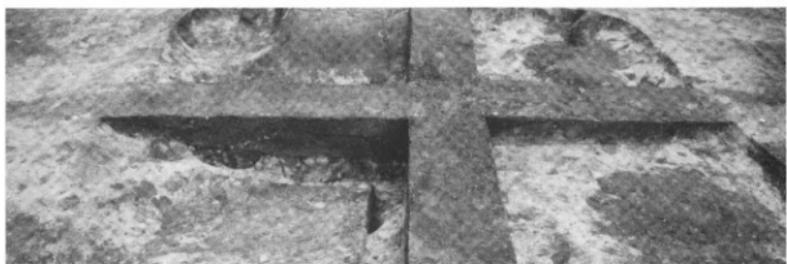
煙道断面（西から）



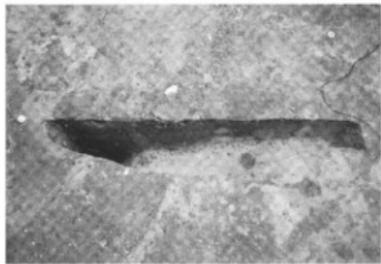
カマドたちわり（南から）



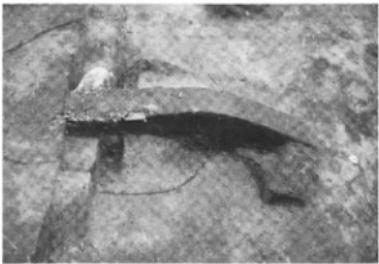
穴掘（南から）



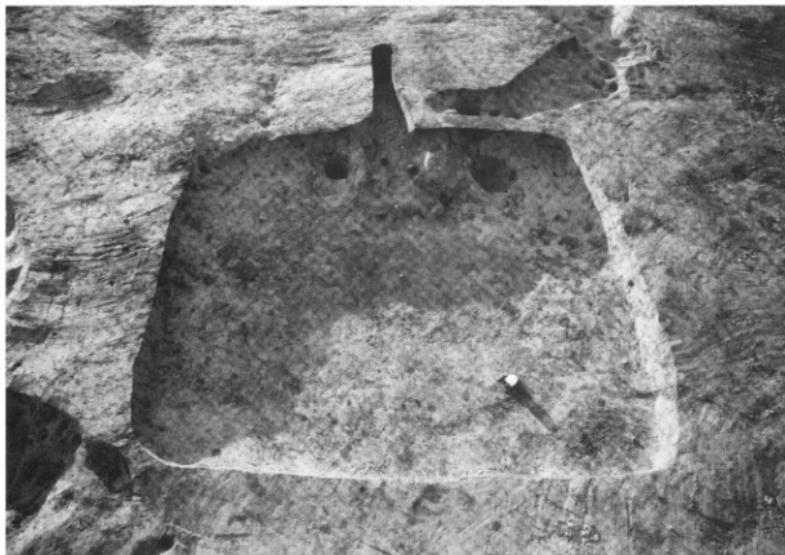
堆積土断面（南から）



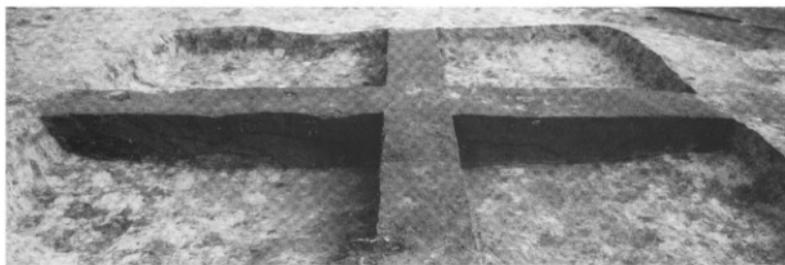
煙道断面（西から）



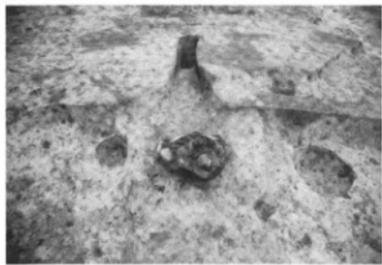
カマド断面（西から）



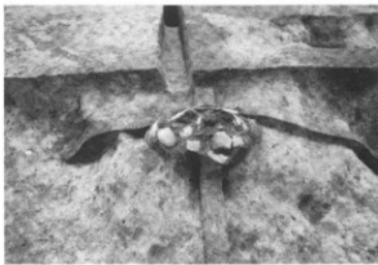
穴掘（東から）



堆積土断面（西から）



カマド（東から）



カマド断面（東から）



完掘（東から）



RZ014・RD116 断面（南から）



RZ014 断面拡大（南から）



検出状況（東から）

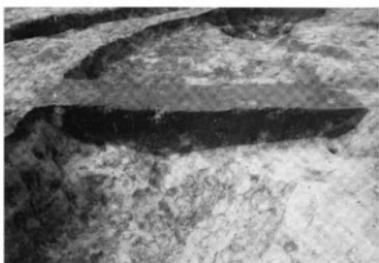


第7次調査区（北から）

写真図版 16 RZ014



竪掘（東から）



断面 A（東から）



断面 B（東から）



付属土坑竪掘（西から）



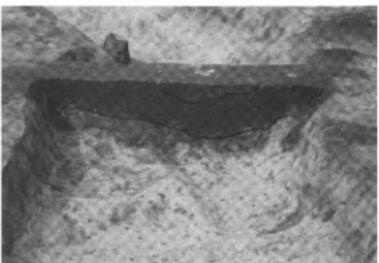
付属土坑断面（北から）



完掘（東から）



断面 D（南から）



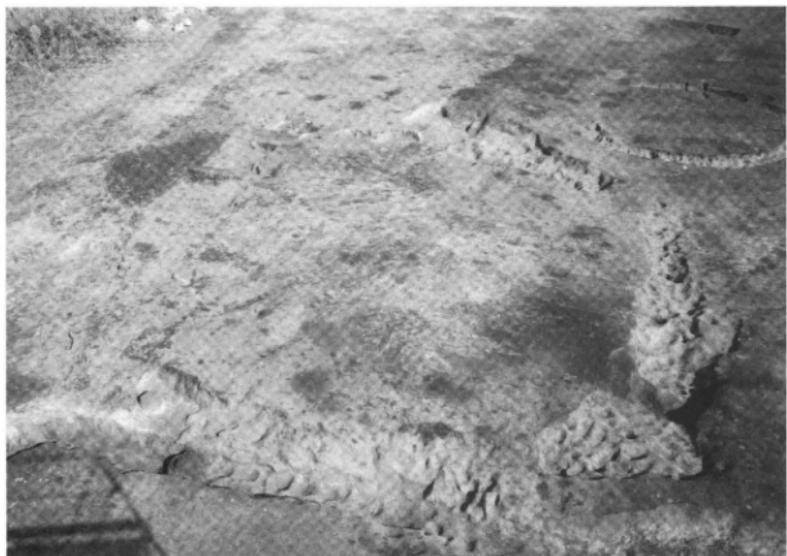
断面 B（東から）



断面 C（西から）



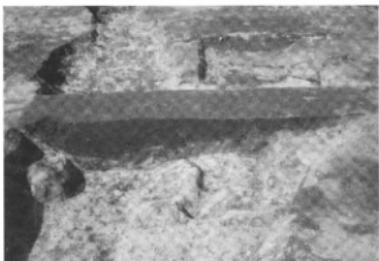
検出状況（東から）



実掘（南から）



断面D（東から）



断面B（東から）



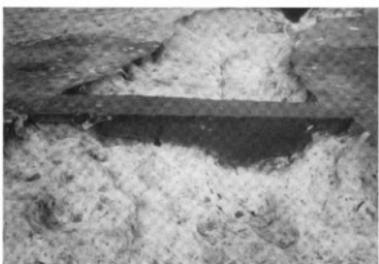
遺物出土状況（東から）



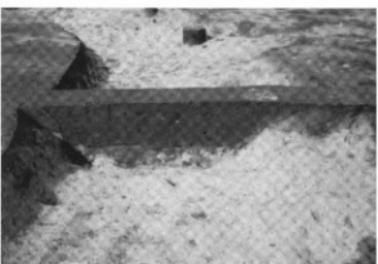
平成18年度調査開始状況



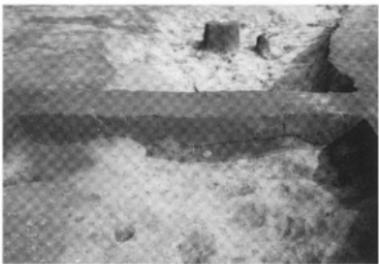
穴掘（東から）



断面 A（東から）



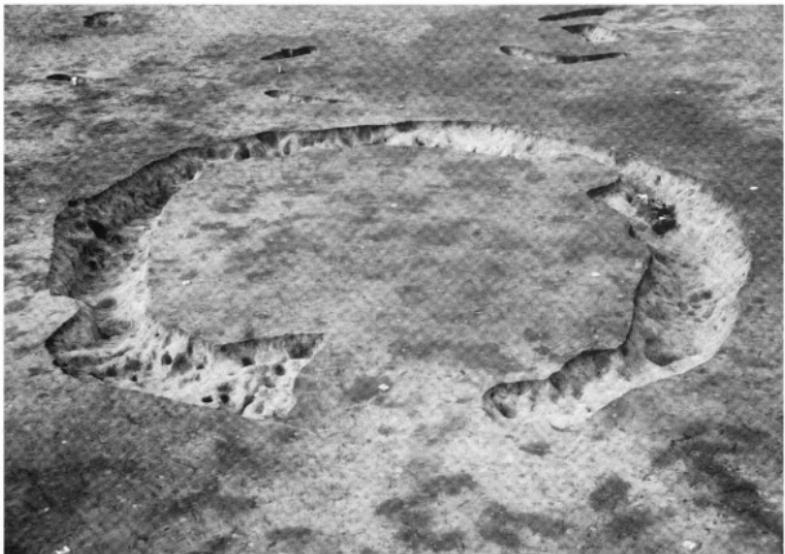
断面 B（東から）



断面 C（南から）



作業風景



完掘（東から）



断面 A（東から）



断面 B（東から）



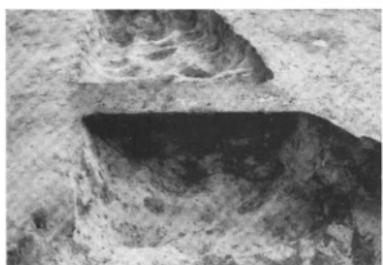
須恵器大甕（157）出土状況（1）



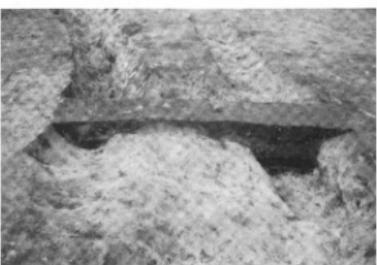
須恵器大甕（157）出土状況（2）



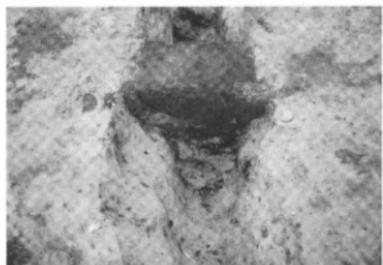
完掘（北西から）



断面 D（西から）



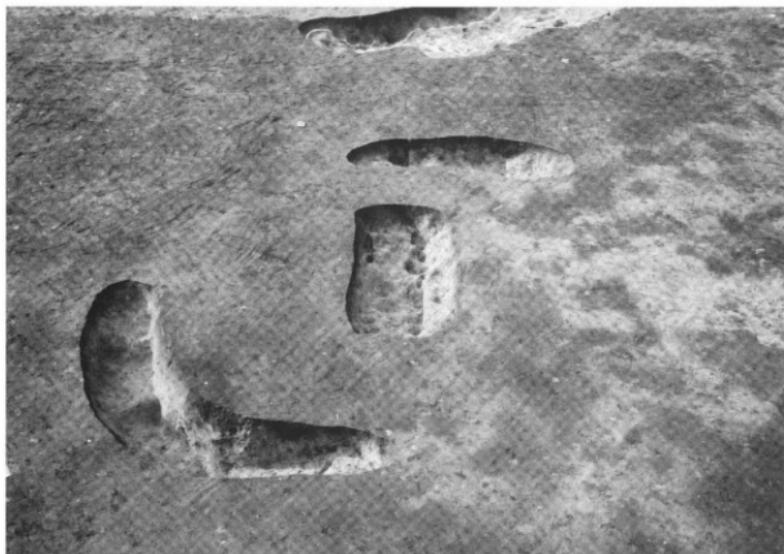
断面 A（南から）



断面 B（南から）



断面 C（西から）



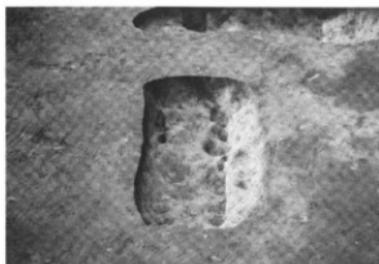
穴掘（東から）



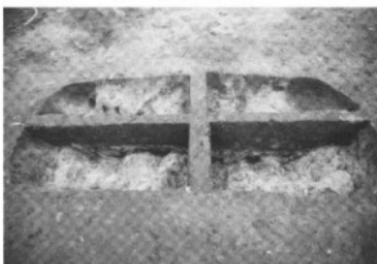
断面 A（南から）



断面 B（南西から）



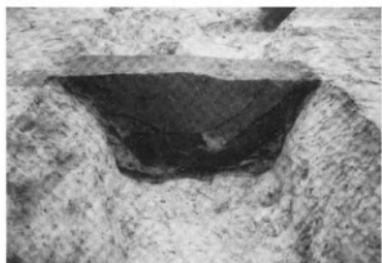
埋葬施設（西から）



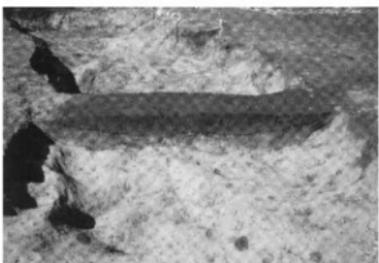
埋葬施設断面（南から）



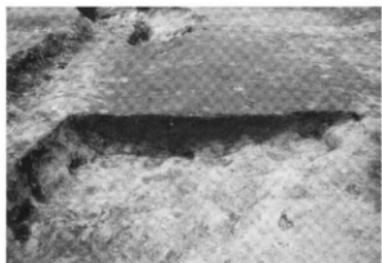
完掘（東から）



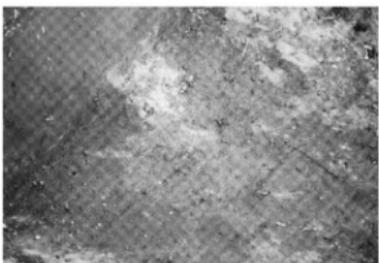
断面 A（東から）



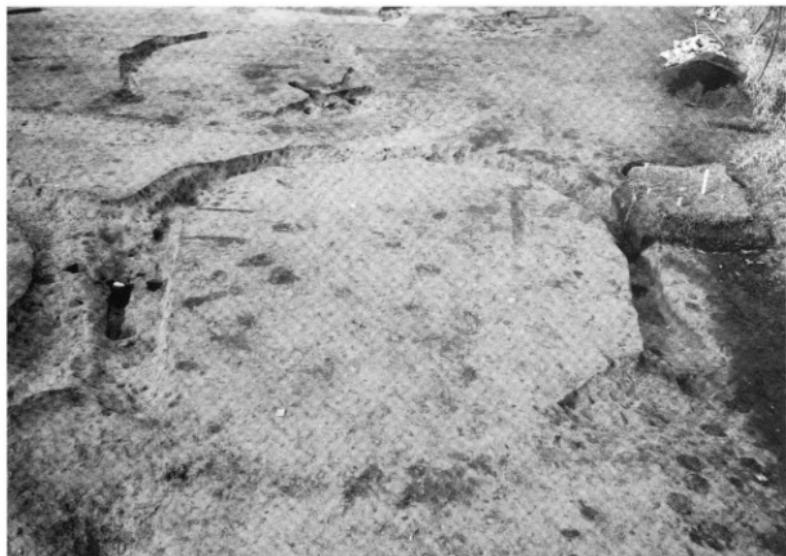
断面 B（東から）



断面 C（北から）



焼土検出状況（南から）



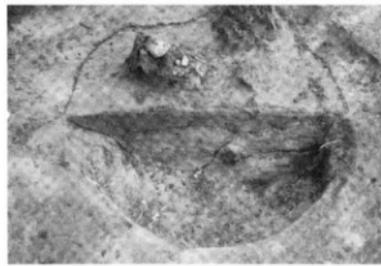
穴掘（東から）



断面 D（東から）



断面 B（東から）



付属土坑断面（西から）



須恵器大甌（161）出土状況



完掘（東から）



断面 E（東から）



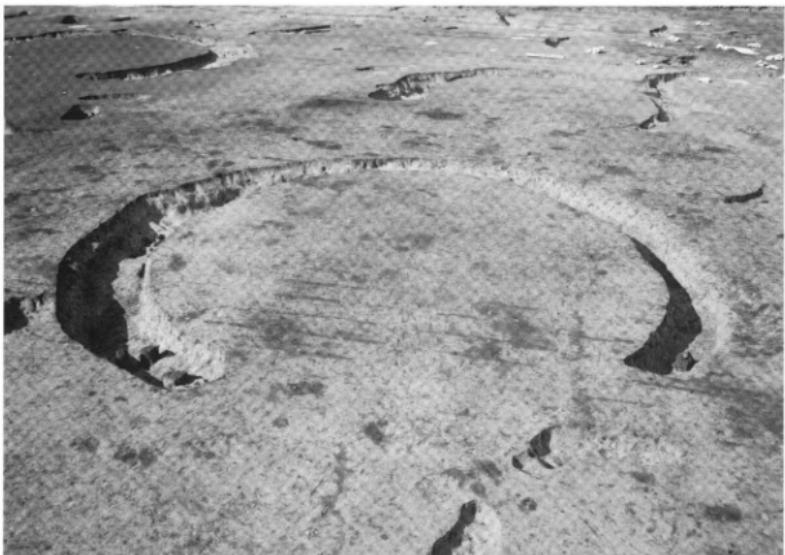
断面 A（東から）



断面 G（西から）



現地説明会



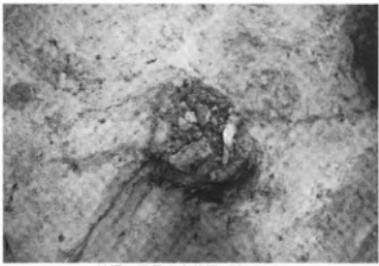
完掘（東から）



断面 A（東から）



断面 B（東から）



鉄鐸・刀子出土状況（南から）



土師器小甕（165）出土状況（北から）



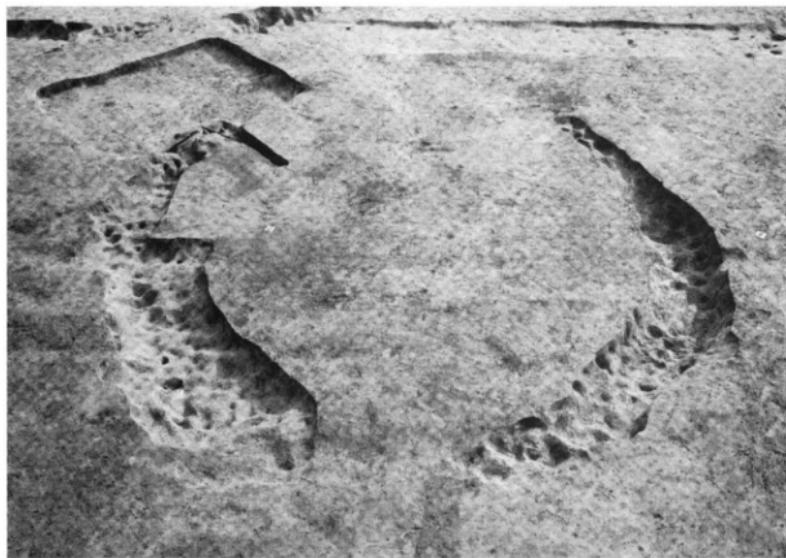
RZ019 完掘（南から）



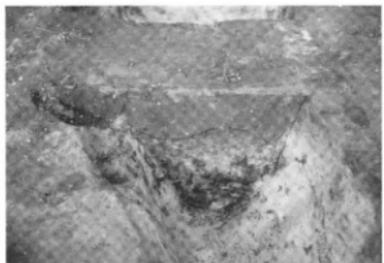
RZ021 完掘（西から）



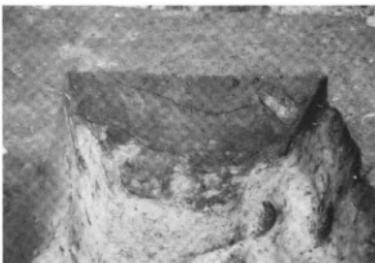
RZ027 完掘（南から）



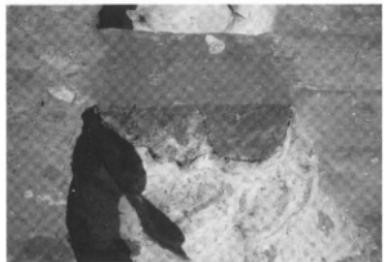
RZ029 完掘（西から）



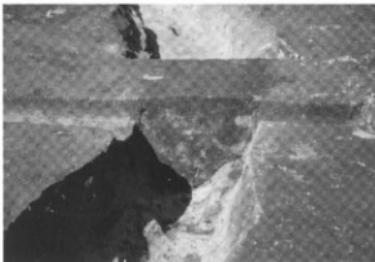
RZ019 断面 A (南から)



RZ019 断面 D (南から)



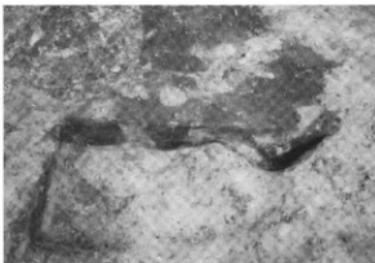
RZ021 断面 B (南から)



RZ021 断面 A (南から)



RZ027 断面 A (東から)



RZ027 断面 B (南から)



RZ029 断面 A (東から)



RZ029 断面 C (東から)



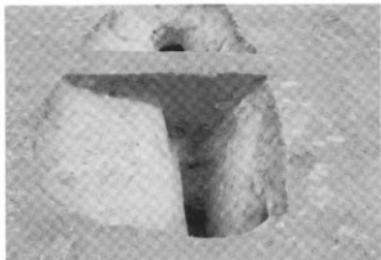
RD104 完掘 (東から)



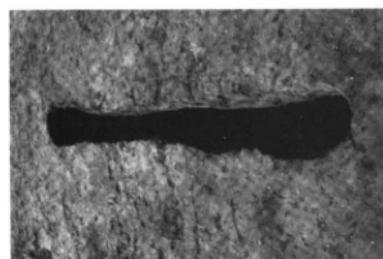
RD104 断面 (東から)



RD105 完掘 (東から)



RD105 断面 (東から)



RD106 完掘 (北東から)



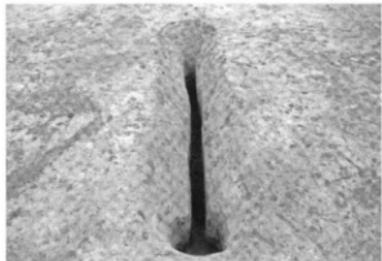
RD106 断面 (北東から)



RD107 完掘 (東から)



RD107 断面 (東から)



RD108 完掘（北から）



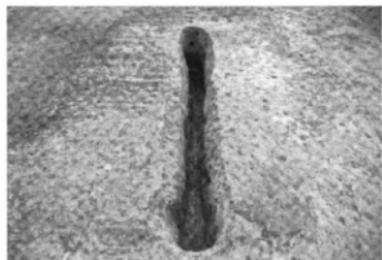
RD108 断面（北から）



RD109 完掘（東から）



RD109 断面（東から）



RD110 完掘（東から）



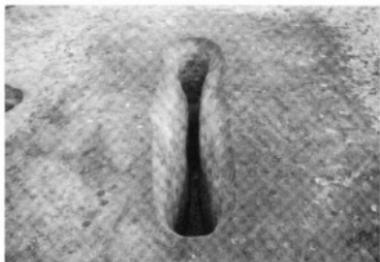
RD110 断面（東から）



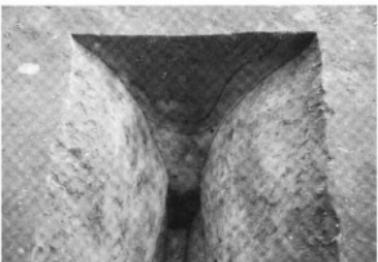
RD111 完掘（西から）



RD111 断面（西から）



RD112 完掘（西から）



RD112 断面（西から）



RD113 完掘（南東から）



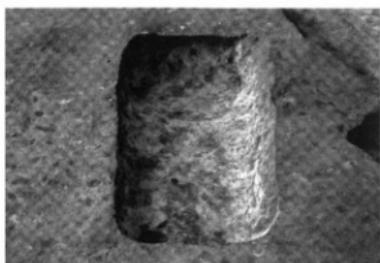
RD113 断面（南東から）



RD114 完掘（北西から）



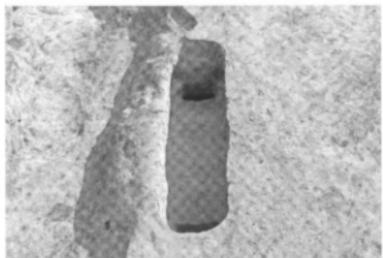
RD114 完掘（南東から）



RD115 完掘（東から）



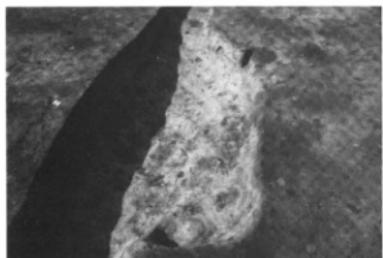
RD115 断面（東から）



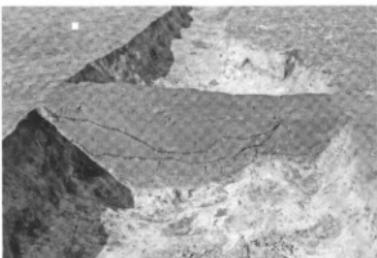
RD116 完掘（北から）



RD116 断面（南から）



RD117 完掘（西から）



RD117 断面（西から）



RD118 完掘（南から）



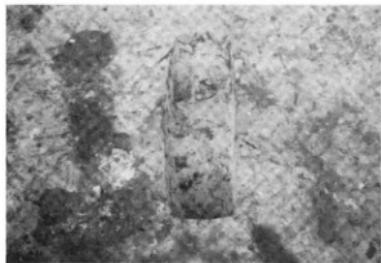
RD118 断面（南から）



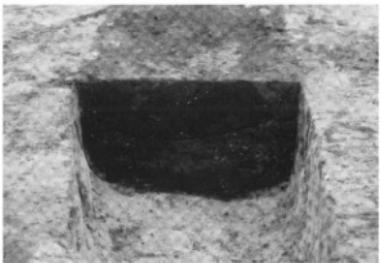
RD119 完掘（東から）



RD119 断面（東から）



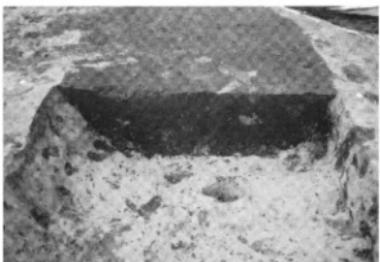
RD120 完掘（東から）



RD120 断面（東から）



RD121 完掘（東から）



RD121 断面（東から）



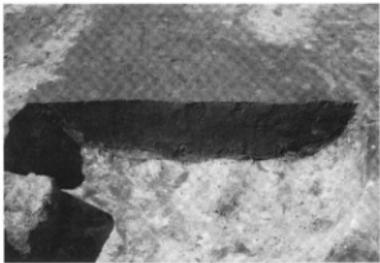
RD122 完掘（北から）



RD122 断面（北から）



RD123 完掘（西から）



RD123 断面（東から）



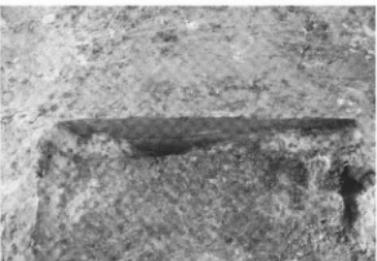
RD124 完撮（西から）



RD124 断面（東から）



RD125 炭化物出土状況（東から）



RD125 断面（東から）



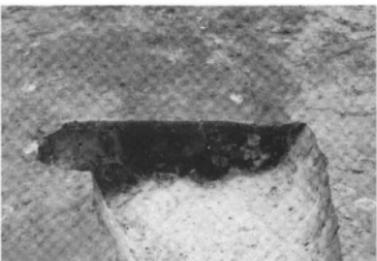
RD126 完撮（西から）



RD126 断面（東から）



RD127 完撮（東から）

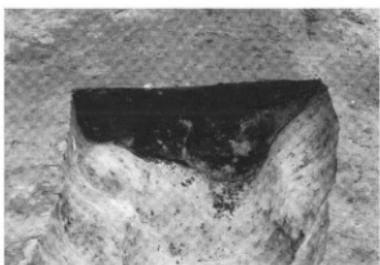


RD127 断面（東から）

写真図版 36 RD124 ~ 127



RD128 完掘（南から）



RD128 断面（南から）



RD129 完掘（南東から）



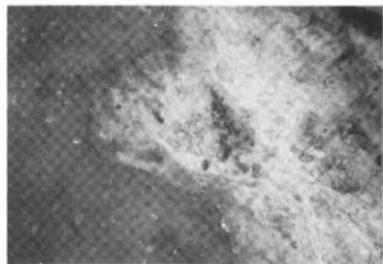
RD129 断面（南東から）



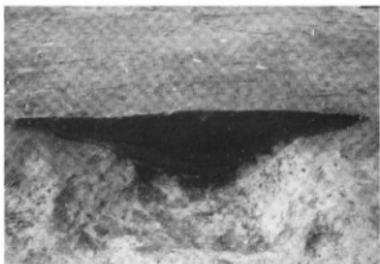
RD130 完掘（南東から）



RD130 断面（南東から）



RD131 完掘（南から）



RD131 断面（東から）



RD132 完掘（南西から）



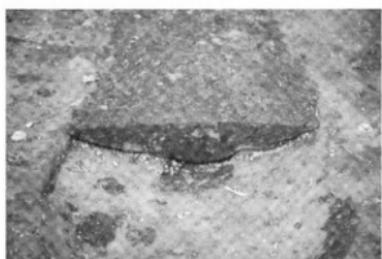
RD132 断面（南西から）



RD133・134 完掘（東から）



RD133 断面（西から）



RD134 断面（東から）



RD135 遺物出土状況（南東から）



RD135 完掘（南から）

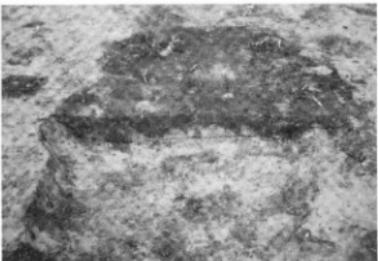


RD135 断面（南から）

写真図版 38 RD132～135



RD136 完掘（南から）



RD136 断面（南から）



RD137 完掘（南東から）



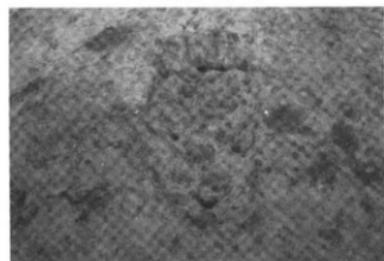
RD137 断面（南東から）



RD138 断面（東から）



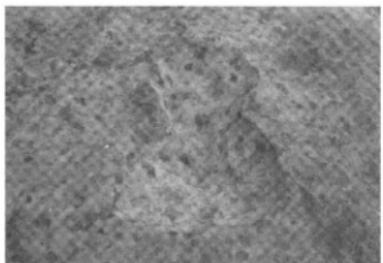
RD138 断面（東から）



RD139 完掘（南から）



RD139 断面（南から）



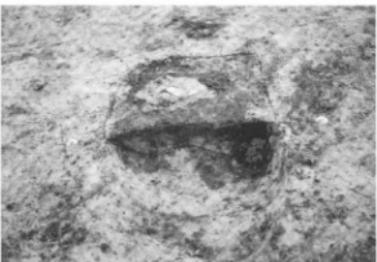
RD140 完掘 (西から)



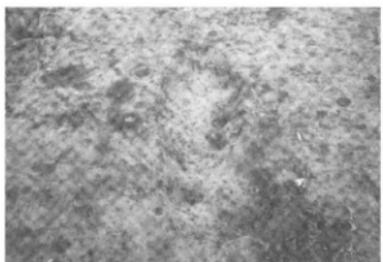
RD140 断面 (西から)



RD141 完掘 (北から)



RD141 断面 (北から)



RD142 断面 (南から)



RD142 断面 (南から)



RF002 検出 (東から)

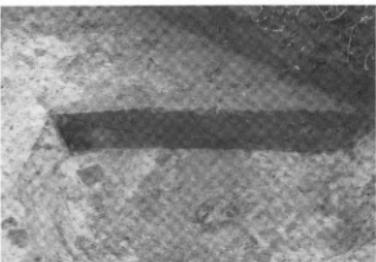


RF002 断面 (南から)

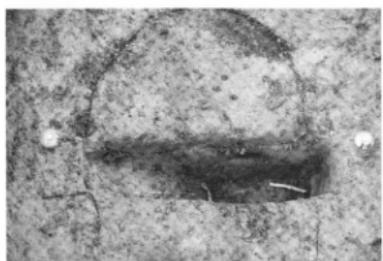
写真図版 40 RD140 ~ 142、RF002



RD143 完掘 (北東から)



RD143 断面 (南西から)



RD143 焼土裁ち割り (東から)



RD144 完掘 (南から)



RZ033 棚出 (東から)



RZ033 断面 (東から)



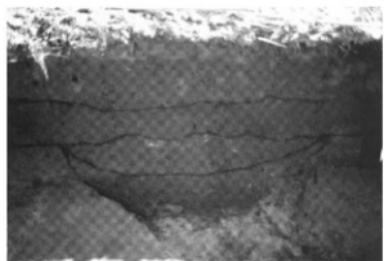
RZ034 完掘 (東から)



RZ034 断面 (西から)



完掘（南東から）



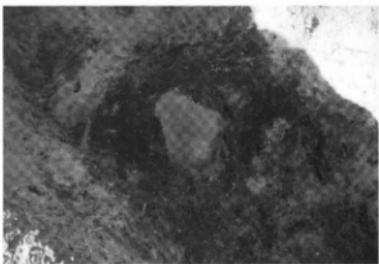
断面 E（北東から）



断面 B（東から）



土師器把手（186）出土状況



土師器坏（181）出土状況

写真図版 42 RG056



RG032 (北から)



RG055 (東から)



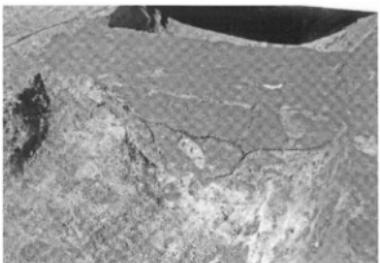
RG057 (南から)



RG058 (北から)



RG032 断面（南西から）



RG055 断面（東から）



RG057 断面 B（南から）

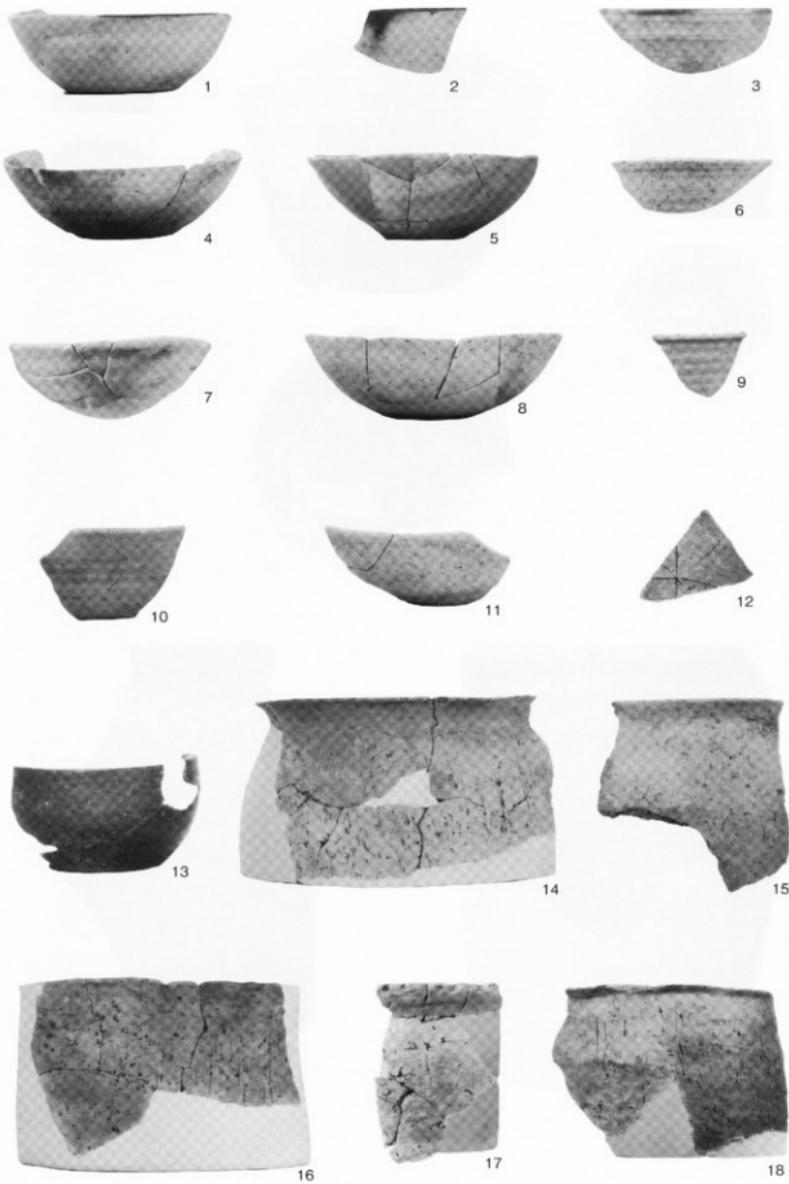


RG058 断面（南から）

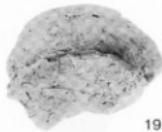


柱穴群（西から）

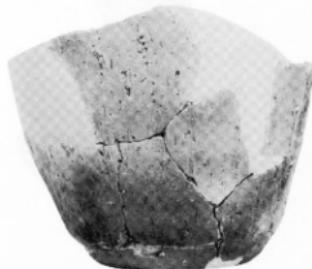
写真図版 44 RG 断面・柱穴群



写真図版 45 RAO28 出土遺物 (1)



19



21



20



22



23

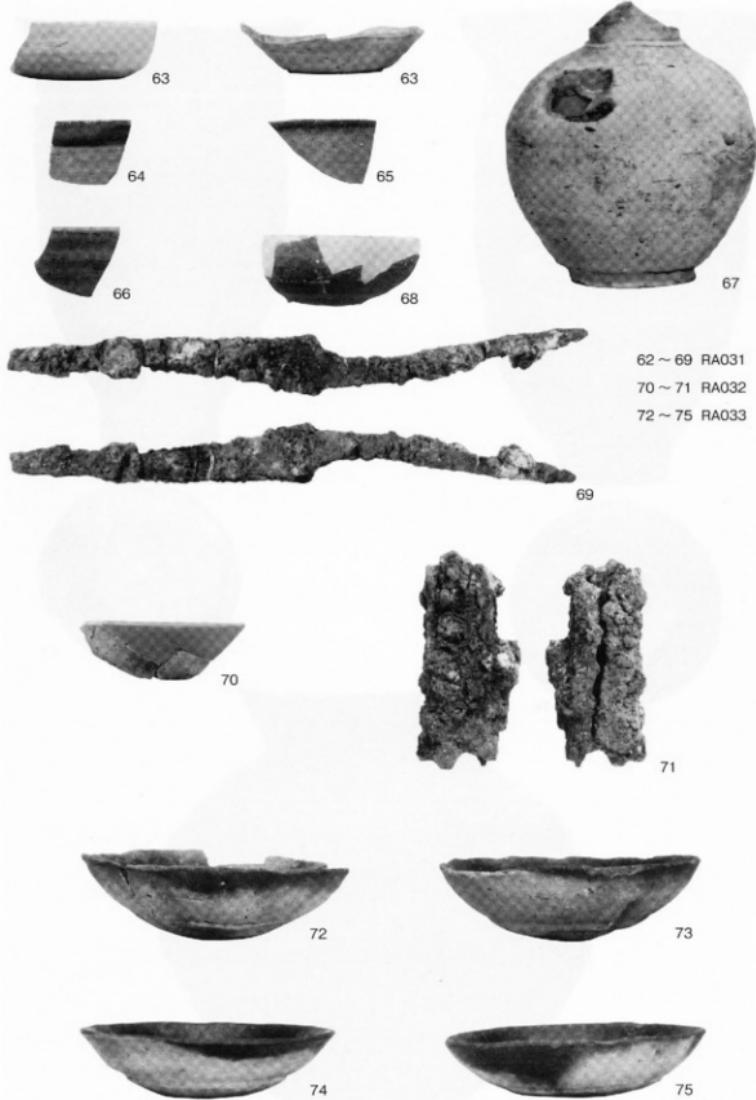
写真図版 46 RAO28 出土遺物 (2)



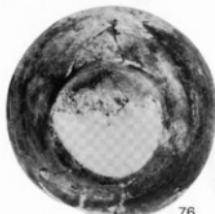
写真図版 47 RAO28・029 出土遺物



写真図版 48 RA029 ~ 031 出土遺物



写真図版 49 RA031 ~ 033 出土遺物



76

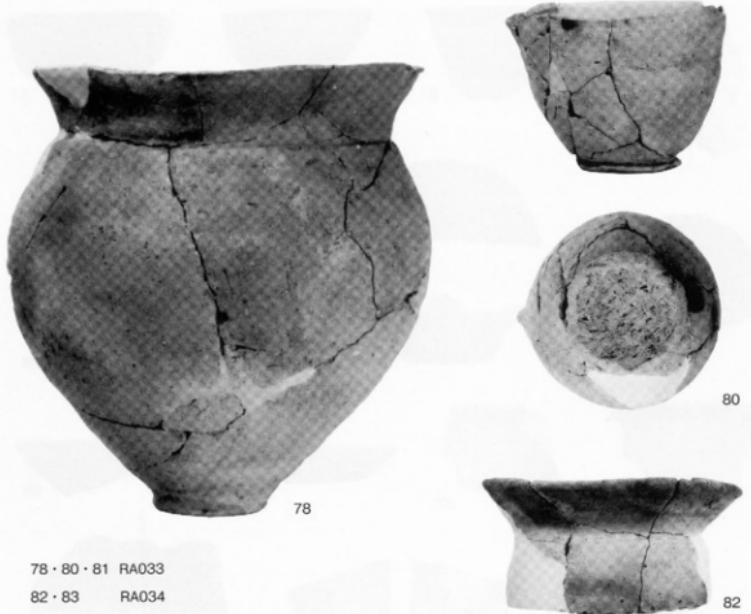


77

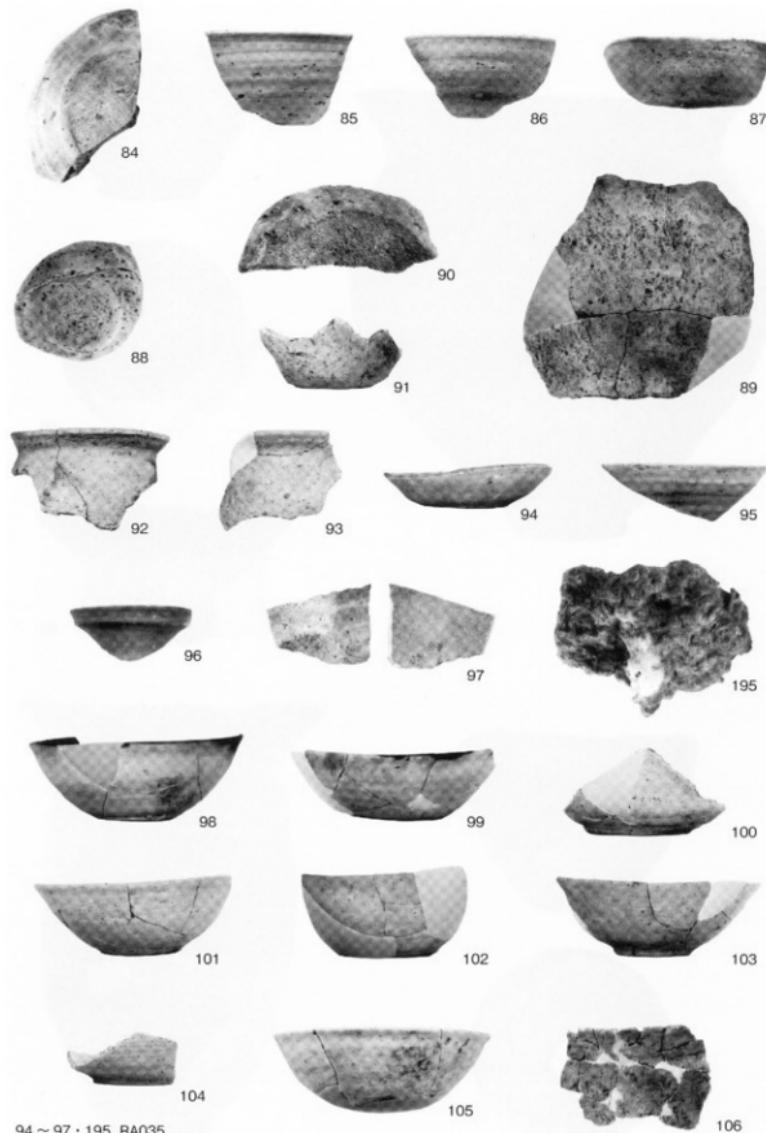


79

写真図版 50 RAO33 出土遺物



写真図版 51 RAO33 · 034 出土遺物

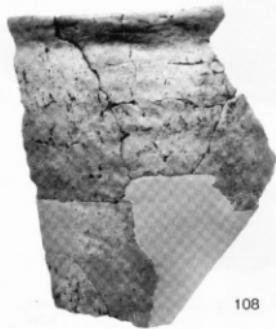


94 ~ 97 · 195 RA035

98 ~ 106 RA036



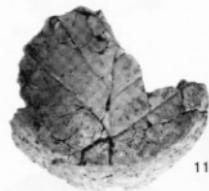
107



108



109



110



112



114



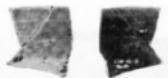
111



113



115



116



117



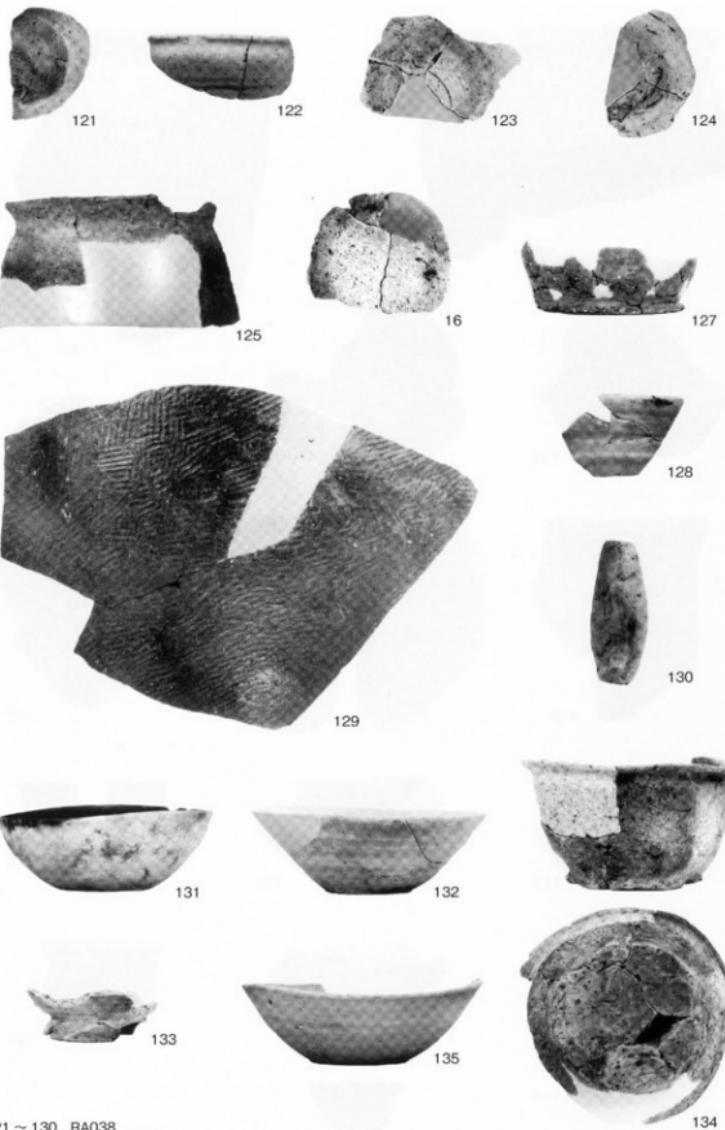
118



119

107 ~ 114 RA036

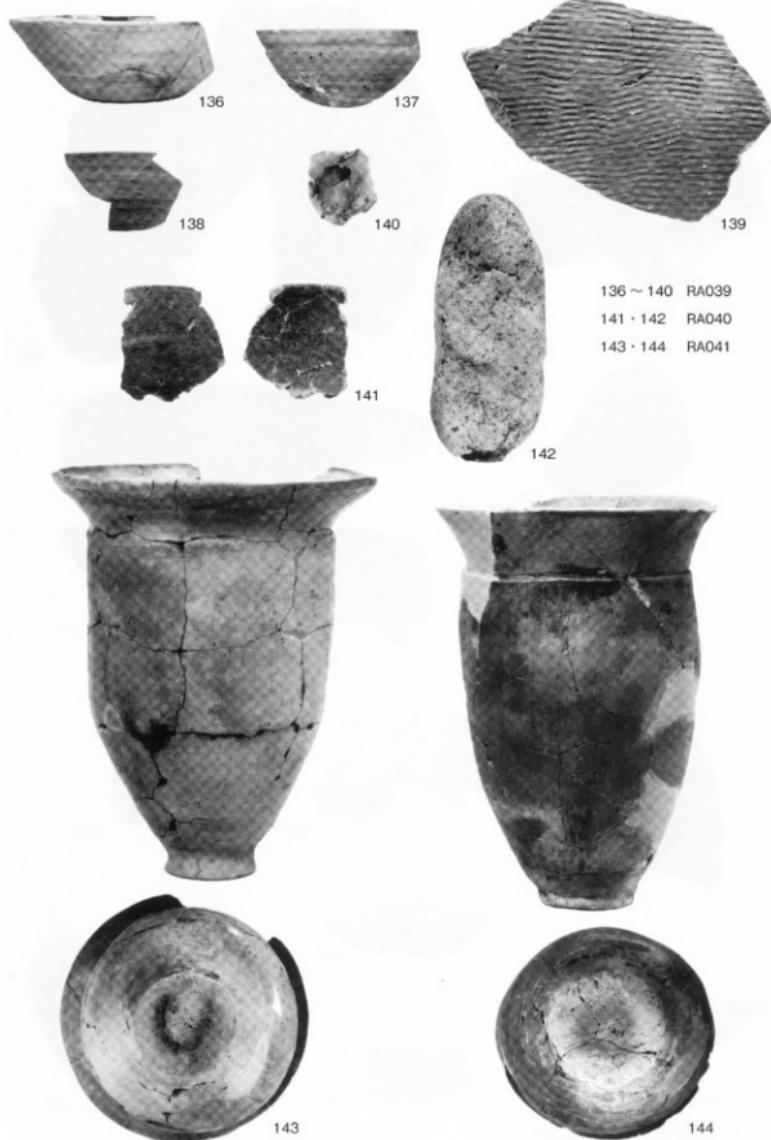
115 ~ 120 RA037



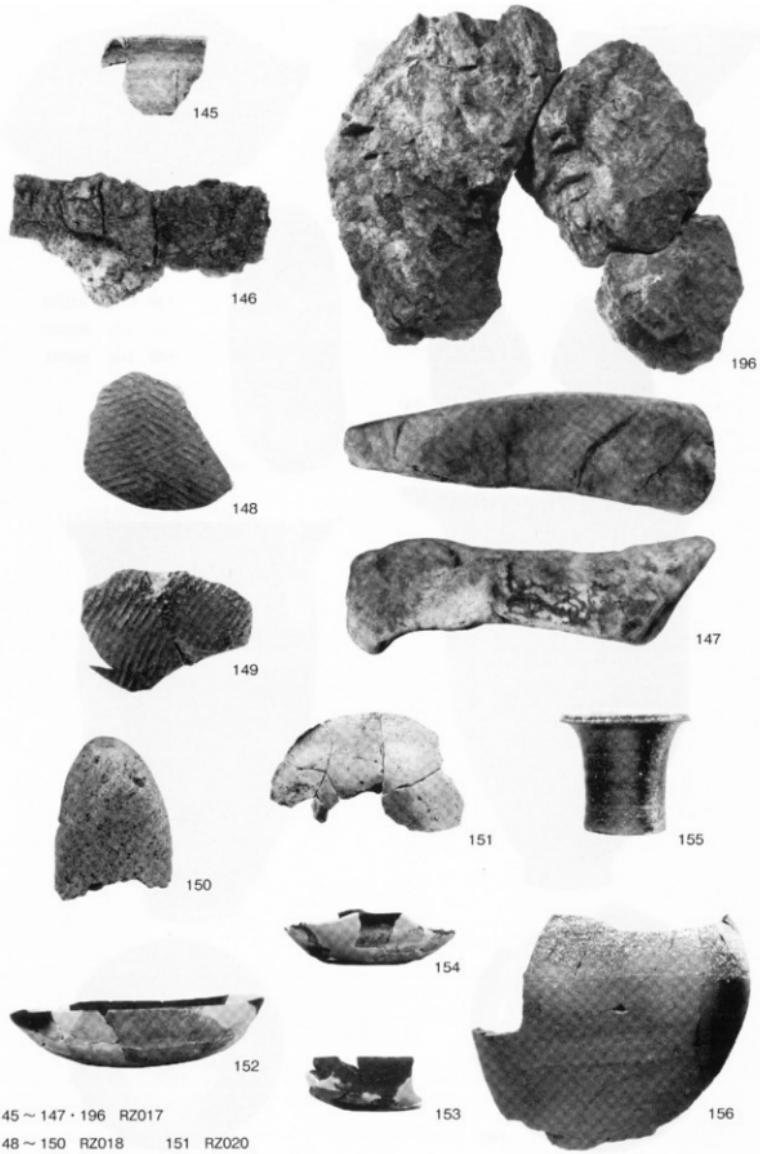
121 ~ 130 RA038

131 ~ 135 RA039

写真図版 54 RA038・039 出土遺物



写真図版 55 RAO39 ~ 041 出土遺物



145 ~ 147 · 196 RZ017

148 ~ 150 RZ018 151 RZ020

152 · 153 RZ022 154 ~ 150 RZ023

写真図版 56 RZ 古墳出土遺物 (1)



160



159



162



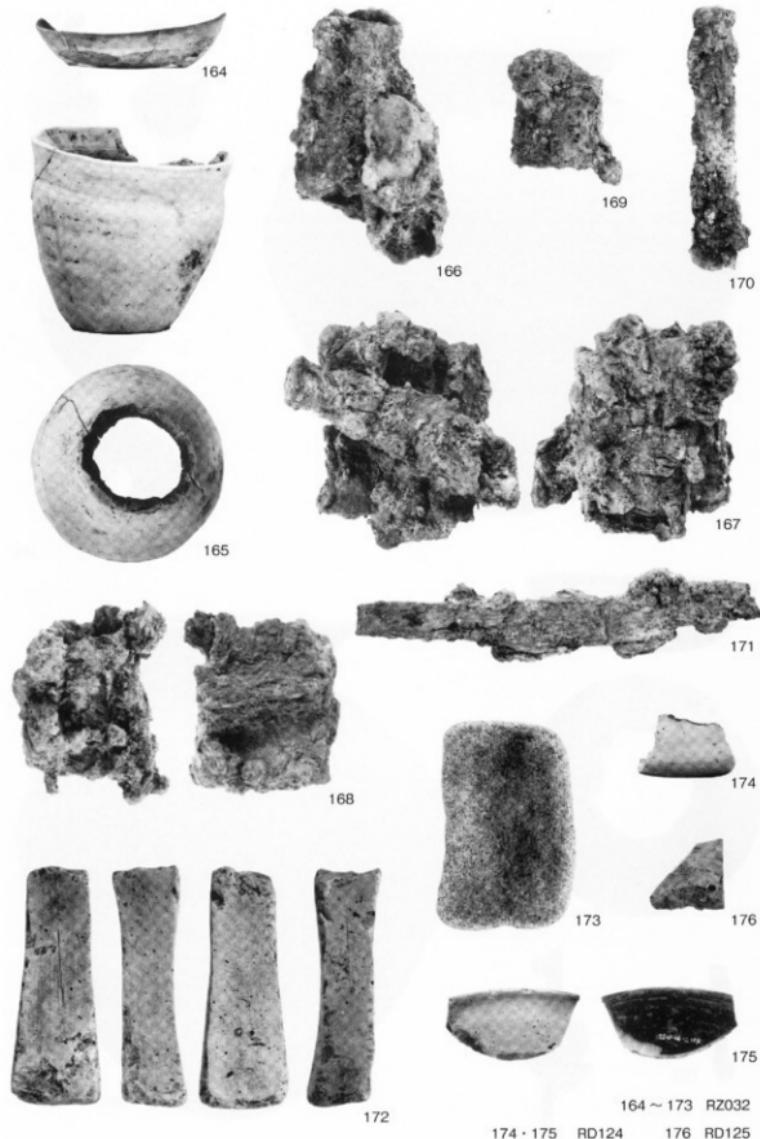
163



161

157 RZ023 158 RZ024 159~163 RZ030

写真図版 57 RZ 古墳出土遺物 (2)



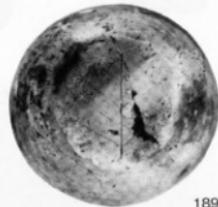
写真図版 58 RZ 古墳、RD 土坑出土遺物



177 RD128 178 RD135・140

178 RD141 180～187 RG056

188 RZ033



189

190

191

192

189 RZ034

190 ~ 194 遺構外



193



194

報告書抄録

ふりがな 書名	いいおかさいかわいせきだいじゅうにじはくつちょうさほうこくしょ 飯岡才川遺跡第12次発掘調査報告書							
固有名	盛岡南新都市土地区画整理事業開進遺跡発掘調査							
卷次								
シリーズ名	岩手県文化振興事業団蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第515集							
編著者名	村田 淳・濱田 宏・金子昭彦							
編集機関	(財)岩手県文化振興事業団蔵文化財センター							
所在地	〒020-0853 岩手県盛岡市下飯岡11地割185番地 TEL(019) 638-9001							
発行年月日	2008年1月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因	
いわてけんまちなかいわいせきだいじゅうにじはくつちょうさほ 飯岡才川遺跡 第12次調査	岩手県盛岡市下飯岡 新田2地割43-1 ほか	市町村 03201	遺跡番号 LE16-2291	39度 40分 45秒	141度 08分 04秒	2005.10.03 ~ 2005.11.10 (平成17年度調査) 2006.09.19 ~ 2006.11.24 (平成18年度調査)	3,200m ² 4,000m ²	盛岡南新都市開発 整備事業周辺遺跡 発掘調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
飯岡才川遺跡 第12次調査	狩猟場	縄文時代	陥し穴状遺構 11基		古代墓制の一形態である古墳を検出。埴丘・埋葬施設とともに削平されていたが、周溝内から理容や祭祀に使用したと考えられる遺物が出土している。			
	集落	古代	盛穴住居 14棟 古墳 17基 溝跡 3条 墓坑 7基 土坑 4基	土器類・須恵器 鉄製品（刀子・鏃・劍） 石製品（砥石・磨り石） 土製品（土鍬）				
		時期不明	土坑 20基 溝 2条 柱穴 66個					
要約	調査区は遺跡範囲の北側に位置し、縄文～近世までの遺構・遺物が検出されている。とくに廻柵区北側で検出された古墳は、隣接する飯岡沢田遺跡を除いて半石川右岸地域では検出例の少ない遺構として注目される。今回の調査により、本遺跡は縄文時代の狩猟場、古墳時代末～奈良時代の墓域、奈良（8世紀中頃）、平安時代（9世紀後半～10世紀初）の集落として機能していた遺跡であることが明らかとなった。							

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第515集
飯岡才川遺跡第12次発掘調査報告書

盛岡南新都市土地区画整理事業関連遺跡発掘調査

印 刷 平成20年1月28日

発 行 平成20年1月31日

発 行 (財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
〒020-0853 岩手県盛岡市下巣岡11地割185番地

電話 (019) 638-9001

FAX (019) 638-8563

印 刷 有限会社 光文社印刷
〒020-0106 岩手県盛岡市東松岡3-12-1
電話 (019) 661-3441(代)

